

神曲

LA DIVINA COMMEDIA

地獄

青空文庫

第一曲

われ正路を失ひ、人生の羈旅半にあたりてとある暗き林のなかに
ありき 一―三

あゝ荒れあらびわけ入りがたきこの林のさま語ることに難い
かな、恐れを追思にあらたにし 四―六

いたみをあたふること死に劣らじ、されどわがかしこに享けし幸さいはひ
をあげつらはんため、わがかしこにみし凡ての事を語らん 七―

九

われ何によりてかしこに入りしや、善く説きがたし、まこと眞の路を棄

てし時、睡りはわが身にみちくたりき 一〇—一二

されど恐れをもてわが心を刺し、溪の盡くるところ、一ひとつの山の麓
にいたりて 一三—一五

仰ぎ望めば既にその背はいかなる路にあるものをも直なほくみちびく
遊星の光を纏ひゐたりき 一六—一八

この時わが恐れ少しく和なぎぬ、こはよもすがら心のおくにやどり
て我をいたく苦しましめしものなりしを 一九—二一

しかしてたとへば呼吸いきもくるしく洋わたより岸に出でたる人の、身を
危あやうせる水にむかひ、目をこれにとむるごとく 二二—二四

走りてやまぬわが魂はいまだ生きて過ぎし人なき路をみんとてう
しろにむかへり 二五—二七

しばし疲れし身をやすめ、さてふたゝび路にすゝみて、たえず低
 き足をふみしめ、さびたる山の腰をあゆめり 二八―三〇

坂にさしかゝれるばかりなるころ、見よ一匹の牝めの豹あらはる、
 軽くしていと疾はやし、斑點まだらある皮これを蔽へり 三一―三三

このもの我を見れども去らず、かへつて道を塞ぎたれば、我は身
 をめぐらし、歸らんとせしこと屢 なりき 三四―三六

時は朝の始めにて日はかなたの星即ち聖なる愛がこれらの美しき
 物をはじめて動かせるころ 三七―

これと處を同じうせるものとともに昇りつゝありき、されば時の
 宜ききと季の麗けいろはなしきとは毛色華やかなるこの獸にむかひ

善き望みを我に起させぬ、されどこれすら一匹の獅子わが前にあ

らはれいでし時我を恐れざらしむるには足らざりき　—四五

獅子は頭を高くし劇しき飢ゑをあらはし我をめざして進むが如く
大氣もこれをおそるゝに似たり　四六—四八

また一匹の牝の狼あり、その瘦軀によりて諸慾内に満つることし
らる、こはずでに多くの民に悲しみの世をおくらせしものなりき

四九—五一

我これを見るにおよびて恐れ、心いたくなやみて高きにいたるの
望みを失へり　五二—五四

むさぼりて得る人失ふべき時にあひ、その思ひを盡してなげきか
なしむことあり　五五—五七

我またかくの如くなりき、これ平和なきこの獸我にたちむかひて

進み次第に我を日の默^{もた}す處におしかへしたればなり 五八—六〇

われ低地をのぞみて下れる間に、久しく默せるためその聲嗶れし

とおもはるゝ者わが目の前にあらはれぬ 六一—六三

われかの大きいなる荒野の中に彼をみしとき、叫びてかれにいひけ

るは、汝魂^{まこと}か眞の人か何にてもあれ我を憐れめ 六四—六六

彼答へて我にいふ、人にあらず、人なりしことあり、わが父^{ちち}母^{はは}

はロムバルディアの者^{ふるさと}郷土をいへば共にマントヴァ人^{びと}なりき

六七—六九

我は時後れてユーリオの世に生れ、似^え非^せ虚^{いつはり}偽^{はり}の神々の昔、善き

アウグストの下^{もと}にローマに住めり 七〇—七二

我は詩人にて驕れるイーリオンの焼けし後トロイアより來れるア

ンキーゼの義しき子のことをうたへり 七三―七五

されど汝はいかなればかく多くの苦しみにかへるや、いかなれば
あらゆる喜びの始めまた源もとなる幸の山に登らざる 七六―七八

われ面おもてに恥を帯び答へて彼にいひけるは、されば汝はかのヴィル

ジリオ言ことのは葉のひろき流れをそゝぎいだせる泉なりや 七九―八

一

あゝすべての詩人の譽ほまれまた光よ、願はくは長まなびき學と汝の書ふみを我に

索めしめし大いなる愛とは空しからざれ 八二―八四

汝はわが師よりどころわが據よりどころなり、われ美しき筆路を習ひ、譽をうるにいた
れるもたゞ汝によりてのみ 八五―八七

かの獸を見よ、わが身をめぐらせるはこれがためなりき、名高き

聖ひしりよ、このものわが血筋をも脈をも顛はしむ、ねがはくは我を救

ひたまへ 八八―九〇

わが泣くを見て彼答へて曰ひけるは、汝この荒地あれちより遁のがれんことをねがはゞ他ほかの路につかざるをえず 九一―九三

そは汝に聲を擧げしむるこの獸は人のその途を過ぐるをゆるさず、これを阻みて死にいたらしむればなり 九四―九六

またその性さが邪惡なれば、むさぼりて飽くことなく、食をえて後いよいよ餓う 九七―九九

これを妻とする獸多し、また獵かりいぬ犬來りてこれを憂ひの中に死なしむるまでこの後なほ多からむ 一〇〇―一〇二

この獵犬はその營やしなひ養を土にも金かねにもうけず、これを智と愛と徳

とにうく、フェルト口とフェルト口との間に生れ 一〇三—一〇

五

處女カムミルラ、エウリアーロ、ツルノ、ニソが創をうけ命を棄

おとめ

て、争ひし低きイタリアの救ひとなるべし 一〇六—一〇八

すなはち徧く町々をめぐりて狼を逐ひ、ふたゝびこれを地獄の中
に入らしめん（嫉みはさきにこゝより之を出せるなりき） 一〇

九—一一一

この故にわれ汝の爲に思ひかつ謀りて汝の我に従ふを最も善しと
せり、我は汝の導者となりて汝を導き、こゝより不朽の地をめぐ

らむ 一一二—一一四

汝はそこに第二の死を呼び求むる古のなやめる魂の望みなき叫び

いにしへ

をきくべし 一一五—一一七

その後汝は火の中にあてしかも心足る者等を見む、これ彼等には
時至れば幸なる民に加はるの望みあればなり 一一八—一二〇

汝昇りて彼等のもとにゆくをねがはゞ、そがためには我にまさ
れる魂あり、我別るゝに臨みて汝をこれと俱ならしめむ 一二一—

一二三

そは高きにしろしめす帝^{みかど}、わがその律法^{おきて}に背けるの故をもて我に
導かれてその都に入るものあるをゆるし給はざればなり 一二四

—一二六

帝の稜威^{みいつ}は至らぬ處なし、されど政かしこよりいでその都も高き
御座^{みくらひ}もまたかしこにあり、あゝ選ばれてそこに入るものは福^{さいはひ}な

るかな 一二七—一二九

我彼に、詩人よ、汝のしらざりし神によりてわれ汝に請ふ、この
禍ひとこれより大なる禍ひとを免かれんため 一三〇—一三二

ねがはくは我を今汝の告げし處に導き、聖ピエートロの門と汝謂
ふ所の幸なき者等をみるをえしめよ 一三三—一三五

この時彼進み、我はその後方に従へり 一三六—一三八

第二曲

日は傾けり、
灰ほのくら 闇き空は地上の生物をその勞苦より釋けり、たゞ

我ひとり 一—三

心をさだめて路と憂ひの攻めにあたらんとす、誤らざる記憶はこゝ
にこれを寫さむ 四—六

あゝムーゼよ、高き才よ、いざ我をたすけよ、わがみしことを刻
める記憶よ、汝の徳はこゝにあらはるべし 七—九

我いふ、我を導く詩人よ、我を難路に委ぬるにあたりてまづわが
力のたるや否やを思へ 一〇—一二

汝いへらく、シルヴィオの父は朽つべくして朽ちざるの世にゆき、
肉體のまゝにてかしこにありきと 一三一—一五

されど彼より出づるにいたれる偉業をおもひ、彼の誰たり何たる
をおもはゞ、衆惡の敵あたのめぐみ深かりしとも 一六一—一八

識者見て分に過ぎたりとはなさじ、そは彼エムピレオの天にて選
ばれて尊きローマ及びその帝國の父となりたればなり 一九—二

一

かれもこれもげにともに定めに従ひて聖地となり、大ピエロの後
を承くる者位に坐してこゝにあり 二二—二四

彼かしこにゆき（汝これによりてかれに名をえしむ）勝利かちと法衣ころも
の本となれる多くの事を聞きえたり 二五—二七

その後選えらびの器うつは、救ひの道の始めなる信仰はげみの勵はげを携もへかへらんため

またかしこにゆけることあり 二八—三〇

されど我は何故かに彼處こにゆかむ誰か之を我に許せる、我エーネアに非ず我パウロに非ず、わがこの事に堪ふべしとは我人俱に信ぜざるなり 三一—三三

されば我若し行くを肯はゞその行くこと恐らくはこれ狂へるわざならん、汝は賢さかし、よくわが言ことばの盡ことばさゞるところをさとる 三四—三六

人その願おもひひを翻し、新なる想おもひによりて志を變へ、いまだ始めにあたりてそのなすところをすべて抛つことあり 三七—三九

我も暗やまき山路やまぢにありてまたかくのごとくなりき、そはわが思ひめ

ぐらしてかくかろがろしく懐けるわが企くはだて圖を棄てたればなり

四〇—四二

心おほいなる者の魂答へて曰ひけるは、わが聽くところに誤りな
くは汝のたましひは怯懦にそこなはる 四三—四五

夫れ人しばくこれによりて妨げられ、その尊きくはだてに身を
背くることあたかも空しき象かたちをみ、臆して退く獸の如し 四六—

四八

我は汝をこの恐れより解き放たんため、わが何故に來れるや、何
事をきゝてはじめて汝のために憂ふるにいたれるやを汝に告ぐべ
し 四九—五一

われ懸垂の衆とともにありしに、尊き美しきひとりの淑女の我を

呼ぶあり、われすなはち命を受けんことを請ひぬ 五二―五四

その目は星よりも燦あざやかなりき、天使のごとき聲をもて言麗ことばしくや

はらかく我に曰ひけるは 五五―五七

やさしきマントヴァの魂よ（汝の名はいまなほ世に残る、また動うごき

のやまぬかぎりは残らん） 五八―六〇

わが友にて命運の友にあらざるもの道を荒さびたる麓に塞がれ、恐

れて踵をめぐらせり 六一―六三

我は彼のことにつきて天にて聞ける所により、彼既に探く迷ひわが彼を助けんため身を起せしことの遅きにあらざるなきやを恐る

六四―六六

いざ行け、汝の琢ける詞またすべて彼の救ひに缺くべからざるこ

とをもて彼を助け、わが心を慰めよ 六七―六九

かく汝にゆくを請ふものはベアトリーチエなり、我はわが歸るを
ねがふ處より來れり、愛我を動かし我に物言はしむ 七〇―七二
わが主のみまへに立たん時我しばく汝のことを譽むべし、かく
いひて黙せり、我即ちいひけるは 七三―七五

徳そなはれる淑女よ（およそ人圈けん最小さき天の内なる一切のもの
に優るはたゞ汝によるのみ） 七六―七八

汝の命ずるところよくわが心に適ひ、既にこれに従へりとなすと
もなほしかするの遅きを覺ゆ、汝さらに願ひを我に闢くひらを須もちるず

七九―八一

たゞねがはくは我に告げよ、汝何ぞ危ぶむことなく、闢き處をは

なれ歸思衷に燃ゆるもなほこの中心に下れるや 八二―八四

彼答へていひけるは、汝かく事の隱微をしるをねがへば、我はわが何故に恐れずここに來れるやを約つゞまやかに汝に告ぐべし 八五―

八七

夫れ我等の恐るべきはたゞ人に禍ひをなす力あるものゝみ、その他ほかにはなし、これ恐れをおこさしむるものにあらざればなり 八

八―九〇

神はその恩惠めぐみによりて我を造りたまひたれば、汝等のなやみも我に觸れず燃ゆる焰も我を襲はじ 九一―九三

ひとりの尊き淑女天にあり、わが汝を遣はすにいたれるこの障しやう礙げのおこれるをあはれみて天上おごそかの嚴なる審判さばきを枉ぐ 九四―九

六

かれルチーアを呼び、請ひていひけるは、汝に忠なる者いま汝に
頼らざるをえず、我すなわち彼を汝に薦むと 九七―九九

すべてあらぶるものゝ敵あだなるルチーアいでゝわが古いにしへのラケーレと

坐しゐたる所に來り 一〇〇―一〇二

いひけるは、ベアトリーチエ、神まことの眞の讚美よ、汝何ぞ汝を愛す

ること深く汝のために世俗を離るゝにいたれるものを助けざる

一〇三―一〇五

汝はかれの苦しき歎きを聞かざるか、汝は河水漲りて海も誇るに
たらざるところにかれを攻むる死をみざるか 一〇六―一〇八

世にある人の利に趨り害を避くる急はやしといへども、かくいふをき

きて 一〇九—一一一

汝の言ことばの品しなたかく汝の譽また聞けるもの、譽なるを頼たのみとし、祝福めぐみ

の座を離れてこゝに下れるわがはやさには若かじ 一一二—一一

四

かくかたりて後涙を流し、その燦あざやかなる目をめぐらせり、わが疾と

くとく來れるもこれがためなりき 一一五—一一七

さればわれ斯く彼の旨をうけて汝に來り、美うつくしきやま山の捷路ちかみちを

奪へるかの獸より汝を救へり 一一八—一二〇

しかるに何事ぞ、何故に、何故にとゞまるや、何故にかゝる卑怯

を心にやどすや、かくやむごととなき三人みたりの淑女 一二一—一二三

天の王宮に在りて汝のために心を勞し、かつわが告ぐるところか

く大いなる幸さちを汝に約するに汝何ぞ勇なく信なきや 一二四—一

二六

たとへば小さき花の夜寒よさむにうなだれ凋めるが日のこれを白むるこ
ろ悉くおきかへりてその莖の上にひらく如く 一二七—一二九
わが萎なえしたましひかはり、わが心いたくいさめば、恐るゝもの
なき人のごとくわれいひけるは 一三〇—一三二

あゝ慈悲深きかな我をたすけし淑女、志厚きかなかれが傳へし眞
の詞にとくしたがへる汝 一三三—一三五

汝言によりわが心を移して往くの願ひを起さしめ、我ははじめの
志にかへれり 一三六—一三八

いぎゆけ、尊者よ、主きみよ、師よ、兩者ふたりに一の思ひあるのみ、我斯

く彼にいひ、かれ歩めるとき 一三九―一四一
艱き廢れし路に進みぬ 一四二―一四四

第三曲

我を過ぐれば憂ひの都あり、我を過ぐれば永遠とこしへの苦患なやみあり、我を過ぐれば滅亡ほろびの民あり 一—三

義は尊きわが造り主ぬしを動かし、聖なる威力ちから、比類たくひなき智慧、第一の愛我を造れり 四—六

永遠とこしへの物のほか物として我よりさきに造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ 七

—九

われは黒く録しるされしこれらの言ことばを一の門の頂に見き、この故に我、

師よ、かれらの意義我に苦し 一〇—一二

事すべてあきらかなる人の如く、彼我に、一切の疑懼一切の怯心

ここに棄つべく滅ぼすべし 一三—一五

我等はいま智能の功德を失へる憂ひの民をみんなとわがさきに汝に

告げしところにあるなり 一六—一八

かくて氣色うるはしくわが手をとりて我をはげまし、我を携へて

祕密の世に入りぬ 一九—二一

ここには歎き、悲しみの聲、はげしき叫喚、星なき空にひゞきわ

たれば、我はたちまち涙を流せり 二二—二四

異様の音、罵詈の叫び、苦患の言、怒りの節、強き聲、弱き聲、

手の響きこれにまじりて 二五—二七

轟動^{どよ}めき、たえず常^{とこやみ}暗の空をめぐりてさながら旋風吹起る時の
砂のごとし 二八—三〇

怖れはわが頭^{かうべ}を巻けり、我即ちいふ、師よわが聞くところのもの
は何ぞや、かく苦患^{なやみ}に負くるとみゆるは何の民ぞや 三一—三三
彼我に、この幸^{さち}なき状^{さま}にあるは恥もなく譽もなく世をおくれるも
のらの悲しき魂なり 三四—三六

彼等に混^{まじ}りて、神に逆^{さから}へるにあらず、また忠なりしにもあらず、
たゞ己にのみ頼れるいやしき天使の族^{むれ}あり 三七—三九

天の彼等を逐へるはその美に虧くる處なからんため、深き地獄の
彼等を受けざるは罪ある者等これによりて誇ることなからんため
なり 四〇—四二

我、師よ、彼等何を苦しみてかくいたく歎くにいたるや、答へて
 いふ、いと約つゞまやかにこれを汝に告ぐべし 四三―四五

それ彼等には死の望みなし、その失明の生はいと卑しく、いかな
 る分際きはといへどもその嫉みをうけざるなし 四六―四八

世は彼等の名の存のこるをゆるさず、慈悲も正義も彼等を輕んず、我
 等また彼等のことをかたるをやめん、汝たゞ見て過ぎよ 四九―

五一

われ目をさだめて見しに一旒の旗ありき、翻り流れてそのはやき
 こと些すこしの停止やすみをも蔑視さげすむに似たり 五二―五四

またその後方うしろには長き列を成して歩める民ありき、死がかく多く
 の者を滅ぼすにいたらんとはわが思はざりしところなりしを 五

五―五七

われわが識れるもの、彼等の中にあるをみし後、心おくれて大事
を辭いなめるもの、魂を見知りぬ 五八―六〇

われはたゞちに悟さとりかつ信ぜり、こは神にも神の敵にも厭はるゝ
卑しきものの宗族うからなりしを 六一―六三

これらの生けることなき劣れるものらはみな裸のまゝなりき、ま
た虻あり蜂ありていたくかれらを刺し 六四―六六

顔に血汐の線をひき、その血の涙と混れるを汚らはしき蟲足あしもと下
にあつめぬ 六七―六九

われまた目をとめてなほ先方さきを望み、一の大いなる川の邊ほとりに民あ
るをみ、いひけるは、師よねがはくは 七〇―七二

かれらの誰なるや、かすか微なる光によりてうかゞふに彼等渡るをいそ
 ぐに似たるは何の定さだめによりてなるやを我に知らせよ 七三―七五
 彼我に、我等アケロンテの悲しき岸邊に足をとゞむる時これらの
 事汝にあきらかなるべし 七六―七八

この時わが目恥を帯びて垂れ、われはわが言ことばの彼に累をなすをお
 それて、川にいたるまで物言ふことなかりき 七九―八一

こゝに見よひとりの翁おきなの年へし髪を戴きて白きを、かれ船にて我
 等の方に來り、叫びていひけるは、禍ひなるかな汝等悪しき魂よ

八二―八四

天を見るを望むなかれ、我は汝等をかなたの岸、永とこしへ久の闇の中
 熱の中氷の中に連れゆかんとて來れるなり 八五―八七

またそこなる生ける魂よ、これらの死にし者を離れよ、されどわ
 が去らざるをみて 八八―九〇

いふ、汝はほかの路によりほかの港によりて岸につくべし、汝の
 渡るはこゝにあらず、汝を送るべき船はこれよりなほ輕し 九一
 ―九三

導者彼に、カロンよ、怒る勿れ、思ひ定めたる事を凡て行ふ能力ちから
 あるところにてかく思ひ定められしなり、汝また問ふこと勿れ
 九四―九六

この時目のまはりに炎の輪ある淡うすぐろ黒き沼なる舟師かこの鬚多き類は
 しづまりぬ 九七―九九

されどよわれる裸なる魂等はかの非情ことばの言をきゝて、たちまち色

をかへ齒をかみあわせ 一〇〇—一〇二

神、親、人およびその蒔かれその生れし處と時と種たねとを誹そしれり

一〇三—一〇五

かくて彼等みないたく泣き、すべて神をおそれざる人を待つ禍ひの岸に寄りつどへり 一〇六—一〇八

目は熾火おきびのごとくなる鬼のカロン、その意こころを示してみな彼等を集

め、後るゝ者あれば權にて打てり 一〇九—一一一

たとへば秋の木の葉この一葉散りまた一葉ちり、枝はその衣ころもを残り

なく地にをさむるにいたるがごとく 一一二—一一四

アダモの悪しき裔すゑは示しにしたがひ、あひついで水際みぎはをくだり、

さながら呼ばるゝ鳥に似たり 一一五—一一七

かくして彼等黯める波を越えゆき、いまだかなたに下立たぬまに

こなたには既にあらたに集まれる群あり 一一八—一二〇

志厚き師曰ひけるは、わが子よ、神の怒りのうちに死せるもの萬

國より來りてみなこゝに集ふ 一二一—一二三

その川を渡るをいそぐは神の義これをむちうちて恐れを願ひにか
はらしむればなり 一二四—一二六

善き魂この處を過ぐるることなし、さればカロン汝にむかひてつづ
やくとも、汝いまその言の意義をしるをえん 一二七—一二九

いひ終れる時黒暗の廣野はげしくゆらげり、げにそのおそろし
さを思ひいづればいまなほわが身汗にひたる 一三〇—一三二

涙の地風をおこし、風は紅の光をひらめかしてすべてわが官能を

うばひ 一三三—一三五

我は睡りにとらはれし人の如く倒れき 一三六—一三八

第四曲

はげしき雷いかづちはわが頭かうべのうちなる熟睡うまいを破れり、我は力によりてお
こされし人の如く我にかへり 一—三

たちなほりて休める目を動かし、わが在るところを知らんとて瞳
を定めあたりを見れば 四—六

我はげにはてしなき叫喚の雷をあつめてものすごき淵なす溪へりの縁
にあり 七—九

暗く、深く、霧多く、目をその深處ふかみに注げどもまた何物をもみと
むるをえざりき 一〇—一二

詩人あをぎめていひけるは、いざ我等この盲めしひの世にくだらむ、我

第一に汝第二に 一三一—一五

われその色を見、いひけるは、おそるゝごとに我を勵ませし汝若
しみづから恐れなば我何ぞ行くをえん 一六一—一八

彼我に、この下なる民のわづらひは憐みをもてわが面おもてを染めしを、

汝みて恐れとなせり 一九—二一

長途我等を促せばいざ行かむ、かくして彼さきに入り、かくして

我をみちびきぬ、淵をめぐれる第一の獄ひとやの中に 二二—二四

耳にてはかるに、こゝにはとこしへの空そらをふるはず大息ためいきのほか

歎なげき聲なし 二五—二七

こは苛責の苦なきなやみよりいづ、またこのなやみをうくるは稚を

兒さなご、女、男の數多き、大いなる群むれなりき 二八―三〇

善き師我に、汝これらの魂をみてその何なるやを問はざるならず
や、いざ汝なほさきに行かざるまに知るべし 三一―三三

彼等は罪を犯せるにあらず、嘉よみすべきことはありとも汝がいだく
信仰の一部なる洗バツテスモ禮レをうけざるが故になほたらず 三四―三

六

またクリストの教へのさきに世にありたれば神があがむるの道を
つくさゞりき、我も亦このひとりなり 三七―三九

われらの救ひを失へるはほかに罪あるためならず、たゞこの虧處おちど
のためなれば我等はたゞ願ひありて望みなき生命いのちをこゝにわぶる

のみ 四〇―四二

われこの言をきくにおよびてリムボに懸れるいとたふとき民ある
をしり、深き憂ひはわが心をとらへき 四三―四五

我は一切の迷ひに勝つ信仰にかたく立たんことをおもひ、いひけ
るは、我に告げよわが師、我に告げよ主^{きみ} 四六―四八

おのれの功德^{くどく}によりまたは他人^{ひと}の功德により、かつてこの處をい
で、福^{さいはひ}を享くるに至れるものありや、かれわが言^{ことば}の裏をさとり

四九―五一

答へて曰ひけるは、われこゝにくだりてほどなきに、ひとりの權^ち
能^{から}あるもの勝利^{かち}の休徴^{しるし}を冠^{かむ}りて來るを見たり 五二―五四

この者第一の父の魂、その子アベルの魂、ノエの魂、律法^{おきて}をたて

またよく神に順へるモイゼの魂 五五―

族長アブラアム、王ダヴィーデ、イスラエルとその父その子等お
よびラケール（イスラエルかれの、ために多くの事をなしたりき）
その外なほ多くの者の魂をこゝよりとりさり、彼等に福さいはひを與へた
りき、汝しるべし、彼等より先には人の魂の救はれしことあらざ
るを — 六三

かれかたる間も我等歩みを停とどめず、たえず林を分けゆけり、即ち
繁き魂の林なり 六四—六六

睡りのこなた行く道いまだ長からぬに、我は半球の闇を服せる一
の火を見き 六七—六九

我等なほ少しくこれと離れたりしもその距へだ離り大ならねば、我は
またこの處の一部にたふとき民の據れるを認めき 七〇—七二

汝學藝のほまれよ、かくあがめをうけてそのさま衆と異なるは誰ぞや 七三―七五

彼我に、汝の世に響くかれらの美名よきなはその恵みを天にうけ、かれらかく擢んでらる 七六―七八

この時聲ありて、いとたふとき詩人を敬へ、出でゝいにしその魂はかへれりといふ 七九―八一

聲止みしづまれるとき我見しに四よつの大きいなる魂ありて我等のかたに來れり、その姿には悲しみもまた喜びもみえざりき 八二―八

四

善き師日ひけるは、手に劍つるぎを執りて三者みたりにさきだち、あたかも王わ者うじやのごとき者をみよ 八五―八七

これならびなき詩人オーメロなり、その次に來るは諷刺家オラー
 チオ、オヴィデイオ第三、最後はルカーノなり 八八―九〇

かの一の聲の稱となへし名はかれらみな我と等しくえたるものなれば
 かれら我をあがむ、またしかするは善し 九一―九三

我はかく衆を超えて驚の如く天あまがけ翔る歌聖の、うるはしき一族の
 あつまれるを見たり 九四―九六

しばらくともにかたりて後、かれらは我にむかひて會釋す、わが
 師これを見て微笑ほゝゑみたまへり 九七―九九

かれらはまた我をその集つどひのひとりとなしていと大いなる譽を我に
 えさせ、我はかゝる大智に加はりてその第六の者となりにき 一

かくて我等はかの時かたるに適ふさわはしくいまは黙もだすにふさはしき多くの事をかたりつゝ光ある處にいたれり 一〇三―一〇五

我等は一の貴き城のほとりにつけり、七重ななへの高壘これを圍み、一の美しき流れそのまはりをかたむ 一〇六―一〇八

我等これを渡ること堅き土に異ならず、我は七ななの門を過ぎて聖ひじりの群むれとともに入り、緑新しき牧場まきばにいたれば 一〇九―一一一

こゝには眼まな緩ゆるかにして重く、姿に大いなる權威をあらはし、云ふことまれに聲うるはしき民ありき 一一二―一一四

我等はこゝの 一かたほとり隅、廣あかるき明あき高たかき處に退きてすべてのものを見るをえたりき 一一五―一一七

對面むかひの方かたには緑の の大いなる魂をみき、またかれらを見たるに

よりていまなほ心に喜び多し 一一八—一二〇

我はエレットラとその多くの侶ともをみき、その中に我はエツトル、

エーネア、物ものゝぐ具身まなこにつけ眼鷹まなこの如きチエーザレを認めぬ 一二

一—一二三

またほかの處に我はカムミルラとパンタシレアを見き、また女むすめラ

ヴィーナとともに坐したる王ラティーノを見き 一二四—一二六

我はタルクイーノを逐へるブルート、またルクレーチア、ユーリ

ア、マルチア、コルニーリアを見き、また離れてたゞひとりなる

一二七—

サラデーノを見き、我なほ少しく眉をあげ、哲人の族やからの中に坐

したる智者の師を見き 一三二—

衆皆かれを仰ぎ衆皆かれを崇む、われまたこゝに群むれにさきだちて

彼にいとちかきソクラテとプラトネを見き 一三三—一三五

世界の偶成を説けるデモクリート、またディオジエネス、アナツ
サーゴラ、ターレ、エムペドクレス、エラクリート、ツエノネ

一三六—一三八

我また善く特性を集めしもの即ちディオスコリデーを見き、また
オルフェオ、ツルリオ、リーノ、道徳を設けるセネカ 一三九—
一四一

幾何學者エウクリーデまたトロメオ、イポクラテ、アヴィチエ
ンナ、ガリエーノ、註の大家アヴェルロイスを見き 一四二—一

四四

いま脱おちなくすべての者を擧げがたし、これ詩題の長きに驅られ、

事あまりて言足らざること屢 なればなり 一四五—一四七

六者むたりの伴侶なかまは減へりて二者ふたりとなれり、智さとき導者異なる路によりて我

を靜なる空より震ひゆらめく空に導き 一四八—一五〇

我は光る物なき處にいたれり 一五一—一五三

第五曲

斯く我は第一の獄ひとやより第二の獄に下れり、是は彼よりをさむる地
 少く苦患なやみははるかに大いにして突いて叫喚を擧げしむ 一—三

こゝにミノス恐ろしきさまにて立ち、齒をかみあはせ、入る者あ
 れば罪業ざいごふを糺たゞし刑罰を定め身を巻きて送る 四—六

すなはち幸さちなく世に出でし魂その前に來れば一切を告白し、罪を
 定むる者は 七—九

地獄の何處いづこのこれに適ふさはしきやをはかり、送らむとする獄ひとやの數かずにし
 たがひ尾をもて幾度も身をめぐらしむ 一〇—一二

彼の前には常に多くの者の立つあり、かはる／＼出で、審判を
うけ、陳べ、聞きて後下に投げらる 一三―一五

ミノス我を見し時、かく重き任務つとめを棄て、我にいひけるは、憂ひ
の客舎に來れる者よ 一六―一八

汝みだりに入るなかれ、身を何者に委ぬるや思ひ見よ、入口ひろ
きによりて欺かるるなかれ、わが導者彼に、汝何ぞまた叫ぶや

一九―二一

彼定命に従ひてゆく、之を妨ぐる勿れ、思ひ定めたる事を凡て行
ふ能力ちからあるところにてかく思ひ定められしなり、汝また問ふこと

勿れ 二二―二四

苦患なやみの調しらべはこの時あらたに我にきこゆ、我はこの時多くの歎聲なげきの

我を打つところにいたれり 二五—二七

わがいたれる處には一切の光もた黙し、その鳴ることたとへば異なる

風に攻められ波たちさわぐ海の如し 二八—三〇

をやみ

小止なき地獄の烈風吹き荒れて魂を漂はし、旋めぐりまた打ちてかれ

らをなやましむ 三一—三三

かれら荒ぶる勢ひにあたれば、そこに叫びあり、憂ひあり、歎き

あり、また神の權能ちからを誹ことばる言あり 三四—三六

我はさととりぬ、かゝる苛責の罰をうくるは、理性を慾えきの役となせ

し肉の罪つみびと人なることを 三七—三九

たとへば寒き時むくどり棕鳥翼に支へられ、大いなる隙すきなき群をつくり

て浮び漂ふごとく、風惡靈を漂はし 四〇—四二

こゝまたかしこ下また上に吹送り、身をやすめまたは痛みをかる
むべき望みのその心を慰むることたえてなし 四三―四五

またたとへば群鶴むらづるの一線長く空そらに劃し、哀歌をうたひつゝゆく

ごとく、我は哀愁の聲をあげ 四六―

かの暴風はやちに負おはれて來る魂を見き、すなはちいふ、師よ、黒き風
にかく懲なさるゝ此等の民は誰なりや ―五一

この時彼我にいふ、汝が知るをねがふこれらの者のうち最初はじめなる
は多くの語ことばの皇后きさいなりき 五二―五四

かれ淫慾の非に耽り、おのが招ける汚辱を免かれんため律法おきてをた
て、快樂けらくを回護かばへり 五五―五七

かれはセミラミスなり、書にかれニ―ノの後を承く、即ちその妻

なる者なりきといへるは是なり、かれはソルダンの治むる地をその領とせり 五八―六〇

次は戀のために身を殺しシケーオの灰にむかひてその操を破れるもの、次は淫婦クレオパトラースなり 六一―六三

エレーナを見よ、長き禍ひの時めぐり來れるもかれのためなりき、また戀と戰ひて身ををへし大いなるアキルレを見よ 六四―六六
見よパリスを、トリスターノを、かくいひてかれ千餘の魂の戀にわが世を逐はれし者を我にみせ、指さして名を告げぬ 六七―六九

わが師かく古の淑女騎士の名を告ぐるをきける時、我は憐みにとらはれ、わが神氣絶えこゝろいるばかりになりぬ 七〇―七二

我曰ふ、詩人よ、願はくはわれかのふたりに物言はん、彼等相連
れてゆき、いと軽く風に乗るに似たり 七三―七五

かれ我に、かれらのなほ我等に近づく時をみさだめ、彼等を導く
戀によりて請ふべし、さらば來らむ 七六―七八

風彼等をこなたに靡かしゝとき、われはたゞちに聲をいだして、

あはれなやめる魂等よ、彼もし拒まずば來りて我等に物言へとい

ふ 七九―八一

たとへば鳩の、願ひに誘はれ、そのつよき翼をたかめ、おのが意
に身を負はせて空をわたり、たのしき巢にむかふが如く 八二―

八四

情ある叫びの力つよければ、かれらはデイドの群を離れ魔性の
なさけ

むれ

ましやう

空そらをわたりて我等にむかへり 八五—八七

あゝやさしく心あたゝかく、世を紅に染めし我等をもかへりみ、

くらやみ

暗闇くらやみの空をわけつつゆく人よ 八八—九〇

汝我等の大いなる禍ひをあはれむにより、宇宙の王若し友ならば、
汝のためにわれら平和をいのらんものを 九一—九三

すべて汝が聞きまたかたらんとおもふことは我等汝等にきゝまた

語らむ、風かく我等のために黙もだす間あひだに 九四—九六

わが生れし邑まちは海のほとり、ポーその従者ずさらと平和を求めてくだ

るところにあり 九七—九九

いちはやく雅みやびごと心こころをとらふる戀は、美しきわが身によりて彼を

捉へき、かくてわれこの身を奪はる、そのさまおもふだにくるし

一〇〇—一〇二

戀しき人に戀せしめではやまざる戀は、彼の慕はしきによりていと強く我をとらへき、されば見給ふ如く今猶我を棄つることなし

一〇三—一〇五

戀は我等を一の死にみちびきぬ、我等の生命いのちを斷てる者をばカイ

一ナ待つなり、これらの語を彼等われらに送りき 一〇六—一〇八

苦しめる魂等のかくかたるをきゝし時、我はたゞちに顔をたれ、ながく擧ぐるをえざりしかば詩人われに何を思ふやといふ 一〇

九—一一

答ふるにおよびて我曰ひけるは、あはれ幾許いくその樂しき思ひ、いか

に切^{せち}なる願ひによりてかれらこの憂ひの路にみちびかれけん 一

一二—一一四

かくてまた身をめぐらしてかれらにむかひ、語りて曰ひけるは、
フランチエスカよ、我は汝の苛責を悲しみかつ憐みて泣くにいた
れり 一一五—一一七

されど我に告げよ、うれしき大息^{といき}たえぬころ、何によりいかなる
さまにていまだひそめる胸の思ひを戀ぞと知れる 一一八—一二

○

かれ我に、幸^{さち}なくて幸ありし日をしのぶよりなほ大いなる苦患^{なやみ}な
し、こは汝の師しりたまふ 一二一—一二三

されど汝かくふかく戀^{うひね}の初根^{うひね}をしるをねがはゞ、我は語らむ、泣

きつゝかたる人のごとくに 一二四—一二六

われら一日こゝろやりとて戀にとらはれしランチャロットの物語
を讀みぬ、ほかに人なくまたおそるゝこともなかりき 一二七—

一二九

書ふみはしばくわれらの目をその唆かし色を顔よりとりされり、されど

我等を従へしはその一節ひとふしにすぎざりき 一三〇—一三二

かの憧あこがるゝ微笑ほゝゑみがかゝる戀人の接吻くちづけをうけしを讀むにいたれる

時、いつにいたるも我とはなるゝことなきこの者 一三三—一三

五

うちふるひつゝわが口にくちづけしぬ、ガレオットなりけり書ふみも

作者も、かの日我等またその先さきを讀まざりき 一三六—一三八

ひとつ

一の魂かくかたるうち、一はいたく泣きたれば、我はあはれみの
あまり、死に臨めるごとく喪神し 一三九―一四一

死體の倒るゝごとくたふれき 一四二―一四四

第六曲

所縁の兩者をあはれみ、心悲しみによりていたくみだれ、そのた
め^な萎えしわが官能、また我に返れる時 一—三

我わがあたりをみれば、わが動く處、わが向ふ處、わが目守る處^{まも}
すべて新なる^{あらた}苛責^{あらた}新なる苛責を受くる者ならぬはなし 四—六

我は第三の獄^{ひとや}にあり、こは永^{とこしへ}久の詛ひの冷たきしげき雨の獄な
り、その法^{のり}と質^{さが}とは新なることなし 七—九

大^{おほつぶ}粒の雹、濁れる水、および雪はくらやみの空よりふりしきり、
地はこれをうけて惡臭^{をしう}を放てり 一〇—一二

猛き異様の獸チエルベロこゝに浸れる民にむかひ、その三の喉みつに
よりて吠ゆること犬に似たり 一三―一五

これに紅の眼、脂ぎりて黒き鬣、大いなる腹、爪ある手あり、こ
のものの魂等を爬き、噛み、また裂きて片きれ々／＼にす 一六―一八
雨はかれらを犬のごとくさけばしむ、かれら幸さちなき神ともなき徒から、片
たわき脇たわきをもて片脇の防禦ふせぎとし、またしばく、反側す 一九―二一

大いなる蟲チエルベロ我等を見し時、口をひらき牙をいだしぬ、
その體からだにはゆるがぬ處なかりき 二二―二四

わが導者もろて雙手をひらきて土を取り、そのみちたる土を飽くことな
き喉の中に投げ入れぬ 二五―二七

鳴いてしきりに物乞ふ犬も、その食くひもの物を噛むにおよびてしづま

り、たゞこれを喰ひ盡さんとのみおもひてもだゆることあり 二

八—三〇

さけびて魂等を驚かし、かれらに聾みくしひならんことをねがはしめし鬼

チエルベロの汚きたなき顔もまたかくのごとくなりき 三一—三三

我等ははげしき雨のうちふせらるゝ魂をわたりゆき、體からだとみえて

しかも空くうなるその象かたちを踏みぬ 三四—三六

かれらはすべて地に臥しゐるたるに、こゝにひとり我等がその前を

過ぐるをみ、坐すわらんとてたゞちに身を起せる者ありき 三七—三

九

この者我にいひけるは、導かれてこの地獄を過行くものよ、もし
かなはゞわが誰なるを思ひ出でよ、わが毀たれぬさきに汝は造ら

れき 四〇—四二

我これに、汝のうくる苦しみは汝をわが記憶より奪へるか、われ
いまだ汝を見しことなきに似たり 四三—四五

然^{され}ど告げよ、汝いかなる者なればかく憂き處におかれ又かゝる罰
を受くるや、たとひ他^{ほか}に之より重き罰はありともかく厭はしき罰
はあらし 四六—四八

彼我に、嫉み盈ちくくすでに囊^{ふくろ}に溢るゝにいたれる汝の邑^{まち}は、
明^{あか}き世に我を收めし處なりき 四九—五一

汝等邑^{まちびと}民われをチャツコとよびなせり、害多き暴食の罪により
てわれかくの如く雨にひしがる 五二—五四

また悲しき魂の我ひとりこゝにあるにあらず、これらのものみな

同じ咎によりて同じ罰をうく、かくいひてまた言なしことば 五五―五

七

われ答へて彼に曰けるは、チャツコよ、汝の苦しみはわが心をいたましめわが涙を誘ふいざな、されどもし知らば、分れし邑まちの邑まち人の

行末 五八―六〇

一人だにこゝひとりに義たゞしきもの者ありや、またかく大いなる不和のこゝを

襲ふにいたれる源もとを我に告げよ 六一―六三

かれ我に、長き争ひの後彼等は血を見ん、鄙ひなの徒黨ともがらいたく怨み

て敵を逐ふべし 六四―六六

かくて三年みとせの間にこれらは倒れ、他はいま操縦あやなすものゝ力により

て立ち 六七―六九

ながくその額を高うし、歎き、憤りいかに大いなりとも敵を重き

重荷の下に置くべし 七〇―七十二

義者二人あり、されどかへりみらるゝことなし、自負、嫉妬、貪

婪は人の心に火を放てる三の火花なり 七三―七五

かくいひてかれその斷腸の聲をとゞめぬ、我彼に、願はくはさら

に我に教へ、わがために言を惜しむなかれ ことば 七六―七八

世に秀でしフアーリナータ、テツギアイオ、またヤーコポ・ルス

テイクツチ、アルリーゴ、モスカそのほか善を行ふ事にその才を

むけし者 七九―八一

何處にありや、我に告げ我に彼等をしらしめよ、これ大いなる願

ひ我を促し、天彼等を甘くするや地獄彼等を毒するやを知るを求

めしむればなり 八二―八四

彼、彼等は我等より黒き魂の中にあり、異なる罪その重さによりて彼等を深處ふかみに沈ましむ、汝下りてそこに至らば彼等をみるをえ

ん 八五―八七

されど麗しき世にいつる時、ねがはくは汝我を人の記憶に薦めよ、われさらに汝に告げず、またさらに汝に答へず 八八―九〇

かくてかれその直すぐなりし目を横に歪め、少しく我を見て後頭かうべをたれ、これをほかの盲等めしひとならべて倒れぬ 九一―九三

導者我に曰ふ、天使の喇叭らうぱひゞくまで彼ふたゞび身を起すことなし、仇なる權能ちから來るとき 九四―九六

かれら皆悲しき墓にたちかへり、ふたゞびその肉その形をとりて

とこしへに鳴渡るものをきくべし 九七—九九

少しく後世ごせのことをかたりつゝ我等は斯く魂と雨きたなまじと汚まじく混れるな

かを歩あゆみしづかにわけゆきぬ 一〇〇—一〇二

我すなはちいふ、師よ、かゝる苛責の苦しみは大いなる審判さばきの後

増すべきか減へるべきかまたはかく燃ゆべきか 一〇三—一〇五

彼我に汝の教にかへるべし、曰く、物いよゝゝ全きに従ひ、幸を

感ずるいよゝゝ深し、苦しみを感ずるまた然りと 一〇六—一〇

八

たとひこの詛ひの民眞まことの完まつたき全まことにいたるをえずとも、その後は前

よりこれにちかゝらむ 一〇九—一一一

我等迂回してこの路をゆき、こゝにのべざる多くの事をかたりつゝ

降るべき處にいたり 一一二―一一四

こゝに大敵プルートを見き 一二五―一二七

第七曲

パペ、サタン、パペ、サタン、アレツペ、聲を嗔らしてプルート
 は叫べり、萬の^{よろづ}ことを知りたまへるやさしき^{ひじり}聖 一―三

我を勵まさんとていひけるは、汝おそれて自ら損ふなかれ、彼に
 いかなる力ありとも、汝にこの岩を降らしめざることあらじ 四

―六

またかの膨るゝ顔にむかひいひけるは、^{もだ}黙せ、^{みやうばつ}冥罰重き狼よ、
 その怒りをもて己が心を滅ぼし盡せ 七―九

かく^{ふかみ}深處にゆくは故なきにあらず、こはミケーレが仇を不遜の非

倫にかへせる天にて思ひ定められしなり 一〇—一二

たとへば風にはらめる帆の檣碎けて纏れ落つるごとく、かの猛き

獸地に倒れぬ 一三—一五

かくして我等は宇宙一切の悪をつゝむ憂ひの岸をすゝみゆき、第

四の坎あなに下れり 一六—一八

あゝ神の正義よ、かく多くの新なる苦しみと痛みとをおしつ押填むるは

誰ぞ、我等の罪何ぞ我等をかく滅ぼすや 一九—二一

かの逆浪さかなみに觸れてくだくるカリツヂの浪の如く、斯このため民またこゝ

にリツダを舞はではかなはじ 二二—二四

我はこゝに何處よりも多くの民のかなたこなたにありていたくわ

めき、胸の力によりて重荷をまろばすをみき 二五—二七

かれらは互に打當り、あたればたゞちに身を翻し、何ぞ溜むるや
 何ぞ投ぐるやと叫び、もときしかたにまろばせり 二八―三〇

かくて彼等はかなたこなたより異なる方向むきをとりてまたも恥づべ
 き歌をうたひ、暗ひとやき獄を傳ひてかへり 三一―三三

かくして圈なかばの半にいたればふたゝびこゝに渡り合ひ、各 その身
 をめぐらせり、心刺さるゝばかりなりしわれ 三四―三六

いひけるは、わが師よ、これ何の民なりや、また我等の左なる髪
 を削れるものらすべてこれ僧なりしや、いま我に示したまへ 三
 七―三九

彼我に、かれらは悉く第一の世に心ゆがみて程よく費すことをな
 さざりしものなり 四〇―四二

こはこの地獄の中表うらうへ裏なる咎かれらを分つ二の點にいたる時か

れらその吠ゆる聲によりていと明かならしむ 四三―四五

頭に毛の蔽物おほひなき者は僧なりき、また法王、カルデイナレあり、

慾その衷に權を行ふ 四六―四八

我、師よ、わが識れるものにてこの罪咎に汚るゝものかならずか

れらの中にあらん 四九―五一

かれ我に、汝空しき思ひを懷けり、彼等を汚せる辨別わきまへなき生命いのち

はいまかれらを昧くらまし、何者もかれらをわきまへがたし 五二―五

四

かれら限りなくこの二の牴觸をみん、此等は手を閉ぢ、これらは
髪を短くして墓よりふたゝび起きいづべし 五五―五七

あしく費しあしく貯へしことは美しき世をかれらより奪ひ、かれらにこの争ひあらしむ、われこゝに言を飾りてそのさまをいはじ

五八―六〇

子よ、汝いま知りぬらん、命運に委ねられ、人みなみだれの亂の本なる世の富貴のただ苟かりそめ且たはぶれの戯を 六一―六三

そは月の下に今ありまた昔ありし黄金こがねこと／＼く集まるともこれらよわれる魂の一にだに休みをえさすることはよくせじ 六四
―六六

我彼に曰ふ、師よ、さらにいま我に告げよ、汝謂ふ所の命運とはこれいかなるものにて斯く世の富貴をその手の裡にをさむるや

六七―六九

彼我に、あゝ愚^{おろか}なる人々よ、汝等を躓かすは何等の無智ぞや、い

ざ汝この事についてわがいふところのこゝろのこゝろを含め 七〇—七二

夫れその智萬物に超ゆるもの諸天を造りてこれに司るものを與へ
たまへり、かくて各部は各部にかゞやき 七三—七五

みな分に應じてその光を頒つ、これと同じく世にありてもまたそ
の光輝をすべをさめ且つ導く者を立てたまへり 七六—七八

このもの時至れば空しき富貴を民より民に血より血に移し人智も
これを防ぐによしなし 七九—八一

此故にその定^{さだめ}にしたがひて一の民榮え一の民衰ふ、またその定の
人にかくるゝこと草の中なる蛇の如し 八二—八四

汝等の智何ぞこれに逆^{さから}ふことをえん、彼先を見て定めおのが權を

行ふことなほ神々のしかするに似たり 八五―八七

その推移には休歇やすみなし、已むなきの力かれをはやむ、その流轉るてんに

あふもの屢と出づるも宜なるかな 八八―九〇

彼を讃むべきもの却つて彼を十字架につけ、故なきに難なんじ、汚名

を負はしむ 九一―九三

されどかれ祝福めぐみをうけてこれを聞かず、はじめて造られしものと

共にこゝろよくその輪を轉らし、まためぐまるゝによりて喜び多

し 九四―九六

いぎ今より我等は尚大いなる憂ひにくだらん、わが進みしとき登

れる星はみな既にかたむきはじむ、我等ながくとゞまる能はず

九七―九九

我等この獄を過ぎてかなたの岸にいたれるに、こゝに一の泉あり

て湧きこゝより起れる一の溝にそゞげり 一〇〇—一〇二

水の黒きことはるかにペルソにまさりき、我等黯める波にともな

ひ慣れざる路をつたひてくだりぬ 一〇三—一〇五

この悲しき小川はうす黒き魔性の坂の裾にくだりてステイ—ジエ

とよばるゝ一の沼となれり 一〇六—一〇八

こゝにわれ心をとめて見んとて立ち、この沼の中に、泥にまみれ

みなはだかにて怒りをあらはせる民を見き 一〇九—一一一

かれらは手のみならず、頭、胸、足をもて撃ちあひ、齒にて互に

噛みきざめり 一一二—一一四

善き師曰ふ、子よ、今汝は怒りに負けしものゝ魂を見るなり、汝

またかたかく信すべし 一一五—一一七

この水の下に民あることを、かれらその歎息ためいきをもて水の面に泡

立たしむ、こはいづこにむかふとも汝の目汝に告ぐる如し 一一

八—一二〇

泥ひどの中にて彼等はいふ、日を喜ぶ麗しき空氣のなかにも無精ぶせいの水

氣を衷にやどして我等鬱せり 一二一—一二三

今我黒き泥どろみづ水のなかに鬱すと、かれらこの聖歌によりて喉うがひに嗽

す、これ全き言ことばにてものいふ能はざればなり 一二四—一二六

かくして我等は乾ける土と濡れたる沼の間をあゆみ、目を泥を飲

む者にむかはしめ、汚きたぬき瀦たまりの大なる孤をめぐりて 一二七—一二

九

つひに一の城樓やぐらの下もとにいたれり

一三〇一

第八曲

續いて語るらく、高き城樓やぐらの下もとを距るなほいと遠き時、我等は目をその頂に注げり 一—三

これ二ふたつの小さき焰のこゝにおかるゝをみしによりてなり、又他ほかにひとつ一之と相圖を合せしありしも距離あはひ大なれば我等よく認むるをえざりき 四—六

こゝにわれ全智の海にむかひ、いひけるは、この火何といひ、かの火何と答ふるや、またこれをつくれるものは誰なりや 七—九
彼我に、既に汝は來らんとすることを汚けがれし波の上に辨わかちうべし、

若し沼の水氣これを汝に隠さずば 一〇—一二

矢の絃つるに弾はじかれ空を貫いて飛ぶことはやきもわがこの時見し一の

小舟には如かじ 一三—一五

舟は水を渡りて、我等のかたにすゝめり、これを操あやつれるひとりの

舟子ふなこよばゝりて、悪しき魂よ、汝いま來れるかといふ 一六—一

八

わが主曰ひけるは、フレジ阿斯、フレジ阿斯、こたびは汝さけぶ

も益なし、我等汝に身を委ぬるは、泥ひぢを越えゆく間あひだのみ 一九—

二一

怒りを湛へしフレジアスのさま、さながら大いなる欺たばかり罔たばかりに罹れ

る人のこれをさとりていたみなげくが如くなりき 二二—二四

わが導者船にくだり、尋つひで我に入らしめぬ、船はわが身をうけて
始めてその荷を積めるに似たりき 二五―二七

導者も我も乗り終れば、年へし舳へさき忽ち進み、その水を切ること常
よりも深し 二八―三〇

我等死の溝を馳せし間に、泥を被れるもの一人わが前に出で、い
ひけるは、時いたらざるに來れる汝は誰ぞ 三一―三三

我彼に、われ來れども止まらず、然さはれ、かく汚るゝにいたれる汝
は誰ぞ、答へていふ、見ずやわが泣く者なるを 三四―三六

我彼に、罰ばちあたり當の魂たましひめ奴な、歎なげき悲かなしみの中にとゞまれ、いか
に汚るとも我汝を知らざらんや 三七―三九

この時彼船にむかひて兩手もろてをのべぬ、師はさとりてかれをおしの

け、去れ、かなたに、他の犬共にまじれといふ 四〇—四二

かくてその腕かひなをもてわが頸をいだき顔にくちづけしていひけるは、

憤りの魂よ、汝を孕める女は福さいはひなるかな 四三—四五

かれは世に僭越なりしものにてその記憶を飾る徳なきがゆゑに魂
ここにありてなほ猛し 四六—四八

それ地上現に大王の崇あがめをうけしかも記念かたみにおそるべき誹りを残し
て泥ひぢの中なる豚の如くこゝにとゞまるにいたるものその數いくば
くぞ 四九—五一

我、師よ、我等池をいでざる間に、願はくはわれ彼がこの羹あつもののな
かに沈むを見るをえんことを 五二—五四

彼我に、岸汝に見えざるさきにこの事あるべし、かゝる願ひの汝

を喜ばすはこれ適はしきことなればなり 五五―五七

この後ほどなく我は彼が泥ひぢにまみれし民によりていたく噛み裂か
るゝをみぬ、われこれがためいまなほ神を讃め神に謝す 五八―

六〇

衆皆叫びてフィリッポ・アルゼンテイをといへり、怒れるフィレ
ンツエの魂は齒にておのれを噛めり 六一―六三

こゝにて我等彼を離れぬ、われまた彼の事を語らじ、されど此時
苦患なやみの一ひとこゑ聲わが耳を打てり、我は即ち前を見んとて目をみひら
けり 六四―六六

善き師曰ひけるは、子よ、デーイーテと稱ふる邑まちは今近し、こゝに
は重き邑まちびと人大いなる群集むれあり 六七―六九

我、師よ、我は既にかなたの溪間に火の中より出でたる如く赤き
伽藍をさだかにみとむ 七〇―七二

彼我に曰ふ、内に燃ゆる永^{とこしへ}久の火はこの深き地獄の中にもなほ

汝にみゆるごとく彼等を赤くす 七三―七五

我等はつひこの慰めなき^{まち}邑を固むる深き^{ほり}濠に入れり、圍^{かこひ}は鐵より

成るに似たりき 七六―七八

めぐりく^てやうやく一の處にいたれば、舟子^{ふなこ}たかくさげびて、

入口はこゝぞ、いでよといふ 七九―八一

我見しに天より降^ふれる千餘のもの門上にあり、怒りていひけるは、

いまだ死なざるに 八二―

死せる民の王土を過ぐる者は誰ぞや、^{さと}智きわが師はひそかに語ら

はんとこころの意を彼等に示せるに　― 八七

かれら少しくその激しき怒りをおさへ、いひけるは、汝ひとり來り、かくきも膽ふとくもこの王土に入りたる者を去らせよ　八八―九

○

狂へる路によりて彼ひとりかへり、しかなしうべきや否やを見しめ、かくこの暗き國をかれに示せる汝はこゝに残るべし　九一―

九三

讀者よ、この詛ひの言をきゝて再び世にかへりうべしと信ぜざりし時、わが心挫けざりしや否やをおもへ　九四―九六

我曰ふ、あゝ七なゝたび度あまり我を安全やすきにかへらしめ、たちむかへる大難より我を救ひいだせし愛する導者よ　九七―

かくよるべなき我を棄てたまふなかれ、もしなほさきに行くあたはずは、我等疾く共に踵をめぐらさん — 一〇二

我をかしこに導ける主曰ひけるは、恐るゝなかれ、何者といへども我等の行方を奪ふをえず、彼これを我等に與へたればなり —

〇三—一〇五

さればこゝにて我を待ち、よわれる精神をはげまし、眞の希望

を食め、我汝をこの低き世に棄てざればなり — 一〇六—一〇八

かくてやさしき父は我をこの處に置いて去り、我は疑ひのうちに残り、然と否とはわが頭の中に争へるなりき — 一〇九—一一一

彼何をかれらにいへるや、我は聞くをえざりき、されど彼かれらとあひてほどなきに、かれ等みな競ひて内にはせいりぬ — 一二二

— 一四

我等の敵は門をわが主の前に閉せり、主は外そとに残され、その足おそくわが方にかへれり 一一五—一一七

目は地にむかひ、眉に信念の跡をとゞめず、たゞ歎きて憂ひの家を我に拒めるは誰ぞといふ 一一八—一二〇

また我にいひけるは、わが怒るによりて汝恐るゝなかれ、いかなる者共内にゐて防ぎ止めんとつとむとも、我はこの争ひにかつべし 一二一—一二三

彼等の非禮を行ふは新しきことにあらず、かく祕めらるゝことなく今も肩とがしなき門のほとりにそのかみ彼等またこれを行へり 一二四—一二六

四—一二六

汝がかの死の銘をみしは即ちこの門の上なりき、いまそのこなた
に導者なく圏また圏を過ぎて坂を降るひとりのもものあり 一二七

― 一二九

かれよくこの邑を我等のためにひらくべし 一三〇―一三二

第九曲

導者の歸り來るを見てわが面おもてを染めし怯心の色は彼の常ならぬ色
をかへつてはやくうちに抑へき 一―三

彼は耳を欽つる人の如く心してとゞまれり、これその目、黒き空、
濃き霧をわけて遠くかれを導くをえざりしによりてなり 四―六
彼曰ふ、さばれ我等必ずこの戦ひに勝つべし、されどもし……彼
なりき進みて助けを約せるは、あゝかの一者ひとりの來るを待つ間まはい
かに長いかな 七―九

我は彼さきが先と異なることを後あとにいひ、これをもてその始めを蔽

へるさまをさだかに知れり 一〇—一二

彼かくなせるもそのいふ事なほ我を怖おぢしめき、こはわが彼の續か

ざる言ことばに彼の思ひるたるよりなほ悪き意義を含ませし故にやあり

けん 一三—一五

罰はたゞ望みを絶たれしのみなる第一の獄ひとやより悲しみの坎あなかく深

くくたるものあることありや 一六—一八

われこの問を起せるに彼答へて曰ひけるは、我等の中にはかゝる

旅路につくものあることまれなり 一九—二一

されどまことは我一たびこゝに降れることあり、こは魂等と呼び

てその體からだにかへらしめし酷むごきエリトンの妖術によれり 二二—二

四

わが肉我を離れて後少時しばし、ジユダの獄より一の靈をとりいださん
 ため彼我をこの圍かこひの中に入らしめき 二五―二七

この獄はいと低くいと暗く萬物を廻らす天を距ることいと遠し、
 我善く路をしる、この故に心を安んぜよ 二八―三〇

はげしき惡臭をしうを放つこれなる沼は、我等がいま怒りをみずして入
 るをえざる憂ひの都をかこみめぐる 三一―三三

このほかなほいへることありしも我おぼえず、これわが目はわが
 全心を頂もゆる高き城樓やぐらにひきよせたればなり 三四―三六

忽ちこゝに血に染みていと凄き三のフリーエ時齊しくあらはれい
 でぬ、身も動作ふるまひも女によしやう性のごとく 三七―三九

いと濃き緑の水蛇イドラを帶とす、小蛇チエラスト髪に代りてその猛き

後額こめかみを卷けり 四〇—四二

この時かれ善くかぎりなき歎きの女王の侍婢等はしためを認めて我にいひけるは、兇猛なるエーリネを見よ 四三—四五

左なるはメジェラ右に歎くはアレツトなり、テシフォネ中にあり、斯く言ひて黙せり 四六—四八

彼等各と爪をもておのが胸を裂き掌たなごころをもておのが身を打てり、

その叫びいと高ければ我は恐れて詩人によりそひき 四九—五一

俯うつむき窺うかがひつゝみないひけるは、メヅーサを來らせよ、かくして彼を石となさん、我等テゼオに襲はれて怨みを報いざりし幸さちなさよ

五二—五四

身をめぐらし後うしろにむかひて目を閉ぢよ、若しゴルゴンあらはれ、

汝これを見ば、再び上に歸らんすべなし 五五―五七

師はかくいひて自らわが身を背かしめ、またわが手を危ぶみ、お

のが手をもてわが目を蔽へり 五八―六〇

あゝまことの聰明さとりあるものよ、奇くすしき詩のかげにかくるゝをしへ

を見よ 六一―六三

この時既にすさまじくひし轟めく物音濁れる波を傳ひ來りて兩岸これ

がために震へり 六四―六六

こはあたかも反する熱によりて荒れ、林を打ちて支ふるものなく、

枝を折り裂き 六七―

うち落し吹きおくり、塵を満たしてまたほこりに吹き進み、獸

と牧者を走らしむる風の響きのごとくなりき 一七二

かれ手を放ちていひけるは、いざ目をかの年へし水沫みなわにそゝげ、

かなた烟のいと深きあたりに 七三―七五

たとへば敵なる蛇におどろき、群居むれるる蛙みな水に沈みて消え、地

に蹲ひたりまるにいたるごとく 七六―七八

我は一者ひとりの前を走れる千餘ほろびの滅亡の魂をみき、この者徒歩かちにてス

テージエを渡るにその蹠濡あしうらるゝことなし 七九―八一

かれはしばゝ左手ゆんでをのべて顔のあたりの霧をはらへり、その疲

れし如くなりしはたゞこの累わづらひありしたためのみ 八二―八四

我は彼が天より遣はされし者なるをさだかに知りて師にむかへる
に、師は我に示して口を噤ましめ、また身をその前にかゝめしむ

あゝその憤りいかばかりぞや、かれ門にゆき、支ふる者なければ
一の小さき杖をもてこれをひらけり 八八―九〇

かくて恐ろしき鬪の上よりいふ、あゝ天を逐はれし者等よ、卑し
き族よ、汝等のやどす慢心はいづこよりぞ 九一―九三

その目的削がるゝことなく、かつしばゝ汝等の苦患を増せる天
意に對ひ足を擧ぐるは何故ぞ 九四―九六

命運に逆ふ何の益ぞ、汝等のチエルベロいまなほこれがため願と
喉のんどに毛なきを思はずや 九七―九九

かくて彼我等に何の言だになく汚れし路をかへりゆき、そのさま
さながらほかの思ひに責め刺され 一〇〇―

おのが前なる者をおもふに暇なき人のごとくなりき、聖語を聞い

て心安く、我等足を邑まちのかたにすゝめ 一一〇五

戦はずして内に入りనికి、我はまたかゝる砦とりでの内なるさまのいか

なるやをみんことをねがひ 一〇六一—一〇八

たゞちに目をわがあたりに投ぐれば、四方に一の大なる廣ひろには場あ

りて苦患なやみときびしき苛責を満たせり 一〇九—一一一

ローダーノの水澱むアルリ、またはイタリアを閉してその境を洗

ふカルナー口近きポーラには 一一二—一一四

多くの墓ありて地に平らかなる處なし、こゝもまた墓のため

べてかくの如く、たゞ異なるはそのさまいよくにが苦きのみ 一一

五—一一七

そは多くの焰墓の間に散在して全くこれを焼けばなり、げにいか

なる技工わざといへどもこれより赤くは鐵くろがねを焼くを需もとめぬなるべし

一一八—一二〇

蓋は悉く上げられ幸さちなき者苦しむ者にふさはしきはげしき歎なげ聲内
より起れり 一二一—一二三

我、師よ、これらの墓の中に葬られ、たゞ憂うれひの歎ため息いきを洩すの
みなるこれらの民は何なりや 一二四—一二六

彼我に、邪宗よこぞうの長等ながらその各流の宗徒とともにこゝにあるなり、ま
たこれらの墓の中には汝の思ふよりも多くの荷あり 一二七—一
二九

みな類にわかちて葬られ、塚の熱度一様ならず、かくいひて右に
むかへり 一三〇—一三二

我等は苛責と高壘の間を過ぎぬ

一三三—一三五

第十曲

さて城壁と苛責の間のかくれたる路に沿ひ、わが師さきに我はその背に附きて進めり 一—三

我曰ふ、あゝ心のまゝに我を導き信なき諸ひとやの獄をめぐる比類たぐひなき功德くどくよ、請ふ我に告げわが願ひを満たせ 四—六

墓の中に臥せる民、われこれを見るをうべきか、蓋みな上げられて守る者なし 七—九

彼我に、かれら上うへの世に残せる體からだをえてヨサファットよりこゝにかへらば皆閉ぢん 一〇—一二

こなたにはエピクロとかれに倣ひて魂を體とともに死ぬるとなす
者みな葬らる 一三一—一五

さればたゞちにこの中にて汝は我に求めしものをえ、黙して我に
いはざりし汝の願ひもまた成るべし 一六一—一八

我、善き導者よ、言少なきを希ふにあらずばわれ何ぞわが心を汝
に祕むべき、汝かく我に思はしめしは今のみならじ 一九—二一
恭しくかたりつゝ生きながら火の都を過ぎゆくトスカーナ人よ、

ねがはくはこの處にとゞまれ 二二—二四

汝は汝の言によりて尊きわが郷土ふるさと（恐らくはわが虐げし）の生

れなるをしらしむ 二五—二七

この聲ゆくりなく一の墓より出でければ、我はおそれてなほ少し

くわが導者に近づけり 二八—三〇

彼我に日ひけるは、汝何をなすや、ふりかへりてかしこに立てる
 ファーリナータを見よ、その腰より上こと／＼くあらはる 三
 一—三三

我はすでに目をかれの目にそゝぎゐたるに、かれはその胸と額を
 もたげ起してあたかもいたく地獄を嘲るに似たりき 三四—三六
 この時導者は汝の言を明かならしめよといひ、臆せず弛たゆみなき手を
 もて我を墓の間におしやりぬ 三七—三九

われ彼の墓の邊ほとりにいたれるとき、彼少しく我を見てきて蔑視さげすむごと
 く問ひていひけるは、汝の祖先は誰なりや 四〇—四二

我は従はんことをねがひてかくさず、一切をかれにうちあけしに、

少しく眉をあげて 四三―四五

いひけるは、かれらは我、わが祖先、またわが黨與の兇猛なる敵
なりき、さればわれふたゝび兩度かれらを散らせることあり 四六―四

八

我答へて彼に曰ひけるは、かれら逐はれしかども前にも後にも四
方より歸れり、されど汝の徒はともがら善くこの術を習はわざざりき 四九―

五一

この時開ける口より一の魂これとならびておとがひ頤まであらはせり、思
ふにかれは膝にて立てるなるべし 五二―五四

我とともにある人ありや否やをみるとねがへる如くわが身のあた
りをながめたりしが、疑ひ全く盡くるにおよびて 五五―五七

泣きて曰ひけるは、汝若し才高きによりてこの失明くらやみひとやの獄をめぐりゆくをえば、わが兒はいづこにありや、かれ何ぞ汝と共にあらざる 五八―六〇

我彼に、われ自ら來れるにあらず、かしこに待つ者我を導きてこゝをめぐらしむ、恐らくはかれは汝のグイードの心に侮りし者ならん 六一―六三

かれの言ことばと刑罰の状さまとは既にその名を我に讀ましめ、わが答かく全きをえしなりき 六四―六六

かれ忽ち起きあがり叫びていひけるは、汝何ぞ「りし」といへるや、彼猶生くるにあらざるか、麗しき光はその目を射ざるか 六七―六九

わがためらひてとみに答へざりしをみ、かれは再び仰あふきたふれ、

またあらはれいづることなかりき 七〇—七二

されど我に請ひて止まらしめし心大なる者、顔をも變へず頸をも動かさずまた身をも曲げざりき 七三—七五

かれさきの言を承けていひけるは、彼等もしよくこの術わざを習はざりきとならば、その事この床とこよりも我を苦しむ 七六—七八

されどこゝを治わさむる女王の顔燃ゆることいまだ五十度いそたびならぬ間に、汝自らその術わざのいかに難きやをしるにいたらむ 七九—八一

(願はくは汝麗しき世に歸るをえんことを)請ふ我に告げよ、かの人々何故に凡てその掟おきてにより、わが宗族うからをあしらふことかく殘

忍なりや 八二—八四

我すなはち彼に、アルビアを紅あけに色採いろどりし敗滅ほろびと大いなる殺戮ほふりとはかかる祈りを我等の神宮みやにさゝげしむ 八五―八七

彼歎なげきつゝ頭かうべをふりていひけるは、そもかの事に與あづかれるはわれひとりひとりにあらざりき、また我何ぞ故なくして人々とともに動かうごかんと

八八―九〇

されどフイレンツエを毀こたんとして人々心をあはせし處にては、これをあらはに回護かばひたる者たゞわれひとりのみなりき 九一―九三

我彼に請こひていひけるは、あゝねがはくは汝すゑの裔うゑつひに安息やすきをえんことを、請こふここにわが思想おもひの縛もつれとなれる節ふしを解とけ 九四―九六

六

我善く汝等のいふところをきくに、汝等は時の携へ來るものをあらかじめみれども現在にわたりてはさることなきに似たり 九七
— 九九

彼曰ふ、我等遠く物をみること恰も光備はらざる人のごとし、これ比類たぐひなき主宰いまなほ我等の上にかく輝くによりてなり 一〇

〇—一〇二

物近づきましたまのあたりにある時我等の智全く空し、若し我等に告ぐる者なくば世のありさまをいかでかしらん 一〇三—一〇五

この故に汝會得あはしくしうべし、未來の門の閉さるゝとともに我の知識全く死ぬるを 一〇六—一〇八

この時われいたく我咎を悔いていひけるは、さらば汝かの倒れし者に告げてその兒いまなほ生ける者と共にありといへ 一〇九―

一一一

またさきにわが黙^{もだ}して答へざりしは汝によりて解かれし迷ひにすでに心をむけたるが故なるをしらしめよ 一一二―一一四

わが師はすでに我を呼べり、われすなはちいよくいそぎてこの魂にともにある者の誰なるやを告げんことを請ひしに 一一五―

一一七

彼我にいひけるは、我はこゝに千餘の者と共に臥す、こゝに第二のフェデリーコとカルディナレあり、その他はいはず 一一八―

一二〇

かくいひて隠れぬ、我はわが身に仇となるべきかの言ことばをおもひめ

ぐらし、足を古いにしへの詩人のかたにむけたり 一二一—一二三

かれは歩めり、かくてゆきつゝ汝何ぞかく思ひなやむやといふ、

われその間に答へしに 一二四—一二六

聖訓ひじぎとしていひけるは、汝が聞けるおのが凶事を記憶をさに藏めよ、ま

たいま心をわが言にそゝげ、かくいひて指を擧げたり 一二七—

一二九

美しき目にて萬物を見るかの淑女の麗しき光の前にいたらば汝は

かれによりておのが生涯たびぢの旅程をさとることをえん 一三〇—一

三二

かくて彼足を左にむけたり、我等は城壁をあとにし、一の溪に入

りたる路をとり、内部うちにむかひてすゝめり 一三三―一三五
溪は忌むべき悪臭をしうをいだして高くこの處に及およばしむ 一三六―一

三八

第十一曲

砕けし巨岩おほいはの輪より成る高き岸の縁ふちにいたれば、我等の下には

いよ／＼酷むごき群むれありき 一—三

たちのぼる深淵ほつかの惡臭をしうたへがたく劇うしろしきをもて、我等はとある大お

墳ほつかの蓋うしろの後方に身を寄せぬ 四—

われこゝに一の銘をみたり、曰く、我はフォーチンに引かれて正
路を離れし法王アナスターシヨを納むと 一—九

我等ゆるやかにくだりゆくべし、かくして官能まづ少しく悲しみの
氣息いきに慣れなば、こののち患うれへをなすことあらじ 一〇—一二

師斯く、我彼に曰ふ、時空しく過ぐるなからんためおぎなひ補充の途を

求めたまへ、彼、げに我もまたその事をおもへるなり 一三一—

五

又曰ひけるは、わが子よ、これらの岩の中に三の小さき獄ひとやあり、

その次第をなすこと汝が去らんとする諸の獄の如し 一六一—

八

これらみな詛ひの魂にて満たさる、されどこの後汝たゞ見るのみ
にて足れりとするをえんため、彼等の繋がるさま状ゆゑと故とをきけ

一九—二一

夫れ憎にくみを天にうくる一切の邪惡はその目的めあて非を行ふにあり、しか

してすべてかゝる目的は或は力により或は欺たばかり罔たばかりによりて他くるしを窘

む 二二—二四

されど欺罔は人特有の罪惡なれば、神意に悖ること殊に甚し、この故にたばかりる者低きにあり、かれらを攻むる苦患なやみまた殊に大なり 二五—二七

第一の獄ひとやはすべて荒ぶる者より成る、されど力のむかふところに

三の者あれば、この獄また三の圓にわかたる 二八—三〇

力の及びうべきところに神あり、自己おのれあり、隣となりびと人あり、こは

此等と此等に屬つけるものゝ謂なることわれなほ明かに汝に説くべし 三一—三三

力隣人に及べば死となりいたましき傷となり、その持物におよべば破壊、放火、また不法の掠奪となる 三四—三六

この故に人を殺す者、惡意より撃つ者、荒らす者、掠むる者、皆類にわかたれ、第一の圓これを苛責す 三七―三九

人暴あらびの手を己が身己が産にくだすことあり、この故に自ら求めて汝等の世を去り 四〇―

またはその産業を博奕によりて盡し、費し盡し、喜ぶべき處に歎く者徒いたづらに第二の圓に悔ゆ 一四五

心に神を無なみし神を誹り、また自然と神の恩惠めぐみをかるんずるは、これ人神にむかひてその力を用ふるものなり 四六―四八

この故に最小の圓はその印をもてソツドマ、カオルサ、また心より神を輕んじかつ口にする者を封ず 四九―五一

欺たばかり罔やまは（心これによりて疚やましからぬはなし）人之を己を信ずる

ものまたは信ぜざるものに行ふ 五二—五四

後者はたゞ自然が造れる愛の繫つなぎを斷つに似たり、この故に偽善、

諂諛、人を惑はす者 五五—

詐欺、竊盜、シモエア、判人ぜげん、汚吏、およびこのたぐひの汚穢けがれみ

な第二の獄ひとやに巣くへり — 六〇

前者にありては自然の造れる愛と、その後これに加はりて特殊の信を生むにいたれるものとともにわすらる 六一—六三

この故に宇宙の中心ディーテの座所ある最小の獄にては、すべて信を賣るもの永遠とこしへの滅亡ほろびをうく 六四—六六

我、師よ、汝の説くところまことに明かに、この深處ふかみとその中なる民をわかつことまことによし 六七—六九

されど我に告げよ、泥深き沼にあるもの、風にはこぼるゝもの、
雨に打たるゝもの、行當りて罵るもの 七〇—七二

もし神の怒りに觸れなば何ぞ罰を朱の都の中にうけざる、またも
し觸れずば何故にかゝる状態さまにありや 七三—七五

彼我に曰ふ、汝の才何ぞその恆つねをはなれてかく迷ふや、またさに
あらずば汝の心いづこをか視る 七六—七八

汝は天の許さゞる三の質さが、即ち放縱、邪惡、狂へる獸心をつぶさ
にあげつらひ 七九—

また放縱は神の怒りにふるゝこと少なく誹りを招くこと少なきを
いへる汝の倫理の言を憶おもはずや 一八四

汝善くこの教へを味ひ、かつ上に外そとに罰をうくるものゝ誰なるや

を恩ひ出でなば 八五―八七

また善く何故に彼等この非道の徒ともがらとわかたれ、何故に彼等を苛責

する神の復讐の怒りかへつて輕きやを見るをえん 八八―九〇

我曰ふ、あゝ一切のみだるゝ視力を癒す太陽よ、汝解くにしたがひて我心をたらはすが故に、疑ひの我を喜ばすこと知るにおとらじ 九一―

請ふなほ少しく溯りて、高利を貪るは神恩にさからふものなりとの汝の言に及び、その纒むすびを解け 一九六

彼我に曰ふ、哲理はこれを究むる者に自然が神の智とその技わざよりいづるを處々に示せり 九七―

汝また善く汝の理學を閲けみせば、いまだ幾葉ならざるに汝等の技わざの

つとめて

自然に従ふこと弟子のその師における如く、汝等の技は神の孫なりともいひうべきを見ん — 一〇五

人みな生の道をこの二のものに求め、しかして進むべきなり、汝『創世記』の始めにこの事あるを思ひ出づべし — 一〇六—一〇八
しかるに高利を貪るものは、これと異なる道を踏みて望みを他に置き、自然とその従者をかろんず — 一〇九—一一一

されどいざ我に従へ、われ行くをねがへばなり、雙魚天涯に煌めき、北斗全くコーロの上にあり — 一二—一一四

しかもくだるべき斷崖きりぎしなほこゝより遠し — 一一五—一一七

第十二曲

岸をくだらんとて行けるところはいと峻しく、あまつさへこゝに
物ありていかなる目にもこれを避けしむ 一—三

トレントのこなたに、或は地震へるため、或は支ふる物なきため、
横さまにアディーチエをうちし崩壊あり 四—六

(くづれはじめし山の巔より野にいたるまで岩多く碎け流れて上
なる人に路を備ふるばかりになりぬ) 七—九

この断崖きりぎしの下るところまたかくの如くなりき、くだけし坎あなの端
には模造まがひの牝牛の胎に宿れる 一〇—

クレーチの名折なをれ偃ふしむたり、彼我等を見て己が身を噛みぬ、その

さま衷うちより怒りにとらはれし者に似たりき　— 一五

わが聖ひじり彼にむかひて叫びていひけるは、汝を地上に死なしめしア

テーネの公きみこゝにありと思へるか　一六—一八

獸よ、たち去れ、彼は汝の姉妹いもの教へをうけて來れるならず、汝

等の罰をみんとて行くなり　一九—二一

撲たれて既に死に臨むにおよびて絆きづなはなれし牡牛の歩む能はずし

てかなたこなたに跳はぬることあり　二二—二四

我もミノタウ口のしかするを見き、彼機とぎをみてよばりていふ、

走りて路を得よ、彼狂まふ間にくだるぞ善き　二五—二七

かくて我等はくづれおちたる石をわたりてくだれり、石は例つねなら

ぬ重荷を負ひ、わが足の下に動くこと屢 なりき 二八—三〇

我は物思ひつゝゆけり、彼曰ひけるは、恐らくは汝はわがしづめ
し獸の怒りに護らるゝこの崩壞くづれのことを思ふならん 三一—三三

汝今知るべし、さきに我この低き地獄に下れる時はこの岩いまだ
落ちざりき 三四—三六

されどわが量るところ違はずば、デーテーに課して第一の獄ひとやに大
いなる獲物えものをえし者の來れる時より少しく前の事なりき 三七—

三九

深き汚けがれの溪四方に震ひ、我は即ち宇宙愛に感ぜりとおもへり（或
人信ずらく 四〇—

世はこれあるによりて屢 と渾沌に變れりと）、此時この古き岩

こゝにもほかのところにもかく壞れしなりき　—四五

されど目を下に注げ、血の河近ければなり、すべて暴あらびによりて人

を害そこなふものこの中に煮らる　四六—四八

あゝ悪き狂へる盲めしひの慾よ、苟かりそめ且の世にかく我等を唆そゝのかし、後か

ぎりなき世にかく幸さちなく我等を漬ひたすとは　四九—五一

われ見しに導者の我に告げし如く、彎曲して弓を成し全く野を抱

くに似たる一の廣き濠ありき　五二—五四

岸の裾と是との間にはあまたのチエンタウ口矢を持ち列をくみて

駛せるたり、そのさま恰も世にすみて狩にいでし時の如し　五五

—五七

我等の下くだるを見てみなとゞまりぬ、群のうちよりみたりの者まづ

弓矢をえらびこれをもてすゝめり 五八—六〇

そのひとり遙かに叫びていひけるは、汝等崖がけを下る者いかなる苛責をうけんとして來れるや、その處にて之をいへ、さらば弓彎ひか

む 六一—六三

わが師曰ひけるは、我等近づきそこにてキロンに答ふべし、汝は心常にかく燥はやるによりて禍わざひをえき 六四—六六

かくてわが身に觸れていひけるは、彼はネツソとて美しきデア

ーニラのために死し、自ら怨みを報いしものなり 六七—六九

眞中まなかにおのが胸をみるはアキルレをはぐゝめる大いなるキロン、

いまひとり怒り満ちくしフオー口なり 七〇—七二

彼等千々ちぢ相集まりて濠をめぐりゆき、罪の定むる處を越えて血よ

り出づる魂あればこれを射るを習ひとす 七三一七五

我等は此等の疾とき獸に近づけり、キロン矢を取り、※はずにて鬚あぎとを腮

によせて 七六一七八

大いなる口を露はし、侶ともに曰ひけるは、汝等見たりや、かの後あとな

る者觸るればすなはち物の動くを 七九一八一

死者の足にはかゝることなし、わが善き導者この時既に二の象結かたち

び合へる彼の胸ちかくたち 八二一八四

答へて曰ひけるは、誠に彼は生く、しかもかく獨りなるにより、

我彼にこの暗闇の溪をみせしむ、彼を導く者は必須なり娛樂にあ

らず 八五一八七

ひとりのものアレルヤの歌をはなれてこの新しき任務つとめを我に委ね

しなり、彼盗人にあらず、我また盗人の魂にあらず 八八—九〇
 さればかく荒れし路を傳ひて我に歩みを進ましむるちから權威によりこゝ
 に我汝に請ふ、群のひとりを我等にえさせよ、我等そのかたへ傍にした
 がひ 九一—九三

彼は我等に渉るべき處ををしへ、また空ゆく靈にあらねばこの者
 をその背に負ふべし 九四—九六

キロン右にむかひネツソにいひけるは、歸りてかく彼等を導け、
 もしほかの群むれにあはゞそれに路を避けしめよ 九七—九九

我等は煮らるゝものゝ高く叫べる紅の煮の岸に沿ひ、このたのも
 しき先達しるべと共に進めり 一〇〇—一〇二

我は眉まで沈める民を見き、大いなるチエンタウ口いふ、彼等は

妄りに血を流し産を掠めし暴君なり 一〇三—一〇五

こゝに彼等その非情の罪業を悼む、こゝにアレツサンドロあり、

またシチーリアに患の年を重ねしめし猛きディオニシオあり 一

〇六—一〇八

かの黒き髪ある額はアツツオリノなり、またかの黄金の髪ある

はげに上の世にその繼子に殺されし 一〇九—

オピツツオ・ダ・エステイなり、この時われ詩人の方にむかへる

に、彼曰ひけるは、この者今は汝のために第一となり我は第二と

なるべし 一一四

なほ少しく進みて後チエンタウ口は煮ゆる血汐の外に喉まで出せ

る如くなりし一の民のあたりに止まり 一一五—一一七

片側なるたゞ一の魂を我等に示していひけるは、彼はターミーチ
 にいまなほ崇あがめをうくる心臓こころを神ふところの懷ふところに割きしものなり 一一八—

一二〇〇

やがて我は河の上に頭かうべを出し、また胸をこと／＼く出せる民を

見き、またその中にはわが知れる者多かりき 一二一—一二三

斯くこの血次第に淺くなりゆきて、遂にはたゞ足を焼くのみ、我

等の濠を涉るところはすなはちこゝなりき 一二四—一二六

チエンタウ口いふ、こなたにては煮ゆる血汐のたえず減へること汝

見る如し、またこれに應じ 一二七—一二九

かなたにては暴しひたげ虐うめの呻吟うめく處と再び合ふにいたるまで水みな底次そこ

第に深くなりまさるを汝信しんずべし 一三〇—一三二

神の義しもとこゝに地の咎しもとなりしアツテイラとピルロ、セストを刺し、

また大路おほぢをいたくさわがしし 一三三一

リニエール・ダ・コルネート、リニエール・パツツオを煮、その
涙をしぼりて永遠とこしへにいたる 一三三八

かくいひて身をめぐらし、再びこの浅瀬を涉れり 一三九―一四

一

第十三曲

ネツソ未だかなたに着かざるに我等は道の跡もなき一の森をわけ
て進めり 一—三

木の葉は色黯くろずみて緑なるなく、枝は節だちくねりて直く滑かなる
なく、毒をふくむ刺とげありて實なし 四—六

チエチーナとコルネートの間なる耕せる處を嫌ふ猛き獸すみかの栖すまにも
かくあらびかくしげれる※薈しげみはあらし 七—九

穢きたなきアルピーエこゝにその巢を作れり、こは末凶なりとの悲報を
もてトロイア人ひとをストロファデーより追へるものなり 一〇—一

二

その翼はひろく頸と顔とは人にして足に爪、大いなる腹に羽あり、
 彼等奇くしき樹の上にて歎けり 一三―一五

善き師我にいひけるは、遠くゆかざるさきに知るべし、汝は第二
 の圓にあるなり 一六―

また恐ろしき砂にいたるまでこの圓にあらん、この故によく目を
 とめよ、さらばわが言ことばより信を奪ふべきものをみん 一―二一

われ四方に叫喚を聞けども、これを上ぐる人を見ざれば、いたく
 惑ひて止まれり 二二―二四

思ふにかく多くの聲はかの幹の間我等のために身をかくせし民よ
 りいでぬと我思へりと彼思へるなるべし 二五―二七

師乃ち曰ふ、汝この樹の一より小枝を手折らば、汝のいだく思ひはすべて斷たるべし 二八—三〇

この時われ手を少しく前にのべてとある大いなる荊棘いばらより一の小枝を採りたるに、その幹叫びて何ぞ我を折るやといふ 三一—三

三

かくて血くろずに黯くろむにおよびてまた叫びていひけるは、何ぞ我を裂くや、憐みの心すこし些も汝にあらざるか 三四—三六

いま木と變れども我等は人なりき、またたとひ蛇の魂なりきとも汝の手にいまま少しの慈悲はあるべきを 三七—三九

たとへば生木なまきの一端かたはし燃え、一端よりは雫しづくおち風聲を成してにげさるごとく 四〇—四二

詞と血と共に折れたる枝より出でにき、されば我は尖さきを落して恐
るゝ人の如くに立てり 四三―四五

わが聖ひじり答へて曰ひけるは、しひたげられし魂よ、彼若しわが詩の
中へのみ見しことを始めより信じえたりしならんには 四六―四
八

汝にむかひて手を伸ぶることなかりしなるべし、たゞ事信じ難き
によりて我彼にすすめてこの行あらしむ、わが心これが爲に苦し
四九―五一

されど汝の誰なりしやを彼に告げよ、さらば彼汝の名を上の世に
(彼かしこに歸るを許さる)新にし、これを贖あがなひのよすがとなさん

五二―五四

幹、かゝる麗しき言ことばにさそはれ、われ口を噤み難し、願はくは心
ひかるゝまゝにわが少しく語らん事の汝に累となるなからんこと
を 五五―五七

我はフェデリーゴの心の鑰かぎを二ながら持てる者なりき、我これを
めぐらして或ひは閉ぢ或ひは開きその術巧わざみなりければ 五八―

六〇

殆ど何人と雖も彼の祕密たづさに係はるをえざりき、わがこの榮はえある職つとめ
に忠なりし事いかばかりぞや、我之がために睡りをも脈をも失へ
り 六一―六三

阿諛おもねりの眼まなこをチエーザレの家より放ちしことなく、おしなべての

死、宮の罪惡なる遊女あそびめは 六四―六六

すべての心を燃やして我に背かしめ、燃えし心はアウグストの心を燃やし、喜びの譽悲しみの歎きとかはりぬ 六七―六九

わが精神たましひは怒りに驅られ、死によりて誹りを免かれんことを思ひ、正しからざることを正しきわが身に行へり 七〇―七二

この樹の奇くしき根によりて誓ひて曰はん、我はいまだかく譽をうるにふさはしかりしわが主の信に背けることなしと 七三―七五
 汝等のうち若し世に歸る者あらば、嫉みに打たれていまなほ地に伏すわが記憶を慰めよ 七六―七八

待つこと須臾しばらくにして詩人我に曰ひけるは、彼默もだすために時を失ふことなく、なほ問ふことあらばいひて彼に問へ 七九―八一

我乃ち彼に、汝我心に適ふべしと思ふ事をば請ふわがために彼に

問へ、憐み胸にせまりて我しかするあたはざればなり 八二―八

四

此故に彼又曰ひけるは、獄裏の魂よ、願はくは此人ねんごろに汝
のために汝の言の乞ことば求むるものをなさんことを、請ふ更に 八五

―八七

我等に告げて魂此等の節ふしの中に繋がるゝに至る状さまをいへ、又若し
かなはゞそのかゝる體からだより解放たるゝ事ありや否やをいへ 八

八―九〇

この時幹はげしく氣を吐けり、この風聲かぜに變りていふ、約つゞまやかに

汝等に答へん 九一―九三

残忍なる魂己を身よりひき放ちて去ることあればミノスこれを第

七の口におくり 九四—九六

このもの林の中に落つ、されど定まれる處なく、たゞ命運の投入るゝ處にいたりて芽すこと一粒の麥の如く 九七—九九

若枝わかえとなり後野生の木となる、アルピーエその葉を食みてこれに痛みを與へまた痛みめざに窓を與ふ、我等はほかの者と等しく 一〇〇—

我等の衣の爲めに行くべし、されど再びこれを着る者あるによるに非ず、そは人自ら棄てし物をうくるは正しき事に非ざればなり

—一〇五

我等これをこゝに曳き來らむ、かくて我等の體からだはこの憂き林、いづれも己を虐げし魂いばらの荆棘の上に懸けらるべし 一〇六—一〇八

幹のなほ我等にいふことあらんを思ひて我等心をとめたるに、

この時さわがしき物音起り、我等の驚かされしこと 一〇九—

一一

さながら野猪しと獵犬と己が立處たちどにむかふをさとり、獸と枝との高

き響きを聞くものの如くなりき 一一二—一一四

見よ、左に裸なる搔き裂かれたるふたりの者あり、あらゆる森の

しげみをおしわけ、逃げわしることいとはやし 一一五—一一七

さきの者、いざ疾とく、死よ、疾くと叫ぶに、ほかのひとり己が

おそくして及ばざるをおもひ、ラーノ、トツポの試藝しあひに 一一八

—

汝の脛はぎはかく軽くはあらざりしをとさけび、呼吸いきのせまれる故に

やありけむ、その身をとある柴木と一團ひとつになしぬ　— 一二三

後うしろの方かたには飽くことなく、走ることくさり鍾くさりを離れし獵犬にひとしき黒

き牝犬林に満ち　一二四—一二六

かの潜める者に齒をくだしてこれを刻み、後そのいたましき身を
持ち行けり　一二七—一二九

この時導者わが手をとりにて我をかをの柴木のほとりにつれゆけるに、
血汐滴たる折際をれめより空しく歎きていひけるは　一三〇—

あゝジャーコモ・ダ・サント・アンドレーアよ、我を防禦ふせぎとなし

て汝に何の益かありし、汝罪の世を送れりとして我身に何の咎あら

んや　— 一三五

師その傍かたへにとゞまりていひけるは、かく多くの折際をりめより血と共に

憂ひの詞をはく汝は誰なりしや 一三六―一三八

彼我等に、あゝこゝに來りてわが小枝を我よりとりはなてる恥づ
べき虐をみし魂等よ 一三九―一四一

それらを幸なき柴木のもとにあつめよ、我は最初の守護の神をバ
ーテイスタに變へし邑の者なりき、かれこれがために 一四二―

一四四

その術をもて常にこの邑を憂へしむ、もしその名残のいまなほア
ルノの渡りにとゞまるあらずば 一四五―一四七

アツテイラが残せる灰の上に再びこの邑を建てたる邑人の勞苦
は空しかりしなるべし 一四八―一五〇

我はわが家をわが絞臺としき 一五一―一五三

第十四曲

郷土の愛にはげまされ、落ちちらばりし小枝を集めて既に聲なき
かの者にかへせり 一—三

さてこゝよりすゝみて第二と第三の圓のわかるゝところなる境に
いたればこゝに恐るべき正義の業^{わざ}みゆ 四—六

めなれぬものをさだかに知らしめんためさらにはんに、我等は
一草一木をも床^{ゆか}に容れざる一の廣野につけり 七—九

憂ひの林これをめぐりて環^{わかざり}飾となり、さながら悲しみの濠の林
に於ける如くなりき、こゝに我等縁^{ふち}いと近き處に足をとゞめぬ

一〇—一二

地は乾ける深き砂にてその状さまそのかみカートンの足踏めるものと
異なるなかりき 一三—一五

あゝ神の復讐よ、わがまのあたり見しことを讀むなべての人の汝
を恐るゝことい**か**ばかりなるべき 一六—一八

我は裸なる魂の多くの群むれを見たり、彼等みないと幸さちなきさまにて
泣きぬ、またその中に行はるゝ掟おきて一様ならざるに似たりき 一九

—二二—

あふの仰きて地に臥せる民あり、また全く身を縮めて坐せるあり、またたえ
ず歩めるありき 二二—二四

めぐりゆくものその數かずいと多し、また臥して苛責をうくるものは

その數いと少なきもその舌歎きによりて却つて寛ゆるかりき 二五―

二七

砂といふ砂の上には延びたる火片ひのひらしづかに降りて、風なき峻嶺たかね

の雪の如し 二八―三〇

昔アレツサンドロ、インドの熱き處にて焰その士卒の上に落ち地にいたるも消えざるをみ 三一―三三

火はその孤なるにあたりて消し易かりしが故に部下に地を踏ましめしことありき 三四―三六

かくの如く苦患なやみを増さんとて永遠とこしへの熱おちくだり、砂の燃ゆる

ことあたかも火打鎌の下なる火口ほくちにひとしく 三七―三九

忽ちかなたに忽ちあらたあなたに新なる焰さちをはらふ幸なきもろて雙手トレスカの亂舞

にはしばしの休みもあることなかりき 四〇—四二

我曰ふ、門の入口にて我等にたちむかへる頑かたくななる鬼のほか物とし

て勝たざるはなき汝わが師よ 四三—四五

火をも心にとめざるさまなるかの大いなる者は誰なりや、嘲りを
帯び顔をゆがめて臥し、雨もこれを熟うましめじと見ゆ 四六—四

八

われ彼の事をわが導者に問へるをしりて彼叫びていひけるは、死
せる我生ける我にかはらじ 四九—五一

たとひジョーヴェ終りの日にわが撃たれたる鋭き電いなづま光を怒れる
彼にとらせし鍛かぢ工を疲らせ 五二—五四

またはフレーグラの戦ひの時の如くに、善きヴルカーノよ、助け

よ、助けよとよばはりつゝモンジベル口なる黒き鍛工場かぢばに 五五

—
 残りの鍛工等をかはるゝ” \ 疲らせ、死力を盡して我を射るとも、
 心ゆくべき復讐はとげがたし — 六〇

この時わが導者聲を勵まして（かく高らかに物言へるを我未だ聞きしことなかりき）いひけるは、カパーネオよ、汝の罰のいよゝ重きは汝の慢心の盡きざるにあり、汝の劇しき怒りのほかはいかなる苛責の苦しみも汝の怒りにふさはしき痛みにあらじ 六一

— 六六

かくいひて顔を和らげ、我にむかひていひけるは、こはテーベを圍める七王ひとりの一にて神を侮れる者なりき 六七—

いまも神を侮りて崇むるあがことなしとみゆ、されどわが彼にいへる
 如く彼の嘲りはいとにつかしきその胸の飾なり 一七二

いぎ我に従へ、またこの後慎みて足を熱砂に觸れしむることなく、
 たえず森に沿ひて歩むべし 七三―七五

我等また語らず、さゝやかなる一の小川の林の中より迸る處にい
 たれり、その赤きこといまもわが身を震へしむ 七六―七八

さながらブリカーメより細き流れ（罪ある女等ほどへてこれをわ
 けもちふ）の出づる如く、この川砂を貫いて下り 七九―八一

その水底みなそこ、傾ける兩岸、縁ふちはみな石と成れり、此故に我こゝに
 行手の路あるを知りき 八二―八四

鬩を人のこゆるに任す門まかより内に入りしこのかた、凡てわが汝に

示せるものゝうちすべてをその上に消すこの流れの如くいち
 じるしきは汝の目未だ見ず 八五―八七

これわが導者の言なりき、我乃ち彼に請ひ、慾を我に惜しまざり
 し彼の、食をも惜しむなからんことを求めぬ 九一―九三

この時彼曰ふ、海の正たゞなか中に荒れたる國あり、クレータと名づく、
 こゝの王の治世の下もと、世はそのかみ清かりき 九四―九六

かしこにそのかみ水と木葉このはの幸さちありし山あり、イーダと呼ぶる、
 今は荒あれすた廢れていと舊ふりたるものゝごとし 九七―九九

そのかみレーアこれをえらびてその子の恃たのみの搖籃となし、その泣
 く時特に善くかくさんためかしこに叫びあらしめき 一〇〇―一

この山の中には一人の老巨人ひとりの直立するあり、背をダーミアータにむけ、ローマを見ること己が鏡にむかふに似たり 一〇三—一

〇五

その頭は純金より成り、腕と胸とは純銀なり、そこより跨またにいたるまでは銅 一〇六—一〇八

またその下はすべて精鐵なれどもたゞ右足のみは焼土にてしかも彼の直く立つ却つて多くこれによれり 一〇九—一一一

黄金こがねの外はいづこにも罅さけめ生じて涙したゝり、あつまりてかの窟いはやを穿ち 一一二—一一四

岩また岩を傳はりてこの溪に入り、アケロンテ、ステイージュエ、フレジエトンタとなり、その後この狭き溝によりて落ち 一一五

— 一一七

またくだるあたはざる處にいたりてそこにコチートと成る、この池の何なるやは汝見るべし、この故にこゝに語らず 一一八—

二〇

我彼に、若しこの細流かくわが世より出でなば何故にこの縁へりにのみあらはるゝや 一二一—一二三

彼我に、汝此處のまろきを知る、汝の來る遠しといへども常に左に向ひて底にくだるが故に 一二四—一二六

未だあまねく獄をめぐらず、されば新しきもの我等にあらはるとも何ぞあやしみを汝の顔に見するに足らむ 一二七—一二九

我また、師よ、フレジエトンタとレーテはいづこにありや、汝もだ黙

してその一のことをいはず、また一は此雨より成るといへり 一

三〇—一三二

彼答へて曰ひけるは、汝問ふところの事みなよくわが心に適ふ、

されど、煮ゆる紅の水はよく汝の問の一に答へん 一三三—一三

五

レーテは汝見るをうべし、されどこの濠の外、罪悔によりて除か

れし時魂等己を洗はんとて行く處にあり 一三六—一三八

又曰ひけるは、いまは森を離るべき時なり、汝我に従へ、燃えざ

る縁路を造り 一三九—一四一

一切の炎その上に消ゆ 一四二—一四四

第十五曲

堅き縁ふちの一は今我等を負おひゆけり、小川の烟はおほひかゝりて水
と堤とを火より救へり 一—三

グイツツアンテとブルツジアの間なるフィアンドラ人びとこなたに寄
せくる潮うしほを恐れ海を走らしめんため水際みぎはをかため 四—六

またはブレンタの邊ほとりなるパードヴァ人キアレンターナの熱に觸れ
ざる間にその邑まちその城を護らんとためまたしかするごとく 七—九

この堤は築かれき、たゞ築けるもの（誰にてもあれ）之をかく高
くかく厚くなさゞりしのみ 一〇—一二

我等既に林を離るゝこと遠くわれ後うしろを顧みれどもそのいづこにあるやを見るをえざりしころ 一三一—一五

我等は堤に沿ひて來れる一ひとむれ群の魂にいであへり、さながら夕間暮れ新月にひづきのもとに人の人を見る如く 一六一—

彼等みな我等を見、また老いたる縫物師ぬひものしの針眼はりのみにむかふごとく目を鋭くして我等にむかへり 一二一—

かゝる族やからにかくうちまもられ我はそのひとりにさとられき、彼わが裾をとらへ叫びて何等の不思議ぞといふ 二二二—二四

彼その腕かひなを我にむかひてのべし時、われ目を焼けし姿にとむるに、顔のたゞれもなほわが智さとを妨げて 二五—

彼を忘れしむるにはたらざりき、われわが顔を彼の顔のあたりに

低れて、セル・ブルネットよ、こゝにゐ給ふやと答ふ 一三〇

彼、わが子よ、ねがはくはブルネット・ラティーニしばらく汝と

共にあとにかへりてこの群むれをさきに行かしめん 三一—三三

我彼にいふ、これわが最も希ふところなり、汝またわが汝と共に
坐すわらん事を願ひその事彼の心に適はゞしかすべし、我彼と共に

けばなり 三四—三六

彼曰ふ、あゝ子よ、この群の中縦たとひ束の間なりとも止まる者あれ

ばその者そののち身を横たゆる百もゝとせ年に及び火これを撃つとも扇

ぐによしなし 三七—三九

されば行け、我は汝の衣につきてゆき、永劫の罰を歎きつゝゆく

わがなかも伴侶にほどへて再び加はるべし 四〇—四二

我は路をくだり彼とならびてゆくを得ず、たゞうやくしく歩む
 人の如くたえずわが頭かうべを低れぬ 四三―四五

彼曰ふ、終焉をはりの日未だ至らざるに汝をこゝに導くは何の運何ぢやうの定
 ぞや、また道を教ふるこの者は誰ぞや 四六―四八

我答へて彼に曰ふ、明あかき上の世に、わが齡未だ満たざるに、我一
 の溪の中に迷へり 四九―五一

わが背そびらを之にむけしはたゞ昨日きのふの朝の事なり、この者かしこに戻
 らんとする我にあらはれ、かくてこの路により我を導いて我家わがやに
 歸らしむ 五二―五四

彼我に、美しき世にてわが量れること違はずば汝おのが星に従は
 んに榮光の湊を失ふあたはず 五五―五七

またわが死かく早からざりせば天かく汝に福するをみて我は汝の
爲すところをはげませしなるべし 五八—六〇

されど古いにしへ、ファイエソレを下りいまなほ山と岩とを含める恩を忘れ

しさがなき人々 六一—六三

汝の善き行ひの爲に却つて汝の仇とならむ、是亦宜なり、そは酸
きソルボに混りてまし甘き無花果の實を結ぶは適はしき事に非ざれば
なり 六四—六六

彼等は世の古き名によりて盲めしひと呼ばる、貪り嫉み傲たかぶりの民なり、汝
自ら清くしてその習俗ならひに染むなかれ 六七—六九

汝の命運大いなる譽を汝のために備ふるにより彼黨此黨いづれも
飢ゑて汝を求めむ、されど草は山羊より遠かるべし 七〇—七二

フイエソレの獸等に己をその敷藁しきわらとなさせ、若し草木のなほそ

の糞ふんの中より出づるあらばこれに觸れしむるなかれ 七三―七五

この處かく大いなる邪惡の巢となりし時こゝに残れるローマ人びとの

聖すゑき裔すゑこれによりて再び生くべし 七六―七八

我答へて彼に曰ふ、若しわが願ひ凡て成るをえたらんには汝は未

だ人の象かたちより逐はるゝことなかりしものを 七九―八一

そは世にありて我にしばく人不朽に入るの道を教へたまひし當

時の慕はしき善きあたゝかきおも影はわが記憶を離るゝことなく

八二―

今わが胸にせまればなり、われこの教へを徳とするいかばかりぞ

や、こは生ある間わが語ることによりてあきらかなるべし 一八

七

わが行末に關かゝはりて汝の我に告ぐる所は我之を録しるし他の文字と共に殘し置くべし、かくして淑女のわがそのもとにいたるに及びて

八八—

知りて義を示すを待たん、願はくは汝この一事を知るべし、曰く、わが心だに我を責めずば、我はいかなる命運をも恐れじ — 九三
かゝる契約はわが耳に新しき事に非ざるなり、この故に命運は己が好むがまゝに其輪を轉らし農夫は鋤をめぐらすべし 九四—九

六

この時我師右の方かたより後うしろにむかひ我を見て、善く聽く者心をとむといふ 九七—九九

かゝる間も我はたえずセル・ブルネットとかたりてすゝみ、その
なかま同囚の中いと秀でいと貴き者の誰なるやを問へり 一〇〇—一〇

二

彼我に、知りて善き者あり、されど他ほかはいはざるを善しとす、こ
ことばれ言多くして時足らざればなり 一〇三—一〇五

たゞ知るべし、彼等は皆僧と大いなる名ある大いなる學者の同じ
 一の罪によりて世に穢れし者なりき 一〇六—一〇八

プリシアンかの幸なき群にまじりて歩めり、フランチェスコ・ダ
 ツコルソ亦然り、また汝深き願ひをかゝる瘡かさによせしならんには

一〇九—一一一

しもべ僕の僕によりてアルノよりバツキリオーネに遷され、惡の爲に竭

せる身をかしこに残せる者を見たりしなるべし 一一二—一一四

その外なほ擧ぐべき者あれど行くも語るもこの上にはいで難し、

かしこに砂原より立登る新しき烟みゆ 一一五—一一七

こはわが共にあることをえざる民來れるなり、我わがテゾーロに
よりて生く、ねがはくは之を汝に薦めん、また他を請はず 一一

八—一二〇

かくいひて身をめぐらし、あたかも緑の衣をえんとてヴェロナの
ひろの廣野を走るものゝ如く、またその中にても 一一一—一二三

負くる者ならで勝つ者の如くみえたりき 一二四—一二六

第十六曲

我は既に次の獄ひとやに落つる水の響きあたかも蜂はちのす窠の鳴る如く聞ゆる
るところにいたれるに 一—三

この時三みつの魂ありてはしりつゝ、はげしき苛責の雨にうたれて過
ぎゆく群を齊しくはなれ 四—六

我等の方にむかひて來り、各 叫びていひけるは、止まれ、衣に
よりてはかるに汝は我等よこしまの邪なる邑まちの者なるべし 七—九

あはれ彼等の身にみゆるは何等の傷ぞや、みな焰に焼かれしもの
にて新しきあり、古きあり、そのさま出づればいまなほ苦し 一

〇—一二

我師彼等のよばゝる聲に心をとめ顔をわが方にむけていひけるは、
待て、彼等は人の敬ひをうくべきものなり 一三一—一五

さればもし處の性の火を射るなくば我は急は彼等よりもかへつて
汝にふさはしといふべし 一六一—一八

我等止まれるに彼等は再び古歌をうたひ、斯くて我等に近づける
時三者あひ寄りて一の輪をつくれり 一九—二一

裸なる身に膏うちぬり將に互に攻め撲たんとしてまづおさゆべき
機會をうかゞふ勇士の如く 二二—二四

彼等もまためぐりつゝ各 目を我にそゞぎ、頸はたえず足と異なる
方にむかひて動けり 二五—二七

そのひとりいふ、この軟かき處の幸なき、くろず黯み爛れし我等の姿、
たとひ我等と我等の請ひとに侮りを招く事はありとも 二八―三

○

願はくは我等の名汝の意を枉こころげ、生くる足にてかく安らかに地獄
を擦すりゆく汝の誰なるやを我等に告げしめんことを 三一―三三
見らるゝ如く足跡を我に踏ましむるこのひとりは裸にて毛なしと
いへども汝の思ふよりは尚きはた際貴き者なりき 三四―三六

こは善きグアルドラードの孫にて名をグイード・グエルラといひ、
その世にあるや智と劔をもて多くの事をなしたりき 三七―三九
わが後うしろに砂を踏みくだく者はその名上の世に稱たへらるべきテツギ

アイオ・アルドブランデイなり 四〇―四二

また彼等と共に十字架にかゝれる我はヤーコポ・ルスティクツチ
 といへり、げに萬よろづの物にまさりてわが猛き妻我に禍す 四三―四
 五

我若し火を避くるをえたりしならんには身を彼等の中に投げ入れ
 しなるべく思ふに師もこれを許せるなるべし 四六―四八

されど焦され焼かるべき身なりしをもて、彼等を抱かんことを切せち
 に我に求めしめしわが善き願ひは恐れに負けたり 四九―五一

かくて我曰ひけるは、汝等の状態さまはわが衷うちに侮りにあらで大いな
 る俄に消え盡し難き憂ひを宿せり 五二―五四

こはこれなる我主の言ことばによりてわが汝等の如き民來るをしりしそ
 の時にはじまる 五五―五七

我は汝等の邑まちの者なり、常に心をとめて汝等の行おこなひと美名よきなをかたり

且つきけり 五八―六〇

我は膽みを棄まことて眞の導者の我に約束したまへる甘き實をえんとてゆ

くなり、されどまづ中たゞなか心までくだらではかなはじ 六一―六三

この時彼答ふらく、ねがはくは魂ながく汝の身をみちびき汝の名

汝の後に輝かんことを 六四―六六

請ふ告げよ、文と武とは昔の如く我等の邑まちにとゞまるや、または

廢れて跡なきや 六七―六九

そはグイリエールモ・ボルシエーレとて我等と共に苦しむ日淺く

いまかなたに侶とゆく者その言ことばによりていたく我等を憂へしむ

七〇―七二

あらた

新なる民 おもはざる 不意の富は、フィオレンツアよ、自負と放逸を汝の

うちに生み、汝は既に是に依りて泣くなり 七三―七五

われ顔を擧げて斯くよばゝれるに、かの三者 みたり これをわが答と知り

て互に面を見あはせぬ、そのさま眞 まこと を聞きて人のあひ見る如くな

りき 七六―七八

皆答へて曰ひけるは、かく卑しき價をもていづれの日にかまた人の心をたらはすをえば、かく心のまゝに物言ふ汝 さいはひ は福なるかな

七九―八一

此故に汝これらの暗き處を脱れ、再び美しき星を見んとて歸り、

我かしこにありきと喜びていふをうる時 八二―八四

ねがはくは我等の事を人々に傳へよ、かくいひてのち輪をくづし

てはせゆきぬ、その足疾ときこと翼に似たりき 八五―八七

彼等は忽ち見えずなりにき、アーメンもかくはやくは唱へえざり
しなるべし、されば師もまた去るをよしと見たまへり 八八―九

○

我彼に従ひて少しく進みゆきたるに、この時水音いと近く、たと
ひ我等語るとも聲聞ゆべくはあらざりき 九一―九三

モンテ・ヴェーゾの東にあたりアペンニノの左の裾より始めて己
の路をわしり 九四―九六

その高處にありて未だ低地にくだらざる間アクアケータと呼ばれ、
フォルリにいたればこの名を空しうする川の 九七―九九

たゞ一ひとおち落おちに落下りて千を容るべきサン・ベネデット・デル・ア

ルペの上に轟く如く 一〇〇—一〇二

かの紅の水はほどなく耳をいたむるばかりに鳴渡りつゝ一の嶮し
き岸をくだれり 一〇三—一〇五

我は身に一筋の紐を巻きゐたり、嘗てこれをもて皮に色ある豹を
とらへんと思ひしことありき 一〇六—一〇八

われ導者の命に従ひてこと／＼くこれを解き、結び束ねて彼に

わたせり 一〇九—一一一

彼乃ち右にむかひ、少しく縁ふちより離してこれをかの深き溪間に投

入れぬ 一一二—一一四

我謂へらく、師斯く目を添へたまふ世の常ならぬ相圖には、應ふ
るものもまた必ず世の常ならぬものならむと 一一五—一一七

あゝたゞ行ひを見るのみならで、その智よく衷^{うち}なる思ひをみる者
 と共にある人心を用ふべきこといかばかりぞや 一一八—一二〇
 彼我に曰ふ、わが待つものたゞちに上^{のぼ}り來るべし、汝心に夢みる
 ものたゞちに汝にあらはるべし 一二一—一二三
 夫^{いつはり}れ偽の顔ある眞^{まこと}については人つとめて口を噤むを善しとす、こ
 れ己に咎なくしてしかも恥を招けばなり 一二四—一二六
 されど我今黙し難し、讀者よ、この喜^{コメディア}劇の詞によりて（願は
 くは世の覺^{おぼえ}ながく盡きざれ）誓ひていはむ 一二七—一二九
 我は濃き暗き空氣の中にいかなる堅き心にもあやしとなすべき一
 の象^{かたち}の泳ぎつゝ浮び來るを見たり 一三〇—一三二
 そのさまたとへば岩または海にかくるゝほかの物よりこれを攫め

る錨を抜かんとをりふしくだりゆく人の 一三三―一三五

身を上^{すほ}にひらき足は窄めて歸る如くなりきと 一三六―一三八

第十七曲

尖れる尾をもち山を越え垣と武器うちものを毀つ獸を見よ、全世界を穢すものを見よ 一—三

わが導者かく我にいひ、さて彼に示して踏來れる石の端はし近く岸につかしむ 四—六

この時きたな汚たばかりき欺かたち罔からだの像浮び上りて頭と體を地にもたせたり、されど尾を岸に曳くことなかりき 七—九

その顔は義しき人の顔にて一重の皮に仁いつくしみ慈をみせ、身はすべて蛇なりき 一〇—一二

二の足には毛ありて腋下に及び、背胸せむねまた左右の脇には蹄わな係と小

楯と畫かれぬ 一三一—一五

タルターロ人びとまたはトルコ人の作れる布きぬの浮織うきおりの裏文表文

にだにかく多くの色あるはなく、アラ—ニエの機はたにだに 一六一—

かゝる織物かけられしことなし、たとへばをりふし岸の小舟なかばの半

水に半陸くがにある如く、または食飲くひのみしげきドイツ人びとのあたりに

海狸戦ひを求めて身を構ふる如く、いとあしきこの獸は砂を圍め

る石の縁ふちにとゞまりぬ 一二四

蠍さそりの如く尖さきを固めし有毒うどくの叉またを巻き上げて尾はこと／＼く虚空

に震へり 二五—二七

導者曰ふ、いぎすこしく路を折れてかしこに伏せるあしき獸にい

たらむ 二八—三〇

我等すなはち右にくんだり、砂と炎を善く避けんため端^{はし}をゆくこと
十歩にしてやがて 三一—三三

かしこにいたれる時、我はすこしくさきにあたりて空處に近く砂
上に坐せる民を見き 三四—三六

師こゝに我にいひけるは、汝この圓の知識をのこりなく携ふるを
えんためゆきて彼等の状態^{ありさま}をみよ 三七—三九

彼等となぐもものいふなかれ、我はこれと汝の歸る時までかたり
てその強き肩を我等に貸さしむべし 四〇—四二

斯くて我はたゞひとりさらに第七の獄^{ひとや}の極^{いやはし}端^{はし}をあゆみて悲しみ
の民坐したるところにいたれり 四三—四五

彼等の憂ひは目より湧き出づ、彼等は手をもてかなたにこなたに
或ひは火氣或ひは焦土を拂へり 四六―四八

夏の日、蚤、蠅または虻に刺さるゝ犬の忽ち口忽ち足を用ふるも、
そのさまこれと異なることなし 四九―五一

われ目を數ある顔にそゝぎて苦患なやみの火を被むる者のみしもそのひ
とりだに識れるはなく 五二―

たゞ彼等各 色も徽號しるしもとり／＼なる一の囊ふくろを頸に懸けまたこ
れによりてその目を養ふに似たるを認めき 一五七

我はうちまもりつゝ彼等のなかをゆき、一の黄なる囊の上に獅子
の面かほと姿態みぶりとをあらはせる空そらいろ色をみき 五八―六〇

かくてわが目のなほ進みゆきし時、我は血の如く赤き一の囊の、

牛酪よりも白き鷺鳥を示せるをみき 六一—六三

こゝにひとり白き小袋に空色の孕める豚を徽號しるしとせる者我にいひ

けるは、汝この濠ほりの中に何を爲すや 六四—六六

いざ去れ、しかして汝猶生くるがゆゑに知るべし、わが隣となりびと人

ヴィターリアーノこゝにわが左にすわらむ 六七—六九

これらフイレンツエ人びとのなかにありて我はパードヴァの者なり、

彼等叫びて三の嘴の囊をもて世にまれなる武ますらを夫來れといひ 七

○—

わが耳つんざを壁くこと多し、かく語りて口を歪めあたかも鼻ねぶを舐る牡

牛の如くその舌を吐けり 一七五

我はなほ止まりて我にしかするなかれと誠めしものゝ心を損はん

ことをおそれ、弱れる魂等を離れて歸れり 七六一七八

かくて既に猛き獸しりの後に乗りたるわが導者にいたれるに、彼我に

曰ひけるは、いざ心を強くしかたくせよ 七九一八一

この後我等かゝる段きだによりてくだる、汝は前に乗るべし、尾の害

をなすなからんためわれ間にあるを願へばなり 八二一八四

瘡をわづらふ人、惡寒さむけを覺ゆる時迫れば、爪既に死色を帶び、たゞ

日蔭を見るのみにてもその身震ひわなゝくことあり 八五―八七

我この言ことばを聞けるときまた斯くの如くなりき、されど彼の戒めは

我に恥を知らしめき、善き主の前には僕強きもまたこの類たぐひなるべ

し 八八―九〇

我はかの太ふとく醜みにくき肩の上に坐せり、ねがはくは我を抱きたまへと

いはんと思ひしかどもおもふ如くに聲出でざりき 九一―九三

されど危きに臨みてさきにも我を助けし者、わが乗るや直ちにその腕かひなをもて我をかかへ我をさゝへ 九四―

いひけるは、いざゆけジェーリオン、輪を大きくし降りをゆるくせよ、背にめづらしき荷あるをおもへ 一九九

たとへば小舟岸をいでゝあとへくくとゆくごとく彼もこの處を離れ、己が身全く自由なるをしるにいたりて 一〇〇―一〇二

はじめ胸を置ける處にその尾をめぐらし、これをひらきて動かすこと鰻の如く、また足をもて風をその身にあつめき 一〇三―一〇五

〇五

思ふにフエートンがその手綱を棄てし時（天これによりて今も見

ゆるごとく焦れぬこが）または幸なきイカー口が 一〇六一

蟬熱をうけし爲め翼腰をはなるゝを覚え、善からぬ路にむかふよ
と父よばゝれる時の恐れといへども

身は四方大氣につゝまれ萬象消えてたゞかの獣のみあるを見し時
のわが恐れにはまさらじ 一一一四

いとゆるやかに泳ぎつゝ彼進み、めぐりまたくだれり、されど顔
にあたり下より來る風によらでは我之を知るをえざりき 一一五
一一七

我は既に右にあたりて我等の下に淵の恐るべき響きを成すを聞き
しかば、すなはち目を低れて項うなじをのぶるに 一一八一—一二〇
火見え歎きの聲きこえ、この斷崖きりぎしのさまいよくおそろしく、

我はわなゝきつゝかたく我身をひきしめき 一二一—一二三

我またこの時四方より近づく多くの大いなる禍ひによりてわがさ

きに見ざりし降下くだりと廻轉めぐりとを見たり 一二四—一二六

ながく翼を驅りてしかも呼ばれず鳥も見ず、あゝ汝下るよと鷹たかづ

匠かひにいはるゝ鷹の 一二七—一二九

さきにいさみて舞ひたてるところに今は疲れて百もの輪を急がいて

くだり、その飼主を遠く離れ、あなどりいかりて身をおくごとく

一三〇—一三二

ジェーリオネは我等を削れる岩の下もとなる底におき、荷なるふたり

をおろしをはれば 一三三—一三五

弦つるをはなるゝ矢の如く消えぬ 一三六—一三八

第十八曲

地獄にマーレボルジエといふところあり、その周圍まはりを巻く圈の如くすべて石より成りてその色鐵に似たり 一—三

この魔性の廣野ひろのの正ただ中なかにはいと大いなるいと深き一の坎あなありて口をひらけり、その構造なりたちをばわれその處にいたりていはむ 四

—六

されど坎と高き堅き岸の下もととの間に残る處は圓くその底十の溪にわかたる 七—九

これ等の溪はその形たとへば石垣を護らんとため城を繞りていと多

くの濠ある處のさまに似たり 一〇—一二

またかゝる要害には鬩より外濠そとぼりの岸にいたるまで多くの小さき

橋あるごとく 一三—一五

數ある石橋いしばし岩根より出で、堤つみと濠をよこぎりて坎にいたれば、

坎はこれを斷ちこれを集めぬ 一六—一八

ジエーリオンの背より拂はれし時我等はこの處にありき、詩人左

にむかひてゆき我はその後うしろを歩めり 一九—二一

右を見れば新あらたなる憂ひ、新なる苛責、新なる撻者うちて第一の囊ボルジャに滿て

り 二二—二四

底には裸なる罪人等ありき、中央なかばよりこなたなるは我等にむかひ

て來り、かなたなるは我等と同じ方向むきにゆけどもその足はやし

二五—二七

さながらジュビレーオの年、ぐんじゆ群集大いなるによりてローマ人等びと民

の爲に橋を渡るの手段てだてをまうけ 二八—三〇

かたがは片側なるはみな顔カステルロを城にむけてサント・ピエート口にゆき、片

側なるは山にむかひて行くごとくなりき 三一—三三

くろす黯める岩の上には、かなたこなたに角ある鬼の大なる鞭を持つあ

りてあらくしく彼等うしろを後より打てり 三四—三六

あはれ始めの一撃ひとうちにて踵くびすを擧げし彼等の姿よ、ふたうちみうち二撃三撃を待

つ者はげにひとりだにあらざりき 三七—三九

さて歩みゆく間、ひとりわが目にとまれるものありき、我はたゞ

ちに我嘗て彼を見しことなきにあらずといひ 四〇—四二

すなはち定かに認めんとて足をとむれば、やさしき導者もともに

止まり、わが少しく後に戻るを肯ひたまへり 四三―四五

この時かの策たるもの顔を垂れて己を匿さんとせしかども及ば

ず、我曰ひけるは、目を地に投ぐる者よ 四六―四八

その姿に詐りなくば汝はヴェネデイーコ・カツチャネミーコなり、

汝を導いてこの辛きサルセに下せるものは何ぞや 四九―五一

彼我に、語るも本意なし、されど明かなる汝の言我に昔の世をし

のばしめ我を強ふ 五二―五四

我は侯マルケーゼの心に従はしめんとてギソラベルラをいぎなひし者なりき

(この不徳の物語いかに世に傳へらるとも) 五五―五七

さてまたこゝに歎くボローニア人は我身のみかは、彼等この處に

満つれば、今サヴェーナとレーノの間に 五八―六〇

シパといひならふ舌もなほその數これに及びがたし、若しこの事しるしあかしの徴、證をほしと思はゞたゞ慾深き我等の胸を思ひいづべし 六

一―六三

かく語れる時一の鬼その鞭をあげてこれを打ちいひけるは、去れ判人、こゝにはた騙すべき女なし 六四―六六

我わが導者にともなへり、かくて數歩にして我等は一の石橋の岸より出でし處にいたり 六七―六九

いとやすく之に上りて破岩をわたり右にむかひ此等のとこしへ永久の圈を離れき 七〇―七二

橋下空しくひらけて打たるゝ者に路をえさするところにいたれば、

導者曰ひけるは、止まれ 七三―七五

しかしてこなたなる幸なく世に出でし者の面を汝にむけしめよ、

彼等は我等と方向むきを等しうせるをもて汝未だ顔を見ず 七六―七

八

我等古き橋より見しに片側かたがはを歩みて我等のかたに來れる群あり

てまたおなじく鞭に逐はれき 七九―八一

善き師問はざるに我に曰ひけるは、かの大いなる者の來るを見よ、

いかに苦しむとも彼は涙を流さじとみゆ 八二―八四

あゝいかなる王者の姿ぞやいまなほ彼に残れるは、彼はヤーン

とて智と勇とによりてコルコ人びとより牡羊を奪へる者なり 八五―

八七

レンノの島の膽きもふと 太き慈悲なき女等すべての男を殺し盡せし事ありし後、彼かしこを過ぎ 八八―九〇

さきに島人を欺きたりし處女おとめイシフィーレを智あまと甘きことばをもてあざむき 九一―九三

その孕むにおよびてひとりこれをこゝに棄てたり、この罪彼を責めてこの苦をうけしめ、メデーアの怨みまた報いらる 九四―九

六

すべて斯の如く欺く者皆彼と共にゆくなり、さて第一の溪とその牙に罹るものをする事之をもて我等足れりとなさん 九七―九九
我等は此時細路第二の堤と交叉し之を次の弓門アルコの橋脚はしぐひとなせる

ところにていたれるに 一〇〇―一〇二

次の囊ポルジャの民の呻吟うめく聲、あらしき氣息いき、また掌たなごころにて身をうつ音きこ

えぬ 一〇三—一〇五

たちのぼる悪氣岸に粘つき、黴かびとなりてこれをおほひ、目を攻めま

た鼻を攻む 一〇六—一〇八

底は深く窪みたれば石橋のいと高き處なる弓門アルコの頂に登らではい

づこにゆくもわきがたし 一〇九—一一一

我等すなはちこゝにいたりて見下みおろせるに、濠の中には民ありて糞ふん

に浸ひたれり、こは人の厠より流れしものゝごとくなりき 一一二—

一一四

われ目をもてかなたをうかゞふ間、そのひとり頭いたく糞によご
れて緇素を判わかち難きものを見き 一一五—一一七

彼我を責めて曰ひけるは、汝何ぞ穢れし我侶ともを措きて我をのみか
く貪り見るや、我彼に、他に非ずわが記憶に誤りなくば 一一八

一一二〇

我は汝を髪乾ける日に見しことあり、汝はルツカのアレッシヨ・
インテルミネイなり、この故にわれ特ことに目を汝にとゞむ 一二一

一二二三

この時頂いたゞきを打ちて彼、我をかく深く沈めしものは諂へつらひなりき、わが
舌これに飽きしことなければなり 一二四―一二六

こゝに導者我に曰ひけるは、さらに少しく前を望み、身穢れ髪亂
れかしこに不淨の爪もて 一二七―一二九

おのが身を搔かきたちまちうづくまりたちまち立ついやしき女の顔

を見よ 一三〇—一三二

これ遊あそびめ女タイデなり、いたく心に適かなへりやと問へる馴染なじみの客に

答へて、げにあやしくとこそといへるはかれなりき 一三三—一

三五

さて我等の目これをもて足れりとすべし 一三六—一三八

第十九曲

あゝシモン・マーゴよ、幸なきずさ従者等よ、汝等は貪りて金銀のため、徳のはなよめ新婦となるべき 一—三

神の物を穢れしむ、今らっば喇叭は汝等のために吹かるべし、汝等第三のボルジャ囊にあればなり 四—六

我等はこの時石橋の次いたゞきの頂まさしく濠のまなか真中にあたれるところに登れり 七—九

あゝ比類たぐひなき智慧よ、天に地にまた禍ひの世に示す汝のわざ技は大いなるかな、汝のちから權威のわか頒ち與ふるさまは公平なるかな 一〇—一

二

こゝに我見しに側かはにも底にも黒める石一面に穴ありて大きき皆同
じくかついづれも圓まろかりき 一三一—一五

思ふにこれらは授洗者じゆせんじやの場所としてわが美しき聖ジョヴァンニ
の中に造られしもの（未だ幾年いくとせならぬさきき我その一を碎けるこ
とあり 一六一—一八

こはこの中にて息絶えんとせし者ありし爲なりき、さればこの言ことば
證あかしとなりて人の誤りを解け）より狭くも大きくもあらざりしなる
べし 一九—二一

いづれの穴の口よりも、ひとりの罪ある者の足およびその脛はぎこむ
腓らまであらはれ、ほかはみな内にあり 二二—二四

二の蹠あしうら火に燃えて關節つがひめこれがために震ひ動き、そのはげしきは綱つなをも組緒くみををも斷切るばかりなりき 二五—二七

油ひきたる物燃ゆれば炎はたゞその表面おもてをのみ駛するを常とす、かの踵くびすより尖さきにいたるまでまた斯くの如くなりき 二八—三〇

我曰ふ、師よ、同囚なかまの誰よりも劇しく振り動かして怒りをあらはし猛き炎に舐ねぶらるる者は誰ぞや 三一—三三

彼我に、わが汝をいだいて岸の低きをくだるを願はゞ汝は彼によりて彼と彼の罪とを知るをうべし 三四—三六

我、汝の好むところみな我よに好し、汝は主なり、わが汝の意こころに違ふなきを知り、またわが黙もたして言はざるものを知る 三七—三九

かくて我等は第四の堤にゆき、折れて左にくだり、穴多き狭き底

にいたれり 四〇—四二

善き師は我をかはぎの脛はぎにて歎けるもの、罅裂われめあるところに着かしむ

るまでその腰よりおろすことなかりき 四三—四五

我曰ふ、悲しめる魂よ、杙くひの如く挿さされて逆さかさなる者よ、汝誰な

りとももしかことばなはば言いを出いだせ 四六—四八

我はあたかも埋いけられて後なほ死を延べんとおもへる不義の刺客に

呼戻されその懺悔をきく僧の如くたちゐたり 四九—五一

この時彼叫びていひけるは、汝既にこゝに立つや、ボニフアーチ

ヨよ、汝既にこゝふみに立つや、書は偽りて數年を違へぬ 五二—五

四

斯く早くもかの財寶たからに飽けるか、汝はそのため欺いて美しき淑女

をとらへ後虐しひたぐるをさへ恐れざりしを 五五—五七

我はさながら答をきゝてさとりえずたゞ嘲りをうけし如く立ちて
さらに應こたふるすべを知らざる人のさまに似たりき 五八—六〇

この時ヴィルジリオいひけるは、速かに彼に告げて我は汝の思へ
る者にあらず汝の思へる者にあらずといへ、我乃ち命ぜられし如
く答へぬ 六一—六三

是に於て魂足をこと／＼く揺ゆるがせ、さて歎きつゝ聲憂はしく我
にいふ、さらば我に何を求むるや 六四—六六

もしわが誰なるを知るをねがふあまりに汝此岸を下れるならば知
るべし、我は身に大いなる法衣ころもをつけし者なりしを 六七—六九
まことに我は牝熊めぐまの仔なりき、わが上うえには財寶たからをこゝには己ふくろを囊

に入るゝに至れるもたゞひたすら熊の仔等の榮さかえを希へるによりて

なり 七〇—七二

我頭の下には我よりさきにシモニアを行ひ、ひきいれられて石の
さけめにかくるゝ者多し 七三—七五

わがゆくりなく問をおこせる時汝とおもひたがへたるもの來るに
いたらば、我もかしこに落行かむ 七六—七八

されどわがかく足を燒き逆さかさにて經し間の長さは、彼が足を赤くし
挿されて經ぬべき時にまされり 七九—八一

これその後あとに西の方より法おきてを無みしいよく醜みにくき行ひありて彼と
我とを蔽ふに足るべきひとりの牧者來ればなり 八二—八四

彼はマツカベエイの書ふみのうちなるヤーソンの第二とならむ、また

王これに甘あまかりし如くフランスを治むるもの彼に甘かるべし 八
五―八七

我はこの時わがたゞかゝる歌をもて彼に答へし事のあまりに愚なるわざなりしや否やを知らず、曰く、あゝいま我に告げよ 八八

―九〇

我等の主かぎ鑰を聖ピエートロに委ぬるにあたりて幾許いくばくの財寶たからを彼に求めしや、げにその求めしものは我に從への外あらざりき 九一

―九三

また罪ある魂の失へる場所を補はんとて鬪くじにてマツティアを選べる時、ピエルもほかの弟子達でしたちも彼より金銀をうけざりき 九四―

九六

此故にこゝにとゞまれ、罰をうくるは宜うべなればなり、かくして汝

にカル口を侮らしめし不義の財貨たからをかたくまもれ 九七―九九

若し喜びの世にて汝が手にせし比類たくひなき鑰うやまひの敬いまなほ我ひかを控ゆ

るなくば 一〇〇―一〇二

これより烈はげしき言ことばをこそもちるめ、汝等の貪りは世界わざはひに殃よきし善を

踏みしき悖もとれるを擧ぐ 一〇三―一〇五

女水の上に坐し淫を諸王に鬻ぐを見し時、かの聖傳を編める者汝

等牧者を思へるなり 一〇六―一〇八

すなはち生れて七の頭あり、その夫の徳を慕ふ間十の角つのよりその

證あかしをうけし女なり 一〇九―一一一

汝等は己の爲に金銀の神を造れり、汝等と偶像に事ふるものゝ異

なる處いづこにかある、彼等一を拜し汝等百を拜す、これのみ

一一二——一四

あゝコスタンティーンよ、汝の歸依ならず、最初の富める父が汝よりうけしその施物せもつはそもいかなる禍ひの母となりたる 一一五

——一七

我この歌をうたへる間、彼は怒りに刺されしか或ひは恥に刺されしか、はげしく二の蹠あしうらゆを揺れり 一一八——二〇

思ふにこの事必ずわが導者の意をえたりしなるべし、かれ氣色けしきいとうるはしくたえず耳をわがのべし眞まことの言に傾けき 一二一——

二三

かくてもろかひな雙腕もろかひなをもて我を抱き、我を全くその胸に載せ、さき

くだれる路をのぼれり 一二四—一二六

またかく抱きて疲るゝことなく、第四の堤より第五の堤に通ふア弓ルコいたゞきの頂まで我を載せ行き 一二七—一二九

石橋粗く嶮しくして山羊やぎさへたやすく過ぐべきならねば、しづかにこゝにその荷をおろせり 一三〇—一三二

さてこゝよりみゆるは次の大なる溪なりき 一三三—一三五

第二十曲

あらた
 新なる刑罰を詩に編み、これを第一の歌沈める者の歌のうちなる
 カント
 曲第二十の材となすべき時は至れり 一―三

こゝにわれよく心をとめて望み見しに、くるしみの涙を浴びし底
 あらはれ 四―六

まろき大溪おほたにに沿ひて來れる民泣いて物言はず、足のはこびはこ
 の世の祈禱いのりの行列に似たりき 七―九

わが目なほひくゝ垂れて彼等におよべば、頤おとがひと胸との間みな奇くし
 くゆがみて見ゆ 一〇―一二

すなはち顔は背うしろにむかひ、彼等前を望むあたはで、たゞ後方うしろに行

くあるのみ 一三一—一五

げに人中ちゆうぶ風のわざによりてかく全くゆがむにいたれることもあ
るべし、されど我未だかゝることをみず、またありとも思ひがた
し 一六一—一八

讀者よ（願はくは神汝に讀みて實みを摘むことをえしめよ）、請ふ

今自ら思へ、目の涙背筋せすぢをつたひて 一九—二一

あさらひ

臂を洗ふばかりにいたくゆがめる我等の像かたちをしたしく見、我何ぞ

顔を濡らさざるをえん 二二—二四

我はげに堅き石橋の岩の一に凭もたれて泣けり、導者すなはち我に曰

ふ、汝なほ愚者に等しきや 二五—二七

夫れこゝにては慈悲全く死してはじめて敬虔生く、神の審判さばきにむかひて憐みを起す者あらばこれより大いなる罪人あらんや 二八

—三〇—

首かうべをあげよ、あげてかの者を見よ、テーベ人びとの目の前にて地そのためにひらけしはこれなり、この時人々皆叫びて、アンファイアラ

—オよ 三一—三三—

何處いづこにおちいるや何ぞ軍いくさを避くるやとよべるもおちいりて止まるひまなく、遂に萬民をとらふるミノスにいたれり 三四—三六

見よ彼は背を胸に代ふ、あまりに前さきをのみ見んことをねがへるに
よりていま後あとを見後方うしろにゆくなり 三七—三九

テイレージアを見よ、こは體からだすべて變りて男より女となり、その

姿あらたまるにいたれるものなり 四〇—四二

この事ありて後、再び雄々しき羽をうるため、彼まづ杖をもて二匹の纏もつれあへる蛇をふたゝび打たざるをえざりき 四三—四五

背を彼の腹に向くるはアロンタなり、ルーニ山の中、その下に住むカルラーラ人の耕すところに 四六—四八

白き大理石のうちなる洞ほらを住居すまゐとし、こゝより星と海とを心のまゝに見るをえき 四九—五一

みだれし髪をもて汝の見ざる乳房ちぶさをおほひ、毛ある肌はだへをみなかなたにむけしは 五二—五四

マントといへり、多くの國々をたづねめぐりて後わが生れし處にとどまりき、されば請ふ少しくわがこゝに陳のぶることを聞け 五

五―五七

その父世を逝さりバーコの都奴婢はしためとなるにおよびてかれはひさし

く世にさすらへり 五八―六〇

上うへなる美しきイタリアの中、ティラルリに垂れて 獨ラーマニア逸を閉す

アルペの裾に一湖あり、ベナーコと名づく 六一―六三

ガルダとヴァル・カーモニカの間にはおもふに千餘の泉あるべし、

その水みなアペンニノを洗ひてこの湖に湛ふ 六四―六六

湖の中央に一の處あり、トレント、ブレシヤ、ヴェロナの牧者等

若しこの路を取ることにあらば各 ことゝに祝福を與ふるをえん 六

七―六九

美しき堅き城ペスキエーラはブレシヤ人ベルガーモ人を防がんと

てまはりの岸のいと低き處にあり 七〇—七二

ベナーコの懷ふところにあまるものみな必ずこゝに落ち、川となりて緑の

牧場をくだる 七三—七五

この水流れはじむればベナーコと呼ばれず、ゴヴェルノにいたり
てポーに入るまでミンチヨとよばる 七六—七八

未だ遠く進まざるまにとある窪地くぼちをえて中にひろがり沼となり、

夏はしばし患ひを醸す恐れあり 七九—八一

さてこの處を過ぐとてかの猛き處をとめ女沼の中央に不毛無人の地ある

を見 八二—八四

すべて世の交際まじらひを避けおのが術わざを行はんためその僕等と共にとゞ

まりてこゝに住みこゝにその骸むくろを殘せり 八五—八七

この後あたりに散りゐたる人々みなこの處にあつまれり、これ四方に沼ありてその固強かためかりければなり 八八―九〇

彼等町を枯骨の上に建て、はじめてこの處をえらべるものに因ちなみ、
占うらによらずして之をマンツアと呼べり 九一―九三

カサロデイの愚未だピナモンテの欺くところとならざりし頃は、

この中なる民なほ多かりき 九四―九六

されど我汝を戒む、たとひ是と異なるわが邑まちの由來を聞くことありとも、汝偽いつはりをもて真まこととなすなかれ 九七―九九

我、師よ、汝の陳ぶること我にあきらかに、善くわが信をえたり、さればいかなる異説出づとも我には消えし炭に過ぎじ 一〇〇―

されど我に告げよ、汝は歩みゆく民の中に心をとむべきものを見
ずや、そはわが思ひたゞこの事にのみむかへばなり 一〇三—

〇五

この時彼我に曰ふ、髯を頬より黯くろめる肩に垂るゝものはギリシア
に男子なく 一〇六—一〇八

搖籃滿つるにいたらざりし頃の卜者にて、カルカンタと共にアウ
リーデに最初の纜とも解かるべき時を卜せり 一〇九—一一一

彼名をエウリピロといひき、わが高き悲曲の調しらべはいづこにか彼を
かく歌へることあり、汝この詩を知り盡せばまたよくこの事を知

らん 一一二—一一四

雙もろ脇わきいたく瘦せたるはミケール・スコットといひ、惑はし欺く

無益むやくの術わざにまことに長けし者なりき 一一五——一一七

見よグイード・ボナツテイを、見よアステンテを（彼革と絲とに

心をむけし事を願ひ今悔ゆれどもおそし） 一一八——一二〇

針、杼ひ、紡錘つむを棄て、ト者となりし幸なき女等を見よ、彼等は草

と偶ひとがた人をもてその妖術を行へり 一二一——一二三

されどいざ來れ、カイノと茨いばらは既に兩半球の境を占め、ソビリ

アのかなたの波に觸る 一二四——一二六

昨夜既に月は圓かりき、こは低き林の中にてしばく汝に益をえ

させしものなれば汝いかでか忘るべき 一二七——一二九

かく彼我に語り、語る間も我等は歩めり 一三〇——一三二

第二十一曲

このほかわが喜コメディア曲の歌ふを好まざる事どもかたりつゝ、かく
橋より橋にゆき、頂いたゞきにいたるにおよびて 一—三

我等はマーレボルジエなる次の罅裂われめと次の空しき歎きを見んとて
とゞまれり、我見しにこの處あやしく暗かりき 四—六

たとへば冬の日ヴェネツィア人の船アールセーナ廠すこやに、健かならぬ船を
塗替へんとて、粘ねばき脂やに煮ゆるごとく 七—九

(こは彼等海に浮ぶをえざるによる、すなはち之に代へてひとり
は新あらたに船を造り、ひとりあまたの旅をかさねし船わきの側を塞ぎ

一〇—一二

ひとりは舳へさきひとりは艫ともに釘うち、彼櫂を造り是綱を繕より、ひとり

は大小の帆を繕つくらふ) 一三—一五

下には濃き脂火やにによらず神の技みわざによりて煮え、岸いたるところこ

れに塗まみれぬ 一六—一八

我之を見れども、煮られて浮ぶ泡の外には一としてその中に見ゆ

る物なく、たゞこの脂の一面に膨れいでゝはまた引縮むさまをみ

るのみ 一九—二一

われ目を凝らして見おろしゐたるに、あれ見よあれ見よといひて

わが導者わが立處たちどより我をひきよす 二二—二四

しきりに見んことをねがへども、そは逃げて避くべきものにしあ

れば、俄におそれていきほひ挫くじけ 二五―

見るまも足を止めざる人の如く、われ身を返して後方うしろをみしに石
橋をわたりてはせきたれる一の黒き鬼ありき 一三〇

あゝその姿猛きこといかばかりぞや、翼ひらかれ足かるきその身
の振舞あらくしきこといかばかりぞや 三一―三三

尖りて高きその肩には、ひとりの罪つみびと人の腰を載せ、その足頸あしくび
をかたく握れり 三四―三六

橋の上よりいふ、あゝマールブランケよ、見よ聖チタのアンチア
ンの一人を、汝等彼を沈むべし、我は再びかの邑まちに歸らん 三七

かの處には我よくかゝる者を備へおきたり、さればボンツ―口の

他^{ほか}、汚吏ならぬものなく、否も錢のために然りに代へらる　— 四

二

かくいひて彼を投げいれ堅き石橋をわたりてかへり、繫^{つなぎ}はなれし番^{ばん}犬^{いぬ}の盗人を追ふもかく疾^{はや}からじ　四三—四四

彼沈み、背を高くして再び浮べり、されど橋を戴ける鬼共叫びて

いひけるは、^{サント・ヴォルト}聖^{セント}顔^{ヴォルト}もこゝには益なし　四六—四八

こゝに泳ぐはセルキオに泳ぐと異なる、此故に我等の鐵搭^{くまで}好ましからずばこの脂の上^{かぎ}にうくなかれ　四九—五一

かくて彼等は彼を百餘の鐵鉤^{かぎ}に噛ませ、こゝは汝のかくれて踊る處なれば、盗みうべくば目を掠^{かす}めてなせといふ　五二—五四

厨^{ちゆうふ}夫^ふが庖^{ぼうじ}仕^しに肉^{にく}叉^{さし}をもて肉を鍋の眞中^{まなか}に沈めうかぶことなか

らしむるもこれにかはらじ 五五—五七

善き師我に曰ふ、汝は汝のこゝにあること知られざるため、岩の
 後にうづくまりておのが身を掩へ 五八—六〇

またいかなる虐わが身に及ぶも恐るゝなかれ、さきにもかゝる争

ひにのぞめることあれば我よくこれらの事を知る 六一—六三

かくいひて橋をわたりてかなたにすゝめり、げにそのさわがぬ氣
 色をみすべきは彼が第六の岸にいたれる時なりき 六四—六六

その怒りあらだつさまはさながら立止まりてうちつけに物乞ふ乞
 食にむかひて群犬はせいづる時の如く 六七—六九

小橋の下より出でし鬼共みなその鐵搭を彼にむけたり、されど彼
 よばゝりていふ、汝等いづれも悪意をいだくことなかれ 七〇—

七二

鐵搭くまでの我をとらふる前に、汝等のひとりすゝみいでゝわがいふと

ころのことをきゝ、のち相謀りて我を之にかくべきや否やをさだめよ 七三―七五

彼等皆叫びてマラコダ行くべしといふ、即ちその一者ひとり進み出で

(他ほかはみな止まれり)かくするも彼に何の益かあるといひつゝ彼に近づけり 七六―七八

わが師曰ひけるは、マラコダよ、われ天意冥助によらずして今に至るまですべて汝等の障礙しやうげをまのかれ 七九―

こゝに來るをうべしと汝思ふや、我等を行かしめよ、わがこの荒れたる路をひとりの者に教ふるも天の定むるところなればなり

— 八四 —

此時彼の慢心折れ、彼は鐵搭くまでをあしもとにおとして彼等にいふ、
かくては彼を撃ちがたし 八五—八七

導者我に、橋の岩間にうづくまる者よ、いまは安らかにわがもと
にかへれ 八八—九〇

我いでゝいそぎて彼の處にいたれば、鬼こと／＼く進みいづ、
我はすなはち彼等が約を履まざらんことをおそれぬ 九一—九三
嘗て契約によりてカープロナをいでし歩兵の一軍群がる敵の間に
ありてまたかく恐るゝを見しことあり 九四—九六

我は全身を近くわが導者によせ、目をよからぬ彼等の姿より放つ
ことなかりき 九七—九九

彼等は鐵鉤かぎをおろせり、その一者ひとりほか他の一者ひとりにいふ、汝わが彼の臀しりに觸るゝをねがふや、彼等答へて、然り一ひとつち擊彼にあつべしといふ

されどわが導者ことばとをまじへし鬼たゞちにふりかへりて、措おけ措おけ、スカルミリオネといひ 一〇三—一〇五

さて我等に曰ひけるは、是より先はこの石橋をゆきがたし、第六アルコの弓門アルコ悉く碎けて底にあればなり 一〇六—一〇八

されば汝等なほさきに行くをねがはゞこの堤を傳ひてゆくべし、近き處にいま一の石橋あり、これぞ路なる 一〇九—一一一

昨日きのふは今より五時の後にてこの路こゝにくづれしこのかた千二百

六十六年を満たせり 一一二—一一四

我は此等の部下を分ちてかなたに遣はし、身を干す者のありや否やを見せしむべければ、汝等之と共に行け、彼等禍ひをなすことあらじ 一一五——一七

又曰ひけるは、出でよアーリキーノ、カルカブリーナ、汝も出でよカーニヤツツオ、バルバリツチャ汝は十の者を率ゑよ 一一八——一二〇

進めりビコツコ、ドラギニヤツツオ、牙のチリアツト、グラツフ
 イアカーネ、ファールファレルロ、狂へるルビカンテ 一二一——一二三

煮ゆる糰もちほとりの邊を巡視みめぐり、またこの多くの岩窟いはあなの上に隙すきなく懸れる次の岩まで此等の者をおくりゆけ 一二四——一二六

我曰ふ、あゝ師よ、これいかなる事の態さまぞや、汝だに路を知らば
 我何ぞ道案内みちしるべを要もとむべき、願はくはこれによらで我等のみ行か
 む 一二七—一二九

汝常の如く心をもちみなば、見ずや彼等の齒をかみあはせ、眉に
 殃わざはひの兆をあらはすを 一三〇—一三二

彼我に、請ふ汝恐るゝなかれ、彼等に好むがまゝに齒をかましめ
 よ、彼等かくするは煮られてなやむ者のためのみ 一三三—一三
 五

彼等は折れて左の堤をとれり、されど各 とまづその長をさにむかひ、
 齒にて舌を緊しめて相圖あひまとし 一三六—一三八
 長をさはその肛門を喇らつ叭ぱとなしき 一三九—一四一

第二十二曲

我嘗て騎兵の陣を進め、戦ひを開き、軍を整へ、或時はまた逃げのびんとて退くを見き 一—三

アレツツオ人よ、我は或ひは喇叭或ひは鐘或ひは太鼓或ひは城の相圖或ひは本國異邦の物にあはせ 四—六

進んで偵ふもの襲うて掠むるもの汝等の地にわしり、また軍軍と武を競ひ、兵兵と技を争ふを見き 七—九

されど未だかく奇しき笛にあはせて歩騎動き、陸または星をしるべに船進むをみしことあらじ 一〇—一二

我等は十の鬼と共に歩めり、げに兇猛なる伴侶よ、みちづれされど聖徒と

寺に浮浪漢ごろつきと酒肆さかみせに 一三一—一五

我心はたゞ脂やににのみむかへり、こはこの囊ボルジャとその中に焼かるゝ民

の状態ありさまとを残りなく見んためなりき 一六一—一八

たとへば背の弓をもて水手等かこをいましめ、彼等に船を救ふの途を

求めしむる海豚いるかの如く 一九一—二一

苦しみをかるめんため、をりふし罪人つみびとのひとりその背をあらは

し、またこれをかくすこと電光いなづまよりも早かりき 二二—二四

またたとへば濠水ほりみづの縁ふちにむれる蛙顔をのみ出して足と太ふとやか

なるところをかくすごとく 二五—二七

罪人等四方にうかびゐるが、バルバリツチャの近づくにしたが

ひ、みなまた煮にえの下にひそめり 二八—三〇

我は見き（いまも思へば我心わなゝく）、一匹ひとつの蛙残りて一匹ひとつ飛

びこむことあるごとくひとりの者のとゞまるを 三一—三三

いと近く立てるグラツファイアカーネ、脂にまみれしその髪の毛を

鐵搭くまでにかけ、かくして彼をひきあぐれば、姿さながら河かはうそ獺に似

たりき 三四—三六

我は此時彼等の名を悉く知りゐたり、これ彼等えらばれし時よく
之に心をとめ、その後彼等互に呼べる時これに耳を傾けたればな
り 三七—三九

誚はれし者共聲をそろへて叫びていふ、いぎルビカンテよ、汝爪

を下して彼奴かやつの皮を剥はげ 四〇—四二

我、わが師よ、おのが敵の手におちしかの幸なき者の誰なるやを
 もしかはなはゞ明あきらめたまへ 四三―四五

わが導者その傍かたへにたちよりていづくの者なるやをこれに問へるに、

答へて曰ひけるは、我はナヴァルラの王國うまれの生なりき 四六―四

八

父無頼ぶらいにして身と持物とを失へるため、わが母我を一人ひとりの主に事

へしむ 四九―五一

我はその後善き王テバルドしもべの僕となりてこゝにわが職つとめをはづかし

め、今この熱をうけてその債おひめを償ふ 五二―五四

この時口の左右みぎひだりより野猪いのこのごとく牙露はれしチリアットはその一

の切味きれあぢを彼に知らせぬ 五五―五七

よからぬ猫の群のなかに鼠は入來れるなりけり、されどバルバリ
 ツチヤはその腕にて彼を抱^かへて曰ふ、離れよ、わが彼をおさゆる
 間 五八―六〇

かくてまた顔をわが師にむけ、ほかに聞きて知らんと思ふことあ
 らば、害^{そこな}ふ者のあらぬまに彼に問へといふ 六一―六三

導者、さらば今ほかの罪人等のことを告げよ、この脂の下に汝の
 識れるラチオの者ありや、彼、我は少しくさきに 六四―

その隣の者と別れしなりき、あゝ我彼と共にいまなほかくれるた
 らんには、爪も鐵搭^{くまで}もおそれじものを 一六九

この時リビコツコは我等はや待ちあぐみぬといひてその腕を鐵^か鉤^ぎ
 にてとらへ引裂きて肉を取れり 七〇―七二

ドラギニヤツツオもまたその脛を打たんとしければ、彼等の長はをき
 まなざしするどくあまねくあたりをみまはしぬ 七三―七五

彼等少しくしづまれる時、わが導者は己が傷より目を放たざりし
 者にむかひ、たゞちに問ひて曰ひけるは 七六―七八

汝は岸に出でんとて幸さちなく別れし者ありといへり、こは誰なりし
 ぞ、彼答へて曰ふ、ガルルーラの者にて 七九―

フラデーテ
 僧ゴミータといひ、萬の欺たばかり罔うつはの器なりき、その主の敵を己が手
 に收め、彼等の中己を褒ほめざるものなきやう彼等をあしらへり

―八四

乃ち金かねを受けて穩おだやかに（これ彼の言なり）彼等を放てるなり、ま
 たそのほかの職務つとめにおいても汚吏の小さき者ならでいと大なる者

なりき 八五―八七

ロゴドロのドンノ・ミケーレ・ツアンケ善く彼と語る、談サール
 デイニアの事に及べば彼等の舌疲るゝを覺ゆることなし 八八―
 九〇

されどあゝ齒をかみあはす彼を見給へ、ほかに告ぐべきことあれ
 ど彼わが瘡かさを引搔ひきかかんとてすでに身を構ふるをおそる 九一―九

三

たゞ撃つばかりに目をまろばしゐたるファールファレル口にむか
 ひ、大いなる長日をさひけるは、悪しき鳥よ退れすさ 九四―九六

この時戦をのゝくものとは慄者語をついでいひけるは、汝等トスカーナまたは口
 ムバルデイアの者を見またはそのいふ事を聞かんと思はゞ我彼等

を來らせん 九七—九九

されど彼等に罰を恐れざらしめんため、禍ひの爪等たち少しくこゝを

離るべし、我はこのまゝこの處に坐して 一〇〇—一〇二

嘯うそぶき（我等のうち外そとに出るものあればつねにかくする習ひあり）、

ひとりの我に代へて七人ななたりの者を來らせん 一〇三—一〇五

カーニヤツツオこの言を聞きて口をあげ頭をふりていひけるは、

身を投げ入れんとてめぐらせる彼の奸計わるだくみをきけ 一〇六—一

〇八

絹わなに富める者乃ち答へて曰ひけるは、侶ともの悲しみを増さしむれば、

我は至極の奸物わるものなるべし 一〇九—一一一

アーリキーン堪こらへず衆にさからひて彼に曰ふ、汝身を投げなば我

は馳せて汝を追はず 一一二——一一四

翼を脂やにの上に搏うつべし、我等頂いたゞき上を棄て岸を楯とし、汝たゞひ

とりにてよく我等を凌ぐや否やをみん 一一五——一一七

讀者よ、奇くすしき戯れを聞け、彼等みな目を片かたがは側にむけたり、し

かも第一にかくなせるは彼等の中殊ことにその心なかりしものなりき

一一八——一二〇

たくみに機すきを窺へるナヴァルラの者、その蹠あしうらをもてかたく地を踏

み、忽ち躍りて長をさを離れぬ 一二一——一二三

かくとみし鬼いづれも咎を悔ゆるがなかに、わけて越度をちどの本なり

し者そのくゆることいと深ければ、すなはち身を動かして 一二

四——一二六

汝は我手の中にありと叫べり、されど益なし、翼ははやきもなほ
 恐れに超ゆるあたはず、彼は沈み、此は胸を上にして飛べり 一
 二七―一二九

鴨忽ち潜り、既に近づける鷹の、怒りくづほれて空にかへるもこ
 れにかはらじ 一三〇―一三二

カルカブリーナは欺かれしを憤り、彼と格闘はんため、却つてか
 の者の免かれんことをねがひ、飛びつゝ彼をあとより追ひゆき
 一三三―一三五

汚吏の姿消ゆるとともに爪をその侶にむけ、濠の上にてこれを攫
 みぬ 一三六―一三八

されど彼また眞の青鷹なりければ、劣らず爪をこなたにうち

こみ、二ながら煮ゆるよどみの眞中まなかに落ちたり 一三九—一四一

熱はたちまち争鬪あらしひをとゞめぬ、されど彼等身を上ぐるをえざり

き、其翼脂やににまみれたればなり 一四二—一四四

残りの部下と共に歎きつゝバルバリツチャはその中よたり四人の者にみ

な鐵鉤かぎを持ちて對岸むかひのきしに飛ばしめぬ、かくていと速かに 一四

五—一四七

かなたにてもこなたにても彼等はおのが立處たちどに下り、既にもち臙もちにま

みれて上層うはかはの中に焼かれし者等にその鐵搭くまでをのべき 一四八—

一五〇

我等は彼等をこの縛もつれの中に残して去れり 一五一—一五三

第二十三曲

ことば
 言なくとも伴侶なくたゞふたり、ひとりはさきにひとりはあとに、さ
 ながらミノリ僧の路を歩む如く我等は行けり 一―三

わが思ひは今の争ひによりて蛙と鼠のことをかたれるイソ―ポの
 フアーヴオラ

寓話にむかひぬ 四―六

心をとめてよくその始はじめを終をはりを較べなば、もとイツサの相似たる
 も彼と此との上にはいでじ 七―九

また一の思ひよりほかの思ひのうちいづるごとく、これよりほか
 の思ひ生れてわがさきの恐れを倍せり 一〇―一二

我おもへらく、彼等は我等のために嘲られてその怨み必ず大なら
んとおもはるゝばかりの害をうけ詭計そこなひにかゝるにいたれるなり

一三一—一五

若し怒り悪意に加はらば、彼等我等を追來り、その慈悲なきこと
口に銜くはへし兎にむかひて酷むごき犬にもまさりぬべし 一六一—一八

我は既に恐れのために身の毛悉く彌いよだ立つをおぼえ、わが後方うしろにの
み心を注ぎつゝいひけるは、師よ、汝と我とを 一九一

直ちに匿かくしたまはずば、我はマーレブランケをおそる、彼等既に
うしろにせまれり、我わが心に寫しみて既に彼等の近きをさとする

—二四

彼、たとへばわれ鏡なりとも、わが今汝の内の姿をうくるよりは

やく汝の外の姿を寫しうべきや 二五—二七

今といふ今汝の思ひは同じはたらき働同じ容をもてわが思ひの中に入り、

我はこの二の物によりてたゞ一の策を得たり 二八—三〇

右の岸もし斜にて次の囊ポルジャの中にくだるをえば、我等は心に急がけ

る追おひをまのかるべし 三一—三三

彼はかりごとこの策を未だ陳べ終らざるに、我は彼等が翼をひらき、我等を

とらへんとてほどなき處に來るを見たり 三四—三六

たとへば騷擾さわぎに目覺めし母の、燃ゆる焰をあたりにみ、我兒をい

だいてにげわしり 三七—

之を思ふこと己が身よりも深ければ、たゞ一枚の襯衣したぎをさへ着く

るに暇あらざるごとく、導者は忽ち我を抱き 一四二

堅き岸の頂より、次の囊ホルジャの片側かたがはを閉す傾ける岩あるところに仰あふ

きて身を投げいれぬ 四三―四五

粉碾車こひきぐるまをめぐらさんとて樋ひをゆく水の、輻やにいと近き時といへ

どもそのはやきこと 四六―四八

侶ともにはあらで子の如く我をその胸に載せ、かの縁へりを越えしわが師

にはおよばじ

その足下したなる深處ふかみの底にふれしころには彼等はやくも我等の上な

る頂いただきにありき、されどこゝには恐れあるなし 五二―五四

彼等をえらびて第五の濠しべの僕となせし尊き攝理は、かしこを離るゝ

の能力ちからを彼等より奪ひたればなり 五五―五七

下には我等彩色いろどれる民を見き、疲れなやめる姿にて涙を流し、め

ぐりゆく足いとおそし 五八一六〇

彼等は型かたをクルーニの僧の用ゐるものにとりたる衣ころもを着、目の前

まで垂れし帽を被かぶれり 六一―六三

外そとは金を施したれば、みる目眩くるめ暈くばかりなれども、内はみな鉛

にて、その重きに比ぶればフェデリーゴの着せしは藁なり 六四

―六六

あゝ永とこしへ遠つの疲つかれの衣よ、我等は心を憂き歎きにとめつゝ彼等とと

もにこたびもまた左にむかへり 六七―六九

されど重量おもさのためこのよわれる民の歩みいとおそければ、我等は

腰をうごかすごとに新なる侶をえき 七〇―七二

我乃ちわが導者おこなひに、行おこなひまたは名によりて知らるべき者をたづね、

かくゆく間目をあたりひとりにそゞぎたまへ 七三―七五

この時一者トスカーナの言ことばをきゝてうしろよりよばゝりいひける

は、黯くろずめる空をわけてはせゆく者等よ、足をとゞめよ 七六―七

八

おそらくは汝求むるものを我よりうくるをえん、導者乃ちかへり
みて曰ふ、待て、待ちてのち彼の歩みにしたがひてすゝめ 七九

―八一

我止まりて見しにふたりの者あり、我に追及いらばんとてしきりに苛
つ心を顔にあらはせども荷と狭き路のために後おくれぬ 八二―八四
さて來りて物をも言はず、目を斜はすにしばらく我をうちまもり、の
ち顔をみあはせていひけるは 八五―八七

この者喉を動かせば生けりとおもはる、また彼等死せる者ならば
 何の恩惠めぐみにより重き衣に蔽はれずして歩むや 八八―九〇

かくてまた我に曰ひけるは、幸なき偽善者の集會つどひに來れるトスカ

―十人びとよ、願はくは汝の誰なるやを告ぐるを厭ふなかれ 九一―

九三

我彼等に、わが生れし處おひたちし處はともに美しきアルノの川か
 邊はべ大いなる邑まちなりき、また我はわが離れしことなき肉體と共にあ
 るなり 九四―九六

されど憂ひの滴したたりかく頬をくだる汝等は誰ぞや、汝等の身にかく煌きら
 めくは何の罰ぞや 九七―九九

そのひとり答へて我に曰ひけるは、拵かうじ子の衣鉛ころもにていと厚く、そ

の重量おもさかく秤はかりを軋きましむ 一〇〇—一〇二

我等は 喜フラーテ・ゴデンテイ樂フラーテ・ゴデンテイ僧フラーテ・ゴデンテイにてボローニア人なりき、我はカタラーノ

といひ、これなるはローデリングといへり、汝の邑まちに平和をたも

たんため 一〇三—

常ひとりは一人取らるゝ例ならひなるに、我等は二人ふたりながら彼處かしこにとられき、

我等のいかなる者なりしやは今もガルディングあたりの附近を見てしる

べし 一〇八

あゝ僧達よ、汝等の禍わざひは……我かくいへるもその先をいはざり

き、これ三の杙くひにて地に張られし者ひとりわが目にとまれるによ

りてなり 一〇九—一一一

彼我を見し時、その難ためい息いきを鬚すげに吐き入れ、はげしくもがきぬ、

僧フラーテカタラーン之を見て 一一二—一一四

我に曰ふ、かしこに刺されて汝の目をひくはこれフアリセイ《び
と》に勧めて、民の爲にひとりの人を苛責するは善しといへる者
なり 一一五—一一七

みらるゝ如く裸にて路を遮り、過ぐる者あればまづその重さを身
にうけではかなはじ 一一八—一二〇

その外舅しうとおよびジュデア人びとの禍ひの種なりしほかの議員等もま
た同じさまにてこの濠の中に苛責せらる 一二一—一二三

我はこの時ヴィルジリオがかくあさましく十字にはられ永久とこしへの
流刑るけいをうくるものあるをあやしめるをみたり 一二四—一二六

彼やがて僧フラーテにむかひていひけるは、汝等禁とゞむるものなくば、請ふ

右に口ありや我等に告げよ 一二七—一二九

我等これによりて共に此處をいで、黒き天使に強ひて來りて、この底より我等を出さしむるなきをえん 一三〇—一三二

この時彼答へて曰ひけるは、いと近き處に岩あり、大いなる圈より出でてすべてのおそろしき大溪おほたにの上を過ぐ 一三三—一三五

たゞこの溪の上にのみ碎けてこれを蔽はざるなり、汝等側かはによこたはり底に高まる崩壞くづれを踏みて上りうべし 一三六—一三八

導者かうべしばらく首を垂れて立ち、さていひけるは、かなたに罪人を鐵鉤かぎにかくるもの事をいつはりて我等に教へき 一三九—一四一

僧、我昔ボローニアにて鬼のよからぬことゞも多く聞きたり、彼は偽る者、偽りの父なりときけるもその一なり 一四二—一四四

かくいへる時導者は顔に少しく怒りをうかべ、足をはやめて去り
行けり、されば我また重荷を負ふ者等とわかれ 一四五―一四七
ゆかしき躑あしうらの趾を追へりき 一四八―一五〇

第二十四曲

一年未だうらわかく、日は寶瓶宮裏に髪をとゝのへ、夜はすで
 に南にむかひ 一—三

霜は白き姉妹の姿を地に寫せども、筆のはこびの長く續きもあへ

ぬころ 四—六

貯藏盡きしひとりたくはへの農夫、おきいでゝながむるに、野は悉く白

ければ、その腰をうちて 七—九

我家にかへり、かなたこなたにわがや呟くさまさながら幸なき人のせん

すべしらぬごとくなれども、のち再びいづるにおよびて 一〇—

世の顔束つかの間にかはれるを見、あらたに望みを呼び起してつゑをとり、小羊を追ひ牧場にむかふ — 一五

かくの如く師はその額みだれに亂をみせて我をおそれしめ、またかくの如く痛みはたゞちに薬をえたりき 一六—一八

そは我等壞れし橋にいたれる時、導者はわがさきに山の麓に見たりし如きうるはしき氣色けしきにてわがかたにむかひたればなり 一九

—二一

かれまづよく崩壞くづれをみ、心に思ひめぐらして後その腕かひなをひらきて我をかゝへ 二二—二四

且つ行ひ且つ量り常に預め事に備ふる人の如く我を一の巨岩おほいはの頂いただきに上げつゝ 二五—

目をほかの岩片いはくづにとめ、これよりかの岩すに縋すがるべし、されどま
づその汝を支へうべきや否やをためしみよといふ — 三〇

こは衣を着し者の路にはあらし、岩より岩を上りゆくは我等（彼
軽く我押さるゝも）にだに難きわざなりき 三一—三三

若しこの堤のかたがはむかひ側かは對面の側より短かゝらずば、彼のことはしら
ねど、我は全く力盡くるにいたれるなるべし 三四—三六

されどマーレボルジエはみないと低き坎あなの口にむかひて傾くがゆ
ゑに、いづれの溪もそのさまこの理にもとづきて 三七—三九

彼かのきし岸高く此岸ひくし、我等はつひに最後の石の碎け散りたる處
にいたれり 四〇—四二

上り終れる時はわが氣息いきいたく肺より搾しぼられ、我また進むあは

ざれば、着くとひとしくかしこに坐れり 四三—四五

師曰ひけるは、今より後汝つとめて怠慢おこたりに勝たざるべからず、

夫れ軟毛わたげの上に坐し、衾ふすまの下に臥してしかも美名よきなをうるものはな

し 四六—四八

人これをえず徒いたづらにその生命いのちを終らば地上に残すおのが記念かたみはたゞ

空そらけぶりの烟水の泡うたかた抹のみ 四九—五一

此故に起きよ、萬よろづの戦ひに勝つ魂もし重き肉體と共になやみくづ

ほるゝにあらずば之をもて喘あへぎに勝て 五二—五四

是よりも長き段きだのなは上るべきあり、これらを離るゝのみにて足

らず、汝ことばわが言をさたらばその益を失ふなかれ 五五—五七

我乃ち身を起し、くるしき呼吸いきをおしかくしていひけるは、願は

くは行け、身は強く心は堅し 五八―六〇

我等石橋を渡りて進むに、このわたりの路岩多く狭く艱くはるかにさきのものよりも峻し 六一―六三

我はよわみをみせざらんため語りつゝあゆみゐるに、忽ち次の濠の中より語を成すにいたらざる一の聲いでぬ 六四―六六

この時我は既にこゝにかゝれる弓門アルコの頂にありしかども、その何をいへるやをしらず、されど語れるものは怒りを起せし如くなりき 六七―六九

我は俯うつむきたりき、されど闇のために生ける目底にゆくをえざれば、すなはち我、師よ請ふ次の堤にいたれ 七〇―

しかして我等石垣をくだらん、そはこゝにてはわれ聞けどもさと

らず、見れども認むるものなければなり 一七五

彼曰ふ、行ふの外我に答なし、正しき願ひには所爲たゞ黙して従
ふべきなり 七六―七八

我等は橋をその一端、第八の岸と連れるところに下れり、この時
囊の状あきらかになりて 七九―八一

我見しに中にはおそろしき蛇の群ありき、類いと奇しく、その記

憶はいまなほわが血を凍らしむ 八二―八四

リビヤも此後その砂に誇らざれ、たとひこの地ケリドリ、ヤクリ、
フアレー、チエンクリ、アムフィシベナを出すとも 八五―八七

またこれにエチオピアの全地または紅海の邊のものを加ふとも、
かく多きかくあしき毒を流せることはあらし 八八―九〇

この猛くしていともものすごき群のなかを孔をも エリトロピア 血 石をも求め

うるの望みなき裸なる民おぢおそれて走りゐたり 九一—九三

蛇は彼等の手を後方にうしろ縛しいまめ、尾と頭にて腰を刺し、また前方にまへ

からめり 九四—九六

こゝに見よ、こなたの岸近く立てるひとりの者にむかひて一匹の

蛇飛び行き、頸と肩と結びあふところを刺せり 九七—九九

○またはiを書くともかく早からじとおもはるゝばかりに彼は忽ち火をうけて燃え、全く灰となりて倒るゝの外すべなかりき 一

〇〇—一〇二

彼かく顔くづれて地にありしに、塵おのづからあつまりてたゞちにも

との身となれり 一〇三—一〇五

名高きひじりたち 聖 等 またかゝることあるをいへり、曰く、フエニーチエ 靈 鳥は

その齡よはひ五百年に近づきて死し、後再び生る 一〇六一一〇八

この鳥世にあるや、草をも麥をも食はまず、たゞたきもの 薰物の涙とアモ

モとを食む、また甘松ともつやく 沒藥とはその最後のじゆい 壽衣となると 一

〇九一一一一

人或ひは鬼の力によりて地にひかれ、或ひは塞ふさぎにさへられて倒れ、

やがて身を起せども、おのがたふれし次第をしらねば 一一二一

うけし大いなる苦しみのためいたくまどひて目をうちひらき、あ

たりを見つゝ歎くことあり 一一七

起き上れる罪つみびと人のさまざま斯くの如くなりき、あゝ仇を報いん

とてかくはげしく打懲す神の威力ちからはいかにきびしきかな 一一八

— 一二〇

導者この時彼にその誰なるやを問へるに、答へて曰ひけるは、我
 は往さきつひ日トスカーナよりこのおそろしき喉の中に降り下ふれる者な
 り 一二一—一二三

我は驟馬なりければまたこれに倣ひて人にはあらで獸の如く世を
 おくるを好めり、我はヴァンニ・フツチといふ獸なり、しかして

一二四—

ピストイアは我に應ふさはしき岩窟いはあななりき、われ導者に、彼に逃にぐる勿
 れといひ、また彼をこゝに陥らしめしは何の罪なるやを尋ねたま
 へ

わが見たるところによれば彼は血と怒りの人なりき、この時罪人

これを聞きいっはて伴らず、心をも顔をも我にむけ、悲しき恥に身を彩いろど
 色りぬ — 一三二

かくて曰ひけるは、かゝる禍ひの中にて汝にあへる悲しみは、わ
 がかの世をうばゝれし時よりも深し — 一三三—一三五

我は汝の間を否むあたはず、わがかく深く沈めるは飾美しき寺の
 寶藏みくらの盗人たりし故なりき — 一三六—一三八

またこの罪嘗てあやまりて人に負はされしことあり、されど汝此
 等の暗き處をいづるをえてわがさまをみしを喜びとなすなからん
 ため — 一三九—一四一

耳を開きてわがうちあかすことを聞け、まづピストイアは黒黨ネーリを
 失ひて瘦せ、次にフィオレンツアは民ならはしあらたと習俗を新にすべし — 一四

二——四四

マルテはヴァル・ヂ・マールグラより亂るゝ雲に裏つまれし一の火氣
をひきいだし、嵐劇しくすさまじく 一四五——一四七

カムポ・ピチェンに戦起りて、この者たちまち霧を擘つんざき、白黨ビアンキ
悉くこれに打たれん 一四八——一五〇

我これをいふは汝に憂ひあらしめんためなり 一五一——一五三

第二十五曲

かたりをはれる時かの盗人もろて雙手を握りて之を擧げ、叫びて曰ひけるは、受けよ神、我汝にむかひてこれを延ぶ 一―三

此時よりこの方蛇はわが友なりき、一匹ひとつはこの時彼の頸にからめり、そのさまさながら我は汝にまた口をきかしめずといへるに似たりき 四―六

また一匹ひとつはその腕にからみてはじめの如く彼を縛いましめ、かつ身をかたくその前に結びて彼にすこしも之を動かすをゆるさざりき 七

―九

あゝピストイアよ、ピストイアよ、汝の惡を行ふこと己おのが祖先の
 上に出づるに、何ぞ意を決して己を灰し、趾あとを世に絶つにいたら
 ざる 一〇—一二

我は地獄の中なる諸 の暗ひとやき獄を過ぎ、然も神にむかひてかく不
 遜なる魂を見ず、テーベの石垣より落ちし者だに之に及ばじ 一
 三—一五

かれ物言はで逃去りぬ、此時我は怒り満みちく々し一のチエンタウロ、
 何處いづこにあるぞ、執かたくな拗なる者何處にあるぞとよばはりつゝ來るを
 見たり 一六—一八

思ふに彼が人の容かたちつらなの連れるところまでその背に負へるとき多くの
 蛇はマレムマの中にもあらぬなるべし 一九—二一

肩の上項うなじうしろの後には一の龍翼をひらきて蟠まり、いであふ者あれば

みなこれを焼けり 二二—二四

わが師曰ひけるは、こはカーコとてアヴェンティノ山の巖の下
にしばしば血の湖うみを造れるものなり 二五—二七

彼はその兄弟等と一の路を行かず、こは嘗てその近傍あたりにとゞまれ
る大いなる家畜けものの群を謀りて掠めし事あるによりてなり 二八—

三〇

またこの事ありしたため、その歪ゆがめる行はエルクレの棒に罹りて止
みたり、恐らくは彼百を受けしなるべし、然もその十をも覺ゆる
事なかりき 三一—三三

彼斯く語れる間（彼過ぎゆけり）三みつの魂我等の下に來れるを我も

導者もしらざりしに 三四—三六

彼等さけびて汝等は誰ぞといへり、我等すなはち語ることをやめ、
今は心を彼等にのみとめぬ 三七—三九

我は彼等を識らざりき、されど世にはかゝること偶然^{ふと}ある習ひと
て、そのひとり、チャンファはいづこに止まるならんといひ 四

〇—四二

その侶の名を呼ぶにいたれり、この故に我は導者の心をひかんだ
めわが指を上げて頤^{おとがひ}と鼻の間におきぬ 四三—四五

讀者よ、汝いまわがいふことをたやすく信じえずともあやしむに
たらず、まのあたりみし我すらもなほうけいるゝこと難ければ

四六—四八

我彼等にむかひて眉をあげゐたるに、六の足ある一匹の蛇そのひ
 とりの前に飛びゆきてひたと之にからみたり 四九―五一

なかあし
 中足をもて腹を巻き前足をもて腕をとらへ、またかなたこなた

の頬を噛み 五二―五四

あとあし
 後足を股に張り、尾をその間あひより後方うしろにおくり、ひきあげて腰

のあたりに延べぬ 五五―五七

木に絡むから蔦つたといへどもかの者の身に纏まつはれる恐ろしき獣のさまに

くらぶれば何ぞ及ばん 五八―六〇

かくて彼等は熱をうけし蠟のごとく着きてその色まじを交へ、彼も此

も今は始めのものにあらず 六一―六三

さながらくろす黯みてしかも黒ならぬ色の炎にさきだちて紙をつたはり、

白は消えうするごとくなりき 六四—六六

残りの二者之ふたりを見て齊しくさげびて、あゝアーニエルよ、かくも

變るか、見よ汝ははや二ふたつにも一にもあらずといふ 六七—六九

二の頭既に一となれる時、二の容かたちいりまじりて一の顔となり二そ

のうちに失せしもの我等の前にあらはれき 七〇—七二

四の片きれより二の腕成り、股脛もはぎはね腹胸はみな人の未だみたりしことな

き身となれり 七三—七五

もとの姿はすべて消え、異様の像かたちは二にみえてしかも一にだにみ

えざりき、さてかくかはりて彼はしづかに立去れり 七六—七八

三伏の大なる答しもとの下に蜥蜴籬とかげまがきを交かへ、路を越ゆれば電いなづま光とみ

ゆることあり 七九—八一

色青を帯びて黒くさながら胡椒の粒つぶに似たる一の小蛇の怒りにも
 えつゝ残る二者の腹ふたりをめざして來れるさままたかくの如くなりき

八二―八四

この蛇そのひとりの、人はじめて滋やしなひ養をうくる處を刺し、のち
 身を延ばしてその前にたふれぬ 八五―八七

刺されし者これを見れども何をもちはず、睡りか熱に襲はれしご
 とく足をふみしめて欠あくびをなせり 八八―九〇

彼は蛇を蛇は彼を見ぬ、彼は傷より此は口よりはげしく烟を吐き、
 烟あひまじれり 九一―九三

ルカーノは今より黙もだして幸なきサベル口とナツシディオのことを
 語らず、心をとめてわがこゝに説きいづる事をきくべし 九四―

九六

オヴィデイオもまた黙してカドモとアレツォの事をかたるな
 かれ、かれ男を蛇に女を泉に變らせ、之を詩となすともわれ羨ま
 じ 九七—九九

そは彼二の自然をあひむかひて變らしめ兩者の形あひ待ちてその
 質を替ふるにいたれることなければなり 一〇〇—一〇二

さて彼等の相應ぜること下の如し、蛇はその尾を割きて又とし、
 傷を負へる者は足を寄せたり 一〇三—一〇五

脛は脛と股は股と固く着き、そのあはせめ、みるまにみゆべき跡
 をとゞめず 一〇六—一〇八

われたる尾は他の失へる形をとりて膚軟らかく、他のはだへはこ

はばれり 一〇九—一一一

我また二の腕腋ふたつかひな下に入り、此等の縮むにつれて獸の短き二の足伸

びゆくをみたり 一一二—一一四

また二の後あとあし足は縊よれて人の隠すものとなり、幸なき者のは二に

わかれぬ 一一五—一一七

烟新あらたなる色をもて彼をも此をも蔽ひ、これに毛を生はえしめ、かれ

の毛をうばふあひだに 一一八—一二〇

此立これち彼倒かれる、されどなほ妄まうしふ執しつの光を逸そらさず、その下もとにてお

のおの顔を變へたり 一二一—一二三

立ちたる者顔を後こめかみ額かみのあたりによすれば、より來れる材ざい多くし

て耳平たひらなる頬の上に出で 一二四—一二六

後方うしろに流れずとゞまれるものはその餘あまりをもて顔に鼻を造り、また

ほどよく唇を厚くせり 一二七—一二九

伏したる者は顔を前方まへに逐おひ、角をさを收おさむる蝸牛の如く耳を頭にひ

きいれぬ 一三〇—一三二

またさきに一にて物言ふをえし舌は裂け、わかれし舌は一となり、

烟えんこゝに止みたり 一三三—一三五

獸となれる魂はその聲あやしく溪に沿ひてにげゆき、残れる者は

物言ひつゝその後方うしろに唾つばはけり 一三六—一三八

かくて彼新しき背を之にむけ、侶に曰ひけるは、願はくはブオソ

のわがなせしごとく匍匐はらばひてこの路を走らんことを 一三九—一

我は斯く第七の石屑いしくづの變り入替いりかはるさまをみたりき、わが筆少
 しく亂るゝあらば、請ふ人事ことの奇なるをおもへ 一四二—一四四
 またわが目には迷ひありわが心には惑ひありしも、かの二者ふたり我に
 かくれて逃ぐるをえざれば 一四五—一四七

我はひとりなにかまのプツチオ・シヤンカートなるをさだかに知りき、さ
 きに來れるみたりの伴侶なにかまの中にて變らざりしはこの者のみ 一四

八—一五〇

またひとりいたは、ガヴィルレよ、いまも汝を悼いたましむ 一五一—一

五三

第二十六曲

フイオレンツアよ、汝はいと大いなるものにて翼を海陸の上に搏うち汝の名遍く地獄に藉しくがゆるゑに喜べ 一—三

我は盗人の中にて汝のきはたか際貴きまちびと邑民五人をみたり、我之を恥とす、汝もまた之によりて擧げられて大いなる譽を受くることはあ

らじ 四—六

されどあかつき曙の夢正夢ならば、プラート（その他はもとより）の汝のためこひもとむるもの程なく汝に臨むべし、また今既にこの事ありとも 七—九

早きに過ぎじ、事避くべきに非ざれば若かず速に來らんには、そ
 はわが年の積るに従ひ、この事の我を苦しむる愈 大なるべけれ
 ばなり 一〇—一二

我等この處を去れり、わが導者はさきに下れる時我等の段きだとなれ
 る巖いはかど角を傳ひて上りまた我をひけり 一三—一五

かくて石橋の上なる小岩大岩の間のさびしき路を進みゆくに手を
 からざれば足も效かひなし 一六—一八

この時我は悲しめり、わがみしものに心をむくれば今また憂へ、
 才を制すること恆つねを超ゆ 一九—二一

これわが才、徳の導きなきに走り、善き星または星より善きもの
 この寶を我に與へたらんに、我自ら之を棄つるなからんためなり

二二—二四

たとへば世界を照すもの顔を人にかくすこといと少なき時、丘の^{をか}

上に休む農夫が 二五—二七

蚊の蠅に代る比、^{ころはひ}下なる溪間恐らくはおのが葡萄を採りかつ耕す

處に見る螢の如く 二八—三〇

數多き炎によりて第八の囊は^{ボルジャ}すべて輝けり、こはわがその底のあ

らほるゝ處にいたりてまづ目をとめしものなりき 三一—三三

またたとへば熊によりてその仇をむくいしものが、エリアの兵車の去るをみし時の如く（この時その馬天にむかひて立上り 三四

—三六

彼目をこれに注げども、みゆるはたゞ一抹の雲の如く高く登りゆ

く炎のみなりき) 三七—三九

焰はいづれも濠(ほり)の喉を過ぎてすゝみ、いづれもひとりの罪人(つみびと)を

盗みてしかも盗(ぬすみ)をあらはすことなかりき 四〇—四二

我は見んとて身を伸べて橋の上に立てり、さればもし一の大岩を
とらへざりせば押さるゝをもまたで落ち下れるなるべし 四三—

四五

導者はわがかく心をとむるをみていひけるは、火の中に魂あり、
いづれも己を焼くものに卷かる 四六—四八

我答へて曰ひけるは、わが師よ、汝の言によりてこの事いよく
さだかになりぬ、されど我またかくおしはかりて既に汝に 四九

エテオクレとその兄弟との荼毘だびの炎の如く上方うへわかれたる火につゝ
 まれてこなたに來るは誰なりやといはんとおもひたりしなり —

五四

彼答へて我に曰ふ、かしこに苛責せらるゝはウリツセとデイオメ
 ーデなり、ともに怒りにむかへるごとくまたともに罰にむかふ

五五—五七

かの焔の中に、彼等は門を作りてローマ人びとのたふとき祖先をこゝ
 よりいでしめし馬の伏勢ふせぜいを傷みいた 五八—六〇

かしこにアキルレのためにいまなほデイダーミアを歎くにいたら
 しめし詭計たくみをうれへ、またかしこにパルラーディオの罰をうく

六一—六三

我曰ふ、彼等かの火花のなかにて物言ふをえば、師よ、我ひたすらに汝に請ひまた重ねて汝に請ふ、さればこの請ひ千度ちたびの請ひを兼ねて 六四―六六

汝は我に角つのある焔のこゝに來るを待つを否むなかれ、我わが願ひのためのみたまふ如く身をかなたにまぐ 六七―六九

彼我に、汝の請ふところ甚だ善し、この故に我これを容る、たゞ汝舌を慎しめ 七〇―七二

我既に汝の願ひをさとりたれば語ることをば我に任せよまか、そは彼等はギリシア人びとなりしがゆゑに恐らくは汝の言を侮るべければなり 七三―七五

焔近づくにおよびて導者は時と處をはかり、これにむかひていひ

けるは 七六―七八

あゝ汝等二の身にて一の火の中にあるものよ、我生ける時汝等の心に適ひ、高き調しらべを世に録しるして 七九―

たとひいさゝかなりとも汝等の心に適へる事あらば、請ふ過ぎゆかず、汝等の中ひとり路を失ひて後いづこに死處をえしやを告げよ 一八四

年へし焰の大なる角、風になやめる焰のごとく微かすかに鳴りてうちゆらぎ 八五―八七

かくて物いふ舌かとはかりかなたこなたに尖さきをうごかし、聲を放ちていひけるは 八八―

一ひと年とせあまりガエタ（こはエーネアがこの名を與へざりしさきの

事なり)に近く我を匿^{かく}せしチルチエと別れ去れる時 一九三

子の慈^{いつくしみ}愛、老いたる父の敬ひ、またはペネローペを喜ばしう

べかりし夫婦^{めをと}の愛すら 九四—九六

世の状態^{さま}人の善惡を味はひしらんとのがつよきねがひにかちが
たく 九七—九九

我はたゞ一艘の船をえて我を棄てざりし僅かの侶^{とも}と深き濶き海に

浮びぬ 一〇〇—一〇二

スペインア、モロツコにいたるまで彼岸をも此岸をも見、またサ—
ルデイニア島及び四方この海に洗はるゝほかの島々をもみたり

一〇三—一〇五

人の越ゆるなからんためエルクレ^{しるし}が標^{しるし}をたてしせまき口にいたれ

るころには 一〇六一

我も侶等もはや年老いておそかりき、右にはわれシベリアをはな

れ左には既にセツタをはなれき 一一一

我曰ふ、あゝ千^{ちよろづ}萬の危^{あやふき}難を経て西にきたれる兄弟^{たち}等よ、なん

ぢら日を追ひ 一一二

残るみじかき五官の覺醒^{めざまめ}に人なき世界をしらしめよ、汝等^{もと}起原を

おもはずや

汝等は獸のごとく生くるため造られしものにあらず、徳と知識を

求めんためなり 一一三

わがこの短^{ことば}き言をきゝて侶は皆いさみて路に進むをねがひ、今は

たとひとゞむとも及び難しとみえたりき 一一一 一一二 一一三

かゝればとも艦を朝にむけ、櫂を翼として狂ひ飛び、たえず左に舟を

寄せたり 一二四—一二六

夜は今南極のすべての星を見、北極はいと低くして海の床ゆかより登

ることなし 一二七—一二九

我等難路に入りしよりこのかた、月下の光五度いつたび冴え五度消ゆる

に及べるころ 一三〇—一三二

かなたにあらはれし一の山あり、程遠ければ色薄黒く、またその

高さはわがみし山のいづれにもまさるに似たりき 一三三—一三

五

我等は喜べり、されどこの喜びはたゞちに歎きに變れり、一陣の

旋風新しき陸くがより起りて船の前面おもてをうち 一三六—一三八

あらゆる水と共にみたび三度これにめぐ旋らしよたび四度にいたりてそのとも艦を上げ
へんじき舳を下せり（これみこころ天意の成れるなり） 一三九―一四一

遂に海は我等の上に閉ぢたりき 一四二―一四四

第二十七曲

語りをはれるため、焰はすでに上にむかひて聲なく、またやさし
き詩人の許しをうけてすでに我等を離れし時 一—三

その後うしろより來れるほかの焰あり、不律の音を中より出して我等の
目をその尖さきにむけしめき 四—六

たとへばシチーリアの牡牛が（こは鑢やすりをもて己を造れる者の歎き
をその初はつごゑ聲となせる牛なり、またかくなせるや好し） 七—九

苦しむ者の聲によりて鳴き、銅あかがねの器うつはあたかも苦患なやみに貫かるゝかと

疑はれし如く 一〇—一二

はじめは火に路も口もなく、憂ひの言ことばかはりて火のことばとなれるも 一三一—一五

遂に路をえて登り尖さきにいたれる時、こゝにその過ぐるにのぞみて舌よりうけし動搖ゆるぎを傳へ 一六一—一八

いひけるは、わが呼ぶ者よ、またいまロムバルディアの語にていざゆけ我また汝を責めずといへる者よ 一九—二一

我おくれて來りぬとも請ふ止まりて我とかたるを厭ふなかれ、わが燃ゆれどもなほ之を厭はざるを見よ 二二—二四

汝若しわが持來れるすべての罪を犯せる處、かのうるはしきラチオの國よりいまこの盲めしひの世に落ちたるならば 二五—二七

ローマニヤ人びとのなかに和ありや戦ひありや我に告げよ、我はウル

ビーノとテーヴェレの源なる高嶺たかねとの間の山々にすめる者なれば
なり 二八—三〇

我はなほ心を下にとめ身をまげゐたるに、導者わが脇に觸れ、汝
語るべしこれラチオの者なりといふ 三一—三三

この時既にわが答成りければ我ためらはずかたりていふ、下にか
くるゝたましひよ 三四—三六

汝のローマニヤには今も昔の如く暴君等の心の中に戦ひたえず、
たゞわが去るにあたりて顯著あらはなるものなかりしのみ 三七—三九
ラヴェンナはいまも過ぬる幾年いくとせとかはらじ、ポレンタの鷲これ
を温めあたゝ、その翼をもてさらにチエルヴィアを覆ふ 四〇—四二
嘗て長き試みに耐へ、フランス人の血染めの堆つかを築ける邑まちは今緑

の足の下にあり 四三―四五

モンターニアを虐げし古き新しきヴェルルツキオの猛犬あらいぬは舊もとの

處にゐてその齒を錐きりとす 四六―四八

夏より冬に味方を變ふる白巢しろすの小獅子はラーモネとサンテルノの

二の邑まちを治む 四九―五一

またサーヴィオに横を洗はるゝものは野と山の間にあると等しく

暴虐と自由の國の間に生く 五二―五四

さて我こゝに汝に請ふ、我等に汝の誰なるやを告げよ、人にまさ

りて頑ななるなかれ、(かくて願はくは汝の名世に秀でんことを)

五五―五七

火はその習ひにしたがひてしばらく鳴りて後とがれる鋒さきをかなた

こなたに動かし、氣息いきを出していひけるは 五八—六〇

我若しわが答のまた世に歸る人にきかるとおもはゞこの焰はとゞ
まりてふたゝび揺ゆめくことなからん 六一—六三

されどわがきくところ眞まことならば、この深處ふかみより生きて還れる者な
きがゆゑに、我汝に答ふとも恥をかうむるの恐れなし 六四—六

六

我は武器の人なりしがのちコルチーリエロ帶紐僧となれり、こはかく帶して

罪を贖はんとおもひたればなり、また我を昔の諸惡にかへらしめ
し 六七—六九

かの大いなる僧（禍ひ彼にあれ）なか微つせばわれこの思ひの成れる
を疑はず、されば請ふ事の次第と濫觴おこりとをきけ 七〇—七二

我未だ母の與へし骨と肉とをとゝのへる間、わが行は獅子おこなひに似ず

して狐に似たりき 七三―七五

我は惡計たくらみと拔道ぬけみちをすべてしりつくし、これらの術わざをおこなひ
てそのきこえ地の極はてにまで及べり 七六―七八

わが齡よはひすゝみて人おのゝその帆をおろし綱をまきをさむる時に
いたれば 七九―八一

さきにうれしかりしものいまはうるさく、我は悔いまた自白して
身を棄てき、かくして救ひの望みはありしをあゝ幸さちなし 八二―

八四

第二のフアリセイびとの王ラテラーノに近く軍いくさを起し、（こはサ
ラチーノ人またはジュデーア人との戦ひにあらず 八五―八七

その敵はいづれも基クリスティアーン督教徒にてしかもその一人ひとりだにアークリに勝たんとてゆきまたはソルダーノの地に商あきびと人たりしはなし

八八—九〇

おのが至高の職をも緇衣の分をもおもはず、また帯ぶるものいたく瘠するを常とせし紐ひものわが身にあるをも思はず 九一—九三

あたかもコスタンティーンが癩を癒されんとてシルヴェストロをシラツテイに訪へる如く、傲たかぶりの熱を癒されんとて 九四—

この者我を醫くすしとして訪へり、彼我に謀を求め我は默もたせり、その言ことば醉へるに似たりければなり 一九九

この時彼我に曰ふ、汝心に懼るゝ勿れ、今よりのち我汝の罪を宥さん、汝はペネストリーノを地に倒さんためわがなすべき事を我

に教へよ 一〇〇—一〇二

汝の知る如く我は天を閉ぢまた開くをうるなり、この故に鑰^{かぎ}二あり、こは乃ち我よりさきに位にありしもの、尊まざりしものなり
 き 一〇三—一〇五

此時この力ある説我をそゝのかして、黙すのかへつてあしきを思
 はしむるにいたれり、我即ちいひけるは、父よ、汝は 一〇六—
 わがおちいらんとする罪を洗ひて我を淨むるが故に知るべし、長
 く約し短く守らば汝高き座^{くらゐ}にありて勝利^{かち}を稱^{とな}ふることをえん
 一一一

我死せる時フランチエスコ來りて我を連^つれんとせしに、黒きケル
 ビーニ^{ひとり}の一彼に曰ひけるは彼を伴ふ勿れ、我に非をなす勿れ 一

一二一—一四

彼は下りてわが僕等と共にあるべし、これ偽りの謀を授けしによる、この事ありてより今に至るまで我その髪にとゞまれり 一一

五—一一七

悔いざる者は宥さるゝをえず、悔いと願ひとはその相反すること
障しやうげ礙となりて並び立ちがたし 一一八—一二〇

あゝ憂ひの身なるかな、彼我を捉へて汝は恐らくはわが論理に長たくるをしらざりしなるべしといへる時わがをのゝけることいかばかりぞや 一二一—一二三

彼我をミノスにおくれるに、この者八度尾やたびを堅き背に捲き、激しく怒りて之を嘯み 一二四—一二六

こは盗む火の罪人等の同囚なかまなりといへり、さればみらるゝ如く我
こゝに罰をうけてこの衣を着、憂ひの中に歩を《あゆみ》すゝむ

一二七—一二九

さてかく語りをはれる時、炎は歎きつゝその尖れる角をゆがめま
た振りて去りゆけり 一三〇—一三二

我もわが導者もともに石橋をわたりて進み、一の濠を蔽へる次の
弓門アルコの上にいたれり、この濠の中には 一三三—一三五

分離を醸して重荷を負ふものその負債おひめをつくのへり 一三六—一

三八

第二十八曲

たとひきづな継なき言をもちる、またしばくかたるとも、此時わが見

し血と傷とを誰かは脱おちなく陳べうべき 一—三

收をさむべきことかく多くして人の言記憶ことばには限りあれば、いかなる

舌といふとも思ふに必ず盡しがたし 四—六

命運定さだめなきプーリアの地に、トロイア人のため、また誤ることな

きリヴィオのしるせるごとくいと多くの指輪を 七—

捕獲物えものとなせし長き戦ひによりて、そのかみその血を歎ける民み

なふたゝびよりつどひ 一—二

またロベルト・グイスカールドを防がんとて刃のいたみを覚えし
 民、プーリア人のすべて不忠となれる處なるチエペラン 一三一
 およびターリアコツツオのあたり、乃ち老いたるアーラルドが素
 手にて勝利をえしところにいまなほ骨を積重ねる者之に加はり

一八

ひとりは刺されし身ひとりは斷たれし身をみすとも、第九の囊の
 汚らはしきさまには較ぶべくもあらぬなるべし 一九―二一

我見しにひとり頤より人の放屁する處までたちわられし者ありき、
 中板または端板を失へる樽のやぶれもげにこれに及ばじ 二

二―二四

腸は二の脛の間に垂れ、また内臓と呑みたるものを糞となす汚き

囊ふくろはあらはれき 二五—二七

我は彼を見んとてわが全心を注ぎゐたるに、彼我を見て手をもて胸をひらき、いひけるは、いざわが裂かれしさまをみよ 二八—

三〇

マオメツトの斬りくだかれしさまをみよ、おとがひ頤より額髪まで顔を斬られて歎きつゝ我にさきだちゆくはア—リなり 三一—三三

そのほか汝のこゝにみる者はみな生ける時不和分離の種を蒔けるものなり、この故にかく截うしろらる 三四—三六

後方うしろに一の鬼ありて、我等憂ひの路をめぐりはつればこの群の中なるものを再び悉くは劍の刃にかけ 三七—

かく酷むごく我等を装よそふふ、我等再びその前を過ぐるまでには傷すべて

ふさがればなり　—四二

されど汝は誰なりや、石橋の上よりながむるはおもふに汝の自白によりて定められたる罰に就くを延べんためならん　四三—四五
わが師答ふらく、死未だ彼に臨まず、また罪彼を苛責に導くにあらず、たゞその知ることあまね周きをえんため　四六—四八

死せる我彼を導いて地獄を過ぎ、まこと圈また圈をつたひてこゝに下るにいたれるなり、この事の眞なるはわが汝に物言ふことの眞なるに同じ　四九—五一

此言を聞ける時、あやしみのあまり苛責をわすれ、我を見んとて濠の中に止まれる者その數百かずを超えたり　五二—五四

さらば汝ほどなく日を見ることをうべきに、フラー・ドルチンに

告げて、彼もしいそぎ我を追ひてこゝに來るをねがはずば 五五

—

雪の圍かこみが、たやすく得べきにあらざる勝利かちをノヴァーラ人に與ふ

るなからんため糧食かてを身の固かためとなせといへ — 六〇

すでにゆかんとしてその隻脚かたあしをあげし後、マオメツトかく我に

日ひ、さて去らんとてこれを地に伸ぶ 六一—六三

またひとり喉を貫かれ、鼻を眉の下まで削そかれ、また耳をたゞ一

のみ残せるもの 六四—六六

衆と共にあやしみとゞまりてうちまもりゐたりしが、その外部そとこ

とごとく紅なる喉のどぶえ吭を人よりさきにひらきて 六七—六九

いひけるは、罪ありて罰をうくるにあらず、また近似によりの我を欺く

にあらざば^{うへ}上なるラチオの國にてかつて見しことある者よ 七〇

—七二—

汝歸りてヴェルチエルリよりマールカーボに垂るゝ麗しき野を見るをえば、ピエール・ダ・メデイチーナの事を忘れず 七三—七

五

フアーノの中のいと善き二人^{ふたり}メツセル・グイードならびにアンジ
オレルロに、我等こゝにて先を見ること徒^{いたづら}ならずば 七六—

ひとりの殘忍非道の君信を賣るをもて彼等その船より投げられ、

ラ・カットリーカに近く沈めらるべしと知らしめよ —八一—

チープリとマイオリカの二の島の間、海賊によりても^{アルゴスびと}希臘人

によりてもかゝる大罪の行はるゝをネツツノだに未だ見ず 八

二一八四

かの一をもて物を見、かつわが同囚なかまのひとりにみぎりしならばよ
かりしをとおもはしむる邑まちの君なる信なき者 八五―八七

詢はかることありとて彼等を招き、かくしてフオカーラの風のためな

る誓ひも祈りも彼等に用なきにいたらしむべし 八八―九〇

我彼に、わが汝の消おとづれ息うへを上うへに齎うへらすをねがはゞ、見しことを痛

みとするは誰なりや我に示しかつ告げよ 九一―九三

この時彼手なかまを同囚なかまのひとりあぎとのあぎとにかけて口をあけしめ、叫びて、

これなり、物いはず 九四―九六

彼は逐はれて後チエーザレに説き、人備そなへ成りてなほためらはず必

ず損そこなひ害そこなひをうくといひてその疑ひを鎮めしことありきといふ 九

七一九九

かく臆することなく物言ひしクーリオも舌を喉のどぶえ吭より切放たれ、

その驚き怖るゝさまげにいかにぞや 一〇〇—一〇二

こゝにひとり手をふたつ二ともに断たれしもの、残りの腕を暗闇のさに

さゝげて顔を血に汚し 一〇三—一〇五

さけびていふ、汝また幸なくも事行はれて輒ち成るといへるモス
力をおもへ、わがかくいへるはトスカーナの民の禍ひの種なりき

一〇六—一〇八

この時我は詞を添へて、また、汝の宗族うからの死なりきといふ、こゝ
において憂へ憂ひに加はり、彼は悲しみ狂へる人の如く去れり

一〇九—一一一

されど我はなほ群をみんとてとゞまり、こゝに一のものをみたり
 き、若しほかに證あかしなくさりとして良心 一一二—

(自ら罪なしと思ふ思ひを鎧として人に恐るゝことなからしむる
 善き友)の我をつよくするあらずば、我は語るをさへおそれしな
 るべし 一一一七

げに我は首くびなき一の體からだの悲しき群にまじりてその行くごとくゆく
 を見たりき、また我いまもこれをみるに似たり 一一八—一二〇
 この者切られし首の髪をとらへてあたかも提ちようちん燈の如く之をお
 のが手に吊つるせり、首は我等を見てあゝくといふ 一二一—一二

三

體からだは己のために己ともしびを燈となせるなり、彼等は二にて一、一にて二
 からだ

なりき、かゝる事のいかであるやはかく定むるもの知りたまふ

一二四—一二六

まさしく橋下に来れる時、この者その言の我等に近からんため腕
を首と共に高く上げたり 一二七—一二九

さてその言にいふ、氣息いきをつきつゝ死者を見つゝゆく者よ、いざ
この心憂き罰を見よ、かく重きものほかにもあるや否やを見よ

一三〇—一三二

また汝わが消息おとづれをもたらすをえんため、我はベルトラム・ダル

・ボルニオとて若き王に悪を勧めし者なるをしるべし 一三三—

一三五

乃ち我は父と子とを互に背くにいたらしめしなり、アーキトフェ

ルがアブサロネをよからぬ道に唆そゝかしてダヴィーデに背かしめし
も 一三六一

この上にはいじ、かくあへる人と人とを分てるによりて、わが
脳はあはれこの體からだの中なるその根元もとより分たれ、しかして我これ
を携たふ 一四一

應報おきての律乃ち斯くおきての如くわが身に行はる 一四二—一四四

第二十九曲

多くの民もろくの傷はわが目を酔はしめ、目はとゞまりて泣く
をねがへり 一―三

されどヴィルジリオ我に曰ふ、汝なほ何を凝視^{みつむ}るや、何ぞなほ汝
の目を下なる幸なき斬りくだかれし魂の間にそゞぐや 四―六

ほかの囊^{ホルジャ}にては汝かくなさゞりき、もし彼等をかぞへうべしとお
もはゞこの溪^{めぐり}周圍^{ミーリア}二十二哩あるをしるべし 七―九

月は既に我等の足の下にあり、我等にゆるされし時はや残り少な
きに、この外にもなほ汝の見るべきものぞあるなる 一〇―一二

我之を聞きて答へて曰ふ、汝わがうちまもりゐたりし事の由よしに心をとめしならんには、わがなほ止まるを許し給ひしなるべし 一

三―一五

かくかたる間も導者はすゝみ我は答へつゝうしろに従ひ、さらにいひけるは 一六―

わが目をとめし岩窟いはあなの中には、おもふにかく價高き罪をいたむわが血縁の一の靈あり 一―二一

この時師曰ひけるは、汝今より後思ひを彼のために碎くなかれ、心をほかの事にとめて彼をこゝに残しておくべし 二二―二四

我は小橋のもとにて彼の汝を指示さししめし、指をもていたく恐喝おびやかすを見たり、我またそのジェリ・デル・ベル口と呼ぶるゝを聞けり

二五—二七

汝は此時嘗てアルタフォルテの主なりしものにのみ心奪はれたればかしこを見ず、彼すなはち去れるなり 二八—三〇

我曰ふ、わが導者よ、彼はその横死の怨みのいまだ恥をわかつものによりて報いられざるを憤り 三一—

はかるにこれがために我とものいはずしてゆけるなるべし、我またこれによりて彼を憐れむこといよく深し 一—三六

斯く語りて我等は石橋のうち次の溪はじめてみゆる處にいたれり、光こゝに多かりせばその底さへみえしなるべし 三七—三九

我等マーレボルジェの最後の僧院の上にいで、その役僧等やくそうたち我等

の前にあらはれしとき 四〇—四二

憂ひの鏃やじりをその矢につけし異様の歎聲なげき我を射たれば我は手をもて

耳を蔽へり 四三—四五

七月九月の間に、ヴァルデイキアーナ、マレムマ、サールデイニ

アの施療所せれうじよより諸の病みな一の濠にあつまらば 四六一

そのなやみこの處のごとくなるべし、またこゝより來る惡臭をしうは腐

りたる身よりいづるものに似たりき — 五一

我等は長き石橋より最後の岸の上にくだり、つねの如く左にむか

ふにこの時わが目あきらかになりて 五二—五四

底かたの方をもみるをえたりき、こはたふとき帝みかどの使者つかひなる誤りなき

正義がその世に名をしるせる驅者かたり等を罰する處なり 五五—五七

思ふに昔エージナの民の悉く病めるをみる悲しみといへども、

(この時空に毒満ちて小さき蟲にいたるまで 五八—

生きとし生けるもの皆斃る、しかして詩人等の眞まこととみなすところ

によればこの後古の民

蟻やからの族よりふたゝびもとのさまにかへさる)、この暗き溪の中に

あまたの束たばをなして衰へゆく魂を見る悲しみにまさらじ 一六六

ひとりうつむは俯きて臥し、ひとりなかまは同囚の背にもたれ、ひとりはよつ

ばひになりてこの悲しみの路をゆけり 六七—六九

我等は病みて身をあぐるをえざる此等の者を見之に耳をかたむけ

つつ言ことばはなくてしづかに歩めり 七〇—七十二

こゝにわれ鍋の鍋もたに凭れて熱をうくる如く互に凭れて坐しゐたる

ふたりかさまだら二人の者を見き、その頭より足にいたるまで瘡斑點をなせり

七三一七五

その痒きことかぎりなく、さりとてほかに薬なければ、彼等はし
 ばくおのが身を爪に噛ましむ 七六一

きみ

主を待たせし 厩うまやもり 奴 または心ならず目を覺さましむたる僕の馬うまぐし梳

を用ふるもかくはやきはいまだみず 一八一

爪かさぶたの痂を搔き落すことたとへば庖丁の鯉またはこれより鱗大なる

魚の鱗をかきおとすごとくなりき 八二一八四

わが導者そのひとりにいひけるは、指をもて鎧を解きかくしてし
 ばくこれを釘抜にかゆる者よ 八五―八七

なか

この中なる者のうちにラチ才人びとありや我等に告げよ、(かくて願

はくは汝の爪とこしへ永遠いたづきにこの勞いたづきに堪へなんことを) 八八―九〇

かの者泣きつゝ答へて曰ひけるは、かく朽果てし姿をこゝに見する者はともにラチ才人なりき、されど我等の事をたづぬる汝は誰ぞや 九一―九三

導者曰ふ、我はこの生くる者と共に岩また岩をくだるものなり、我彼に地獄を見せんとす 九四―九六

この時互の支くづさくづれておのゝわなゝきつゝ我にむかへり、また洩れ聞けるほかの者等もかくなしき 九七―九九

善き師身をいとちかく我によせ、汝のおもふことをすべて彼等にいへといふ、我乃ちその意に従ひて曰ひけるは 一〇〇―一〇二
ねがはくは第一の世にて汝等の記憶人の心をはなれず多くの日輪の下にながらへんことを 一〇三―一〇五

汝等誰にて何の民なりや我に告げよ、罰の見苦しく厭はしきをおもひて我に身を明かすをおそるゝなかれ 一〇六一—一〇八

そのひとり答へて曰ふ、我はアレツツオの者なりき、アールベロ

・ダ・シエーナによりてわれ火にかゝるにいたれるなり、然^{され}ど

一〇九—

我をこゝに導けるは我を死なしめし事に非ず、我戯れに彼に告げて空飛ぶ術^{すべ}をしれりといひ、彼はまた事を好みて智乏しき者なりければこの技^{わざ}を示さん事を我に求め、たゞわが彼をデーダロたらしめざりし故により彼を子となす者に我を焼かしめしは實^{まこと}なり

一一七

されど過つあたはざるミノスが我を十の中なる最後の囊^{ポルジャ}に陥らし

めしはわが世に行へる鍊金の術によりてなりき 一一八—一二〇
 われ詩人に曰ひけるは、そも事を好むシエーナ人の如き民かつて
 世にありしや、げにフランス人といへどもはるかにこれにおよば
 じ 一二一—一二三

此時いまひとりの癩を病める者かくいふをきゝてわが言に答へて
 曰ひけるは、費^{つひえ}を慎^{すべ}しむ術^{すべ}しれるストリツカ 一二四—

丁^{ちやうじ}子の實^みねぎす園の中にその奢^{もちゐ}れる用^{もちゐ}をはじめて工夫^{くふう}せしニツ
 コロを除け 一二九

また葡萄畑と大なる林とを蕩^{つかひはた}盡^たせしカツチア・ダシアーンお
 よびその才を時めかせしアツバリアート等の一隊を除け 一三〇

—一三二

されどかく汝に與してシエーナ人にさからふ者の誰なるやをしる
をえんため、目を鋭くして我にむかへ、さらばわが顔よく汝に答
へ 一三三―一三五

汝はわが鍊金の術によりて諸 かねの金を詐り變へしカポツキオの魂
なるをみん、またわが汝を見る目に誤りなくば、汝は思ひ出づる
なるべし 一三六―一三八

我は巧みに自然を似せしましち猿なりしを 一三九―一四一

第三十曲

テ―ベの血セ―メレの故によりユノネの怒りに觸れし時（その怒りをあらはせることしば／＼なりき） 一―三

いたく狂へるアタマンテはその妻が二人のふたり男をとこのこ子を左右の手に載せてゆくを見て 四―六

我等網を張らむ、かくしてわれ牝獅子と獅子の仔をその路にてとらへんとさけび、非情の爪をのばし 七―九

そのひとり名をレアルコといへるを執らへ、ふりまはして岩にうちあて、また女は残れる荷をもて自ら水に溺れにき 一〇―一二

また何事をもおそれず行へるトロイア人の僭上^{びと}命運の覆すところ

となりて、王その王土と共に亡ぶにいたれる時 一三—一五

悲しき、あぢきなき、囚^{とらはれ}虜の身のエークバは、ポリツセーナの

死せるをみ、またこのなやめる者その子ポリドロを 一六—

海のほとりにみとめ、憂ひのために心亂れ、その理性^{さとり}をうしなひ

て犬の如く吠えたりき 一二—

されど物にやどりて獸または人の身を驅るテーベ、トロイアの怒

りの猛きも 二二—

わが蒼ざめて裸なる二の魂の中にみし怒りには及ばじ、彼等は恰

も欄^{をり}を出でたる豚の如く且つ噛み且つ走れり 一二七

その一はカポツキオにちかづき、牙^{うなじ}を項にたて、彼を曳き、堅き

底を腹に磨らしむ 二八―三〇

震ひつゝ、残れるアレツツオの者我に曰ひけるは、かの魔性の魑魅すだまはジャンニ・スキツキなり、狂ひめぐりてかく人をあしらふ 三一―三三

我彼に曰ふ、（願はくはいま一の者汝に齒をたつるなからんことを）請ふ此者の誰なるやをそのはせさらぬまに我に告げよ 三四―三六

彼我に、こはいとあしきミルラの舊ふるし魂なり、彼正しき愛を超えてその父を慕ひ 三七―三九

おのれを人の姿に變へてこれと罪を犯すにいたれり、あたかもかなたにゆく者が 四〇―

獸の群の女王をえんとて己をブオソ・ドナーテイといつはり、その遺言書ゆゑごんしょを作りてこれを法例かたの如く調ふるとくのにいたれるに似たり

—四五

狂へる二の者過ぎ去りて後、我は此等に注げる目をめぐらし、ほかの幸さちなく世に出でし徒ともがらを見たり 四六—四八

我見しにこゝにひとり人の又生またさすあたりより股つけねの附根を切りとるのみにて形琵琶に等しかるべき者ありき 四九—五一

同化しえざる水氣によりて顔腹そと配そはざるばかりに身に權衡けんかうを失はせ、また之を重からしむる水腫すゐしゆの病は 五二—五四

たえずその唇をひらかしめ、そのさまエチカをやめる者の渴きて一おとがひを頤おとがひに一を上おとがひにむくるに似たりき 五五—五七

彼我等に曰ふ、あゝいぶかしくも苦患なやみの世にゐて何の罰をもうけ
ざる者よ、心をとめてマエストロ・アダモの幸なきさまを見よ

五八一

生ける時は我ゆたかにわが望めるものをえたりしに、いまはあは
れ水のひとしづく一滴をねぎもとむ　— 六三

カセンティーンをかの緑の丘よりアルノにくんだり、水路涼しく軟かき
多くの小川は　六四— 六六

常にわがまへにあらはる、またこれ徒いたづらにあらず、その婆の我を乾
すことわが顔の肉を削ぐそこの病よりはるかに甚しければなり　六

七— 六九

我を責むるおごそか嚴なる正義は、我に歎ためいき息をいよくしげく飛ばさし

めんとしてその手段てだてをわが罪を犯せる處に得たり 七〇—七二

即ちかしこにロメーナとしてわがバツテイスタの像かたある貨幣かねの模擬まがひを造り、そのため焼かれし身を世に残すにいたれる處あり 七三

—七五

されど我若しこゝにガイド、アレツサンドロまたは彼等の兄弟ささちの幸なき魂をみるをえばその福さいはひをフォンテ・ブラングにもかへじ

七六—七八

狂ひめぐる魂等の告ぐるまことこと眞ならば、ひとりはずでにこの中に

あり、されど身つな繋がるゝがゆるゑに我に益なし 七九—八一

たとひ百年もくとせの間にオンチャ一時をゆきうるばかりなりともこの身み軽くば、

この處めぐり周圍ミーリア十一哩あり 八二—八四

幅半哩を下らざれども、我は既に出立ちて彼をこの見苦しき民の間に尋ねしなるべし 八五―八七

我は彼等の爲にこそ斯かる家族やからの中にあるなれ、我を誘ひて三カラートの合まぜがね金あるフィオリーノを鑄らしめしは乃ち彼等なればなり 八八―九〇

我彼に、汝の右に近く寄りそひて臥し、冬の濡手ぬれてのごとく烟けふるふたりの幸なき者は誰ぞや 九一―九三

答へて曰ふ、我この巖間いわまに降り下れる時彼等すでにこゝにありしが其後一度も身たびを動かすことなかりき、思ふに何時いつに至るとも然しかせじ 九四―九六

ひとりしこづはジュセツポをしこづ讒りし偽りの女、一はトロイアにありしギ

リシア人びと僞りのシノンなり、彼等劇しき熱の爲に臭き烟を出すこ

とかく夥おびたゞし 九七—九九

この時そのひとり、かくあしぎまに名をいはれしを怨めるなるべ
し、拳こぶしをあげて彼の硬き腹を打ちしに 一〇〇—一〇二

その音恰も太鼓の如くなりき、マエストロ・アダモはかたきこれ
にも劣らじとみゆるおのが腕をもてかの者の顔を打ち 一〇三—

一〇五

これにいひけるは、たとひこの身重くして動くあたはずともかゝ
る用もちゐにむかひては自在かひなの肱我かひなにあり 一〇六—一〇八

かの者即ち答へて曰ふ、火に行ける時汝の腕かくはやからず、貨か
幣ねを造るにあたりてはかく早く否これよりも早かりき 一〇九—

一一一

水氣を病める者、汝のいへるは眞まことなり、されどトロイアにて眞を

問はれし時汝はかかる眞の證あかしびと 人にあらざりき 一一二——一一

四

シノネ曰ふ、我は言ことばにて欺けるも汝は貨幣かねにて欺けるなり、わが

こゝにあるは一の罪ひとつのためなるも汝の罪は鬼より多し 一一五——

一一七

腹脹ふくるゝ者答へて曰ふ、誓ひを破れる者よ、馬を思ひいで、この

事全世界にかくれなきをしりて苦しめ 一一八——一二〇

ギリシアの者曰ふ、汝はまた舌を焼くその渴かわきと腹まがきを目の前の籬まがきと

なすその腐くさりみづ 水のためくさりみづに苦しめ 一二一——一二三

この時 贗にせがねし金者、汝の口は昔の如く己が禍ひのために開あく、我渴
 き水氣によりて膨るるとも 一二四—一二六

汝は燃えて頭いためば、もしナルチツソの鏡だにあらば人のしふ
 るをもまたで之を舐ねぶらむ 一二七—一二九

我は彼等の言をきかんとのみ思ひたりしに、師我に曰ふ、汝少し
 く慎しむべし、われたゞちに汝と争ふにいたらん 一三〇—一三

二

彼怒りをふくみてかく我にいへるをきける時我は今もわが記憶に
 渦うづまくばかりの恥をおぼえて彼の方にむかへり 一三三—一三五

人凶夢を見て夢に夢ならんことをねがひ、すでに然るを然らざる
 ごとく切せちに求むることあり 一三六—一三八

我亦斯くの如くなりき、我は口にていふをえざれば、たえず詫^わびつゝもなほ詫^わびなんことを願ひてわが既にしかせるを思ふことなかりき 一三九―一四一

師曰ふ、恥斯く大いならずともこれより大いなる過ちを洗ふにたる、されば一切の悲しみを脱れよ 一四二―一四四

若し民かくの如く争ふところに命運汝を行かしむることあらば、わが常に汝の傍にあるをおもへ 一四五―一四七

かゝる事をきくを願ふはこれ卑しき願ひなればなり 一四八―一五〇

第三十一曲

同じ一の舌なれども先には我を刺して左右の頬を染め、後には藥を我にえさせき 一—三

聞くならくアキルレとその父の槍もまたかくのごとく始めは悲しみ後は幸ひを人に與ふる習ひなりきと 四—六

我等は背を幸なき大溪にむけ、之を繞れる岸の上にいで、言も交へで横ぎれり 七—九

さてこの邊は夜たりがたく晝たりがたき處なれば、我は遠く望み見るをえざりしかど、はげしき雷をも微ならしむるばかりに 一

○

角つのぶえ 笛高く耳にひゞきて我にその行方ゆくへを溯りつゝ目を一の處にの

みむけしめき 一—五

いくさ

師いくさいたましく敗れ、カルロ・マーニオその聖軍を失ひし後のオル
 ラントもかくおそろしくは吹鳴らさゞりしなりけり 一六—一八
 われ頭かうべをかなたにめぐらしていまだほどなきに、多くの高き櫓やぐらを
 みしごとく覺えければ、乃ち曰ふ、師よ、告げよ、これ何の邑な
 りや 一九—二一

彼我に、汝はるかに暗闇の中をうかゞふがゆゑに量ることたゞし
 からざるにいたる 二二—二四

ひとたびかしこにいたらば遠き處にありては官能のいかに欺かれ

易きものなるやをさだかに知るをえん、されば少しく足をはやめ
よ 二五—二七

かくてやさしく我手をとりていひけるは、我等かなたにゆかざる
うち、この事汝にいとあやしとおもはれざるため 二八—三〇

しるべし、彼等は巨人にして櫓にあらざ、またその臍ほぞより下は坎あな
の中岸のまはりにあり 三一—三三

水氣空に籠こもりて目にかくれし物の形、霧のはるゝにしたがひて次
第に浮びいづるごとく 三四—三六

我次第に縁ふちにちかづきわが眼濃まなこき暗くき空を穿つにおよびて誤りは
逃げ恐れはましぬ 三七—三九

あたかもモンテレッツジョンが圓かこひき圍かこひの上に多くの櫓を戴く如く、

おそろしき巨人等は 四〇―

その半身をもて坎をかこめる岸を巻けり（ジョーヴエはいまも雷いかづちによりて天より彼等を慍おびえしむ） ―四五

我は既にそのひとりの顔、肩、胸および腹のおほくと腋を下れる

もろかひな
雙腕

とをみわけぬ 四六―四八

げに自然がかゝる生物を造るをやめてかゝる臣等おみらをマルテより奪

へるは大いに善し 四九―五一

また彼象と鯨を造れるを悔いざれども、見ることさとき人はこれに依りて彼をいよいよ正しくいよおもんばかり慮あるものとなすべし 五

二―五四

そは心の固めもし悪意と能力ちからに加はらばいかなる人もこれを防ぐ

あたはざればなり 五五―五七

顔は長く大きくしてローマなる聖ピエート口の松まつ毯かきに似、他ほかの

骨みなこれに適かなへり 五八―六〇

されば下半身の裳もなりし岸は彼を高くその上に聳えしむ、おもふ

に三人みたりのフリジア人びともその髪に屈とゞくを 六一―

誇りえざりしなるべし、人の外套うはぎを締しめあ合はすところより下方したわが

目にうつれるもの裕ゆたかに三十パルモありき ―六六

ラフェル・マイ・アメク・ツアビ・アルミ、猛き口はかく叫べり、

(これよりうるはしき聖歌はこの口にふさはしからず) 六七―

六九

彼にむかひてわが尊者、愚なる魂よ、怒り生じ雑念起らばその角

笛に縋りて之をこころやりとせよ 七〇―七二

あわたゞしき魂よ、頸をさぐりてつなげる紐をえ、また笛のその
大いなる胸にまつはるをみよ 七三―七五

かくてまた我に曰ひけるは、彼己が罪を陳ぶ、こはネムブロット
なり、世に一の言語のみ用ゐられざるは即ちそのあしき思ひによ
れり 七六―七八

我等彼を殘して去り、彼と語るをやめん、これ益なきわざなれば
なり、人その言をことばしらざる如く彼また人の言をさとらじ 七九―
八一

かくて左にむかひて我等遠くすゝみゆきいしゆみ弩とゞく間をあひへだてゝま
たひとりいよく猛くかつ大いなる者を見き 八二―八四

縛れる者の誰なりしや我はしらねど、彼鏈をもてその腕を左はま
 へに右はうしろに繋がれ 八五―

この鏈頸より下をめぐりてその身のあらはれしところを絡くこと
 五 回に及べり 一九〇

わが導者曰ふ、この傲る者比類なきジョーヴェにさからひておの
 が能力をためさんとおもへり、此故にこの報をうく 九一―九三
 彼名をフィアルテといふ、巨人等が神々の恐るゝところとなりし
 頃大いなる試をなし、その腕を振へるも、今や再び動かすによし
 なし 九四―九六

我彼に、若しかなはゞ願はくは量り知りがたきブリアレオのわが
 目に觸れなんことを 九七―九九

彼すなはち答へて曰ふ、汝はこゝより近き處にアンテオを見ん、
 彼語るをえて身に縛いましめなし、また我等を凡ての罪の底におくらん

一〇〇—一〇二

汝の見んとおもふ者は遠くかなたにありてかくの如く繋がれ形亦
 同じ、たゞその姿いよく猛きのみ 一〇三—一〇五

ファイアルテ忽ち身を揺ゆれり、いかに強き地震なるといへどもその塔を
 ゆるがすことかく劇しきはなし 一〇六—一〇八

此時我は常にまさりて死を恐れぬ、また若し繫つなぎを見ることなくば
 怖れはすなはち死なりしなるべし 一〇九—一一一

我等すゝみてアンテオに近づけり、彼は岩窟いはあなより外にいつるこ
 と頭を除きて五アルラを下らざりき 一一二—一一四

あゝアンニバルがその士卒と共に背を敵にみせし時、シピオン
 を譽よつぎの嗣となせし有爲うゐの溪間に 一一五——一一七

そのかみ千匹の獅子の獲物えものをはこべる者よ（汝若し兄弟等のゆゝ
 しき師いくさに加はりたらば地の子等勝利かちをえしものと 一一八——

いまも思ふものあるに似たり）、願はくは我等を寒さコチートトを
 閉すところにおくれ、これをいとひて 一一三——

我等をテイチオにもティフオにも行かしむる勿れ、この者よく汝
 等のこゝに求むるものを與ふるをうるがゆゑに身を屈かゞめよ、顔を
 擧しかむる勿れ 一二四——一二六

彼はこの後汝の名を世に新にするをうるなり、彼は生く、また時
 未だ至らざるうち恩惠めぐみ彼を己が許によぶにあらずばなほ永く生く

べし 一二七—一二九

師かく日へり、彼速かに嘗てエルクレにその強をつよみみせし手を伸べ

てわが導者を取れり 一三〇—一三二

ヴィルジリオはおのが取られしをしりて我にむかひ、こゝに來こよ、

我汝をいだかんといひ、さて己と我とを一の束とたばせり 一三三—

一三五

傾ける方かたよりガリーセンダを仰ぎ見れば、雲その上を超ゆる時こ

れにむかひてゆがむかと疑はる 一三六—一三八

われ心をとめてアンテオの屈むをみしにそのさままた斯くの如く

なりき、さればほかの路を行かんと願ひもげにこれ時に起れる

なるを 一三九—一四一

彼は我等をかるやかにジユダと共にルチーフエロを呑める底にお
き、またかくかゞみて時ふることなく 一四二―一四四

船の檣の如く身を上げぬ 一四五―一四七

第三十二曲

若し我にすべての巖いはほお壓しせまる悲しみの坎あなにふさはしきあらき
 だみたる調しらべあらば 一—三

我わが想おもひの汁しるをなほも漏れなく搾しぼらんものを、我に是なきにより
 て語るに臨み心後る 四—六

夫れ全宇宙の底を説くは戯れになすべき業わざにあらず、阿母阿父と
 よばゝる舌また何ぞよくせんや 七—九

たゞ願はくはアムファイオネをたすけてテーベを閉せる淑女等わが
 詩をたすけ、言ことばの事と配そはざるなきをえしめんことを 一〇—一

二

あゝ萬の罪人にまさりて幸なく生れし民、語るも苦つらき處に止まる者等よ、汝等は世にて羊または山やぎ羊なりしならば猶善かりしなる

べし 一三一—一五

我等は暗あなき坎の中巨人の足あしもと下よりはるかに低き處におりたち、

我猶高き石垣をながめたるに 一六一—一八

汝心して歩め、あしうらをもて幸なき弱れる兄弟等の頭を踏むな

かれと我にいふものありければ 一九—二一

われ身をめぐらしてみしにわが前また足の下に寒さによりて水に

似ず玻璃に似たる一の池ありき 二二—二四

冬のオステルリツキなるダノイアもかの寒さむぞ空の下なるタナイも

この處の如く厚き覆かほおひ面衣をその流れの上につくれることあらし

二五―

げにタムベルニツキまたはピエートラピアーナその上に落ちぬともその縁ふちすらヒチといはざりしなるべし ―三〇

また農婦が夢にしばく落穂を拾ふころ、顔を水より出して鳴かんとする蛙の如く 三一―三三

蒼ざめしなやめる魂等は愧はぢのあらはるゝところまで氷にとぎれ、その齒を鶴しらべの調にあはせぬ 三四―三六

彼等のみなたえず顔を垂る、寒さは口より憂き心は目よりおのゝその證あかしをうけぬ 三七―三九

我しばしあたりをみし後わが足元にむかひ、こゝに頭の毛まじら

ふばかりに近く身をよせしふたりの者を見き 四〇—四二

我曰ふ、胸をおしあはす者よ、汝等は誰なりや我に告げよ、彼等

頸をまげ顔をあげて我にむかへるに 四三—四五

さきに内部うちのみ濕へるその眼まなこ、あふれながれて唇に傳はり、また

寒さは目の中の涙を凍らしてふたゝび之をとぎせり 四六—四八

鏃かすがひといふともかくつよくは木と木をあはすをえじ、是に於て彼等

はげしき怒りを起し、二匹の牡山羊をやぎの如く衝つきあへり 四九—五

一

またひとり寒さのために耳を二ふたつとも失へるもの、うつむけるまゝ

いひけるは、何ぞ我等をかく汝の鏡となすや 五二—五四

汝このふたりの誰なるを知らんとおもはゞ、聞くべし、ビセンツ

オの流るゝ溪は彼等の父アルベルト及び彼等のものなりき 五五

―五七

彼等は一の身より出づ、汝あまねくカイーナをたづぬとも、氷の中に埋^{いけ}らるゝにふさはしきこと彼等にまさる魂をみじ 五八―六

○

アルツーの手にかゝりたゞ一突^{ひとつき}にて胸と影とを穿たれし者も、

フオカツチャーも、また頭をもて我を妨げ我に遠く 六一―

見るをえざらしむるこの者（名をサツソール・マスケローニといへり、汝トスカーナ^{びと}人ならばよく彼の誰なりしやをしらむ）もま

さらじ 一六六

又汝かさねて我に物言はす莫からんため、我はカミチオン・デ・

パッチといひてカルリンのわが罪をいひとくを待つ者なるをしる
べし 六七—六九

かくて後我は寒さのため犬の如くなれる千の顔をみき、又之を見
しによりて凍れる沼は我をわなゝかしむ、後もまた常にしからむ

七〇—七二

我等一切の重力集まる處なる中心にむかひてすゝみ、我はとこし
への寒さの中にふるひゐたりし時 七三—七五

天意常數命運のいづれによりしやしらず、かうべ頭の間を歩むとてつよ
く足をひとりの者の顔にうちあてぬ 七六—七八

彼泣きつゝ我を責めて曰ひけるは、いかなれば我をふみしくや、
モンタペルティの罰をまさんとて來れるならば何ぞ我をなやま

すや 七九―八一

我、わが師よ、わがこの者によりて一の疑ひを離るゝをうるため
請ふ、この處にて我を待ち、その後心のまゝに我をいそがせたま
へ 八二―八四

導者は止まれり、我すなはちなほ劇しく詛ひるたる者にむかひ、
汝何者なればかく人を罵るやといへるに 八五―八七

彼答へて、しかいふ汝は何者なればアンテノーラを過ぎゆきて人
の頬を打つや、汝若し生ける者なりせば誰かはこれに耐^たへうべき
といふ 八八―九〇

我答へて曰ひけるは、我は生く、このゆゑに汝名を求めば、わが
汝の名を記録の中にをさむるは汝の好むところなるべし 九一―

九三

彼我に、わが求むるものはその反對なり、こゝを立去りてまた我に累をなすなかれ、かく諂ふともこの窪地に何の益あらんや 九

四—九六

この時我その項の毛をとらへ日ひけるは、いまはのがるゝに途なし、若し名をいはずば汝の髪一筋をだにこゝに残さじ 九七—九

九

彼聞きて曰ふ、汝たとひわが髪を^{むし}るとも我の誰なるやを告げじ、また千度わが頭^{ちたび}上^{づじやう}に落來るともあらはさじ 一〇〇—一〇二
 我ははやくも髪を手に捲き、これを抜くこと一房より多きにおよび、彼は吠えつゝたえずその目を垂れゐたるに 一〇三—一〇五

ひとり叫びていひけるは、ボツカよ何をかなせる、あぎとを鳴らすも
 なほ足らずとて吠ゆるか、汝にさは觸るは何の鬼ぞや 一〇六—一〇
 八

我曰ふ、恩に背きしくせものめ曲者奴、いまは汝に聞くの用なし、我汝の
まことおとづれ眞の消息を携へゆきこれを汝の恥となさん 一〇九—一一一
 彼答へて曰ふ、往け、しかして思ひのまゝにかたれ、されど汝こ
 の中よりいでなば、いまかく口を軽くせし者のことをものべよ
 一一二—一一四

彼こゝにフランス人の銀をびと悼むいた、汝いふべし、我は罪人の冷ゆる
 處にツエラの者をみたりきと 一一五—一一七

汝またほかに誰ありしやと問はるゝことあらん、しるべし、汝の

傍そばにはファイオレンツアに喉を切られしベツケーリアの者あり 一

一八一—一二〇

かなたにガネルローネ及び眠れるファーエンツアをひらきしテバルデル口とともにあるはおもふにジャンニ・デ・ソルダニエルなるべし 一二一—一二三

我等既に彼をはなれし時我は一の孔の中に凍れるふたりの者を見き、一の頭は残りの頭の帽となり 一二四—一二六

上なるものは下なるもの、なううなじ脳と項とあひあふところに齒をくだし、さながら饑ゑたる人の麩パンを貪り食ふに似たりき 一二七—一二九

九

怒れるテイデオがメナリツポの後こめかみ額を噛めるもそのさま之に異

ならじとおもふばかりにこの者なうがい腦蓋とそのあたりの物とをかめ

り 一三〇—一三二

我曰ふ、あゝかく人を食はみあさましきしるしによりてその怨みを
あらはす者よ、我に故を告げよ、我も汝と約を結び 一三三—一

三五

汝の憂ひに道ことわり理あらば、汝等の誰なるや彼の罪の何なるやをし

り、こののち上うへの世に汝にむくいん 一三六—一三八

わが舌乾くことなくば 一三九—一四一

第三十三曲

かの罪つみびと人口をおそろしき糧かてよりもたげ、後方うしろを荒らせし頭なる
毛にてこれをぬぐひ 一—三

いひけるは、望みなき憂ひはたゞ思ふのみにて未だ語らざるには
やくも我心を絞るを、汝これを新あらたならしめんとす 四—六

されどわが言我ことばに噛まるゝ逆賊をじよくの汚辱をじよくの實を結ぶ種たりうべく
ば汝はわがかつ語りかつ泣くを見ん 七—九

我は汝の誰なるをも何の方法てだてによりてこゝに下れるをも知らず、
されどその言をきくに汝は必ずフイレンツエの者ならん 一〇—

一二

汝知るべし、我は伯爵コンテウゴリーノ此こは僧正ルツジェーリといへる者なり、いざ我汝に何によりてか上る隣となりびと人となれるやを告げん 一三一—一五

彼の惡念あらはるゝにおよびて彼を信ぜる我とらへられ、のち殺されしことはいふを須ひず 一六一—一八

されば汝の聞きあたはざりし事、乃ちわが死のいかばかり殘忍なりしやは汝聞きて彼我を虐しひたげざりしや否やを知るべし 一九—二一

わがためには餓うゑの名をえてこのちなほも人を籠こむべき埒とやなる小

窓が 二二—二四

既に多くの月をその口より我に示せる頃、我はわが行末の幔まくを裂きし凶夢を見たり 二五—二七

すなはちこの者をさ長きみまた主となりてルツカをピサ人に見えざらしむ

る山の上に狼とその仔等を逐ふに似たりき 二八—三〇

肉瘡せ氣はや燥り善く馴らされし牝めいぬ犬とともにグアンデイ、シスモン

デイ、ランフランキをその先驅さきとす 三一—三三

逐はれて未だ程なきに父も子もよわれりとみえ、我は彼等が鋭き

牙にかけられてその傍わきばら腹を裂かるゝを見しとおぼえぬ 三四—

三六

さて暁に目をさましし時我はともにもるしわが兒等の夢の中に泣き

また麩パン麩を乞ふ聲をきゝぬ 三七—三九

若しわが心にうかべる禍ひの兆きざしをおもひてなほいまだ悲しまずば
 汝はげに無情なり、若し又泣かずば汝の涙は何の爲ぞや 四〇—

四二

彼等はめさめぬ、糧かての與へらるべき時は近づけり、されど夢のた
 めそのひとりだに危ぶみ恐れざるはなかりき 四三—四五

この時おそろしき塔の下なる戸に釘打つ音きこえぬ、我はわが兒
 等の顔を見るのみ言ことばなし 四六—四八

我は泣かざりき、心石となりたればなり、彼等は泣けり、わがア
 ンセルムツチオ、かく見たまふは父上いかにしたまへるといふ

四九—五一

かくても我に涙なかりき、またわれ答へでこの日この夜をすごし

日輪再び世にあらはるゝ時に及べり 五二―五四

微かすかなる光憂ひの獄ひとやにいりきたりてかの四の顔にわれ自らのすがた

をみしとき 五五―五七

我は悲しみのあまりもろて雙手を噛めり、わがかくなせるを食くらはんため

なりとおもひ、彼等俄かに身を起して 五八―六〇

いひけるは、父よ我等をくらひたまはゞ我等の苦痛いたみは却つて輕か

らむ、この便びんなき肉を我等に着せたまへるは汝なれば汝これを剥は

ぎたまへ 六一―六三

我は彼等の悲しみを増さじとて心をしづめぬ、この日も次の日も

我等みな黙もだせり、あゝ非情の土よ、汝何ぞ開かざりしや 六四―

六六

よつかめ

第四日になりしときガツドはわが父いかなれば我をたすけたまは

ざるやといひ、身をのべわがあしもとにたふれて 六七―六九

その處に死にき、かくて五日と六日目の間に我はまのあたり三人

のあひついでたふるゝをみぬ、我また盲めしひとなりしかば 七〇―

彼等を手にてさぐりもとめて死後なほその名を呼ぶこと二日、こ

の時斷食の力憂ひにまさるにいたれるなりき ―七五

かくいへる時彼は目を斜なぐめにしてふたゝび幸さちなき頭かうべ顛を噛めり、そ

の齒骨に及びて強きこと犬の如くなりき 七六―七八

あゝピサよ、シを語となすうるはしき國の民の名折なをれよ、汝の隣となり

人びと等汝を罰するおそければ 七九―八一

ねがはくはカプライアとゴルゴーナとゆるぎいでゝアルノの口に

籬まがきをめぐらし、汝の中なる人々悉く溺れ死ぬるにいたらんことを

八二—八四

そはたとひ伯爵コンテウゴリーノに汝に背きて城を賣れりとのきこえあ

りとも汝は兒等をかく十字架につくべきにあらざればなり 八五

—八七

第二のテーベよ、年若きが故にすなはち罪なし、ウグツチオネも

イル・ブリガータもまた既にこの曲に名をいへる二人ふたりの者も 八

八—九〇

我等はなほ進み、ほかの民の俯うつむかずうらがへりてあらく氷に包ま

るゝところところにいたれり 九一—九三

こゝには憂へ憂ひをとゞめ、なやみは目の上の障しやうげ礙げにさへられ、

苦しみをまさんとて内部うちにかへれり 九四—九六

そははじめの涙凝塊かたまりとなりてあたかも玻璃の被物おほひの如く眉の下

なる杯を満たせばなり 九七—九九

わが顔は寒さのため、胼胝たこのいでたるところにひとしく凡ての感
覺を失へるに 一〇〇—一〇二

この時わが風に觸るゝを覺え、日ひけるは、わが師よ、これを動
かすものは誰ぞや、この深處ふかみには一切の地氣消ゆるにあらずや

一〇三—一〇五

彼即ち我に、汝は程なく汝の目が風を降ふらす源もとをみてこれが答を
汝にえさすところにいたらん 一〇六—一〇八

氷の皮なる幸なき者の中ひとり叫びて我等にいひけるは、あゝ非

道にして最後の立處たちどに罪なはれたる魂等よ 一〇九—一一一

堅き被物おほひを目よりあげて涙再び凍らぬまに我胸にあふるゝ憂ひを

少しく洩すことをえしめよ 一一二—一一四

我すなはち彼に、わが汝をたすくるをねがはゞ汝の誰なるやを我
に告げよ、かくして我もしその支障さゝはりを去らずば我は氷の底にゆ

くべし 一一五—一一七

この時彼答ふらく、我は僧フラーテアルベリーゴなり、よからぬ園の木の

實の事ありてここに無花果に代へ無漏子むろしをうく 一一八—一二〇

我彼に曰ふ、さらば汝既に死にたるか、彼我に、我はわが體からだのい

かに上の世に目をふるやをしらず 一二一—一二三

このトロメアには一の得ありていまだアトロローポスに追はれざる

に魂しばくこゝに落つることあり 一二四—一二六

また汝玻璃にひとしき此涙をいよゝこゝろよくわが顔より除く
をえんため、しるべし、魂わがなせるごとく信に背くことあれば

一二七—

鬼たゞちにその體からだを奪ひ、みづからこれが主となりて時のめぐり
をはるを待ち 一一三二

おのれはかゝる水槽みづぶねの中におつ、さればわが後方うしろに冬を送る魂
もおもふにいまなほその體からだを上かの世にあらはすなるべし 一三三

—一三五

汝今此處にくだれるならば彼を知らざることあらじ、彼はセル・
ブランカ・ドーリアなり、かく閉されてより既に多くの年を経た

り 一三六—一三八

我彼に曰ふ、我は汝の欺くをしる、ブランカ・ドーリアは未だ死
 ならず、彼食^くひ飲み寝^いねまた衣^{ころも}を着るなり 一三九—一四一

彼曰ふ、上なるマーレブランケの濠の中、粘^{ねば}き脂^{やに}煮ゆるところに
 ミケーレ・ツアンケ未だ着かざるうち 一四二—一四四

この者その體^{からだ}に鬼を殘して己にかはらせ、彼と共に逆を行へるそ
 の近親のひとりまたしかなせり 一四五—一四七

されどいざ手をこなたに伸べて我目をひらけ、我はひらかざりき、
 彼にむかひて暴^{みだり}なるは是即ち道なりければなり 一四八—一五〇

あゝジエーノヴァ人^{びと}よ、一切の美風をはなれ一切の邪惡を満たす
 人々よ、汝等の世より散りうせざるは何故ぞ 一五一—一五三

我は極ごく悪あくなるローマニアの魂と共に汝等のひとりその行おこなひにより
て魂すでにコチートコチートに浸ひたり 一五四―

身はなほ生きて地上にあらはるゝ者をみたりき 一五九

第三十四曲

地獄の王の旗あらはる、此故に前方まへを望みて彼を認むるや否やを
見よ、わが師かく曰へり 一—三

濃霧起る時、闇わが半球を包む時、風のめぐらす碾粉車こひきぐるまの遠く
かなたに見ゆることあり 四—六

我もこの時かゝる建たてもの物をみしをおぼえぬ、また風をいとへども
ほかに避くべき處なければ、われ身を導者の後方うしろに寄せたり 七

—九

我は既に魂等全く掩おほひ塞ふさがれ玻璃の中なる藁屑わらくづの如く見え透すけ

る處にゐたり（これを詩となすだに恐ろし） 一〇—一二

伏したる者あり、頭を上あしうらにまたは蹠あしうらを上あしうらにむけて立てる者あり、

また弓の如く顔を足あしもと元もとに垂れたる者ありき 一三—一五

我等遠く進みし時、わが師は昔姿美しかりし者を我にみすべき機おり

いたれるをみ 一六—一八

わが前をさけて我にとゞまらせ、見よデーテを、また見よ雄々を

しさをもて汝を固かたむべきこの處をといふ 一九—二一

この時我身いかばかり冷ひえわが心いかばかり挫くじけしや、讀者よ問

ふ勿ことばれ、言及ことばばざるがゆゑに我これを記しるさじ 二二—二四

我は死せるにもあらずまた生けるにもあらざりき、汝すこし些さとりの理解さとりだ

にあらば請ふ今自ら思へ、彼をも此をも共に失へるわが當時のさ

まを 二五―二七

悲しみの王土の帝みかどその胸の半なかまで氷の外そとにあらはれぬ、巨人をその腕に比ぶるよりは 二八―

我を巨人に比ぶるかたなほ易し、その一部だにかくのごとくば之かなに適あへる全身のいと大いなること知りぬべし ―三三

彼今の醜みにくきに應じて昔美しくしかもその造つくりぬし主しゅにむかひて眉を上げし事あらば一切の禍ひ彼よりいづるも故なきにあらず 三四

―三六

我その頭に三の顔あるを見るにおよびてげに驚けることいかばかりぞや、一は前にありて赤く 三七―三九

残る二は左右の肩の正ただ中なかの上にてこれと連つらなり、かつ三ともに雞と

冠さかあるところにて合へり 四〇―四二

右なるは白と黄の間の色の如く、左なるは二―口の水みなかみ上より來

る人々の如くみえき 四三―四五

また顔の下よりはかゝる鳥につかしきふたつ二の大きいなる翼いでたり、

げにかく大きいなるものをば我未だ海の帆にも見ず 四六―四八

此等みな羽なくその構造つくりぎ蝠赤うもり蝠の翼に似たり、また彼此等を搏ち、

三の風彼より起れり 四九―五一

コチ―トの悉く凍れるもこれによりてなりき、彼は六の眼まなこにて泣

き、涙と血の涎よだれとは三の頤おとがひをつたひて滴したゝれり 五二―五四

また口毎にひとりの罪つみびと人を齒にて碎くこと碎麻機あさほぐしの如く、か

くしてみたりの者をなやめき 五五―五七

わけて前なる者は爪にかけられ、その背しばく皮なきにいたれり、これにくらぶれば噛まるゝは物の數ならじ 五八―六〇

師曰ふ、高くかしこにありてその罰最も重き魂はジユダ・スカリオツトなり、彼頭を内にし脛を外に振る 六一―六三

頭さがれるふたりのうち、黒き顔より垂るゝはプルートなり、そのもがきて言なきを見よ ことば 六四―六六

また身いちじるしく肥ゆとみゆるはカツシオなり、されど夜はまた來れり、我等すでにすべてのものを見たればいざゆかん 六七―六九

我彼の意に従ひてその頸を抱けるに彼はほどよき時と處をはかり、翼のひろくひらかれしとき 七〇―七二

毛深き腋すがに縋り、叢むらまた叢をつたはりて濃き毛と氷層のあひだを

くだれり 七三―七五

かくて我等股の曲まがりめ際腰の太ふとやかなるところにいたれば導者は疲
れて呼吸いきもくるしく 七六―七八

さきに脛をおけるところに頭をむけて毛をにぎり、そのさま上のほる

人に似たれば我は再び地獄にかへるなりとおもへり 七九―八一

よわれる人の如く喘ぎつゝ師曰ひけるは、かたくとらへよ、我等

はかゝる段きだによりてかゝる大いなる悪を離れざるをえず 八二―

八四

かくて後彼とある岩の孔あなをいで、我をその縁ふちにすわらせ、さて心

して足をわが方かたに移せり 八五―八七

我はもとのまゝなるルチーフエロをみるならんとおもひて目を擧
 げて見たりしにその脛上にありき 八八―九〇

わが此時の心の惑ひはわが過ぎし處の何なるやを辨わきまへざる愚なる
 人々ならではしりがたし 九一―九三

師曰ふ、起きよ、路遠く道みちすぢ程艱かたし、また日は既に第三時の半に

歸れり 九四―九六

我等の居りし處は御館みたちの廣間ひろまにあらず床粗ゆかあらく光乏しき天然ひとやの獄舎
 なりき 九七―九九

我立ちて曰ひけるは、師よ、わがこの淵を去らざるさきに少しく
 我に語りて我を迷ひの中よりひきいだしたまへ 一〇〇―一〇二
 氷はいづこにありや、この者いかなればかくさかさまに立つや、

何によりてたゞしばしのまに日は夕ゆふより朝に移れる 一〇三—一

〇五

彼我に、汝はいまなほ地心のかなた、わがさきに世界を貫くよからぬ蟲の毛をとらへし處にありとおもへり 一〇六—一〇八

汝のかなたにありしはわがくだれる間のみ、われ身をかへせし時汝は重量おもさあるものを四方より引く點を過ぎ 一〇九—一一一

廣き乾ける土に蔽はれ、かつ罪なくして世に生れ世をおくれる人その頂點のもとに殺されし半球を離れ 一一二—

いまは之と相あひむか對へる半球の下にありて、足をジュデツカの背面を成す小さき球の上におくなり 一一七

かしこの夕はこゝの朝にあたる、また毛を我等の段きだとなせし者の

身をおくさまは今も始めと異なることなし 一一八—一二〇

彼が天よりおちくだれるはこなたなりき、この時そのかみこの處
に聳えし陸は彼を恐るゝあまり海を蔽物おほひとなして 一二一—一二

三

我半球に來れるなり、おもふにこなたにあらはるゝものもまた彼
をさけんためこの空處をこゝに残して走り上のぼれるなるべし 一二

四—一二六

さてこの深みにベルヅエブの許より起りてその長さ墓の深さに等
しき一の處あり、目に見えざれども 一二七—

一の小川の響きによりてしらるゝ、この小川は回めぐり流れて急ならず、
その噛み穿てる岩の中虚うつろを傳はりてこゝにくだれり 一三二—

導者と我とは^{あやや}祭かなる世に歸らんため、このひそかなる路に入り、

しばしの休^{やすみ}をだにもとむることなく 一三三—一三五

わが一の圓き孔の口より天の負^おひゆく美しき物をうかゞふをうる
にいたるまで、彼第一に我は第二に上^{のぼ}りゆき 一三六—一三八

かくてこの處をいでぬ、再び諸の星をみるとて 一三九—一四

一

註

第一曲

ダンテ路を失ひて暗き林の中に迷ふ、會　一丘上に光明を認め之
に向ひて進む、されど豹、獅子、狼の出で、路を塞ぐにあひ再び
林にかへらんとす、この時ウエルギリウスこれにあらはれて救ひ
の道を示し三界の歷程を勤め且つ自ら導者となりてまづ地獄、淨
火をめぐらんと告ぐ

一―三

【正路】有徳の路

【半】詩人三十五歳の時、人生を七十と見做してその半にあたるをいふ（詩篇、九〇・一〇及びダンテの『コンヴィヴィオ』四・二三、八八以下参照）

ダンテの生れしは一二六五年なり、故に『神曲』示現の時は一三〇〇年聖金曜日の前夜にはじまる（地、二・一註参照）一三〇〇年はダンテがフィレンツェのプリオレとなりし年又ローマに有名なる大會式（ジュビレーオ）（地、一八・二九及び註参照）ありし年なり

【林】罪の路乃ち時黒なる娑婆世界

七一九

【幸】覺醒、理性の聲を聞き、覺めて救ひの路に就くにいたれること

一〇——二

【睡り】罪の甘き夢に魁せられ我知らず光の路を失へるさま

一三——五

【溪】即ち暗き林

【山】喜びの始めまた源なる幸の山（七八行）、罪の路は林の苦しみに導き有徳の路は山の喜びに導く

一六——一八

【直くみちびく】ヨハネ、一一・九に曰、人若し晝あるかば躓く

ことなしこの世の光を見るによりてなり

【遊星】太陽、當時遊星の一にかぞへられたればなり、太陽の光は神より出づる生命の光なり（ヨハネ、八・一二）

二二—二四

【人】破船の厄に遭へる人

二五—二七

【路】林の路、即ち罪の生涯を回顧せるなり

二八—三〇

【低き足】坂路を上るが故に片足高く片足低し

三一—三三

【豹】肉慾の象徴、その皮斑紋ありて美しければなり

註釋者曰、豹、獅子、狼は肉慾、慢心、貪婪の三惡を表はし、エ
レミヤ、五・六に、林よりいづる獅子は彼等を殺し荒野の狼は彼
等を滅ぼし豹は彼等の町々をねらふとあるに據れるなりと

三七―四五

【朝の始め】一三〇〇年聖金曜日朝まだき

【星】白羊宮の星、太陽の白羊宮にあるは春の始め（三月下旬よ
り四月下旬まで）なり

傳説に曰、天地の創造せられし時は春なり而して太陽が白羊宮に
入りてその運行をはじめし日乃ち春分はキリストの懐胎並びに磔
殺の日と相同じと

【美しき物】天體（地、三四・一三七参照）神天地を造り日月星

辰に始めて運行を與へ給へる時白羊宮にありし太陽はこの天宮の中なる他の諸星と共に今同じ處にありて登れり

【望み】豹に勝つべき望み

四九―五〇

【多くの民】貪婪の禍ひ大なるをいふ

五八―六〇

【黙す】光照らざる

六一―六三

【聲嗶る】久しく人と語らざる古人の靈の如く見えたり

六七―六九

【彼】ウエルギリウス（ヴェルジリオ）、有名なるラテン詩人

(前七〇—一九年)、著書數卷あり、就中『アエネイス』最もあらはる

ウエルギリウスはホメロスと共に古來最大詩人の一に數へられ、中古特にいちじるしく歎美せられし詩人なり、しかしてダンテのあまねくその著作を愛讀しこれに精通せるは、この曲中ダンテ自らいへること及び『神曲』を通じてこの古詩人を引照せる甚だ多き事等によりてあきらかなり、『アエネイス』はその詩材よりいふもアエネアスの冥府めぐりイタリア建國の事業等ダンテ自身及びその詩に關係深きものゝみなればこの歌の作者を導者にえらべるはその當をえたりといふべし、『神曲』中のウエルギリウスは理性若しくは哲理の代表者なり

【ロムバルディア】イタリア北部の國名、ダンテの時代には今の所謂ロムバルディアより廣かりきといふ

【マントヴァ】ロムバルディアにある町、その地勢及び由來は地、二〇・五五以下に詳し

七〇―七二

【後れて】ウエルギリウスはユーリウス・カエサル（ジウリオ・チエーザレ）に後るゝこと二十九年にして生れカエサルの殺害せられしとき二十六歳なりき

おもふに七〇行の Sub Iulio（ユーリオの世）はカエサルの名の世に知られし時をも加へおしなべてかくいへるなるべし、カエサルが政權を掌握せるはウエルギリウスの誕生よりはるかに後の事な

ればなり

【アウグスト】アウグストウス・オクタウィアヌス、ローマ皇帝
 (前六三―後一四年)

七三―七五

【イーリオン】トロイア。小アジアの海濱にありし町にて有名な
 トロイア戦争ありし處

トロイア王プリアモスの子パリス、スパルタ王メネラオスに客た
 りしがその妻ヘレネを奪ひて本國に歸り、これがためにトロイア
 戦争なるもの起るにいたれるなり、戦ひ十年に亙りて城陥り兵火
 に罹りて焼く

【アンキーゼの義しき子】アエネアス、アンキセスとアプロディ

テの間に生る、トロイアの名將なり

ウエルギリウスの『アエネイス』はトロイア城陥落の後なるアエネアスの流落にはじまり、そのイタリアにいたりツルヌスを殺して建國の基を起すにをはる

八五―八七

【譽】『神曲』以前の作なる短詩すでに世に知らる（淨、二四・四九以下參照）

九一―九三

【^{ほか}他の路】罪の恐るべきをさとれる者徳の生涯を心中に畫くといへども未だ全く罪の羈絆を脱せるにあらず徳に入るの準備成れるにあらねばたゞちに光明の山に登りて神恩に浴する能はず、まづ

地獄を経て罪をはなれ淨火を経て穢れを淨めざるべからず

一〇〇—一〇二

【妻とする獸】貪婪に伴ふ罪惡

【獵犬】將來世に出で、物質上及び精神上よりその救ひとなるべき偉大の人物（恐らくは皇帝若しくは法王）

註釋者或ひはキリストの再來をいひ或ひは當時ヴェロナの明君なりしカン・グランデ・デルラ・スカーラの如き知名の士を擧ぐるもいづれも疑はし、思ふに捕捉し難きダンテの獵犬にしひて具體的な解釋を求めんとするは無益の業ならん

一〇三—一〇五

【フェルトロ】意義不明

一〇六一—一〇八

【カムミルラ】ヴオルシ人の王メタブルの女なり、ツルヌスを助けてトロイア人と戦ひ、戦死す（『アエネイス』七・八〇三及び一一卷）

【エウリアーロ、ニソ】エウリアルス、ニスス共にトロイア人、友情を以て名高し、ヴオルシ人と戦ひ共に斃る（同上、九・一七九以下）

【ツルノ】ツルヌス、ルツルリア人の王、アエネアスと戦ひて死す（同上、一二卷）

【低きイタリア】古くラチオ（ラティウム）と稱しローマを含めるイタリアの一部、北方の高地に對し平野多きを以て低しといふ

一〇九——一一一

【嫉み】地獄の王ルチーフエロ（ルキフェル）の嫉み、悪魔人類の幸福をねたみ、禍ひの獸なる貪慾を世に放てるなり

一一二——一一四

【不朽の地】地獄

一一五——一一七

異本日、汝はそこに望みなき叫びを聞き第二の死を呼び求なる古のなやめる魂をみるべし

【第二の死】魂肉を離るゝは第一の死、魂無に歸するは第二の死なり、地獄に罰をうくる魂苦しみのあまり己の滅び失せんことを求むるなり

【古の】ダンテ以前の死者を總括していへり

一一八——一二〇

時満ちて天界に登るを得る望みあるが故に甘んじて淨めの苦しみをうくる淨火中の魂

一二一——一二三

【魂】ベアトリーチエ

一二四——一二六

【律法に背ける】神をあがむるの道をつくさざりしをいふ（地、

四・三八）

一三〇——一三二

【禍ひ】現世の

【大なる禍ひ】後世の

一三三—一三五

【聖ピエートロの門】淨火の門、キリスト鑰をピエートロに與へ（マタイ、一六・一九）、ピエートロはこれを天使に托して淨火の門を開閉せしむ（淨、九・一一七以下參照）

第二曲

既にしてダンテ自らかへりみてその力よく冥界をめぐるに足るや否やを疑ふ、ウエルギリウス乃ちこれに告ぐるに己がリムボを出

で、曠野に來るに至れる由來を以てし、これを勵まして地獄にむかはしむ

一—三

【日は傾けり】一三〇〇年四月八日の夕暮

兩詩人の地獄にむかへるは一三〇〇年の聖金曜日なりしこと地、

二一・一一二以下なるマラコダの言によりて明かなり、されどこの金曜日は何月何日に當りしや、或人は三月二十五日といひ或人は四月八日といふ、こゝにはムーア博士の説に従ひて後説を採れり、詳しくは博士の『神曲中の時に就て』(Moore, Time-Reference in the Divina Commedia)を見よ

四—六

ダンテに二の難あり、路の險惡なるは其一、見るに忍びざる罪人の苦患を見るの苦しみ其二なり、前者は身を攻め後者は心を攻む
七―九

【ムーゼ】ムーサ、神話中の女神、九柱ありて詩音楽等を司る
第一曲は『神曲』の總序にして所謂地獄篇は第二曲にはじまるが故にこゝにムーゼと理想の才と記憶とを呼べり、卷頭に詩神をよべるは古來詩人の例に倣へるなり、『神曲』の他の二篇また然り
一三―一五

【いへらく】『アエネイス』六・二三六以下に

【シルヴィオの父】アユネアス、シルウィウス（シルヴィオ）はアエネアスとラウイニア（地、四・一二六）の間の子なり

一六一—一八

【誰】ローマ人の祖先

【何】ローマ帝國の創業者

【衆惡の敵】神

一九—二一

【エムピレオの天】至高の天

二二—二四

ローマ（彼）もローマ帝國（此）も神の定むるところによりて共に聖地となり聖ピエートロの後繼者なる法王の座所こゝにあり寺院と互に獨立し、しかも相提携して天命を行ふ、これダンテの理想の帝國なり

【大ピエロ】聖ピエートロ又はペテロ、キリスト十二弟子の一、道をローマに傳へ、教に殉じて死す

二五―二七

アエネアス冥府にゆきてその父アンキセスにめぐりあひ、これと語りて己が將來の事を知り信念いよく固く遂にイタリアにいたりて亂を平げ建國の基を起せり、されば後年法王の座所をこの地に見るにいたれるもアエネアスの冥府めぐりに負ふところ多し

二八―三〇

【選の器】使徒パウロ（使徒、九・一五）

【かしこ】冥界

コリント後、一二・二以下にはたゞ第三の天に擧げらる云々とあ

り、されど中世紀の傳説によればパウロは天堂のみならず地獄にも赴けるなり

五二―五四

【懸垂の衆】第一の地獄なるリムボの賢哲、天界の祝福を受くるにあらず地獄の苛責を受くるにあらずその中間に懸れるなり

【淑女】ベアトリーチェ（七〇―七二行註参照）

五八

【動】諸天の運行、即ち時の存するかぎり

異本、世のあるかぎりは残らん

譯者曰くこの書本文殆ど全くムーアの『ダンテ全集』（Tutte le

Opere di Dante Alighieri）に據れり、異本各種の比較については同

博士の『神曲用語批判』(Textual Criticism of the Divina Commedi

a) を見れば詳細を知るをうべし、乃ちこの項 *moto* 及び *mondo* の

比較はその第二七一—三頁にあり、以下煩を避けて一々引照せず

六一—六三

我に愛せられてしかも命運に愛せられざるもの

七〇—七二

【ベアトリーチェ】ダンテの『新生』(La Vita Nuova)に出づる

詩人の戀人

(E) 『新生』の解説につきては甲論乙駁今に至りて定説なし、さ

れどこれを以て史實に基づき詩想によりて潤飾せる詩人自傳の一

部と見做す説多くの點に於て信ずべきに似たり、故にベアトリー

チエ及びベアトリーチエとダンテの關係を知らんと欲せば必ずま
づ『新生』によらざるをえず

また假りに『新生』を以て一種の譬喩と見做しダンテはこれによ
りて自己の理想を表現しその理想の形成せるところに「ベアトリ
ーチエ」なる名稱を冠らしめしに過ぎずとし或ひは之を以て詩人
の宗教觀詩人時代の寺院及び教理等を寫し出せる一種の象徴に過
ぎずと見做すも、ダンテのベアトリーチエを知らんと欲せば同じ
くまづ『新生』によらざるをえざるなり

(2) 『新生』中ベアトリーチエに關する事項の主なるものをあぐ
れば、ダンテが始めてベアトリーチエを見たる事及びこの時八歳
の少女が九歳の少年の心に殘せし深き印象(二)、ダンテが寺院

内に一婦人を帷としてベアトリーチェの祈姿をうかゞひ見しこと
 (五)、ベアトリーチェを婚姻の(ベアトリーチェ自身の婚姻な
 るべし)席上に見、友の扶けによりてこの席を去れること(一四
)、ベアトリーチェの父の死(一二八九年(二二)、ベアトリー
 チェの死(一二九〇年(二九、但し學會本によれば——従つて岩
 波文庫も——二八)、等なり、戀人の家系住居につきては何等云
 ふ所なし

(三)ベアトリーチェを史實と配合せる者はボツカツチヨなり、そ
 の説に曰く、ベアトリーチェはフォルコ・ポルチナーリの女にし
 てフィレンツェに生る、一二七四年ダンテ始めてこの女を見、後
 次第に愛慕するにいたれり、一二八六年の頃ベアトリーチェはシ

モネ・デ・バルヂなるものと婚し一二九〇年六月死すと

(ト)『神曲』中のベアトリーチェは『新生』のベアトリーチェのさらに理想化したる者にて神學の象徴なり、ダンテ、ウエルギリウスに導かれて地獄・淨火の兩界をめぐれども、進んで天上に赴くに及びてはベアトリーチェに導かれざるをえず、これ靈界の機微にいたりては天啓によるにあらざれば覺得し難きを示せるなり

【愛】淨、三〇・七九以下及び天、一・一〇一—二參照
七六一—七八

【天】月天、地球は宇宙の中心にありて日月星辰の諸天之をめぐる、而して月は最も地球に近ければその天は諸天中最小の天なり、人、地上の萬物にまさるはたゞ天の奧義をさとるによる

九四―九六

慈悲の泉なる聖母マリア、ダンテの大難をあはれみてその罪に對する上帝の怒りをやはらぐ

九七―九九

【ルチーア】聖ルチーア、シラクサ（シケリア島にあり）の殉教者を指せるなるべしといふ、恵みの光なり

一〇〇―一〇二

【ラケール】ラケル。ラバンの女にしてヤコブの妻（創世記、二九・一〇以下及び地、四・六〇）、黙想の象徴

一〇三―一〇五

【神の眞の讚美】『新生』二六・一四（岩波文庫『新生』八七頁

参照) 以下に曰く

かれ (ベアトリーチェ) 過ぐる時多くの人々いひけるは、こは女にあらでいと美しき天使のひとりなり、またほかの人々いひけるは、こは世の常の女にあらず、かくたへなるみわざをあらはし給ふ主は讃むべきかな

【汝のために】『新生』の末 (同上・一二九頁参照) に曰く

この歌ありて後我は異象によりて多くの事を見、わがいまよりもなほふさはしくこの恵まれしもの (ベアトリーチェの事を陳ぶるをうるにいたるまでは再びかれの事をいはじと思ひ定めたり、またわがこゝにいたらんため力を盡して勵みいそしむことはかれのよく知るところなり、かくて萬物に生をさづくるものわが世にあ

るなほ數年なるを許したまはゞ望むらくはわれ未だ女につきて用
ゐられざりし言をかれにつきて用ゐることをえん

一〇六一—一〇八

【河水漲りて】或ひは、河波さわぎたち（詩篇、九三・三一—四參
照）、罪の路を激流にたとへしなり

一一八一—一二〇

【獸】狼

一二二—一二六

【三人】聖母、ルチーア、ベアトリーチエ

一三三—一三五

【淑女】ベアトリーチエ

一四二

【艱き】或ひは、低き

第三曲

地獄門上の銘を讀みて後兩詩人まづ地獄圏外に入りこゝに怯者の
魂を見、進んでアケロンテの川にいたれば舟子カロン亡魂を磨き
船に載せて對岸にむかふ、この時曠野鳴動して電光閃めきダンテ
爲に喪神して地に倒る

一—三

【憂ひの都】地獄全體

四—六

正義の念によりて獄門を建つるの天意定まり、父（威力）子（智慧）聖靈（愛）なる三一の神の働きによりてその意行はる

七—九

【永遠の物】諸天、天使等

一六—一八

【智能の功德】神を見ること

【さきに】地、一・一一四以下

一九—二一

【祕密の世】原文、祕密の物の中

二八—三〇

【旋風吹起る時】異本、風旋風に似たる時

三一—三三

【怖れ】異本、迷ひ

三四—三六

地獄外房の罪人、善を行ふの勇なく悪を行ふの膽なく、卑怯にして意味なき生を送れるもの

三七—三九

ルキフェル（魔王ルチーフエロ）神に背ける時、中立の態度に出でし天使の一群

四〇—四二

【罪ある者】地獄に罰をうくる者等悪を行はざりし天使の一群の
己と同じく罰せらるゝを見て自ら得たりとなさざらんため

四六―四八

【死】魂の消滅

【失明】暗く光なき地獄のさまに神を見るをえざる迷ひの生涯を
含めていへり

【いかなる分際】天上の祝福を享くる者をも地獄圏内に前を受く
るをも妬むなり

四九―五一

【慈悲も正義も】天を逐はれ地獄は拒まる

五八―六〇

【魂】『神曲』中疑問の人物の一なり、されど古來最も有力なる説はこれを以て法王ケレスティヌス五世を指せりとなす。ケレスティヌス五世はピエートロ・ダ・モルロネといひアブルツチの隱者なりしが一二九四年選ばれて法王となり在位五ヶ月の後自らその器に非ざるをしりて辭しボニファキウス（ボニファーチヨ）八世其後をうくるに至れり、一説にはボニファキウス、法王の位を望み謀を以てケレスティヌスに退位の意を固めしめきといふ（地、一九・五五―七参照）

六四―六六

【生けることなき】一生を空しくおくれる

七〇―七二

【川】アケロンテ、冥界を流るゝ諸水の一、屢『アエネイス』
にいつ

八二―八四

【翁】カロン、神話にいつる三途の川の渡守なり

古代神話にみゆる多くの神々は中古なほその存在を保ち寺院に屬する人々之を以て鬼となせり、使徒パウロの言に、異邦人の獻ぐるものは神に獻ぐるにあらず鬼に獻ぐるなり（コリント前、一〇・二〇）とあるもかゝる信仰を生むにいたれる一因なるべし、さればダンテが傳説の神々傳説の人物材料を多く『神曲』中に收むるにいたりしも此等のものゝ存在を認め事件を事實と信ぜしにあらず、たゞその人口に膾炙し當時の思想を具體的にあらはすに最

も適したるによりてなり、古典とダンテの關係を詳しく知らんと欲する人はムーア博士の『ダンテ研究』(Studies in Dante) 第一卷を見よ

九一—九三

フラティチエルリ (Fratelli) 曰く、カロンが此處には他に渡る舟なく舟子なきをしりてかくいへるは生者に對する怒りと嘲りをあらはせるなりと

註釋者多くはこれを以て淨火の路即ちテーヴェレの河口より淨火の山に至る路をいひ、輕き舟は淨、二・四一なる天使の舟を指すものとなせども、生けるダンテに對する怒れるカロンの言としてふさはしからざるに似たり

九四―九六

地、二一・八三―四参照

一〇三―一〇五

神、親、人類、生國、生時、祖先（蒔かれし種）、生みの親（生れし種）

一〇九―一一一

【後るゝ、】或ひは、くつろぐ（船の中にて）

一一二―一一四

『アエネイス』六・三〇九以下に曰く

たとへば秋始めて冷やかなる頃、敷しれぬ木の葉の凋みて林に落つるごとく、または鳥群をなして寒さきびしき年に逐はれ、暖き

陸を求めてわたつみのかなたより來るごとく

【衣】或ひは、獲物

【地にをさむる】異本、地に見る

一一五——一七

【アダモ】アダム、人類の始祖（創世記）

【呼ばるゝ】鷹匠が小鳥若しくは鳥の羽を合せしものを示して放ちやりし鷹を呼戻すこと

一二四——一二六

【願ひ】望なきを知りて刑に服せんとの心

一二七——一二九

【善き】罰のためにくだれるにあらざる

第四曲

我にかへれば詩人すでに第一の地獄の縁にあり、こゝよりウエル
ギリウスに導かれてリムボにくだる、すなはちキリストを知らず
洗禮をうけざりし者の止まるところなり、ダンテこゝに古の詩人
哲人名將烈婦の魂を見、導者とともにさらに進んで第二の地獄に
むかふ

一―三

【雷】第三曲の終りにみえたる電光にともなふ雷

或ひは曰、九行の雷と同じく罪人の叫喚あつまりて雷の如きをいふと、ダンテがいかにしてアケロンテの川を越えしやは知りかたし

七―九

【溪】地獄全體

一三―一五

【盲の世】地、三・四七註參照

一九―二一

【下なる民】リムボ即ち第一の地獄の民

二二―二四

【獄】原語、圈、深淵の縁をめぐる一帯の地にて一大環状をなす

が故にかくいふ

三四―三六

【一部】異本、門

三七―三九

【道】天啓によりキリストの出現を信じて神を拜すること

【我も】ウエルギリウスの詩によりて詩人となり又キリストの徒となれるスタティウスは救はれて福の路に就きウエルギリウス自身は今もリムボにゐて望みなき生をおくる、これ彼は、火をうしろにともして夜行く人の如くわが身に益をえず後の人をさとくす（浄、二二・六七以下）る者なればなり

四〇―四二

【願ひ、望み】神を見るの願ひ、その願ひ成るの望み

四三―四五

【リムボ】（端、縁の義）第一の地獄の名

【懸れる】地、二・五二―四註參照

四六―四八

【信仰】キリスト教の信仰、特にキリスト、地獄に下り給へることありとの信仰

五二―五四

【ほどなき】ウエルギリウスの死せる年乃ち紀元前一九年よりキリストの死乃ち紀元三三年までの間

【權能あるもの】キリスト、聖母と同じく地獄内に名を稱へず

五五―六三

【第一の父】アダム

【アベル】アダムの第二子（創世記四・二以下）

【ノエ】ノア、大洪水を免かれしヘブライ人の族長（創世記五・二八以下）

【モーゼ】モーゼ、舊約時代の偉人にしてヘブライ人の律法を定めし者（出エチプト記二以下）

【神に順へる】民數紀略一二・七に曰く、わが僕モーゼは然らず、彼はわが全家に忠義なる者なり（ヘブル、三・五參照）

或ひは *ubidiente* を五八行のアブラハムに附し、立法者モーゼ、從順なる族長アブラハムと讀む人あり、これアブラハムがその子

イサクを神に捧げんとしたる（創世記第二二章）を特にこゝに指せりとなせしなり

【アブラアム】アブラハム、舊約時代の偉人（創世記一一・二六以下）

【ダヴィイーデ】ダヴィイデ、イスラエルの王、『詩篇』中の詩人（ルツ、四・二二、其他）

【イスラエル】アブラハムの孫なるヤコブ、天使と相撲ひて後この名を得たり（創世記三二・二八）

【その父】アブラハムの子イサク

【その子等】創世記二九・三一以下参照

【ラケール】ラケル、イスラエルの妻

【多くの事】ラケルを妻とせんためその父ラバンの許にとゞまりて十四年間勞役に従へるをいふ（創世記二九・九以下）

六四―六六

【林】古はリムボを大人と小兒との二部に分ちしかどダンテは當時の教に基づきこの區別を廢して之を厚く遇せらるゝ魂と然らざるものとの二にわかれてるなり、こゝにいふ林は即ち後者の群なり
六七―六九

【睡り】この曲の始めダンテが頭の中なる熟睡を破られしところ
異本、響き（雷の）または頂

【半球の闇を】偉人等の止まるところより道理の光いでゝリムボの獄の一半を照せるなり

七九—八一

【聲】註釋者多くはこれをホメロスの聲なりといふ

八五—八七

【劔】その詩多く戦ひを敘したればなり

八八—九〇

【オーメロ】ホメロス、ギリシアの詩聖、『イリアス』の作者

(前九〇〇年頃)

ダンテは零碎なるラテン語の翻譯によりて僅かにその一部をうかがひみしに過ぎず、しかれども彼がこの大詩人を尊重する甚だ大なるを見る(淨、二二・一〇一—二参照)

【オラーチオ】ホラティウス、有名なるラテン詩人(前六五—八

年)、『サチレス』(諷刺の詩)二卷及び其他の著作あり
されどもア博士は Satiro は教の詩人(乃ち詩論の著者として)
の意にて、諷刺家の意にあらず、ダンテがホラティウスの『サチ
レス』を知れることはその著作の中にあらはれずといへり、いかゞ
【オヴィデイオ】オウイデイウス、有名なるラテン詩人(前四三
—後一八年)、その著書の中『メタモルフオセス』最もあらはる、
ダンテがウエルギリウスに次ぎて最も多く引用せる詩人なり
【ルカーノ】ルカヌス、有名なるラテン詩人(三九—六五年)、
カエサルとポムペイウスとの戦ひを叙したる『ファルサリア』の
作者なり

【一の聲】或ひはひとりの聲、七九行にいでし聲をいふ

いとたふとき詩人の讃辭は彼等皆我と同じくうくべきものなり、かゝる詩人にしてはじめてよく詩人をしりかく我をうやまふ、また詩聖等相和して他を讃むるに吝ならざるは善し

九四―九六

【鷲の如く天翔る歌聖】ホメロス

一〇三―一〇八

【光】六七―九行

一〇六―一〇八

【城】智徳世にすぐれし知名の士女にしてしかもキリストを信ずるにいたらざりし者のとゞまるところ

【七重の高壘】註釋者曰、七重の高壘は四徳（思慮、公義、剛氣、節制）三知（聰明、知識、智慧）をあらはし一一〇行の七の門は當時ローマの教育科目たりし三文（文法、修辭、論理）四數（音樂、算術、幾何、天文）をあらはせるなりと

ダンテの七數にかゝる寓意ありしや否やもとより明かに知り難し、或ひは單に七數を好み用ゐし一例に過ぎざるか

【流れ】註釋者曰、これ美しき詞の流れなり、これを地上をゆく如く容易に渡りゆきしは筆路の難は詩人の難しとするとところにあらざればなりと

一一八―一二〇

【緑の※藥】緑草の美しきをいへり

一二一—一二三

【エレットラ】エレクトラ、神話、アトラスの女にしてゼウス

(ジョーヴェ) 神との間にトロイアの建設者なるダルダノスを生
めり

【侶】エレクトラの子孫なるトロイア人

【エツトル】ヘクトル、トロイア王プリアモスの長子、トロイア
戦役の名將

【エーネア】地、一・七三—五註参照

【チエーザレ】ユーリウス・カエサル、最も著名なる古の英傑

(前一〇〇—四四年)

アエネアスはイタリア帝業の基をたてしトロイア人なればローマ

人はその起源をトロイア人と同じうするのみならず中古の人々カ
 エサルを最初の皇帝と信ぜるが故にダンテ彼をヘクトル、アエネ
 アスと並ばしめしなり

一二四―一二六

【カムミルラ】地、一・一〇六―八註参照

【パンタシレア】アレスの女にしてアマゾン（女軍）の王たり、
 トロイアの役にギリシア軍と戦ひて死す

【ラテイーノ】ラテイヌス、ラテイウム人の王、アエネアスの外
 舅

【ラヴィーナ】ラウイニア、ラテイヌスの女、アエネアスの妻

一二七―一三二

【ブルート】ルキウス・ユウニウス・ブルートウス、前六世紀の人、ローマ最後の王タルクイニウス・スペルブスを逐ひローマ共和國を建設す

【ルクレーチア】ルクレティア、ブルートウスと共にローマ共和國の民政官となれるコルラティヌスの妻なり、タルクイニウスの子セスト（セクストウス）の辱しむるところとなりて死す

【ユーリア】カエサルの女、ポムпейウスの妻

【マルチア】マルキウス・フィリップスの女にして初めカートン（カトー・ウテイケンシス）の妻たりし者

【コルニリア】スキピオ・アフリカヌスの女、テイベリウス・セムプロニウス・グラックスの妻にてローマ施政の改革に殉ぜる

有名なるグラックス兄弟の母なり

【サラデーノ】エチプト及びシリアのソルダン、寛仁大度の明君として世に知らる（一一三七—一九三年）

【智者の師】アリストテレス、（アリストーテレ）有名なるギリシアの哲學者、中古の人これを以て哲人中の第一となせり、ダンテはラテン語譯によりてその著書に精通し引用せること甚だ多し（前三八四—三二二年）

一三三—一三五

【ソクラテ】ソクラテス、有名なるギリシアの哲學者（前四七〇—三九九年）

【プラートネ】プラトン、有名なるギリシアの哲學者（前四二七

—三四七年)

一三六一—一三八

【デモクリート】デモクリトス、ギリシアの哲學者、その師レウキッボスの説に基づきて原子論を敷衍せり（前三六一年死）

デモクリトスを原子偶然に結合して世界成ると説けりといへるはキケロの著書に據れるなり

【ディオージェネス】ディオゲネス、有名なるキュニコス派の哲學者、小アジアに生れてギリシアに住めり（前三二三年死）

【アナクサーゴラ】アナクサゴラス、ギリシアの哲學者（前四二八年死）

【タール】タレス、ギリシア七賢の一、水原説を以て名高し（前

六世紀)

【エムペドクレス】シケリアの哲學者（前五世紀）

【エラクリート】ヘラクレイトス、ギリシアの哲學者（前六世紀）

【ツエノネ】ゼノン、ギリシアの哲學者、ストア學派を起せる者

（前三〇〇年頃）

一三九—一四四

【ディオスコリデーデ】ディオスコリデス、ギリシアの名醫、藥法に關する著者五卷ありてその中に草木の特性を論じたりといふ

（一世紀）

【オルフェオ】オルフェウス、ギリシア神話中の詩人樂人

【ツルリオ】マルクス・ツルリウス・キケロ、ローマの哲人能辯

家、ダンテ善くその著作に通ぜり（前四三年死）

【リーノ】リノス、ギリシア神話中の詩人伶人

異本、リヴィウス（ローマの史家）

【セネカ】ルキウス・アンナエウス・セネカ、ローマの哲學者、

ダンテ善くその著作に通ぜり（六五年死）

【道徳を説ける】文人なりしその父セネカと區別せるなり

【エウクリーデ】エウクレイデス、有名なるアレクサンドレイア

の數學者、『幾何原理』十三卷を著はす（前三〇〇年頃）

【トロメオ】クラウディウス・プトレマイオス、有名なるアレク

サンドレイアの天文地理學者、ダンテ時代の天文學多く之に據れ

り（二世紀）

【イポクラテ】ヒツポクラテス、ギリシアの名醫（前四世紀頃）

【アヴィチエンナ】アラビアの名醫（一〇三七年死）

【ガリエーノ】クラウディウス・ガレヌス、ギリシアの名醫（二〇一年死）

【アヴェルロイス】アラビアの名醫、哲學者、アリストテレスの註疏を大成せるを以て廣く世に知らるゝにいたれり（一一二六—

一一九八年）

一四八一—一五〇〇

【二者】ダンテと導者

或ひは、分れて二（乃ち二組）となれりと解する人あり、事同じ

【震ひゆらめく空】第二の獄の

第五曲

やがて第二の地獄にいたればこゝには邪淫の罪を犯せる多くのもの、狂風に漂はされて暗空の中をめぐるあり、その一なるフランチェスカ・ダ・リミニの魂ダンテに招かれて戀人パオロと共にこれに近づきおのが悲哀なる戀物語をなす

一—三

【少なく】地獄は一大漏斗状をなすが故に下るに従つて地狭し

四—六

【ミノス】地獄の法官

神話に曰、ミノスはゼウスとエウロペの間の子なりクレタ島の君となりて賢明の聞え高し、死後ラダマントス及びアイアコスと共に冥界の法官となると

【入る者あれば】或ひは、入口にて

七―九

【幸なく】マタイ、二六・二四に曰く、その人生れざりしならばかへつて幸なりしならん

一〇―一二

ミノス、刑を宣告するにあたり尾にて身を巻きその巻きたる回数によりて送るべき獄を示すなり、地、二七・一二

四一六に彼グイードを第八の地獄に送らんため八度尾をもておのが背を巻きしこといづ

一三—一五

【投げらる】地、二一・三四—六には鬼によりて獄に送らるゝ例もあれど多くは罪人のみ各自の刑場におちゆくに似たり

一九—二一

ミノスはダンテと共にあるものの鬼にあらずしてウエルギリウスなるを見、ダンテを威嚇してその導者に對する信念を奪はんとせしなり

【入口ひろき】マタイ、七・一三に曰く、滅亡にいたる路は廣し

三一—三三

心に檢束を加へず情の翼に駕してその行方に任せし生前のさまを
あらはすなり

三四―三六

ruina (狂風の吹きまく勢ひ)、異説或ひはこれをキリスト磔殺
の當時に起れる岩の崩れ(地、一二・三一以下及び二一・一一二
以下)とし或ひはこれを第二の地獄の入口とす

四六―五〇

【暴風】原語、なやむるもの、或ひは争ひ

五二―五四

【語】語を異にする國民

五五―五七

己が非倫の行爲を蔽はんため不正の結婚を諸氏にゆるせる事

五八一六〇

【セミラミス】アツシリアの女王、前十四世紀頃の者なりといはる

【書】中古廣く行はれし五世紀の史家パウルス・オロシウスの歴史、乃ちダンテの引用書目の主なるものゝ一なり

【ニーノ】ニーヌス。オロシウス曰く、彼ニーノ（ニーヌス）死せる時その妻セミラミス位を繼げり（オロシウス『歴史』第一卷四の四）

【ソルダンの治むる地】エチプトなるバビロニア（昔のカイロ）セミラミスはアツシリアの女王なればこゝにソルダンの治むる地

云々といへるはエウフラテス河畔のバビロニアとナイル河畔のバビロニアとを混同せるダンテの誤りか、或ひは或る註釋者のいへる如くニーヌスはその存命中にエジプトの一部を征服してこれをアッシリアの領地に加へしことありとの傳説によれるものか明かならず

六一―六三

【操を破れる者】デイド、アフリカ北海岸なるカルタゴの女王、夫死して後こゝに漂着せるアエネアスを慕ひ、アエネアス、イタリアに向ふに及びて失望のあまり自刃して死す、事『アエネイス』
第四卷にくはし

【クレオパトラース】クレオパトラ、有名なるエジプトの女王、

カエサル及びアントニウスを悩まし嬌名甚高し、オクタウィア又ス權を執るに及び恥をローマに晒すをおそれ毒蛇の毒をうけて死す（前六九―三〇年）

六四―六六

【エレーナ】ヘレネ、スパルタ王メネラオスの妻、パリスに誘はれてトロイアに赴き、爲に十年に亙れるトロイア戦役を惹起すにいたれるもの（地、一・七三―五註参照）

【アキルレ】アキレウス、トロイア戦役の猛將

アキレウスはホメロスに歌はれしギリシア方の名將なり、傳説に曰、トロイア戦役の際、彼敵將プリアモスの女ポリュクセナ（地、三〇・一七）を慕ひ武装を解きてアポロンの宮殿に入りこゝにて

パリスの殺すところとなれりと

六七―六九

【パリス】ヘレネを奪へるもの（六四―六行註参照）

【トリスターノ】トリスタン、中古ひろく行はれし英王アーサー物語にいつ、叔父マークの妻を戀ひ、マークの殺すところとなる
七三―七五

【かのふたり】パオロ・マラテスタ及びフランチェスカ・ダ・リミニ（ポレンタ）

今當時の記録によりてこの悲劇の大要をあぐれば左の如し

フランチェスカはラヴェンナの君なるグイード・ダ・ポレンタ

（老グイード）の女なり、當時ポレンタ家とリミニなるマラテス

夕家の間に葛藤絶ゆることなかりしが仲裁者いでて和議成るに及び、いよ／＼和親を固うせんため老グイードはその女フランチェスカをマラテスタ・ダ・ヴェルルツキオ（地、二七・四六―八註参照）の子ジャンチオツトに嫁するを許せり、このジャンチオツトは武勇の聞えありしものなれども風姿粗野にして且つ不具なりければグイード、人の諫めに従ひその弟パオロを兄に代りてポレンタ家に來らしむ、フランチェスカはパオロの若くして美しきを見これをその夫となるべき人なりと聞き伴はれてリミニにいたれり

フランチェスカ、リミニにいたりこゝにはじめて己が欺かれしを知りて悔ゆれどもおよばず、されどパオロに對する戀々の情はか

へつてこの事あるによりてまされり、會 ジヤンチオツト公務のため出で、家に在らず、兩人相會して情をかたる、ジヤンチオツト下人の告ぐるところによりてこれを知り不意にひきかへして彼等を殺せり（一二八五年頃の事といふ）

七九―八一

【彼】神、(Alfi)は古く大能ある者をあらはすに用ひし不定代

名詞)、地獄内にては罪人にをかひて神の名を稱ふることなし

八二―八四

【願ひ】巢に歸らんとの

【たかめ】異本、ひらき

八五―八七

【デイド】六一—三行註参照

八八—九〇

以下一〇七行までフランチェスカの詞

【暗闇の】*Perso*. ダンテの『コンヴィヴィオ』第四卷二〇の一四

—五に曰く、ペルソは紫と黒とまじりてしかも黒勝てる色なり

九一—三

ヘブライの古諺に曰、祈りの門は閉さるとも涙の門は閉されず

九七—九

【邑】ラヴェンナ、アドリアティコ海濱にあり、ダンテ時代にはこの町今よりもなほ海に近かりきといふ

【ポー】イタリア最大の川、ラヴェンナの北にあたりてアドリア

テイコ海に入る

【従者ら】多くの支流

一〇〇—一〇八

三聯みな Amor (戀) なる一語にはじまる

【そのさま】ジャンチオットの刃にかゝりてこの身の魂より奪はれしさま

ムーア博士の引用せるフォスコロの説にてはこのさきに三の條項あり、乃ち、(一) 死を招くにいたれる事情 (二) 死の急にして悔ゆるに暇なかりし事 (三) 殺害てふ蠻的行爲

【今猶】この戀今猶わが心を離れじ

【カイーナ】アダムの子にして弟アベルを殺せるもの (創世記四

・八)、第九の地獄第一の圓はカインに因みてカイーナの名を得たる處なればこの獄に下り來るをカイーナ待つといへり、ジャンチオットの死せるは一三〇四年にて『神曲』の時なる一三〇〇年には猶存命せるなり

一二一—一二三

【汝の師】ウエルギリウス、古註曰、ウエルギリウスは願ひありてしかも望みなきリムボに止まり生時の光榮を回顧し自己の經驗によりてかゝる苦患を味ひしると

一二七—一二九

【ランチャロット】ランスロット、『アーサー物語』(六七—九行註参照)にみゆる圓卓武士の一人にてアーサーの妻ギニヴァー

を慕へるもの

【おそるゝこと】戀をそれと知らざりしさきなれば本讀の危険なるべきを思はざりしなり

一三三―一三五

【微笑】ゑみを湛へし王妃の口

一三六―一三八

【ガレオット】王妃ギニヴァーとランスロットの不義の取持をなせるもの、昔のガレオットの如くこの物語と作者とは我等を罪に陥らしめきとの意

一三九―一四一

【一の魂】フランチェスカ

第六曲

第三の地獄は飲食の慾に耽りし者の罰せらるゝ處なり、鬼チエルベロ雨雪と共に彼等を苛責す、こゝにフィレンツエのチャツコなる者ありダンテを認めて之を呼び、近くその郷土に起るべき黒白兩黨の争ひをかたる

一—三

ダンテが失神せる間に第二の地獄より第三の地獄におくられしことききにアケロンテの川を越えし場合と同じ

【所縁】パオロはフランチェスカの義弟にあたる

七一九

【法と質】雨の落ちる度及び雨の成立に變化なく、
 詛ひの雨間斷なく降りくだるをいふ

一三一一五

【チエルベロ】ケルベロス、神話に出づ、地獄の門を守る怪犬、

頭三ありて尾は蛇なり

一六一一八

【噛み】異本、皮剥ぎ

二二一二四

【蟲】姿の忌むべく怒るべきをいへるなり、他の生物を蟲とよべ

ること聖書に例多し（イザヤ、四一・一四、詩篇二二・六等参照）

三四―三六

あゝ姿のほか凡て空しき魂よ（淨、二・七九）

されど地、三二にはダンテがボツカといへる罪人の頭を蹴りまたその毛髪を抜きしことあり（七八行及び一〇三行以下）

三七―三九

【ひとり】チャツコ、フィレンツエの人にてボツカツチヨが食をたしなむこと何人にも劣らじといへるものなり

四〇―四二

【わが毀たれぬ】チャツコはまだ死なざるさきにダンテ生れしをいふ（或曰、チャツコは一二八六年に死すと）

四九―五一

【汝の邑】フィレンツェ、黑白兩黨の争ひ皆權勢の嫉みより起れり

五二―五四

【チャツコ】或人はこれを食を貪るを嘲りて呼べる綽名（豚の義）なりといひ或人はジャコモの略名といひ或人は普通の家名にてフィレンツェには今もチャツキ家なるものありといへり

五八―六三

【もし知らば】ダンテは既に魂のよく未來を知るを聞きゐたればこの問を起せるなり（地、二・二五―七註参照）

【分れし邑】フィレンツェ

一二一五年この方フイレンツエはグエルファイ、ギベルリニの兩黨に分る、十三世紀の末グエルファイ黨、獨り權勢を得て爭亂一時鎮靜に歸せしもピストイアに生ぜし黒白兩黨の軋轢ひいて濁波をフイレンツエに揚げチエルキ、ドナーテイ兩家の確執となり次第にその範圍をひろくし一三〇〇年の始めにいたりて遂に激烈なる黒白の争ひをこゝに見るにいたれるなり

六四—六六

【長き争ひ】チエルキ、ドナーテイ兩家の互に敵視せるは一二八〇年にはじまれり、前者は白黨を後者は黒黨を率ゆ

【鄙の徒黨】ビアンキ（白黨）

チエルキ家はヴァル・デイ・シエヴェといふ片田舎より來れる粗

野の民なりき

【敵を逐ふべし】一三〇一年五月ネーリ（黒黨）フィレンツエの市外に逐はる

六七―六九

【三年の間】原文、三の日輪の間に（地、二九・一〇五參照）すなはちチャツコの語れる時より三年の間に

白黨の逐はるゝにいたりしは一三〇二年の四月四日にしてチャツコの豫言は一三〇〇年の四月八日なれば誠はこの事二年の間に起れるなり、これにつきスカルタッチニ（G. A. Scartazini）は曰く、ダンテのかく三年といへるは（一）三の數を好みて用ゐしによるか（二）歴史傳記と異なり正確なる日子を豫言に附するをふさは

しからずと思へるによるか（三）白黨が最後の迫害を受けしは一三〇二年の十月なればこれに基づきてかくしるせるか云々

【操縦あやなすもの】法王ボニファキウス八世、當時未だあらはに黒黨を助くるに至らず黒白兩黨の間に立ちて巧みにこれをあやつりフランスのシャルル・ド・ヴァロア（フランス王フィリップ四世の弟）のフィレンツェに至るを待てり

七〇―七二

【憤り】或ひは恥

七三―七五

【義者二人】何人を指せるや不明なり

さきに、いま操縦あやなすものといひこゝに義者二人ありといふ、チャ

ツコは未来を知るのみならずまたよく現在をも知るに似たり（地、一〇・一〇〇—一〇二註参照）

七九—八一

【フアーリナータ】（地、一〇・三一—三註参照）

【テツギアイオ】（地、一六・四〇—四二註参照）

【ヤーコポ・ルステイクツチ】（地、一六・四三—四五註参照）

【アルリーゴ】アルリーゴの事この後に見えず、註者多くは之をもてブオンデルモンテの殺害に與れるものゝ一人なるべしといふ（地、二八・一〇六—八註参照）

【モスカ】（地、二八・一〇六—八註参照）

以上皆當時世に知られしフィレンツェ人

【善を行ふ】市政に關する（地、一六・三一―一八及び五八―六〇
 參照）

八八―九〇

一切の望みなき地獄の魂その慰藉をたゞ知人の記憶に求むるのみ
 （地、二七―六四―六註參照）

九一―九三

【盲】汚泥の上につつむき伏して見ることさえざる暴食者

九四―九六

【喇叭ひゞくまで】世界審判の日來るまで（マタイ、二四・三一）

【仇なる權能】諸惡の敵なるキリスト、人類の罪を定めんために
 來るなり

九七―九九

審判の日いたれば魂ヨサファツトの溪にゆきて再び肉體の衣をうけ永遠きはみなき刑罰の宣言をきくべし（地、一〇・一一―二及び三の一〇三以下参照）

一〇六―一〇八

【汝の教】アリストテレスの教

一〇九―一一一

【その後】天使の喇叭ひゞきし後即ち最後の審判の後

靈肉相合して人はじめて全し、されど此等の罪人は魂すでに全からねばたとひ肉を得るも眞の完全にいたれりといふをえす、たゞ肉を離れし時に比すれば完全に近きが故に審判の後の苦しみは従

つて前よりも深し

一一五

【プルート】ハデス、神話にいつる富の神なり、財寶の慾は世界人類の平和を亂し諸惡の源となるものなれば大敵といへり

第七曲

兩詩人第四の地獄の入口にいたりてプルートを見、のち獄内に進む、この獄二に分たれ一には貪り貯へし者一には妄りに費せる者罰せらる、導者は命運を論じつゝダンテと共に此處を過ぎて第五

の地獄にくだり忿怒の罪を犯せる者ステイージエの沼泥濘の中に
ひたりて相争ふをみる

一—三

【パペ・サタン・パペ・サタン・アレツペ】 [Pape` Sata`n, Pape`
Sata`n aleppe i] 怒れるプルートの詞、義不明

七—九

【狼】 貪りをあらはすこと地、一・四九と同じ

一〇—一二

【ミケーレ】 ミカエル、天使の長（ユダ、九）、魔軍と戦ひこれ
に勝つ（黙示録一二・七—九）

【非倫】 strupo（姦淫、強姦）、ルキフェル一味の魔軍が慢心を

起して神に背くにいたれること

神と人との關係を男女の關係によりてあらはせること聖書に例多し（詩篇、七三・二七、イザヤ、一・二二等）

一六一—一八

【第四の坎】第四の地獄

一九—二〇

【誰ぞ】汝正義にあらずして誰ぞ

二二—二四

【カリツヂ】カリブデイス。ホメロス、ウエルギリウス、オウイ
 デイウス等の詩に見えて名高き渦卷、メツシナ海峽（イタリア、
 シケリア間）にあり、イオニオ海の潮とチレニア海の潮（逆流）

とうちあひて波荒く古より航海の難所たり

【リツダ】大勢にて舞ひめぐる舞踏の一種

二八一—三〇

第四の地獄には貪る者と費す者と同一の罰を受く、圈二に等分せられその一乃ち兩詩人の左には貪る者（三八—九行）同じく右には費す者あり、罪人等胸にて重荷をまろばしつゝ各 その半圈を來往し半圈の兩端なる分岐點にいたれば彼此こゝにうちあひ、これと同時に費す者は貪る者にむかひて何ぞ貪り貯ふるやと罵り貪る者は費す者にむかひて何ぞ漫りに費すやと難じ各 踵をめぐらして一端にむかひかくして限りなくその觸をくりかへすなり

三一—三三

【歌】何ぞ溜むるや云々なる罵詈の叫び

三七—三九

【僧】cherici 僧侶たると俗僧たるとを問はずすべて寺院に屬する者をいふ

四〇—四二

【ほどよく】一方は費すべきに費さず一方は費すべからざるに費せるなり

四六—四八

【カルデイナレ】寺院の高官、七十人相集まりてローマの聖團を組織し法王選舉の權を有す、當時寺院に屬するものゝ貪婪なること俗衆に比して更に甚しきをいへるなり

五五―五七

【二の】半圈の兩端なる

【手を閉ぢ】固く握りて放たざる守錢奴のさま

【髪を短くし】浪費者の姿、イタリアの諺に *dissipato fino a' capelli*

「(髪の毛までも遣ひ果す)といふことありと

五八―六〇

【美しき世】天堂

【いはじ】汝のしたしく目撃するところなれば

六一―三

【戲】或ひは、力、空なる事、欺、と解する人あり

七〇―七二

【わがいふところ】命運に關するダンテの所説は多くボエテイウス（天、一〇・一二四—六註參照）の著書に據れり

七三—七八

神は日月及びその他の諸天を造りたまひ、これと同時に此等諸天の運行を司るもの即ち各種の天使をも造りたまへり、是に於てか九種の天使九個の天にわかれて輝きいづれもその神より附與せられたる光の割合に應じて天の全體を照すなり、これと等しく神は世界に命運なるものを立て、その光輝となるべきもの即ち財産、地位、名譽等を司らしめたまふ

七九—八一

【血】血統

八五―八七

【神々】天球の運行を司る靈體乃ち九種の天使、これらの天使の諸天を司るに似たり

八八―九〇

【流轉】命運のめぐり來るにあひて世の幸をうくる人、相ついで出づ

九一―九三

【十字架につけ】責め誹り

九四―九六

【はじめて造られしもの】天使

九七―九九

【進みしとき】地、一・一三六、星の傾くは子午線を過ぎ西にむかひて降るなり、時夜半を過ぐ乃ち一三〇〇年四月九日聖土曜日の初めなり

一〇三―一〇五

【ペルソ】地、五・八八―九〇註参照

一〇六―一〇八

【ステイージェエ】デイーテ（地、八・六八）を繞れる沼

ステイージェエは神話にいづる地獄の川の一なり、神々この川によりて誓ひを立てしこと古詩に散見す

一一八―一二〇

泥水の下に沈める者は忿怒の罪人の一種にして邪氣を宿し怨みを

いだき沈鬱陰險なる徒なり

一二一—一二三

【空氣】地上の

【無精の】accidioso 心のひきたゝぬ、美しき日の光をうくるも
なほ樂しまず快き外界の響きに應ぜざる

一二四—一二六

【聖歌】反語、歎聲

一二七—一二九

坂（第四と第五の地獄の間の）と沼との間の路をあゆみてこの地
獄の大部分をへめぐり

第八曲

彼等進んでデイーテの城樓の下にいたりフレギユアスの船に乗りてステイージェの沼に浮びこゝにフィリツポ・アルゼンテイなる者にあふ、やがて岸につきてデイーテの門にむかふに魔軍群集して之を固め彼等の内に入るを許さず

一―三

【續いて】第七曲の物語をうけて

四―六

【焰】二の烽火は魂の來れるを示す相圖にて他の一の烽火はこれ

に應へこの相圖の通じたるをあらはす

七一九

【全智の海】ウエルギリウス

一〇一—一二

【來らんとすること】相圖の結果として

一六一—一八

【舟子】フレギュアス、神話に曰。フレギュアスはアレスの子なり。その女コロニスがあポロンに辱められしを憤りデルポイなるこの神の宮殿に火を放てりと、ダンテがこれに第五の地獄をまもらしめしもその愛みによりてなりされどフレギュアスの舟子なりしことはダンテ以前の記録に見えずといふ

【魂】原語に單數を用ゐしにつきては古註或ひは沼を渡る魂多からねば口ぐせとなりてかくいへるなりといひ或ひはウエルギリウスとダンテとを別々に指していへるなりともいふ

二八一—三〇

【常よりも】原文、ほかの者等を載する時よりも（肉體の重みあれば）、思ふにフレギュアスの來れる時ウエルギリウスの載れる時のさまを見、一般をおしはかりてかくいへるなるべし

三一—三三

【死の】水の淀みて動かざる

【一人】フィリツポ・アルゼンテイ、フィレンツエの貴族アーヂマリ家の者にてボツカツチヨが怒り易きこと他に類を見ずといへ

る者

【時いたらざるに】いまだ死なざるに（八四行参照）

四〇―四二

ダンテを害せんとて手を伸べしなり

【犬共】怒り易き罪人等

六一―六三

【おのれを】怒りのあまり我とわが身を噛めるなり（地、二七・

一二六参照）

六七―六九

【ディーテ】神話、プルート（魔王即ち『神曲』中のルチーフエ

ロ）の異名、ディーテの都はディーテの城壁より地心に至るまで

の地獄全體を含む、ダンテが魔王ルキフェル（ルチーフエロ）を
 デイーテと呼べる例は地、一一・六五、一二・三九、三四・二〇
 に見えたり

【重き】罪も罰も（地、一一・七九以下参照）

七〇―七二

【伽藍】meschite（マホメツト教徒の禮拜所）、デイーテの城樓
 をかくいへり

七六―七八

【固むる】或ひは、繞れる

八二―八七

【天より降れる】ルキフェルと共に神に背きて天を逐はれしもの

【門上】 闕の上の意に解する人あり

九一―九三

【狂へる】 地、二・三四―五參照

九四―九六

【世に】 原語、こゝに

九七―一〇二

【七度あまり】 思ふに地、二二・一〇三に見ゆるとおなじくあまたゝびの意に用ゐしなるべし、七なる數を不定數若しくは完全數として用ゐしこと聖書中に例多し（詩篇、一二・六、箴言、二四・一六等）

一〇三―一〇五

【彼】神

一〇九―一一一

【然と否】ウエルギリウスの歸り來るべきや否やを判じえざりし
なり

一一八―一二〇

【憂ひの家】デイーテの邑

一二四―一二六

【門】地獄の門、傳説に曰ふ、キリスト、リムボに降れる時（地、
四・五二以下）惡鬼等地獄の門を閉ぢてこれにさからひしかば打
碎きて内に入りその後この門再び閉さるゝことなしと

一二七―一二九

【死の】永久に滅亡を宣言する

【ひとりのもの】天より遣はされしもの（地、九・八〇註参照）

第九曲

あまつさへフリーエあらはれいで、彼等を威嚇す、彼等すなはち
 天の冥助を待ち遂にこれによりて門内に入りこゝに異端邪説の徒
 を葬れる多くの熱火の墓を見る

一―三

ウエルギリウスの事成らずして歸り來る姿を見、おそれのあまり

ダンテの顔蒼白となりたれば導者はその恐れを去らしめんため己が怒りの色を外にあらはさじとつとめしなり

【常ならぬ色】怒りの色（地、八―一二―三参照）

七―九

【彼なりき】ベアトリーチエを指せるなるべし（地、二・七〇以下参照）

【一者】天より遣はされしもの

一〇―一二

先にはされどもしといひて疑ひをあらはし後には助けを約せる者のことをいひて望みをあらはせり

一六―一八

【望みを絶たれし】地、四・四〇―四二

二二―二四

【エリトン】テツサリアの巫女、大ポムペイウスの子セクスツスの請ひによりファルサーリアの戦ひ（ポムペイウスとカエサルとの）を語らしめんため一兵士の魂を呼び起せることルカヌスの『ファルサーリア』（六・五〇七以下）にいつ

二五―二七

【ジュダの獄】ジュデツカ（地、三四・一一七）、第九の地獄にあり、イスカリオテのユダの罰せらるゝところ

二八―三〇

【天】プリーモ・モービレとて他の諸天を回轉せしむる第九の天

なり（天、二八・七〇―七一参照）

三一―三三

【怒りを見ずして】尋常にては

三七―三九

【フリーエ】エリニュエス、神話にいつる三女神、仇を報い罪ある者を罰す

四〇―四二

【チエラスト】頭に二個の黒き角ある小蛇

異本、小蛇とチエラスト

四三―四五

【侍婢等】フリーエ傳説に曰、フリーエは魔王ハデスの妻ペルセ

ポネの侍婢なりと、かぎりなき歎きは、かぎりなき歎きの國乃ち地獄なり

【エーリネ】エリニユエス、フリーエのギリシア名

五二―五四

【メヅーサ】神話ゴルゴン（三女怪）の一、その頭を見るもの直ちに化して石となるといふ

【テゼオ】テセウス、神話に曰、テセウスはアテナイ王アイゲウスの子なり、その友ピリトウスを助けペルセフォネを奪はんとて地獄に下りハデスの捕ふるところとなる、後エルクレ（ヘラクレス）地獄にゆきて之を救へりとテセウスに十分の怨みをむくいしならば世の人おそれて再び地獄に入來る者あるまじかりしを

五五―五七

【ゴルゴン】メツ―サの頭

六一―六三

メツ―サの譬喩的解説につきてはダンテの眞意明かならず古來或ひはこれを異端邪説の象徴とし、或ひは色慾、貪婪、恐怖、嫉妬、疑惑、絶望等の表示とし異説甚だ多し、されどおもふにデー―テの城は放縱の罪乃ち情を制する能はずして犯せる罪と邪惡乃ち惡心衷に萌して人を害するにいたりし罪とをわかつ境にあるものなれば、メツ―サを邪惡の代表と見做す説採るべきに似たり、その頭を見る人化石するはデー―テ城外の罪と異なり惡念心に入りて習性的色彩を帯びあたかも惡性の痼疾の醫藥に於ける如く解脱の

望みさらになきを示せり（詳しくはスカルタツチニの註にいづ、スカルタツチニはエリニユエスを本心の苦しみ乃ち自責としメツ―サを疑念と解せり）

六七―七十二

【反する熱】異なる地方の熱

七九―八一

【一者】天使、兩詩人をたすけて門内に入らしめんため特に天よりくだれるもの

【魂】怒る者の魂

【徒歩にてステイ―ジエを渡るに】或ひは、ステイ―ジエの渡りをわたるに

九七―九九

【チエルベロ】ケルベロス、（地、六・一三）、神話に曰、ヘラクレス天の命によりて地獄にくだれる時ケルベロスこれにさからひたれば鎖をもてこれをいましめ地獄門外に引出せりと

【毛なき】鎖のあと

一〇〇―一〇五

【ほかの思ひ】天に歸るを願ふ心

一一二―一一五

【アルリ】アルル。ローダーノ（フランスのローン川）河畔の町、河水わかるゝにあたり停滞して一湖をなす、名高き墓地ありしところ、傳説に曰、シャルルマーニュ（カルロ・マーニオ）こゝに

サラセン人と戦ひキリスト教徒の死者甚だ多くして葬るに暇なかりしが神恩これに臨み一夜にして無数の墳墓現出せりと

【ポーラ】イストリア（現今オーストリア領）の南端にある町、昔ローマの墓地ありし處、カルナール灣はアドリアティコ海の一部にてイストリアの岸を洗ふ

一二七—一二九

【邪宗】こゝに *eresia* といへるは寺院の教理に反して靈魂の不滅キリストの神性等な認めざりし者の謂なり

【荷】罪人、一の墓の中に多くの罪人を葬れるなり

一三〇—一三二

【右】詩人等地獄をくだるに常に道を左にとれり、これ罪の道は

左より左にむかひ、悪より悪に進むを示せるなり（地、一四・一二六参照）しかるにこれに反し道を右にとれること二回ありその一はこの處、他は地、一七・三一にいつ、この二回の例外につきてはダンテの眞意知りがたし

第十曲

詩人等第六の地獄の中エピクロス（エピクロ）及びその一派の者の葬らるゝところにいたりし時ダンテはこゝにファーンナータ及びカヴァルカンテとかたり前者の言によりてその身のフィレンツ

エより逐はるべきを知る

一—三

【かくれたる】異本、狭き

一〇—一二

【ヨサファアット】エルサレムに近き溪の名、最後の審判の行はるゝところ（ヨエル書三・二及び一二）

一三—一五

【エピクロ】エピクロス、有名なるギリシアの哲學者、エピクロス學派を起せるもの（前三四—二七〇年）

一六—一八

【願ひ】フィレンツエの者を見んと願ひなるべし

一九―二一

【今のみならじ】多言を慎しむの意を起さしめしは今のみにあらず（地、三・七六―八一参照）

二二―二四

【トスカーナ】ダンテの郷國、フィレンツェの中にあり

二五―二七

【郷土】フィレンツェ

【虐げし】フィレンツェのグエルフィ黨を悩まし（三一―三行註参照）

三一―三三

【ファールリナータ】フィレンツェなるウベルティ家の出、一二三

九年ギベルリニ黨の首領となる、一二五八年その徒黨と共に郷土を逐はれてシエーナにいたりこゝに同志を糾合し同六〇年九月グエルファイ黨とモンタペルテイ（八五―七行註參照）に戦ひ大いにこれを敗る（一二六四年死）

三七―三九

【明かならしめよ】政敵に對して言語の明截的確なるべきを注意せしなり

四三―四五

【従はん】ウエルギリウスの注意に背かざらんため

【眉をあげ】過去の記憶を呼起すさま

四六―四八

【かれら】ダンテの父祖は皆グエルファイ黨なりければ

【兩度】一二四八年及び一二六〇年

四九―五一

【前にも後にも】一二五一年及び一二六六年

【術】フイレンツエに歸ること、一二六六年ベネヴェントの戦ひの後グエルファイ黨再びフイレンツエに歸りギベルリニ黨はこゝより逐はる、一二八〇年にいたりて兩黨調停の事あり、されどウベルテイ一家の者はなほその郷土に入るを許されざりき

五二―五四 或ひは、この時頤まであらはなりし一の魂これとならびてあらはれいでたり

【口】墓の

【一の魂】カヴァルカンテ・カヴァルカンテイ、グエルファイ黨に屬せり、フアーリナータと同じく來世の存在を信ぜざりきといふ
五八一六〇

【わが兒】グイード・カヴァルカンテイ、ダンテが『新生』三・九八一九にわが第一の友といへるもの、詩を書くしまた哲學に通ぜり、十三世紀の半フイレンツェに生る、一三〇〇年黒白兩黨の争ひこゝに起れる時故ありて白黨に與し、これがためにフイレンツェの西北なるサルツアーナに幽せられ病を得、郷に歸りて死す（同年八月）、グイードの妻はフアーリナータの女なり
カヴァルカンテはわが兒グイードの才ダンテに劣るまじきとまたそのダンテの親しき友なるをおもひてかくいへるなり

六一—六三

【悔りし】義不明、ドヴィデイオ (D. Ovidio) は、は『アエネイス』の著者としてのウエルギリウスに對するグイードの態度をいへるに外ならずとし兩者の趣味詩風の相違を論じかつグイードのエピクロス派的傾向若しこの問題に聯關せば『アエネイス』にははれし宗教思想來世の状態の記述等この傾向と相反するの謂なるべしといへり

六四—六六 その言によりて友の父なるを知りその罰によりてエピクロスの末流なるを知る

六七—六九 悔るといはずして悔りしといひ過去の動詞を用ゐたるをあやしめるなり

【光】日の

七三―七五

【請ひて】二二―四行

七六―七八

【床】燃ゆる墓

七九―八一

フアーリナータの豫言なり、曰く、汝は今より五十ヶ月以内に郷里に歸ることのいかばかり難きやを自ら味ひ知るなるべしと

【女王】魔王プルートの妻ペルセポネ（地、九・四三―五註参照）
神話によりて月と見做せるなり

八二―八四

【願はくは】物を請ふにあたりて請はるゝ人の幸を希ふ意を陳ぶ、以下この例甚だ多し

【わが宗族】四九―五一行註参照

八五―八七

【アルビア】トスカーナ州の川の名、有名なるモンタペルティの戦場（シエーナの東南六十餘哩）はこの河畔にあり、一二六〇年九月四日追放されしフィレンツエのギベルリニ黨シエーナ人と合してフィレンツエのグエルファイ黨と戦ひ大いに之を敗る（三一―三三行註参照）

【祈りを】再び政權をフィレンツエにえしグエルファイ黨はモンタペルティの殺戮を惡むのあまりかくウベルティ家に不利なる法令

を出してその郷土にかへるをゆるさず

【神宮】註釋者曰ふ、當時聖ジヨヴァンニの寺院をフィレンツエ高官の議場にあてたればこれに因みて法令を祈りといへるなりと
八八―九〇

【かの事】モンタペルテイの戦ひ

九一―九三

【處】エムポリー、フィレンツエの西十九哩なるアルノ河畔の町、モンタペルテイの戦ひの後ギペルリニ黨の人々この處に相會し後日の累を免かれんためフィレンツエ破壊の事を議せしがフアーリナーター一人の劇烈なる反對ありて議遂に成るに至らざりきといふ

九七―九九

汝等は未來の事を知りてしかも現在の事に暗きに似たり、フアーリナータはダンテの未來を豫知しカヴァルカンテはわが兒の生死を知らず

一〇〇—一〇二

【光備はらざる】遠視眼の

こゝに我等といへるは地獄全體の罪人を指せるか第六の地獄の罪人のみを指せるか明かならざるに似たれども註釋者多くは之をもて全地獄の罪人と解せり、地、二七・二五以下にグイード・ダ・モンテフェルトロがローマニアの現状をダンテに問ひし如きまたこの例に洩れず、罪人の未來を豫言せる例は處々に見ゆれども現在の事を語れる例はたゞ第六曲のチャツコの物語にあるのみ（地、

六・四九以下、同七三)、さればむしろチャツコを例外と見做すかた自然なるべし

一〇六一—一〇八

最後の審判の日至れば未來の門は閉されて永遠の門開かる、未來既に消滅すれば未來の事にかぎられし罪人の知識は従つて全く消滅す

一〇九—一一一

【答】カヴァルカンテの間に直ちに答へざりしこと(七〇—七一
行)

一一八—一二〇

【フェデリーコ】有名なるローマ皇帝フリートリヒ二世(一一九

四——二五〇年）、エピクロスの徒と見做されし者

【カルデイナレ】オクタヴィアーノ・デーリ・ウバルデイニ、一
二四五年カルデイナレとなり、同七三年に死す、ギベルリニ黨に
屬しエピクロスの流れを汲める者にて死に臨み、たとひ世に魂な
るものありとも我は既にギベルリニ黨のためにこれを失へりとい
へりと傳へられる

一二七——二九

【わが言に】原、こゝに

【指を擧げたり】ダンテの注意を促すため

一三〇——一三二

【淑女】ベアトリーチエ。ベアトリーチエ、ダンテにすゝめてカ

ツチャグイーダにその生涯の事を問はしむ（天、一七・七以下）
一三三―一三五

【溪】第七の地獄

第十一曲

第六の地獄を去るに臨みウエルギリウスはこれよりめぐるべき三
の地獄の構造とその中なる罪人の分類を論じディーテ城門の内と
外との罪を比較しさらに高利を貪る者の罪を擧げてダンテに教ふ

一―三

【岸】第六と第七の地獄の間の（第十二曲の始めにくはし）

四一九

【フォーチン】フォティヌス、テッサロニアの僧、チエーザレア（パレスチナにあり）の僧正アカキウスが異端の故をもて僧籍より除名されしことありしときフォティヌス彼のために復籍を取りはからはんとてローマにいたれり

【アナスターシヨ】法王アナスタシウス二世（四九六年より同八年まで在位）、ローマの人、當時東西二派の寺院異端につきて争へるにアナスタシウスその調停に志しその頃ローマに來れるフォティヌスを屢引見せるより己もまた異端に陷れるが如くおもはるゝにいたりしなりといふ

一六一—一八

【次第】大小高低次をなすこと

一九—二一

【見るのみにて】罪人の種類をウエルギリウスに問ふ（地、三・

三三、七三、四・七四等）に及ばざるため

三一—三三

【屬けるもの】神に屬するものは自然と神恩、人に屬するものはその持物（三四行以下）

四〇—四五

第七の地獄第二圓に罰せらるゝ浪費者は第四の地獄に罰せらるゝ放縱なる浪費者と異なり博奕またはこの類の事により人の不利を

わが利となさんとするものなり

【喜ぶべき處】地上、生命財産は善用して幸に入るの階段となすべきを悪用して自ら悲歎の境界に陥るなり

四九―五〇

【ソツドマ】男色即ち自然に反する罪（創世記第十九章）

【カオルサ】高利貸即ち神の恩恵（自然の賜なる財寶）にむかひて暴を行ふ罪、カオルサはフランスの南にある一都會（カオルス）の名なり、中古、高利貸の極めて多かりしところなりければかくいふ

【封ず】黙示録、二〇・三参照

五二―五四

【心これによりて】豫め深くたくらみて人を欺くが故にこれを行ふ人、本心に痛みを感じざるはなし

五五―六〇

己に特殊の關係なきものを欺くは人間相愛の道に背くなり

第八の地獄なる各種罪惡の分布左の如し

偽善 第六囊 地、二三

諂諛 第二囊 一八

惑はす者 第四囊 二〇

詐欺 第十囊 二九、三〇

竊盜 第七囊 二四、二五

シモニア 第三囊 一九

判人

第一囊

一八

汚吏

第五囊

二一、二二

外にこのたぐひの汚穢

詐りの謀

第八囊

二六、二七

争ひを蒔く者

第九囊

二八

【シモニア】僧官及び其他の神聖なる物を賣買すること、この語の出處につきては地、一九・一—六註参照

【汚吏】Parati.公私に論なく己が職務を利用して益をはかる者

【第二の】これよりめぐらんとする獄の中の第二、即ち全體よりいへば第八の獄

六四—六六

【デイーテ】地獄王ルキフェル（地、八・六七―九註参照）

七〇―七二

デイーテ城外の諸地獄にある者（第五、第二、第三、第四）

七九―八四

【汝の倫理】アリストテレスの倫理學第七卷の始め

ダンテの分類とアリストテレスの分類とは同一にあらず、ダンテの邪惡はアリストテレスの邪惡とその義を異にすムーア博士曰、ダンテはまづアリストテレスにより、地獄に罰せらるべき凡ての罪をば情を制する能はずして犯せる罪と痼疾の罪との二にわかちさらにキケロにより、後者を力と欺の二にわかつてるなりと（『ダンテ研究』第二卷一五八頁以下）

八五―八七

【上に外に】地獄の上方デイーテの門外

八八―九〇

【復讐】異本、正義

九一―九六

【汝の言】四六行以下

九七―一〇五

【その枝】神が自ら定めたまひし故に従ひてその業をなしたまふこと

【汝の理學】アリストテレスの『理學』（フィージカ）二卷二・

七

【孫】人間の技は自然よりいで自然は神よりいづ、故に人間の技は神の孫の如し

一〇六一—一〇八

【二のもの】自然と技、即ち人は自然に倣ひその法に従つて努力し神の賜を自然の中に求むべきものなること

【創世記】創世記三・一九に曰く、汝顔に汗して食を得べし

一〇九—一一一

高利を貪る者は神の定むるところに反し自然の恩恵と自己の努力によりて富を求むることをなさずたゞ貨をして貨を生ましむるの道をとりその望みを不正の利益におきて自然とその従者なる人間の技とをないがしろにす

一一二——一四

【雙魚】雙魚宮は白羊宮にさきだつ天の十二宮の一、この時太陽は白羊宮にあり（地、一・三八）そのあらはるゝは雙魚の星に後るゝこと約二時間なり、故に兩詩人がアナスタシウスの墓側を離れしは日出前約二時間乃ち四月九日年前四時の頃なるべし

【コーロ】西北の風、こゝには西北の空の意

第十二曲

詩人等斷崖を下りて第七の地獄第一の圓にいたればこゝに血の流

れあり他人にむかひて暴なるものを煮またあまたのケンタウロス（チエンタウロ）ありて掟に従はざるものを射る、その一ネツソス（ネツソ）ウエルギリウスの請ひによりダンテを負ひて淺瀬を渡り第二の圓にむかふ

一—三

【物】 一一行以下のミノタウロス（ミノタウロ）

四—六

【トレント】 イタリア北方の山地にある町（チロルの南）

【アデーーチェ】 川の名、チロルよりいでヴェロナの市街を貫流し北イタリアの平野を過ぎてアドリアティコ海に入る

山壞れのありしところはトレントとヴェロナ兩市の間なるロヴェエ

レート町の町に近き處にてスラヴィーニ・デイ・マルコといひ一三〇二年ダンテ逐はれてヴェロナに客たりし時親しく見し處と傳へらる

一〇一五

【くだけし坎の端】破岩により成る第六獄の端

【クレーチの名折】ミノタウロス（ミノタウロ）

神話に曰、ミノタウロスは牛頭人體の怪物なり、その母パシファエ（パシフエ）（淨、二六・四一）はクレタ（クレーチ）島（ギリシアの南地中海にあり）の王ミノス（地、五・四にみゆるミノスの孫）の妻なりしが海神ポセイドンよりミノスに賜はれる牡牛を慕ひ當時の名匠ダイダロスの造れる木製の牝牛の中に入りて遂

にミノタウロスを生むに至れり

一六一—一八

【アテーネの公】テセウス（テゼオ）

神話に曰、ミノスはミノタウロスの生れしを恥辱とし、ダイダロスの造れる一迷宮の中にこれを幽して外に出づるをなからしめ且つ年々若き男女各七人をアテナイに課してこの怪物の食に宛てたり、アテナイ王アイゲウスの子テセウス（地、九・五四）ミノスの不法を憤り海を渡りてクレタに赴きまづミノスとパシファエの間を生れしアリアドネ（乃ち、汝の姉妹）の歡心を得その教に従ひ歸路に迷ふことなからんため絲を身に結びて迷宮に入りミノタウロスを殺せり

三四—三六

【地獄に下れる】エリトネ（エリトン）の命をうけて（地、九・

二二以下）

三七—三九

【ディーテ】地獄の王ルキフェル（ルチーフエロ）

キリスト地獄にくんだり第一の獄乃ちリムボにとゞまる人類の始祖
アダムの魂をはじめ多くの魂をルキフェルの手より奪ひ去りしこ
とあり（地、四・五二以下）この時より少しく前といへるは即ち
キリスト磔殺の時を指せるなり、地獄内の岩の壊れを教祖磔殺の
時に起れることゝなせるはマタイ、二七・五一に、地震ひ岩裂け
云々とあるによれり

四〇―四五

【宇宙愛に】エムペドクレス（地、四・一三八）の説を指せり
 エムペドクレス思へらく宇宙は愛と憎の如き異分子の結合により
 てその常の状態を持續するものなれば若し一方の力勝ち類その類
 と相合ふにいたる時は却つてこれがために混亂の状態に變ずと
 四六―四八

【血の河】地獄の川の一なるフレジエトンタ（地、一四・一三〇
 以下參照）

四九―五一

異本、あゝ失明の慾よ狂へる怒りよ

四九行よりは地の文なり

五二―五四

【告げし】地、二・三〇、三七―九

五五―五七

【チエンタウロ】ケンタウロス、暴びの代表なり、神話にいふ、この者胸部より上は人にして下は馬なりと

【世に住みて】ケンタクロスはもとギリシアのテッサリア山地の蠻民なりしを次第に誤り傳へて妖怪となせしなり、骨格逞しき山地の蠻民が肥馬に跨がつて狩にいでし姿はげに半人半馬の怪物群を成して横行するの風情ありしなるべし

六四―六六

【キロン】キロネ、ケンタウロスの一、クロノス神の子、天文、

醫藥、音樂、狩獵の諸術に通じ兇猛なるケンタウロスの中にありてひとり異彩な放てり、ホメロスかつてこれをよびてケンタウロスの中の最も義しきものといへることあり、また善く人と親しみアキレウスの父ペレウスとテチスの媒となり又自らアキレウスの師となれり、ウエルギリウスが殊更にキロンをえらべるも此等の消息に通ぜるによりてなり

【禍ひをえき】死を抱くにいたれり（ネツソの條參照）
六七―六九

【ネツソ】ネツソス、神話に曰、ヘラクレスその妻デアアナ（デアアニーラ）と旅してエウエノス河（ギリシア）に至れる時こゝにケンタウロス、ネツソスの川越人足をなしゐたるを見、妻

をその背に托し自らまづ川を渡り岸に着きて後をみしにネツソスはディアネラを負ひしまゝ逃げさらんとするところなりければ乃ち弓にてこれを射その矢ネツソスの胸を貫けり、ネツソス死に臨み血に染みし己が衣をディアネラに與へこの衣には男の心を放れしめざる不思議の力ありと欺き教ふ、この後いくばくもなくヘラクレスの心他の女にうつれりとの評さかななるなきゝディアネラ乃ちネツソスの衣をこれに送れり、ヘラクレス之を着くるに及びて忽ちその毒に感じ苦悶甚しく遂にオエタ山上に死せり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』九・一〇一行以下）

七〇—七二

【胸をみる】沈思の状

【はぐゝめる】教育せる（六四―六行註参照）

【フォーロ】フォロス、ケンタウロスの一、テセウスの友ピリトウスとヒッポダーミアの婚姻の筈に招かれ酒に酔ひて暴れ廻り自ら死を招くにいたれり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』一二・二一〇以下）

八二―八四

【二の象】人と馬との

八八―九〇

【ひとりのもの】ベアトリーチエ

【アレルヤ】（主をたゝへよ）天堂にて歌ふ頌詠

【盗人の魂】或ひは悪き魂、欺く魂

一〇六一—一〇八

【アレツサンドロ】有名なるマケドニア王アレクサンドロス（前三五六—三二三年）の事なるべし

異説曰、テツサリアのフェレ市の暴君アレクサンドロス（前三五九年死）の事と

【ディオニシオ】ディオニシウス、シケリア島シラクサ市の僭主（前三六七年死）

一〇九—一一四

【アツツオリーノ】アツツオリーノ（或ひはエツツエリーノ）・

ダ・ローマーノ（一一九四—一二五九年）北イタリアに多くの地を領し暴虐を極めし者

【オピッツォ・ダ・エステイ】一二六四年よりポー河の南三哩なるフェルラーラ市に君たり、一二九三年その妾腹の子アッツォ

(浄、五・七七)の殺すところとなる

或曰、こゝに繼子といへるはたゞ罪の不自然なるより實子アッツォをダンテかく呼べるならんと

【この者今は】今はネツソス第一の案内者にて我はこれに次ぐものなれば彼の云ふところな疑ふ勿れ

一一五―一一七

【煮ゆる血汐】bulicameブリカーメはヴィテルポに近き温泉の名(地、一四・七九及び註参照)をとれるなり

【一の民】人を殺せる者等

一一八一—一二〇

【一の魂】ガイ・オブ・モンフォート、その父シモンがイギリス王エドワード一世のため死するにいたれる（一二六五年）を怨みエドワードの叔父にてシモンの義兄弟なるリチャードの子ヘンリー（即ちガイの従兄弟にあたる）が法王選舉の事に關しヴェイテルポに止まれるを知りこの地の寺院の式に臨める時をうかゞひこれを寺院内（神の懷）に刺殺せり（一二七一年）

【ターミーチ】ロンドンのテムズ川、ヘンリーの心臓は黄金の器にをさめられてテムズ橋上に供へられきといふ説あるによれり

一二一—一二三

【民】人を傷けまたはその持物を奪へる者

一二四—一二六

【焼く】異本、蔽ふ

一三〇—一三二

【暴虐】一〇三行の僭主

一三三—一三八

【アツテイラ】神の答と呼ばれし有名なる匈奴（フンヌ）人の王にて五世紀にイタリアを襲へるもの

【ピルロ】ギリシアのエピロスの王ピルロス（前三一八—二七二年）、イタリアを攻めてローマ人を悩ませし者一説にはアキレウスの子ピルロスを指せりともいふ

【セスト】セクスツス、大ポムпейウスの子、イタリアの海岸を

荒せしもの（前三五年死）

【リニエール・ダ・コルネート】ダンテ時代の名高き盜賊

【リニエール・パッツォ】同上

第十三曲

第七の地獄第二の圓は己が身己が産に暴を加へし者の罰せらるゝ
處なり、詩人等こゝに自殺者ピエール・デルラ・ヴィーニアと語
りまた産を荒せし者の犬に噛み裂かるゝを見る

七―九

チエチーナとコルネートの間の不毛の地をえらびて棲む猛き獸、
チエチーナはイタリアの西海岸地中海に注ぐ小河コルネートは同
じ海岸の町、この川と町との間は略　マレムマと稱せらるゝ一帯
不毛の地にあたり山林沼地多くして耕地甚だ少なし

一〇——二

【アルピーエ】ハルプユイアイ、神話にいづる怪物、頭處女の如
く體羽翼爪は鳥に似たり常に群集し汚穢極りなしといふ

【悲報】アエネアスその士卒と共にストロファデス（ストロファ
ーデ、イオニア海中の二小島）に上陸せし時、ハルプユイアスの
ために悩まされ劍を抜いてこれを追へるに其一ケライノなる者ト
ロイア人にむかひ汝等後日饑に迫りて食卓をも喰ひ盡すに至るベ

しといへること『アエネイス』三・二〇九以下に見ゆ

一六―二〇

【恐ろしき砂】第三の圓なる砂

【信を奪ふ】わが言をきくのみにては眞と信ずまじき

異本、わが言に信を與ふべき

二五―二七

【我等のために】我等をおそれて、我等に見れらざらんため

三七―三九

【木】自殺者の理性と官能の作用とを失へるをあらはせり

四三―四五

【尖】折取りし小枝の先

四六一—四八

【我詩の中にのみ見しこと】アエネアス、トラキヤに上陸しその母アプロディテ及び其他の神々を祭らんとし祭壇を蔽はんためそのあたりの丘にゆきて樹木を曳けるに黒き血滴りて地を染む、かくすること三度に及べば悲しき聲丘下より出で、アエネアスよ何とて幸なき者を裂くや云々とつぶやき且つその生前はアエネアスの身寄なるポリドロス（地、三〇・一八）といへる者なりしことを告ぐ（『アエネイス』三・一九以下）

五八一—六〇

【我】ピエール・デルラ・ヴィーニア、十二世紀の末ナーポリ附近の下賤の家に生れしものなりしが皇帝フリートリヒ（フェデリ

一コ）二世に事ふるに及びてその信任を得大いに用ゐらる、一四八年反逆の罪をうけて獄に投ぜられ翌九年獄中に自殺す、彼また詩文を善くしその著作今に傳るといふ

【或は閉ぢ或は開き】わが好むところには帝の心を開き好まざるところには之を閉ぢ

六一—六三

【睡りをも脈をも】夜は眠りをなさず晝はいたく疲勞す
異本、血筋をも脈をも

六四—六六

【チエーザレの家】王宮

【遊女】嫉み、萬民共通の罪惡にして特にやんごとなきあたりに

甚し

六七―六九

【アウグスト】オクタウイアヌス以下ローマ皇帝の稱號、こゝにてはフリートリヒ二世を指す

七三―七五

【奇しき】或ひは、新しき

九四―九六

【第七の口】第七の地獄

一〇〇―一〇五

【窓】痛みの歎きとなりて外に出るところ即ち傷口

【行くべし】肉體をえんとてヨサファアツテの溪にゆくなり（地、

六・九七―九、同一〇・一一)

一〇六一―一〇八

魂木に入り、體はその木の上に懸けらる

一一二―一一四

【立處】獵の一行のうち野獸の逃げ路を見張る者の立つ處

一一八―一二三

【さきの者】ラーノ、シエーナの人、一二八八年フィレンツエ人を助けピエーヴェ・デル・トツポ（寺領の名）の戦ひに臨みアレツツオ人の敗るところとなりて死す

【疾く】或ひは、助けよ

苦しきのあまり魂の無に歸せんことを希ひて死を呼べるなり

【ひとり】ジャーコモ・ダ・サント・アンドレーア、パードヴァの人にてラーノと同じくその資産を妄りにせしものなりといふ

【汝の脛】トツポの戦ひにラーノは戦場をのがれて命を全うし得べかりしも資産すでに盡き餘生を幸ならしむる望みなきをおもひ軍利なきにかゝはらずとゞまりて敵に當れるなりといふ

一二四―一二六

【牝犬】ハルプユイアイ（アルピーエ）の徐々蠶食しゆくは自殺者の心を書き黒犬の猛烈なるは浪費者の生涯を寫せるなり

一三〇―一三五

【折際をりめより】或ひは、折傷のため

ジャーコモのかくれしたため折り荒されしなり

一三九―一四一

【彼】自殺者の名不明

一四二―一四四

【邑】フィレンツェ、初め軍神マルス（ギリシアではアレス）をその守護神とせしがキリスト教の傳來と共にバプテスマのヨハネを以てこれに代へたり

一四五―一四七

【その術】軍神の術乃ち戦亂

【アルノの渡り】マルスの堂宇ジョヴァンニの寺院に變ずるとともに人々軍神の像をアルノ河邊の一塔中になさめたりしが五四二年ゴート人の王トチラ、フィレンツェを攻めて陥るゝに及びこの

像アルノの水に沈めり、シャルルマーニユの世フィレンツエ復舊の事ありし時、人々まづ沈めるマルスの像を取上げこれをアルノの渡乃ちポンテ・ヴェツキオと名づくる橋の一端に安置す、こゝに名残といへるはこの像すでに多く破損したればなり（天、一六・一四五参照）

一四八—一五〇

【アツテイラ】有名なる匈奴（フンヌ）人の王（地、一二・一三四）、されどフィレンツエに侵入せるはトチラにしてアツテイラにあらず、ダンテは傳説によりてこの名をあげしなるべし

【灰の上】トチラ（或ひはアツテイラ）、フィレンツエを焼けりといふ傳説によれり

一五一

我はわが家の内にて首を縊れるなり

第十四曲

第七の地獄第三の圓は神及び神の物にむかひて暴を行へる者の罰せらるゝ處にてこゝに三種の罪人ありこの曲にてはまづその一種乃ち神を侮るものゝ刑罰をあぐ、詩人等そのひとりなるカパネウス（カパーネオ）を見その暴言をきゝて後フレジエトクタの川にいたりこゝに導者地獄内なる諸川の由來をダンテにかたる

一―三

【郷土の愛】 自殺者と同郷の好みあれば

一〇―一二

【憂の林】 自殺者の森

【悲の濠】 血の河

一三―一五

【カートンの足踏めるもの】 アフリカなるリビヤの砂漠

紀元前四七年ウティカのカトー（カートン）（前九五―四六年）

ポンペイウス敗餘の軍を率ゐてヌミディア王ジウバと合せんため
リビヤの砂漠を過ぐ

二二―二四

【臥せる】神を侮れる者

【坐せる】自然と神の賜をしひたげしもの（高利貸）

【歩める】自然に背けるもの（男色）

仰臥するは侮蔑の目を天にむかはしむるなり、坐するは額に汗せ
ずして貸殖に腐心するなり、歩むは情慾の誘ふままに正道を離るゝ
なり、三種の罪人いづれも生前の状態に従つてその罰を異にす

二五―二七

男色を行ふものその數最も多く高利貸これに次ぎ神を侮る者最も
少なし、しかもその最も少なき者罪却つて重ければ歎聲を發する
ことまた却つて他よりも多し

三一―三三

【アレツサンドロ】アレクサンドロス大王よりアリストテレスに
送れりと傳へらるゝ書簡の中インド行軍の記あるによれり

この書の中には大王、大雪にあひ士卒にこれを踏ましめ次に雨下
する火焰にあひ部下に衣をもて拂はしめしことしるさるゝも火焰
を踏ましめしことみえねばダンテは中古の大哲アルベルトス・マ
グヌスの著書によりてかく火と雪とを混ざるにいたれるなるべし
といふ、委しくはトインビーの『ダンテ字典』(A Dictionary of
Proper Names and Notable Matters Works of Dante-P. Toynbee) に
づ

四〇—四二

トレスカ
【亂舞】手足を急速に動かして舞ふ舞踏の一種

四六一—四八

【大いなる者】カバネウス、テバイを圍める際ゼウスの怒りに觸れその電光に撃たれて死す（六七—七二註參照）

【熟ましめじ】火の雨もその慢心を挫く能はず、果實の始めは固く酸くして後は軟かく甘きに譬へしなり

五二—五四

【ジオーヴェエ】ゼウス。ギリシア・ローマの神話にいづる神

カパネウスの神は昔の神にしてキリスト教の神にあらず、彼は全く智能の功德を失ひ（地、三・一八）我を罰する神の何たるを知らざるなり、ダンテがこゝに神を侮るものゝ代表者としてカパネウスをあげしはその神と信ずる者にむかひて不遜なる點よりみれ

ば名異なるも實同じきを以てなり、淨、六・一一八にダンテ自らキリスト教の神をジョーヴェと呼べることあるをおもふべし

【鍛工】ヴルカーノ（ヴルカヌス又はヘファイストス）。ゼウスの子にして火の神なり、神話に曰ふ、この神エトナ山中の工場にてゼウス神のためにその電光の矢を鍛へりと

五五―六〇

【フレーグラ】プレグライ。ギリシアのテッサリアの曠原、ゼウスと巨人軍との戦ひありしところ

【モンジベルロ】エトナ山の古名なり、シケリア島にある火山にてヘファイストスの鍛工場ありしところ

【鍛工等】キクロペ（チクロピ）と稱する一眼の巨人等、ヘファ

イストスをたすけてエトナの工場に鐵鎚をふるふ

六一—六六

【劇しき怒り】怒りて自ら苦しむは神の刑罰をいよく大ならしむるに外ならず

六七—七二

【七王】ギリシアの七王、カパネウス、アドラストス、テユデウス、ヒツポメドン、アンフィアラオス、パルテノパイオス、ポリユネイケス

テバイ王オイデプスとイオカステの間に二兒あり、エテオクレス、ポリユネイケスといふ、父オイデプスの後を承け年毎に交代してテバイを治むる約ありしにエテオクレス時至るもなほ弟に讓るを

肯はざらしかば、ポリユネイケスこゝに諸王をかたらひその助けを得て軍を起しテバイを攻む、是即ち七王の役なり

七六―七八

【小川】フレジエトンタ（一三一行）、地獄の川の一、第一の圓の血の河自殺者の森の下を過ぎてこゝに流れ下れるなり

七九―八一

【ブリカーメ】ヴィテルボを距る二哩にある温泉の名、この水集まりて池となり池より一の細流いづ（ダンテ時代に）、こゝにては水の湧くと流れの急なるとをくらべしなり

【罪ある女等】遊女等、彼等他の婦人と混じて浴を取る能はず少しく水源を離れしところより各戸に水を引きて己が浴場の用と

なせりといふ

八二―八四

【路】第八獄への

八五―八七

【門】地獄の門（地、八・一二四―六及び註参照）

八八―九〇

【その上に消す】地、一五・二―三参照

九一―九三

【慾を】流れの不思議なるを告げて求知の念を起させたれば今教示してその念を満足せしめよ

九四―九六

【海】當時地中海を單に海といへり

【クレータ】地、一二・一二

【王】クロノス（サトルノ）神、クレタ島最初の王にてこの王の治めし頃を黄金時代といふ

九七—九九

【イーダ】イダ、クレタ島の中央にあり

一〇〇—一〇二

【レーア】レア、神話に曰、レアはクロノス神の妻にてゼウス及びその他の神々の母なり、そのころクロノスの位はその子の奪ふところなるべしとの豫言ありしかばわが子の生るゝに従ひ神これを喰ひ盡せり、ゼウス生るゝに及び母レアこれをイダ（イーダ）

山中の洞窟にかくし且つ泣く聲によりてその所在を知られんことを恐れクレタ人に命じ或ひは樂を奏し或ひは饗宴を張りて聲をあげて以て呱呱の聲を沒せしむ

一〇三—一〇五

【老巨人】ダニエル、二・三一以下ネブカドネザル王の夢の中にあられし巨人の像によれり、聖書の巨人はこの王以後の世の變遷を示しダンテの巨人は人類の歴史を總括す、頭より以下金の銀となり銅となり鐵となるは黄金時代次第に退歩し歴史の老ゆるに従つて人類次第に墮落しゆくを示せるなり、またクレタ島を巨人の立つ處となせるはクロノスの治世の下にこゝに理想の世を現出したるとこの島は當時の所謂世界三大睦の略 中央に位するが故な

るべし（スカルタツチニ註参照）

【ダーミアータ】エチプトの北海岸ナイル河口を距る八哩にある町、こゝにては東方一帯の地を指し古代王國の所在地として過去を代表す

【ローマ】世界活動の中心として現在を代表す

一〇九——一一一

【右足】註釋者曰、巨人の兩足は帝國と寺院なり、寺院の腐敗したるを燒土にたとへしかも輿望のなほ之にあつまれるを巨人を支ふるにたとへしなりと

一一二——一一四

罪の涙流れざるはたゞ黄金時代あるのみ

【窟】イダ山中の洞窟

一一五——一七

【アケロンテ】地、三・七〇以下

【ステイージュ】地、七・一〇六以下

【フレジエトンタ】地、一二・五二以下

一一八——二〇

【コチート】地獄の底の池、地、三二・二二以下

一二一——二三

【縁】第二の圓の

一二四——二六

【左】地、九・一三〇——三二註參照

一三〇——一三二

【レーテ】一三六—八行註參照、ウエルギリウス未だレーテの事をいはず、フレジエトンタは巨人の罪の涙より成るといへり

一三三—一三五

【煮ゆる紅の水】第一の圓の河水赤く湧くをみてそのフレジエトンタなるを知りうべかりきとなり

ウエルギリウスはダンテの『アエネイス』に精しきを知りてかくいへり、この歌六・五五〇—五一に、冥府の急流フレジエトンタその迸る焰をもてこれをめぐり云々とあり

一三六—一三八

レーテ（忘るゝ義）の川は地獄の外淨火に穢れを淨むる魂己を洗

はんとてゆくところにあり（淨、二八・一二一以下）

第十五曲

兩詩人フレジエトンタの堤を傳ひて進み第三の圓第二種の罪人乃ち自然を亂せる者（男色）の火の雨にうたれつゝ砂上を歩み來るをみる、その中にブルネット・ラティーニあり己が群を離れてダシテと共にゆきその將來を豫言しまたその群の中の主なる罪人の名をこれに告ぐ

【グイツツァンテ】（乃ちウイサント）ダンテ時代のフランドル（フィアンドラ）の西端カレーに近き町

【ブルツジア】ブルージュエ、同東端の町

兩地の間約六十五哩にて略　フィランドルの海邊（今のフランスの東北端とベルギーの一部の）といふに同じ、土地低きが故に海水の浸入を防がんため堤防を築く

七―九

【ブレンタ】アルピの峰よりパードヴァの町のほとりに流れ下る
川

【キアレन्ターナ】パードヴァの北の山地にてブレンタの水源地をも含む、この山地の雪春日の熱をうくれば溶けて流れて河水た

めに汨濫す

一〇—一二

【誰にてもあれ】神か天使か悪魔か（地、三一・八五参照）

二二—二四

【裾】岸高く砂低ければなり

二五—三〇

【わが顔を】異本、手を

【セル・ブルネット】ブルネット・ラティニーニ、一二一〇年頃、
 フィレンツェに生る。哲學文學に通じまたグエルファイ黨に屬して
 時の政治に干與せり、一二六〇年モンタペルティの戦ひの後、グ
 エルファイ黨の首領と共に郷土を追はれフランスのパリに赴き久し

くこゝに止まりてその間佛文『テゾーロ』を編せり、後再びフィレンツェに歸り一二九四年に死す、「セル」は、ブルネットが逐客とならざりし前公證人たりしことあればその尊稱をここにも用ゐしなり

四九―五〇

【齡未だ満たざるに】未だ人生の半乃ち頂點に達せざるに、備へ未だ全く成らざるに

ダンテの林に迷ひ入れるは神曲示現の以前にあり

五二―五四

【昨日の朝】四月八日の朝（地、一・三七）、今は翌土曜日の未明なり

【この者】罪人にむかひてウエルギリウスの名をいはず

【わが家】世界、三界を歷程して再び世に歸る路にあればウエルギリウスはたゞ地獄、淨火の導者なれどもかくいへるなるべし
或曰、地上乃ち南半球（地、三四・一三九）と、又或曰、天と
五五―五七

【星に従】天賦の才のあるところに従つて進まば（古來天文によりて人の運命を測知しうべしとの信仰ありしに基づけり）

五八―六〇

【早からざりせば】ダンテと聯關して己が死の早きをいへりブルネット自身は齡八十に及ぶまで世にながらへるなり

六一―六三

【フイエソレ】フィレンツェを距る約三哩なる一丘上の町、この町ローマ人のために攻め落されし時その民アルノ河畔にのがれ、ローマの移住者と共に合してフィレンツェ市な成すにいたりといふ傳説によれり

【山と岩とを含める】粗野にして拗執なる
六四―六六

【ソルボ】果樹、その實酸く醜して始めて食用とす
六七―六九

【古き名】史家ヴィルラーニの説によればフィレンツェ人の譬と呼ぶるゝにいたりしはトチラ侵略（地、一三・一四五―七註参照）の際その甘言に欺かれ門なひらきてこれを迎へ入れたるによれり

といふ

【貪嫉傲】地、六・七四参照

七〇―七二

【彼黨此黨】黑白の兩黨

【飢ゑて汝を求めむ】汝を害せんとはかるべし

七三―七五

フイエソレの血をわかつフイレンツエ人たゞ相互に搏噬しその腐敗の中より一人たりとも眞のローマ人のあらはるるあらば彼等手をこれに觸るべからず

七六―七八

フイエソレ人下り來りて邪惡の巢なるフイレンツエの町建てられ

し時

【聖き】ローマは聖地、ローマ人は選民なり

七九―八〇

【汝は未だ】汝は未だ死せざりしものを

八二―八七

【教へたまひし】ダンテはしば／＼この老碩儒の教をうけたれども所謂師として之に事へたりしや否やは明かならず（スカルタツツイニ註参照）

八八―九三

【録し】記憶に

【他の文字】チャツコ及びファリーナータの豫言（地、六・六四

以下及び地、一〇・七九以下)

【淑女】ベアトリーチェ(地、一〇・一三〇—三二参照)

九四—九六

【契約】未來の契約即ち不吉なる豫言

或曰、人と命運との間の契約即ち人の命運に逆ふべからざること
をいふと

【農夫は鋤を】人事を盡して天命を待つの外なきをいへり

九七—九九

【善く聽く】聖賢の教をきゝ之をさとりて心にをさむるものこれ
善く聽く者なり

ウエルギリウスはこの答によりダンテが地、一〇・一二七以下フ

アーリナータの豫言に關しまた地、七・七〇以下命運に關し師の教へしところを理解し銘記するをしりて大いにこれを賞せるなり
一〇九―一一四

【プリシアン】プリスキアヌス、有名なるラテン文法學者、六世紀の始めの人

【フランチェスコ・ダツコルソ】有名なるフィレンツエの法律學者アツコルソの子にて父と同じく法理を修め一二七三年イギリスのオックスフォードに赴きて講師となれり（一二二五―一二九三年）

【瘡】汚き罪人等、かゝる穢れを見んことを願ひたらば

【僕の僕】法王

【アルノ】ファイレンツエをいふ、川の名を町に代へしなり

【バツキリオーネ】ヴィチエンツアの町を貫流する川、前のアルノと同じく町の名に代へて用ゐしなり

【殘せし者】アンドレーア・デ・モツチ、ファイレンツエの人、一二八七年この邑の僧正となりしも不徳のため同九五年法王ボニアキウス八世の命により遷されてヴィチエンツアの僧正となり翌九六年此處に死す

一一五——一七

【烟】砂烟

一一八——二〇

世の地位により分たれて多くの小團をなしその一に屬する者他の

一團に加はるをえず、ブルネットの一群には學者と僧とあり

【テゾーロ】ブルネットがフランスに滞在中フランス文にて編せる百科事典的著作

ブルネットの著作にはこの他、本國の語にてしるせる短詩『テゾレット』あり

一二一—一二四

【ヴェロナ】中古ヴェロナ市の郊外には四〇日齋の始めの日曜日に徒歩競争行はるゝ例あり、勝者はいづれどれる衣を受け敗者即ち最後の到着者は一初の雄鷄を受けたりといふ

第十六曲

かくてさらに進みゆくにフィレンツエの者みたり群を離れてはせ
來りそのひとりヤーコポ・ルステイクツチといへる者ダンテと語
る、彼等去りて後詩人等第七の地獄盡くるところにいたりウエル
ギリウスはこゝにダンテの身にまける紐を解かしめ斷崖の上より
之を投げおろしてジェーリオネ（ジェーリオン）を招く

一―三

【次の獄】第八獄

四―六

【群】男色の罪を犯せる者の一群にて文武の公職にありしものを

あつむ

七―九

【衣】町によりては特殊の服装行はれし處あればなり

一三―一五

【聲に心をとめ】或ひは、聲をきゝてとゞまり

一六―一八

この處の習として火の雨下ることなくば彼等のはせ來るを待たず
汝まづいそぎすゝみて彼等を迎ふべきなり

一九―二〇

【古歌】例となれる歎聲

【輪】しばらくもとゞまること能はざれば輪をつくりてめぐれる

なり

二二—二四

【勇士】註釋者曰、この譬は人に雇はれてその権利の保護者となり拳闘によりて司法上の争ひを決せし力士にとれるなり、かゝる風習は十三世紀より十四世紀の始めにかけイタリア各地の都市に行はれたるなり云々

二五—二七

【頸は】目ダンテに注ぎ足圓を畫けばなり

三一—三三

【名】世に残せる

三四—三六

【毛】異本、皮

三七―三九

【グイード・グエルラ】フィレンツェ、グエルファイ黨の首領。一
二六〇年モンタペルティの戦ひ敗れて後郷里を逐はれ亡命の士を
糾合して之に將たり、一二六六年ベネヴェントの戦ひに殊勳をあ
らはし翌六七年黨與を率ゐてフィレンツェに歸り同七二年に死す、
その父マルコヴァルドはグアルドラーダとその夫、老グイードの
間の第四子なりグアルドラーダはフィレンツェの名門ラヴィニア
―二家の者なるベルリンチオン・ベルティ（天、一五・一一二）
の女、容姿美にして夙に貞淑の聞えあり、老グイードに嫁して四
子を生む

四〇―四二

【テツギアイオ・アルドブランデイ】フィレンツエの名門アヂマ
ーリ家の出にて、當時著名の武人なり、フィレンツエなるグエル
フィ黨の人々にシエーナな攻むるの無謀なるを諭せしもその言用
ゐられずして遂にモンタペルティの大敗を招くにいたれり（一二
六六年死）

【名】voce この字を言の意にとりその言（乃ちグエルフィ黨を
戒めし）世に用ゐらるべかりし云々と解する人あり

四三―四五

【十字架にかゝれる】苛責を受くる

【ヤーコポ・ルスティクッチ】傳不詳、十三世紀の半の人、古註

曰、彼、妻と合はずして別れしたため一般婦人を厭ひて不自然の罪を犯すにいたれるなりと

五五―五七

【主の言】一四―五行

六一―六三

【膽】にがき罪、禍ひ

【甘き實】あまき救ひ、福

七〇―七二

【グリエイルモ・ボルシーレ】ボツカツチヨの『デカメローネ』
に見ゆるフィレンツェの武人

七三―七五

ダンテの詞

【新なる民】十三世紀の末フィレンツェ附近より來りて住むにいたれる民、民新なるによりて市を愛するの念うすし

【フィオレンツア】フィレンツェ

【汝は既に】争亂分離の萌既にこの時にあらはれしなり

七九―八一

汝は心のまゝにかたり勞せずして自然に巧みなる言を出しうるが故にこれより後にも今の如く僅かの詞にて問ふ者の心に満足な與へうべくば幸なり

八二―八四

【星を見んとて】地、三四・一三九參照

【我かしこに】過去を追想するをうる時

八八一九〇

【アーメン】ファンファニー (P. Fanfani) 曰' in un ammen (アーメンの間に)、in men d'un ammen (アーメンより早く)といふ言今もまたくまの意に用ゐらると

九四一〇二

【川】モントネ川 (ローマニアにあり)、アペンニノ連峰の一部よりいで、アドリアティコ海に注ぐ、ポーの源なるモンテ・ヴェーゾ (アルピ山中の高嶺) の東アペンニノの左にあたる諸川は皆東流してポーに注ぎモントネにいたりて初めて獨立す (今は地勢の變化によりてこれよりさきに海に注ぐ川あり)、この川ダント

の時代にはフォルリの町にいたるまでアクアケータと呼ばれし溪流なりきといふ、低地はローマニアの平原を指せるなり

【サン・ベネデット・デル・アルペ】アペンニノの山麓フォルリの附近にある僧院の名、アクアケータの水このあたりにいたれば飛瀑となり一瀉して落つ

千を容るべき云々につきては異説ありていづれとも定め難し

(一)僧院の生活豊かなれば猶多くの僧を容るべき

(二)多くの民の住む處となる筈なりし

この説はボツカツチヨがこの僧院の院主を訪へる時院主かたりてこのあたりの高地を領する侯伯の中、瀧のあたりに一城市を築きて近隣の都邑をひとまとめにせんとの計畫をたつるものありしも

事行はれずしてやみたりといへりといふにもとづく

(3)この一句を瀑に附し、その量その高さ裕に千の飛瀑となりて
落ちくだるに足るべきにたゞ落ちに落下りて

一〇六一—一〇八

【紐】豹は第一曲に見ゆる如く情慾の象徴なり、之を捕ふるために用ゐし紐は慾を抑へんとする人間の努力修養若しくは結縁の誓ひなり、ダンテ既に邪淫の兩界を経この罪の誘ひに勝つべき信念を得るにいたれば今は紐を帶ぶる必要を見ず、またウエルギリウスは便宜上その必要なき物を借り之を相圖としジェーリオネを呼べるなるべし（ノルトン C. E. Norton 註参照）

一二四—一二六

ダンテの詞地の文

【恥】眞を語りてしかも人に偽りなりとおもはるればなり

一二七——二九

【喜コメディア劇

】ダンテはカン・グランデ・デルラ・スカーラに與へ

し書二一八行以下にこの詩を喜劇といふは地獄の不幸にはじまりて天堂の幸に終り且つ記すに俗語を以てしたればなりといへり

第十七曲

ジェーリオネ岸にあらはれて後ダンテは導者と別れてそのあたり

なる第三の圓第三種の罪人即ち高利貸の群に入りこゝにファイレンツエ及びパードヴァの人々な見、やがてかへりて導者と共にジェーリオネの背に跨がり斷崖を下りて第八の地獄にいたる

一―三

【獸】ジェーリオネ（ゲリユオン）ダンテはたゞ名を傳説に借りるに過ぎず、神話に見ゆるジェーリオネはヘラクレスに殺されし三頭三體の巨人にて『神曲』中のものと全く異なればなり
ジェーリオネは欺罔の象徴なり、尖れる尾を持つは人を害するをいひ山を越え垣と武器を毀つは自然も人工もその行方を遮りとゞむること能はざるを示せるなり

四―六

【踏來れる石】詩人等の歩み來れるフレジエトンタの岸

一〇—一二

ロセツテイ (G. Rossetti) 曰、欺罔はまづ義人の顔によりて人の信を得次にいろどれる體をもて人を惑はし後尖れる尾を動かして人を撃つと

一三—一五

【係蹄】人を誘ひ陥るゝしるし

【小楯】欺罔を蔽ひかくすしるし

一六—二四

タルターロ 韃靼人及びトルコ人共に織物にて名高かりしなり

【アラーニエ】アラクネ、神話にいつ、有名なるリディア (小ア

ジア)の織女、女神アテナとその技を争ひ死して蜘蛛となる(オ
 ウイテイウスの『メタモルフオセス』第六卷の始めにくはし)

戦ひ求めて魚を捕へんとして、こは海狸が屢 尾を水に垂れて岸
 にうづくまることあるより起れる俗説なり

二五―二七

【蠍】黙示録、九・一〇参照

三一―三三

【右】地、九・一三〇―三二註参照

三四―三六

【民】人の技に背ける罪人即ち高利貸

五二―五七

【囊】家紋を附したる財囊にて在世の日と同じくこれをみて目を喜ばすなり

五八―六〇

黄地に空色の獅子を出せるはグエルファイ黨に屬するフィレンツエの名門ジャンフィリアツテイ家の紋

六一―六三

赤地に白鷺を浮べしはギベルリニ黨に屬するフィレンツエの貴族ウブリアーキ家の紋

六四―六六

白地に空色の牝豚をあらはせるはバードヴァ市スクロヴェーニ家の紋

六七―六九

【生くるが故に】世に歸りてわが言を人に傳へうるため

【ヴィターリアーノ】古註曰、ヴィターリアーノ・デル・デンテといひパートヴァの人なり、一三〇七年その郷里のポデスタとなると

【左に】罪いよく大なればなり

七〇―七五

【まれなる武夫】反語、此者はジヨヴァンニ・ブイアモンテといひフィレンツェ第一の高利貸なりきといふ

ラーナ (Lana) の古註に曰、ブイアモンテ家の紋は青地に金にて三の鳶の嘴をあらはせるものなりきと

七六一七八

【誠めし】四〇行

八二一八四

【かゝる段】アンテオの手によりて第九の地獄に下り（地、三一・一三〇以下）ルチーフエロの毛にすがりて地心を超ゆ（他、三四・七〇以下）

八五―八七

【瘧】 quartana 四日目毎に起る間歇熱

八八―九〇

【戒め】八一―二行

九四―九九

【めづらしき】地、一二・二八―三〇参照

一〇六―一一四

【フェートン】ファエトン。神話に曰、ファエトンはヘリオスとクリメネの間の子なり、一日父に請ひその火車をめぐらせしにこれを曳ける馬御者を侮り軌道を逸して天に近づく、ゼウス、火焰の宇宙を焼盡さんことを恐れ電光を投じてファエトンを殺せり

(オウイデイウスの『メタモルフオセス』第二巻の始めにくはし)
 【今も見ゆる】銀河を天の焼跡と見做せるなり

ダンテの銀河説は『コンヴィヴィオ』二・四四―八六にいつ

【イカール】イカルス、神話に曰く、イカルスはダイダロス(地、一二・一〇―一五註参照)の子なり、父の作れる翼を身につけ父

と共にクレタを去りし時その教に背きて高く飛び日に近づけるた
め翼を支へし蠟熱によりて溶け海に陥りて死す（オウイデイウス
の『メタモルフオセス』八・一八八以下に委し）

一一八―一二〇

【項】原語、頭

一二四―一二六

【禍ひ】第八獄の刑罰

一二七―一二九

【呼ばず】（地、三・一一五―七註参照）、飼主に呼ばれもせず

捕ふべき鳥もなく

一三三―一三五

【削れる岩】第七と第八の地獄の間の斷崖

第十八曲

第八の地獄はマーレボルジエと呼ばれ十の囊ボルジヤより成る、兩詩人ジ
 エーリオネの背をくだりて後次第に中心にむかふにあたりまづ第
 一囊に己または人のために女を欺けるものゝ鬼に鞭たるゝを見、
 次に第二囊におもねりへつらふものゝ糞土にひたるをみる

一―三

【マーレボルジエ】（禍ひの囊）第八獄の總稱、十個の圈状の溪

より成る、詩人等がジエーリオネの背に跨がりて下れる斷崖の下より岩石流れ出で溪と溪との間の堤を橋脚として多くの橋となり中央の坎に達す、しかして斷崖上りこの坎に近づくに従ひ地は次第に下方に傾斜せり（地、一九・三四―五及び二四・三七―四〇）
Bolgia は囊の一種なり、溪を囊といふはその中に罪人ををさめて恰も長き囊の如くみゆればなり

【圈】第七と第八の兩獄の堺にある斷崖

四―六

【坎】第九の地獄この坎の底にあり

七―九

【岸】斷崖、三行の圈と同じ

一〇—一五

【闕】城門の

一六—一八

【石橋】原語、岩、破岩溪の上を過ぎて橋となれるもの

【坎は】多くの石橋四方より皆中央の坎にあつまり坎にいたりて盡く、その状恰も車の輻の軸に聚まるに似たり

二五—二七

第一囊は中央より分たれて二の輪となりその中なる二種の罪人互に反對の方向に進む、外の輪には人の爲に女を欺けるもの内の輪には己のために女を欺けるものあり

二八—三〇

【ジュビレーオの年】罪の赦の年（一二九九—一三〇〇年）

このジュビレーオは法王ボニファキウス八世の令旨によりて行はれき、乃ち法王は一二九九年のキリスト降誕祭より向ふ一ヶ年間すべてローマに集まる巡禮者にしてこの地に十五日を過し且つ聖ピエートロ聖パウロの兩寺院に詣でてその罪を懺悔するものに大赦を宜せるなり、この時ヨーロッパ各地より集まり來れる旅客の數莫大なりければ此等の者に對する取締り保護の方法種々ありし中にダンテのこゝに引用せる一項ありき、即ち聖アンジェロの橋を縦に一個の柵をしつらひ聖ピエートロの寺院にゆくもの及びそこより歸る者に往來の故障なく各その方向に従つて橋を渡るをえせしめしことこれなり（ノルトン）

三——三三

【カステルロ】カステルロ・サンタンジエロ、もとは歴代皇帝の靈廟なりしが六世紀にいたり市民これを城に代へたり、聖アンジエロ橋の右側にあり

【サント・ピエートロ】カステルロの西にあり、使徒ピエートロ（ペテロ）この墓の上に建てられし大寺院

【山】橋の左にあるモンテ・ジオルダーノを拜せりといふ
三四—三六

【鞭】*ferze* 棒の先に多くの革紐をつけしもの
四九—五一

【ヴェネデイーコ・カッチアネミーコ】一二六〇年より同九七年

までボローニアなるグエルファイ黨の首領たりしもの

【サルセ】*salse* サルセまたは藥味、註釋者曰く、ボローニアの附近にサルセと名づくる溪ありて昔處刑せられし罪人の遺骸こゝに棄てられ罪輕き者こゝに策たれしことあれば辛き藥味即ち苦しみの場所と兩義に通はして用ゐしなりと

五二―五四

【明かなる】善くボローニアの事に通ぜるを示す

五五―五七

【侯】フェルラーラの市の侯爵にてエステイ家の者なりといふ、名不明

【ギソラベルラ】ヴェネデイーコの姉妹

五八一六三

我と共に此處に罰せらるゝボローニア人は今現に世に住むボローニア人よりその數多し

【サヴェーナとレーノの間】ボローニア、サヴェーナとレーノは東西よりボローニアを插みて流るゝ川の名なり

【シパ】sipa ボローニアの方言にてシアsia (si 然り) の意に用ゐる、故にシパといひならふ、舌はボローニアの方言を用ゐるもの即ちボローニア人なり

六四一六六

【騙すべき】da conio 或ひは人に取持ちて錢にすべき、錢のために己が身を賣る等の意に解する人あり

七〇―七二

【永久の圈】第七獄と第八獄第一囊の間の岸、永久は地、一・一
一四不朽の地と同義なるべし

七九―八一

【群】己のために女な欺けるものゝ群

八五―八七

【ヤーソン】イアソン、神話に名高き『金の羊毛』の勇士、テッサリアの王アイソンの子なり、金の羊毛をえんためアルゴナウタイ遠征隊を組織し自らその長となりてコルキス（黒海の東にあり）に渡れり

八八―九〇

【レンノの島】レムノス、エーゲ海中の島

アプロディテこの島の女の己を敬はざるを憤りこれを罰せんためまづ男子をして女子を疎んぜしむ、女子怨みのあまり相謀りて立ち島中の男子を麀にす

九一—九三

【イシファイレ】ヒュプシユピレ、レムノス王トアスの女、男子殺戮の事ありし時父を殺せる如く装ひてひそかにこれを助け自らレムノスの女王となれり

【智】異本、しるし（戀の）

イアソンは遠征終らばヒュプシユピレを娶りて妻とせんと約し女雙兒を孕める後コルキスにむかへるなり（淨、二六・九四—六

参照)

九四―九六

【メデーア】メデイア、コルキス王アイエテスの女なり、イアソンを慕ひ妖術を以てこれをたすけて羊皮を得せしめこれに従ひてギリシアに赴き後棄てらる

九七―九九

【牙に罹る】これにとらへらるゝ

一〇〇―一〇二

【細路】石橋

【弓門】溪の上なる石橋の弓形なるをいふ

一一五―一一七

【緇素を判ち】剃髮せるや否やによりて

一二一—一二三

【アレツシヨ・インテルミネイ】ルツカ市の貴族、一二九五年の末猶生存せりといふ、傳不詳

一三三—一三五

【タイデ】タイス、名高きアテナイの遊女なり、トラソオなるものタイスの歡心を買はんため幫間グナトオを介してこれに奴隸の一少女を贈り使歸れる時タイスの喜びいかなりしやを問へるにいと厚く禮を陳べたりと答へきといふことローマ詩人テレンティウス（前二世紀）の喜劇『エウヌクス』三幕一場の始めにありとい

ふ

或曰、キケロの『友情について』にいづるタイスの物語には對話者の誰なりといふことあきらかならず、さればダンテこの書によりてトラソオが直接タイスに問へる如く記せしなるべしと

第十九曲

第三囊にはシモニアを行へるものあり倒さまに孔の中にいけられたゞ足のみな外にいだし且つそのあしうら火に焼かる、詩人等堤を下りてそのひとりニコラウス三世とかたり後第四囊の橋上にいづ

一―六

【シモン・マーゴ】（魔術者シモン）、サマリアに住める魔術者にて使徒ピリポより洗禮を受けし後錢を持來りペテロ及びヨハネに聖靈を授くる力を與へんことを求めし者（使徒八・九―二四）
 「シモニア」なる語（地、一一・五五―六〇註參照）はこのシモンよりいでしなり

【今喇叭は】われ今こゝに汝等の罪業を公にすべし
 七―九

或ひは、我等既に石橋のまさしく濠の眞中にあたれるところに登りて次の墓（乃ち第三囊）の上にある弓門の

【次の】第三囊の上なる弓門の

一〇—一二

【禍ひの世】地獄

【頒ち】賞罰を

一六—二一

【聖ジヨヴァンニ】フィレンツエ市にある聖ジヨヴァンニの洗禮所

堂内には中央の柱をめぐれる一大水盤あり水盤の外部を固めし大理石の中には四ヶ所に長圓形の孔を設け僧の稚兒に洗禮を授くる時この中に立ち水に近きと（當時すべて浸禮を用ゐしなり）群集を避くるの便あるをはかれりといふ

【碎ける】古註曰ふ、曾て堂内に群集雜沓して孔のあたりに争へ

ることありしに一人の小兒その中に陥り人々これを引出さんとつとめしも能はざりしかばダンテ斧を揮つて大理石を破壊し小兒を死より救へるなりと

【人の誤り】聖物破壊の事をあしざまにいひ傳ふる人ありしより理由をあげてその妄を辯ぜるなり

二五—二七

【綱、組緒】ritorte は若枝を搓りて作れる綱 *strambe* は草をあみて作れる綱（或ひは若枝を組合せて作れる綱ともいふ）

三一—三三

【猛き】異本、赤き

三四—三六

【低き】第八の地獄は中央の坎に向ひ次第に下方に傾斜するが故に内の岸は外の岸より低し（地、一八・一―三註参照）

三七―三九

【黙して】地、一〇・一六以下及び地、一六・一一八以下参照

四三―四五

【脛にて】脛を振りて苦をあらはすものゝ孔あるところ

四九―五一

詮釋者曰、中古の刑罰に暗殺者を逆さにして地に掘れる穴にいれ土塊を投じて次第に穴を埋めしことあり、かゝる刑に處せられし罪人が既に穴に入りたる後懺悔僧を呼戻して罪を告白し暫しの命を延べんとせしこと珍らしからずこれ懺悔の間は刑吏土塊を投ず

ることなければなりと

五二―五四

【彼】ニコラウス（ニコロ）三世、一二七七年より一二八〇年まで法王たり

【ボニファーチヨ】ボニファキウス八世、一二九四年より一三〇三年まで法王たり

【書】未來記

ニコラウスはダンテをボニファキウス八世と誤り思へるなり、ボニファキウスの死は一三〇三年にてニコラウスは地獄の罪人の未來をしる例によりてこれを知りゐたるに今は一三〇〇年なればか
くいへり

五五―五七

【欺いて】謀を以てチエレステイーノ（ケレステイヌス）五世に法王の位を退かしめしをいふ（地、三・五八―六〇註参照）

【淑女】寺院、淑女をとらふは法王となること

【虐ぐ】シモニアを行ひて

七〇―七二

【牝熊の仔】オルシーニ家の出

ローマのオルシーニ家は家紋に牝熊（オルサ）を用ひ古くより牝熊の裔の名ありきといふ

【上には】世にある日は財貨を囊に入れ地獄にくだりてはわが身を囊（孔）に入る

【熊の仔等】一門

七六一七八

ボニフアキウス來らば我もこの孔の下に沈みゆくべし

七九一八一

ニコラウスのこの時まで足をさらせし日の數はボニフアキウスの足をさらすべき日の數より多し

ニコラウスは一二八〇年の八月より一三〇〇年の四月までボニフアキウスは一三〇三年の十一月より一三一四年の四月まで

スカルタツツイニ曰、ダンテ若し史實に據りてかくいひしならば『神曲』のこの一部の一三一四年四月以後に成れるものなること知るべしと

八二―八四

【牧者】法王クレメンス五世、一三〇五年ベネデクトウス十一世（一三〇三年ボニファキウスに次ぎて法王となり、在位九ヶ月にして死す）の後を承け一三一四年四月に死す

【西の方より】クレメンスはガスコニー（フランス）の生れにて
ボルドー（フランス）の僧正なりければ

【法を無みし】法王廳をローマよりフランスのアヴィニオンに移せるは彼なり。またシモニアを行ひ性貪婪にして放縱なりきといふ

八五―八七

【ヤーソン】イアソン、ユダヤの祭司の長なるシモン二世の子、

シリア王アンティオコスに金を與ふることを約して祭司の長となれり（マツカベエイ後、四―五章）

クレメンスがフランス王フィリップ四世の歡心を買ひて法王となる事これと相似たり

【また王】シリア王アンティオコスのイアソンに厚かりし如くフランス王フィリップ、クレメンスに厚からむ

八八―九三

【愚なる】或ひは、大膽なる

【我等の主】マタイ、一六・一九、鑰は天國の鑰なり

【我に従へ】マタイ、四・一九 マルコ、一・一七等

九四―九六

ピエートロ（ペテロ）及び其他の弟子等ジユダ・スカリオット

（イスカリオテのユダ）の死後マツティア（マツテヤ）をえらびて使徒とせり（使徒、一・一五―二六）

【ピエル】ピエートロ

九七―九九

【カルロ】ナポリとシケリアの王シャルル・ダンジュウ（カルロ・ダンジオ）

ヴィルラーニの記録に曰、法王はシャルルが結婚の申込を拒めるを含みローマの議官及びトスカーナの僧官たる資格をシャルルより奪ひ、さらにジョヴァンニ・プロチダなる者より賄賂を受けて陰謀をめぐらし、死後かの有名なるシケリアの虐殺（一二八二年

フランス人の虐殺)を見るにいたれるなりと

一説にはこゝに所謂不義の財貨とはニコラウスが寺院所屬の十分一税を私せるを指せるなりともいふ

一〇六一—一〇八

【編める者】ヨハネ傳を編める者、黙示録の著者と同一なりとの説に従へるなり

黙示録第一七章に水の上に坐せる女の事いづ、但しその記事その寓意に於て聖書とダンテと必下しも同一にあらず黙示録の中なる女は七の頭と十の角を持ち且つ獸に乘れり(一七・三)、その解に曰、水は諸民なり(一七・一五)七の頭は七の山なり(一七・九)十の角は十の王なり(一七・一二)と

今ダンテの女につきて註釋者の説を聞くに、曰、女は法王の下なるローマ若しくは寺院なり淫を諸王に鬻ぐは諸王の歡心を求むるを事とするなり七の頭は七のサクラメンテ聖式なり（或曰、聖靈の七の賜と）十の角はモーゼの十誡なり乃ち寺院は靈の賜をうけその夫即ち法王は徳を慕ひかくして始めて十誡によりて寺院の寺院たる眞を證せらるゝ（若しくは寺院の威力を之によりてうる）なりと

一一二——一四

【彼等】イスラエルの民、彼等金の犢を鑄てこれを拜せること出エヂプト、三二・四、八等にいづ

或曰、廣く偶像信者を指していへりその拜する神多けれども黄金崇拜者の百に對し一に當るべき割合なるの意と

【百】金貨銀貨一として神ならぬはなし（地、三〇・一一七参照）
一一五―一一七

【コスタンティーン】皇帝コンスタンティヌス一世（二七四―三三七年）、キリスト教に歸依し時の法王シルヴェステル一世にローマの領地を供物として捧げたりとの説ありて中古事實と認められしも、而後その訛傳に過ぎざること證明せらるゝにいたれり

【父】シルヴェステル一世（三一四年より三三六年まで法王たり）
、前項記戦の供物を受けて法王中最初の長者となれるなり、またかく富を得たるがために其後の牧者心を利慾に注ぎ従つて寺院の腐敗を招くにいたれり

此曲の中一〇六行より一一七行に互る四聯は地、一一・八一―九行

とともに十七世紀の始めイスパニアの宗教裁判所に於て新に出版せんとするダンテの『神曲』中より削除すべき事を命ぜり（ムーア『ダンテ研究』二卷七頁脚註參照）

第二十曲

第四囊の橋上にいたれば魔術ト筮等によりて人を蠱惑せる者背を前にして歩み來れり、ウエルギリウスその中數人を指示してダンテに教へまたマントと名づくる卜者のことより郷里マントヴァの由來に説き及び後共に第五囊にむかふ

一—三

【第一の歌】地獄即ち深淵の中に沈める者の歌

七—九

【祈りの行列】祈りの歌をうたひつゝしづかに歩みゆく寺院内の行列

二八—三〇

【慈悲全く】ダンテは *pieta* を慈悲と敬虔との兩意に用ゐて文飾とせり、罪人に對する慈悲心亡びて（地、二・九一—三參照）初めて神に對する敬虔の念生く

【神の審判にむかひて】神の審判により罰をうくる者にむかひてウエルギリウスの意は同情を寄するに足るざる罪人をあはれむは

神の審判を誹議するに等しければ許すべからざる罪なりといふにあり、眞に同情を寄するに足るべき罪人に對してはウエルギリウス自身憐みのため色を變ずるにいたれることあり（地、四・一九—二一）何ぞダンテのフランチェスカ、チャツコ及びヤーコポ・ルスチクツチ等に對する同情を責むべき

三一—三六

【アンファイアラオ】アンファイアラオス、ギリシアのト者、テバイを圍める七王の一（地、一四・六七—七二註參照）なり、テバイ攻圍中ゼウス電光を投じて大地をひらきアンファイアラオスを地獄に陥る

四〇—四二

【ティレージア】テバイのト者、嘗て森に入り二匹の蛇の交はれるを見、杖にて撃ちて放れしめしにその身變じて女となれり、七年の後再び此等の蛇を見しかばまたさきの如く撃ち、ここに再び男にかへれり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』三・三二四以下）

四三―四五

【雄々しき羽】髯

四六―四八

【アロンタ】エトルリア（イタリア）のト者、カエサルとポムペイウスの間で戦ひありし時前者の勝を豫言せりといふ

【ルーニ】イタリアの西北海岸マーグラの河口に近き町、この町

今は僅かに荒廢の跡をとゞめ名はこの地方の總稱なるルーニジア
ーナとなりて存するに過ぎず、ルーニの山はカルラーラの山をも
含むなり

四九―五〇

【大理石】カルラーラの大理石坑はローマ時代よりすでに世に知
られたりといふ

五五―五七

【マント】ティレージア（四〇行）の女

【わが生れし處】マントヴァ市をいへりされどウエルギリウスの
生れし處はマントヴァ市の附近なるアンデスなり

五八―六〇

【バーコの都】酒神バツコスを守護神とせる町、乃ちテバイ、エテオクレス兄弟の死後（地、二六・四九―五四註参照）クレオンなる者テバイを治めて虐政を布キテバイはたゞ屈從を事とせるのみ

六一―六三

【上なる】地獄に對して世界を上といふ

【ティラルリ】ガルダ湖の北方メラノに近き城、もとドイツ領たり、アルピ連峰の一部此上に聳ゆ、湖上最初のドイツの城なれば獨逸（ラーマニア）を閉すといへるなり

【ベナーコ】今のガルダ湖

六四―六六

【ガルダ】湖東の城

【ヴァル・カーモニカ】湖水の西北にあたる溪、延長五十餘哩

【アペンニノ】異本ペンニノとあり、ガルダ湖附定の連山を指せるならんも不明なり、所謂アペンニノ連峰にはあらず

六七―六九

【一の處】不明、或ひはフラーチと稱する一小島なりといひ或ひはチニアールガの河口といひ或ひは想像の一地點に過ぎすといふ、此處はトレント（湖北）、ブレシヤ（湖西）、ヴェロナ（湖東）の牧者の管轄地互に境を接する處なれば三の中いづれの管轄地より來る僧もこゝに立ちて十字を截りてわが牧する民に祝福を授くることを得べし（僧の公けに祝福を授くることは己が管轄地内に

のみなしうべき定めあればなり)

七〇―七十二

【ペスキエーラ】ガルダ湖の南端にあるヴェロナ人の城

【ベルガモ】ブレシヤの西にあり

七六―七八

【ゴヴェルノ】今ゴヴェルノロといふ、ミンチョの右側にある邑

七九―八一

【夏は】夏時往々地乾き汚水處々に停滞して市民の衛生を害することあり

九一―九三

【占】昔土地に新に名をつくる時は卜筮によりてその名をえらぶ

習ありきといふ

【マンツア】マントヴァ

九四―九六

【カサロデイ】ブレシヤの一城主カサロデイ家のアルベルト伯なる者マントヴァに君たりし時（一二七〇年頃）この地の名族ピナモンテ・デ・ボナーコルシ、市の平和の爲と稱しアルベルトに勸めてまづ多くの貴族を市外に逐はしめ後遂にアルベルトを逐ひ自らマントヴァの君となれり

九七―九九

【由來】『アエネイス』一〇の一九八以下には

オクヌスもまた一隊を率ゐて故國の岸より來れり、彼は卜者マン

トとエトルリアの川（テーヴェレ川）の間の子にて、マントヴァよ、汝に石垣と母の名を與へし者なり

とあり、ダンテの説とウエルギリウスの説に多少の差あること知るべし、思ふに或人の云へる如くダンテは當時の傳説若しくは記録に據りて一種の由來説を得たればこゝにウエルギリウスの口を借りてかく陳ぶるに至れるならむ

一〇六一—一〇八

【男子なく】丈夫悉くトロイアの戦ひに赴き幼兒新に生るゝことなければ搖籃多くは空しきなり

一〇九—一一一

【卜者】ギリシア軍中の卜者エウリピロス

【カルカンタ】同じくギリシア軍中の卜者

【アウリーデ】アウリス。ギリシア軍のトロイアにむかひて船出せし港

一一二—一一四

【悲曲】『アエネイス』。これを悲曲といへるは詩材文體の高逸なるによりてなり（ダンテの『デ・ウルガリー・エーロクエンチアー』二、四の三八以下）

【いづこにか】二の一一四以下

『アエネイス』にはたゞ反問者シノンの詞の中ギリシア軍がトロイアを去らんとしてエウリピロスにアポロンの宣託を受けしめし事あるのみアウリス解纜に關しては何等の記事なし、されば或人

はこゝにかく歌へるといへるは彼の卜者なることを歌へる意に外ならずと解せり

一一五——一七

【ミケール・スコット】スコットランドの人、十三世紀の始めロ
ーマ皇帝フリートリヒ二世の朝に仕へて妖術を行へりといふ

一一八——二〇

【グイード・ボナツテイ】イタリア、フォルリの星學者（十三世紀の後半）

【アスデンテ】イタリアのパルマ市の靴師、マエストロ・ベンヴェヌートといひアスデンテはその綽名なり、本業の傍卜筮を習ひ遂には卜者として世に知らるゝにいたれり（十三世紀の半）

一一二——一二三

【草】或種類の草の液を用ゐて術を行ふこと、オウイデイウスの『メタモルフオセス』第七卷（二三二行以下）にメデイアがイアソンの父を若返らしめんとて多くの奇しき草を集め根を煎じてその液を用ゐしこといづ

【偶人】人の形を蠟の類にて作り或ひは火にかけ或ひは頸に針を打ちて術を行ふこと

一二四——一二六

【カイノと茨】月

月の斑点の形人に似たるより古の俗説にこはカイン（カイノ）

（創世記第四章始め）が賞罰をうけ神に顧みられざりし野の植物

を肩にして立てる姿なりといへるによれり（天、二・五以下参照）

【南半球】南半球は聖都エルサレムと淨火の山を二個の頂點としイスパニアとインドの一部を境として分割せる南北二個の半球（三二六頁插圖参照）、その境を占むるは地平線にかゝるなり

【ソビリア】ソビリア、イスパニアの西南にある町、月の沈むは年前六時頃

一二七—一二九

【昨夜】四月八日の前の夜にてこの時よりいへば一昨夜なり

【しばく】しばく路を照して

第二十一曲

かくて第五囊の上にいたれば下には煮ゆる脂たゞへ公私の職を利用して己の慾をはかれる者其中に沈めらる、ウエルギリウス、ダントを岩蔭にかくし自らまづ進みて第六の堤に達し鬼の長マラコダとかたり後ダントを呼びて一群の鬼と共に左に堤を傳ふ

一—三

【コメディア】地、一六・一二七—九註參照

七—九

【船廠】ヴェネツィア市の東端にあり、中古、世に名高き船廠なりしといふ

一〇——二

【彼等】ヴェネツィア人

三七—四二

或ひは、彼いふ我等の橋のマーレブランケよ

【マーレブランケ】（禍ひの爪）第五囊を守る鬼の總稱

【聖チタ】ルツカ市

聖チタは一二一八年ルツカの西北約五十哩にあるボントレモリの附近に生れ無垢の一生をルツカに送り一二七二年に死せる比丘尼の名なり、ルツカの人々特に尊び敬ふをもて町の名の代りとす

【アンチアン】ルツカ市の行政官、十人あり

【ボンツォロ】一四世紀の始めルツカ民黨の首領となれるものに

て古註に汚吏の隨一とあり、外は反語なり

【否、然】ラーナの古註に曰、ルツカの公會にては議事の採決をなすにあたり二個の投票箱を會場に持來り其一には然の投票を入れしめ他には否を入れしむる例あり、かゝる時黄白のために心迷へる議員等否の投票をなすべき場合にも然をもて之に代らしむること屢ありと

四六―四八

【聖顔】「サント・ヴォルト」は昔東方より傳來しルツカ市聖マールチーノの禮拜堂に安置せられし木製十字架上のキリストなり、ラーナ曰、ルツカの人冥助を祈ることあれば、サント・ヴォルトよ今我を助けたまへといふを例とせりと

橋下の鬼等かの罪人が背を脂の外にあらはし恰も神前にぬかづく
如くなるをみて嘲りてかくいへるなり

四九―五一

【セルキオ】ルツカの附近を流るゝ川、ルツカの人々夏の日よく
この河水に浴せりといふ

五二―五四

【盗みうべくば】脂の上に浮くべき機會を

五五―五八

【厨夫が庖仕に】厨人（くりやびと）がその下廻りに（改譯より）
六一―六三

【さきにも】地、九・二二以下參照

七六一七八

【マラコダ】（禍ひの尾）第五囊の鬼の長

七九―八四

【我等を】異本、我を

九四―九六

【契約】生命の安全を降服の條件として

【カープロナ】アルノ河畔にありしピサ人の城、一二八九年八月
ルツカとフィレンツェの同盟軍攻めて之を陥る、ダンテは戦闘員
としてフィレンツェの軍中にありしかばピサの歩兵の敵前を通過
するさまを此時したしくみしならんといふ

一〇九―一一一

【石橋あり】マラコダの虚言、策六囊にては壞れざる橋一もなきなり（地、二三及び二四）

一一二——一四

地獄内なる岩の崩れはキリスト磔殺の當時に起れり（地、一二・三七以下）而してダンテの信ずる所によるにキリストの死せしはその三十四歳の時の聖金曜日なり（『コンヴィヴィオ』四・二三の九五より一〇七まで）、今、中古の計算に従ひ三十四年に一六六六年を如ふれば即ち神曲示現の年なる一三〇〇年を得べし、聖金曜日はダンテの地獄に入りし初めの日なれば一夜を其中に過して今は昨日となれるなり、またキリストの息絶えし時即ち第六時（ルカ、二三・四四）をダンテは正午と解したれば（『コンヴィ

ヴイオ』四・二三、一〇七）これより五時を引去る時は朝の約七時となる、さればマラコダの兩詩人とかたれるは一三〇〇年型金曜日（四月九日）午前七時の頃なりとしるべし

一一八一—一二三

ダンテが一々鬼に名を附せしはこの後起らんとする事柄を明瞭に讀者の腦裡に印せんとするにあり、されど此等の名をえらぶにあたりていくばくの用意ありしやあきらかに知り難し、この中には翼犬鬚龍等を編込めるもあれどもまた音調以外に何等の摸索し得べきものなきもあり。おもふに附會の説によりてしひて解釋を求むるは詩人の本意にあらざるべし、また此等の名は詩人時代のフイレンツエの行政官或ひは黒黨の首領等の名を巧みに作り變へし

ものなりとのロセツテイの説は一部のダンテ學者の認むるところなれどもダンテがかゝる姑息の手段によりてその鬱憤を洩せりとは信じ難きに似たり

一二四―一二六

【岩窟】すべての溪（十の囊）をいふ

一三六―一三六

【齒にて】兩詩人の欺かるゝを嘲り長と相圖をあはせしなり

第二十二曲

兩詩人と共に堤をゆける鬼脂の中よりチャムポロなる者をとらへ岸に引上げて之を苛責す、この者詩人等に己とその侶の事を告げし後鬼を欺いて再び脂に沈み遂に鬼と鬼との争を惹起すにいたれり

一—三

【軍を整へ】或ひは、兵を閲し

四—九

【アレツツオ】カムバルデーノ（アレツツオ市の北アルノの溪の戦場なり、一二八九年アレツツオ人こゝにフィレンツエ軍と戦ひて敗る）の戦ひの折を指せるならん、ダンテはこの時フィレンツエ騎兵の中に加はりゐたりといへば

【鐘】フイレンツエ人戦時にマルチネルラと名づくる巨鐘を鳴らし後之を戦場に曳きゆきその響きによりて士氣を鼓舞するを例とせりといふ

【城の相圖】晝は旗または烟、夜は烽火

【物】樂器

【軍、軍と】*torneamenti* は馬上の競技、組に分れて行ふもの

【兵、兵と】*giostra* 同上、一騎打

一〇—一二

【笛】*cennamella* 戦時に用ゐし笛の一種、奇しき笛は肛門の喇叭(地、二一・一三九)と同じ

一九—二一

海豚が背を水上にあらはして船を追來るは海に嵐起る前兆なりといふ事此頃一般に信ぜられきといふ

三七―三九

【えらばれし】マラコダに（地、二一・一一八―二三）

四六―四八

【我】古註にナヴァルラのチャムポロなりとあり、傳不詳

【ナヴァルラ】ナヴァール、イスパニアの東北にあり

四九―五二

【身】身を失へるは自殺せるをいふ

五二―五四

【テバルド】ナヴァルラ王テバルド二世（一二五三―一二七〇年

間王たり)を指せるなるべしといふ

【債を償ふ】 *rendo ragione* ムーアの引照せるルカ、一六・二には
rendi ragione del tuo governo とあり

六四―六九

或ひは、導者すなはち(日ふ)いざ告げよ脂の下なる罪人の中汝の識れるラチオの者ありや

【ラチオの者】イタリアの者。ラチオ(ラティウム)はローマを含めるイタリア一部の古名

【隣の者】イタリアに隣れるサールデイニア島の者
七九―八四

【ガルーラ】一〇一七年ピサ人サールデイニアをサラセン人よ

り奪ひ之を四州に分つ、ガルルーラはその一にして島の東北にあり

【ゴミータ】サルディニアの人、ガルルーラ州の知事なるウゴリーノ（或ひはニーノ）ヴェスコンティに仕へ祕書官となりてその信任を得たり、會　ニーノ敵を攻め多くの捕虜を得て之を獄に下せることありしにゴミータ賄賂を受けてひそかに彼等を自由の身となし事覺はるゝに及びて絞罪に處せらる

八五―八七

【穩かに】di piano 詮議に及ばず、しかるべき手續を経ずして
ゴミータの首をそのまゝ借り來れるなり

八八―九〇

〔ロゴドロ〕サールデイニア四州の中西北の一州

〔ミケーレ・ツアンケ〕ロゴドロ州の知事たりしエンチオ（フリートリヒ二世の庶子）、ボローニア人に捕はれし時ミケーレこれに代りて政務を司り、一二七一年エンチオ死して後その寡婦アデラーシアを娶り一女を生む、一二九〇年頃その女婿ブランカ・ドーリアこれを殺せり（地、三三・一三七以下参照）、「ドンノ」は敬語

〔善く彼と語る〕或ひは、尊く彼と會す

九一―九三

〔瘡を引搔かんとて〕卑しき俗言、用捨なく打つこと

九七―九九

【トスカーナ、ロムバルディア】まづサールデイニアの者をあげ次にイタリアの者の事をいふこれチャンポロの奸智なり

一〇〇——一〇二

【禍ひの爪】鬼（地、二一—三七—四二註参照）

一〇三——一〇五

口笛を相圖に鬼のゐざるを知らして侶を招くなり

【七人】多數をいふ（地、八・九七—一〇二註参照）

一〇九——一一一

鬼を欺くのあしきをいへるカーニヤツツオの詞をうけて侶を欺くのあしきにいひかへたるチャムポロの奸智

一一五——一一七

【頂上を棄て】第五と第六囊の間の堤の頂を下り少しく六囊の方にむかひ岸を隔とし

一一八—一二〇

【心なかりしもの】カーニヤツツオ、或曰カルカブリーナと鬼皆背を脂にむけしなり

一二一—一二三

【長】九四行の大なる長バルバリツチャ

或曰、*proposto* は企の意にてチャムポロが鬼の引裂かんとする企をまのがれしをいふと

一三三—一三五

カルカブリーナはアーリキーノ（アリキーン）にむかひて怒りを

起せるなり

一四八

【かなた、こなた】彼岸に飛びゆける四の鬼及びあとに残れる長
と三の鬼

【上層の中に焼かれし】脂の表近きところに焼かれし

一説に曰、*crosta* は鬼の皮膚の脂に焼かれて硬くなりたるものを
指しその中にといへるはかたき皮膚を透して既に肉まで焼け初め
し意をあらはせるなりと

第二十三曲

詩人等たゞふたり堤を傳ひて進むうち鬼後より追來ればウエルギリウスはダンテを抱き逃れて第六囊の中にくだる、こゝには鉛の衣を着し偽善者の群あり、そのうちボローニアのカタラーノなる者その侶ローデリngoと共に來りてダンテとかたりまた路をウエルギリウスに教ふ

一―三

【ミノリ僧】フランチェスコ派の僧、古註曰、此等の僧路を行く時は上位の僧をさきになりて相前後せりと

四―六

【イソポの寓話】アイソポスの寓話、蛙と鼠あり共に放して水

邊にいたる、蛙は鼠をたすけて水を超ゆべしといひて之を欺きその足と己が足とを結びあはせ水深き處にいたりて溺れしむ、會一羽の鳶（或ひは鷹）鼠の水に浮ぶをみて之をひきあげ、はからずも生ける蛙を得たり

中古専ら行はれしラテン語譯の『アイソポス物語』の中には往々類似の寓話（所謂アイソポス以外の）をも收めし者ありて區別明かならず、蛙と鼠の話もまたその一なりといふ

七一九

【モとイツサ】 mo e issa 共にラテン語より出でし今の義

カルカブリーナのアーリキーノを害せんとせるは鼠の蛙を水に溺れしめんとせるに同じくその相争ひて脂の上に落ちしは蛙と鼠と

共に鳶に捕へられしに似たり

二五―二七

【鏡】原語、鉛ひきし硝子

二八―三〇

【二の物】汝の思ひとわが思ひ

三一―三三

【追】詩人等の心に畫きておそるゝ鬼の追撃

四六―五六

【縁】岸の側面

六一―六三

【クルーニ】ボルゴニア州（フランスの東）にあるベネデクト派

の僧院なり

オックスフォード版其他にはコロニアとあり不明、古註曰、コロニアはドイツのライン河畔の一都會にてこゝに一僧院あり當時富貴第一なりければ院の主僧虚榮の念に驅られあまたの僧徒を従へて法王の許にいたり緋の僧衣を許されんことを乞ふ、法王その僭越を惡み命を下して却つて之に粗服を着けしめ且つ巨大の僧帽を戴かしむ云々

六四―六六

【フェデリーゴ】フリートリヒ二世（地、一〇・一一九）大逆の罪を犯せる者を罰するに指の厚さなる鉛の衣を裸なる罪人に着せ大釜の中に入れて熱火にかけしといふ當時の説によれるなり

七六一七八

【はせゆく】己の足おそければ詩人等の歩むさま恰もはせゆくに似たり

八二一八四

【荷】重き鉛の衣

九四一九六

【邑】フィレンツェ

九七一九九

【煌めくは】あきらかにあらはるゝは

一〇〇一—一〇二

重き物體を秤にかくればその秤軋む如く我等も金色の衣のおもさ

にかく歎聲をいだすなり

一〇三——一〇八

【フラデーテ・ゴデンテイ】もと聖マリアの騎士と稱し一二六一年法王ウルバヌス四世の批准をえてポローニアに編成せられ軍事と宗教とに關せし一團なり、イタリア各市の黨派の軋轢及び閥族爭鬪の調停弱者の保護等を目的とし勢力甚だ盛なりしも騎士等次第にこの目的を忘れてたゞ安逸をのみ求めしかばこゝに喜樂僧の名を得るにいたれるなり

【カタラーノ、ローデリンゴ】一二六六年ギベルリニ黨の首領王マンフレデイ、ベネヴェントの戦ひに敗れ屍を戦陣に曝せし時モンタペルテイの戦ひ（一二六〇年）よりこの方敵黨の威壓の下に

ありしフィレンツエのグエルファイ黨再びその頭を擡ぐるにいたりたればフィレンツエは禍ひを未發に防がんとため同じ年ボローニアよりグエルファイ黨のカタラーノ、ギベルリニ黨のローデリングを招き同時にフィレンツエのポデスタとなし兩黨の調和市政の革新を計らしむ、しかるに彼等利慾に迷ひ法王クレメンヌ四世の意を迎へグエルファイ黨と好みを通じて密かにその頽勢を挽回するに力めたり

【常は】通例はひとりのポデスタを選ぶ定めなるに

【ガルデインゴ】ガルデインゴはフィレンツエ市の一部にてギベルリニ黨中屈指の名族ウベルテイ家の邸宅ありしところ、カタラーノ等表に公平を飾りて暗に一黨派の益をはかれる結果ギベルリ

二黨遂に市外に逐はれその邸宅多く破壊せらるゝにいたりし時ウ
ベルテイ家も亦暴徒等の焼くところとなりてその焼跡當時ガルデ
インゴの附近に残れるなり

一一二——一四

【彼】カイアフア（カヤバ）、ユダヤの祭司長、名を國益に藉り
善人の死を謀れるもの（ヨハネ、一一・四七以下）

一一五——一八

【民の爲に】ヨハネ、一一・四九—五〇に曰、汝等何事をも知ら
ずまた一人民のために死して舉國亡びざるは我等の益たることを
も思はざるなり

一二一——一二三

【外舅】アンナス（ヨハネ一八・一三）、祭司長たり（ルカ、三・二）

【苛責せらる】或ひは、ひきはらる

一二四―一二六

嘗てエリトネの命に従つて地獄の底に下れる時はかゝる刑罰をうくるものを見ざりしによりてあやしめるか、異説多し、委しき事スカルタツツイニの註にいづ

一三〇―一三二

【黒き天使】鬼（地、二七・一一二―四註参照）

一三三―一三五

【岩】石橋なり、斷崖よりいで、十の囊の上を過ぐ

一三九—一四一

【鐵鉤にかくる者】マラコダ（地、二一・一〇九—二參照）

一四二—一四四

【偽る者】ヨハネ、八・四四

第二十四曲

ダンテ、ウエルギリウスと偽善者の溪を出で第七囊の橋をわたりて堤の上より見おろせばこゝには無数の毒蛇ありて盗人の魂を苛責す、中にヴァンニ・フツチといふ盗人あり兩詩人とかたりて身

の來歴を告げまた白黨の禍ひを豫言す

一―三

【日は】日の寶瓶宮にあるは一月二十日頃より二月二十日まで

【髪をとゝのへ】日の光を金髪になぞらへしなり、『アエネイス』
九の六三八に、髪長きアポローとあるが如し、日髪をとゝのふと
は暖氣の加はりゆくをいふ

【夜は】夜は日と反對の天にあり（淨、二・四參照）、十二月以
降春分に近づくに従ひ日は北に夜は南にむかふ即ち日次第に長く
夜次第に短し

四―六

【白き姉妹】雪、霜雪の如く白く地上に落つるも日出ると共に消

ゆるを筆先鈍りて長く使用に堪へざるに譬へしなり

七―九

【腰をうち】霜を雪なりと思ひあやまり腰をうつ

一六―一八

【亂】地、二三・一四五―六参照

一九―二二

【山の麓】地、一・六一以下

三一―三三

【衣を】鉛の

四〇―四二

地、一九・三四―六註参照

五五―五七

人罪を離るゝのみにては未だ足らず進んでさらにその穢れを淨め而して後はじめて福の路に就くべし

【段】淨火の山の

【これら】此等の段乃ち地獄

六四―六六

【次の濠】第七囊

七〇―七五

【生ける目底にゆくを】或ひは、目あきらかに底をみるを生ける目は肉眼なり

【次の堤】第七と第八囊の間の堤

【石垣】第七囊を蔽へる橋

八二—八四

【蛇】ランデーノ (Landino) 曰、蛇猾智に富む盗人亦然り蛇身を細くして穴といふ穴に入り盗人身を軽くして處といふ處に入る蛇萬人に嫌はる盗人亦然り蛇草にかくれて戦ひ盗人亦ひそかに人を害すと

八五—八七

【リビヤ】エジプトの西、名高き砂漠あるところ

【ケリドリ】以下すべて蛇の名なり、ルカヌスの『ファルサリア』
九・七〇六以下にいづ

八八—九〇

【エチオピア】エジプトの南

【紅海の邊のもの】砂漠多きアラビア

九一—九三

【エリトロピア】寶石、色緑にして紅の斑点あり、古の俗説に此石よく蛇の毒を癒しまた持人の姿を人の目に見えざらしむる力ありといへり

一〇〇—一〇二

【○、○】いづれも一筆にて書き得べき文字

一〇六—一〇八

【聖等】プリーニオ、クラウデアールノ、ブルネット・ラティー

ニ、オウイディウス等、就中オウイディウスは主として詩人の引

用せるものなり、『メタモルフオセス』一五・三九二以下に曰く
 再び身を新にして再び生るゝ鳥あり、アツシリア人は之をフェー
 ニカ（フェニックス）と名づく、この鳥麥をも草をも食まず、薰
 物の涙アモモの汁を食む、その世を経ること五百年にいたれば爪
 とゆがめる嘴とをもて青櫨の枝またはそよめく棕櫚の梢に巢を作
 り、そが中には桂枝、甘松の穂、碎ける肉桂、黄なる没薬を撒散
 らし此事果れば直ちにこゝに横たはり香氣に包まれてその生を終
 ふ、聞くならくフェニックスの雛母體よりいで齡を重ねるはじめ
 の如しと

一〇九——一一

【アモモ】木の名、種子より香料を得

一一二——一七

【鬼の力】マルコ、一・二六、ルカ、四・三五等参照

【塞にさへられ】癩癩の類、体内生氣の通路塞がり官能その作用を失ひて倒るゝものと見做されしなり

一一八——一〇

異本、神の威力（異本、正義）よ汝はいかに誠なるかを

一二二——一二三

【我】ヴァンニ・フツチ、ピストイア（フィレンツェの西北約廿哩）市の名族フツチオ・デイ・ラツツアーリの庶子、黒黨に屬せり

【往日】約五年前、ヴァンニの處刊せられしは一二九五年なり

【喉】囊

一二四—一三二

【騾馬】イタリア語 mullo にはまた私生兒の義あればなり

【ピストイア】罪惡の邑（地、二五・一〇以下參照）

【血と怒りの人】即ち第七の地獄に罰せらるべき

ヴァンニ・フツチはフィレンツェの軍に加はりてピサ人の亂（地、二一の九四—六註參照）に赴けることあればダンテの彼を見しはこの頃の事なるべし、又ヴァンニのピストイアに暴を行へる（乃ち血の人）事につきてはスカルタツツイニの註にくはし

一三三—一三五

【汝】白黨の一人なる

【盗人】この事古註に詳なりされど古註の傳ふるところ悉く事實なるや疑はし今その概略をいはんに、一二九三年ヴァンニは二人の同類をかたらひ金銀の飾美しき聖ヤコブの寶藏（寺の名を聖ツエノネといふ）に忍び入り多くの寶物を盗み出し發覺の憂をからんためこれをその知人の家にかくし置きたり、盜難の報四方に傳はるに及びあまたの嫌疑者捕へられて拷問をうけしその中にラムピーノといへるもの苛責の苦しみに堪へずして無實の罪を負ひ將に刑せられんとす、ラムピーノはヴァンニの友なりければヴァンニこれを冤に死せしむるにしのびず自ら罪状を市吏に具申し共犯者と共に刑に服せり（或ひはヴァンニ罪を他人に歸して自ら刑を

免かれきともいふ)

一四二—一四四

【ピストイア】一三〇一年ピストイアの白黨はフィレンツエの助けをかりて黒黨を市外に逐へり（ピストイアが黒白兩黨の分争を見るにいたれるはその前年なり）

【フィオレンツア】フィレンツエ（フィオレンツア）にては事これに反し、表に兩黨の調和を装ひひそかに法王の意を行へるシャルル・ド・ヴァロア、フランスより來れる爲一三〇一年に入りて白黨勢衰へ翌二年の始めにはこの黨に屬する者多く市外に逐はるゝにいたれり

【習俗】市の政權黒黨の手にうつるをいふ

一四五—一四七

【マルテ】マルス（ギリシアではアレス）軍の神

【ヴァル・デイ・マーグラ】マールクラ川の流るゝ溪、ルーニジア
ーナ（地、二〇・四六—八註参照）にあり

【火氣】電光即ち猛將モロエルロ・マラスピーナを指す、モロエルロは侯爵マンフレディ一世の子にてルーニジアーナに君たり。

一三〇二年さきにピストイアを逐はれし黒黨及びフィレンツエ、ルツカの黒黨を率ゐてピストイアを攻む

亂雲は戰雲（或曰、黒黨の士卒と）なり

一四八—一五〇

【カムポ・ピチェン】不明、一説にはこはピストイア附近の一地

方にてこの戦ひは一三〇二年五月マラスピーナがセルラヴァアルレの城砦を陥れたるを指せりといひ又一説にはこはピストイアを含める一地方にてこの戦ひは一三〇六年四月ピストイアの陥落せるを指せりといふ

第二十五曲

詩人等なほ同じ處にとゞまりてフィレンツエの盗人等の不思議なる變形を見る

【雙手を握り】原語 *fiche* は拇指を中指食指の間より出して手を握ることにて人を侮り嘲る時の野卑なる仕打なり

一〇—一二

【祖先】ピストイア市を初めて建てし人々、傳説によればピストイアはローマの賊將カチリーナ（前六一年死）の死後その殘餘の部下の建てしところなりといふ

一三—一五

【落ちし者】カパネオス（地、一四・四六以下）

一六—一八

【チエンタウロ】ケンタウロス、地、一二・五五—七註參照、この者ヴァンニを追ひ來れるなり

一九—二一

【マレムマ】海に沿へるトスカーナ州一帯の地、沼澤多く沃野少なし（地、一三・七—九註参照）

二五—二七

【カーコ】カクス、神話に出づる名高き盗人、ローマ七丘の一なるアヴェンティノー（アヴェティヌ）山に住みし巨人なり、ヘラクレス、ジエネーリオネの牛を奪ひイスパニアより本國ギリシアに歸らんとてアヴェンティヌスの岩穴近く來れる時カクスはヘラクレスの眠れる間に若干の牛を盗みいだしその足跡をくらまさんため尾を曳きて逆行せしめ己が棲家にかくし置きたり、されどヘラクレス鳴聲によりてその所在を知り巨人を襲うて之を殺せり

カクスの物語は『アエネイス』八・一九三—二六七にくはし、されどウエルギリウスのカクスは半人半獸なれどもケンタウロスにはあらざりしものゝ如くまた自ら口より火と煙を吐けり

【血の潮】近郷を掠め畜類を奪ひ來りて屠れるなり、『アエネイス』には、地には常に新しき血汐のぬくみあり云々といへり

二八—三〇

【兄弟等】他のケンタウロスは皆第七の地獄（地、一二・五五以下）にあれどもカクスのみは盜なりしたため第八の地獄にあり

三一—三三

【十をも】ヘラクレス（神話中最著名の英傑）の棍棒にて打たるゝことあまた度に及びしかも幾度にもいたらざる中早くも絶え果て

たれば其餘の打撃は身に覺えしらざりしなり

三四―三六

【三の魂】アーニエル（六八行）、ブオソ（一四〇行）、ブツチ
オ（一四八行）

四〇―四五

【チャンファ】フィレンツエ市ドナーティ家の者にグエルファイ黨
に屬せる盜なりきといふ（十三世紀の末）、委しき事古註にも見
えず

【指】指を唇にあてゝ導者に沈黙を求めしなり

四九―五一

【蛇】チャンファの變形せるもの

五八一六〇

【獸】尋常ならぬ動物

六一一六三

【彼も此も】人の色も蛇の色も

六四一六六

白と黒との間の色いづるを人と蛇との間の色いづるにたとへしなり

【紙】當時綿より作れる一種の紙ありし事古註によりてしらる、されど一説に曰、papiro は紙にあらずして燈心（乃ち細藺のなご）なりと

六七一六九

【アーニエル】（アーニエル口、或ひはアーニオロ）、古註にフイレンツエの貴族ブルネルレスキ家の者といへり

七三―七五

【四の片】人の兩腕と蛇の二の前足

七六―七八

【二にみえて】人と蛇とをかねし如くみえしかもいづれともつかざるなり

七九―八一

【答】熱

八二―八四

【小蛇】カヴァアルカンテイ（二五一行註）の變形せるもの

八五―八七

【ひとり】ブオソ

【人はじめて】生兒胎内にありて母體より滋養をうくるところ即ち臍

九一―九三

【烟】人は人蛇は蛇の自然性を互に吐き出し烟のまじると共に變形の作用を起すなり

九四―九六

【ルカーノ】ルカヌス（地、四・九〇）、『ファルサリア』九・七六一以下にカトーがりビヤの砂漠を過ぎし時部下のザベルルス（ザベルロ）なる者セプスと名づくる蛇に噛まれ肉忽ちくづれ落

ちて一扼の灰となり同ナツシディオなる者プレステルと呼ばれる、
 蛇に噛まれ全身腫れあがりて胸甲裂け破るゝにいたれることいづ
 九七―九九

【オヴィディオ】（地、四・九〇）

【カードモ】カドモス、フェニキア王アゲノルの子にてテバイの
 基を起せるもの、晩年テバイを出でて處々に流寓し遂に化して蛇
 となれり（オウイディウス『メタモルフオセス』四・五六三以下）
 【アレツ―ザ】アルテミスに事へし女神の一、河神アルフェウス
 に追はれて泉に變ず（同上、五・五七二以下）

一〇〇―一〇二

オウイディウスの物語には人と蛇との如き二の自然が相對して變

形し互に順序を同じくして入更るにいたれることなし

一〇九―一一一

二つに分れし蛇の尾は人の足脛股の形（乃ちブオソの失へる）をとり

一一二―一一四

【獣の短書】蛇の二の前足は伸びて人の腕となる

一一五―一一七

蛇の二の後足は合して人の生殖器となり、ブオソの生殖器は二に分かれて蛇の後足となる

一二一―一二三

【光】目なり、互に瞰みあひつゝ顔を變ぜしなり

一二四—一二九

蛇の顔の人の顔に變る有様を敍せり

【その餘をもて】或ひは、その餘のうしろに流れずとゞまれるは
顔に鼻を造り

一三〇—一三二

人の顔の蛇の顔に變る有様を敍せり

一三三—一三五

蛇の舌叉をなすとの當時の説によれるなり

一三六—一三八

【唾はけり】人の物言ふ時よく唾吐くことあればかくいへり

或曰、人の唾は蛇の毒となるとの迷信によりブオソを詛ひてかく

唾吐けるなりと

一三九―四一

人となれる蛇はその新に得たる背を蛇となれる人にむけ

【侶】プツチオ・シヤンカート

【ブオソ】（蛇となれる者）、フィレンツエの盗人、傳不詳

一四二―一四四

【石屑】ZAVORRA（船の動揺を防ぐため船底に積入るゝ砂利の類）

第七囊の罪人等を卑みて指せる語

【亂るゝ】或ひは、拙し不明瞭なり横路に入れり等異説多し

一四八―一五〇

【プツチオ・シヤンカート】フィレンツエのもの、傳不詳

一五一

【ひとり】フランチェスコ・デ・カヴァルカンティ、このフィレンツェ人アルノの溪の一小村ガヴィルレの者に殺されしかばその近親仇を報いんとて多くの村民を殺害せり

第二十六曲

かくてこゝを去りて第八囊の橋上にいたれば謀をめぐらして人を欺ける者焔につままれて溪を歩めり、そのひとりトロイア役の名將ディオメデス（ディオメーデ）と共に來りて己が最後の航海の

物語をなす

一―三

【翼を】フィレンツエの名市外にひゞき渡れるをいふ

四―六

【五人】アーニエル（アーニエルロ）、ブオソ、プツチオ、チャ
ンファ、カヴァルカンティ

七―一二

【曙の夢】オウイデイウス、ホラテイウス等の著作に見ゆる如く
古、早朝に結ぶ夢を正夢とをせり地、三三のウゴリーノの夢、浄火に結べるダンテの夢等参照、ダ
ンテはフィレンツエの災害を曙の夢に見たる如くしるせるなり

【プラート】プラート（ピストイアとフィレンツェの間にある町）がフィレンツェの不幸を希ふ理由に關し一説には、この町フィレンツェに從屬してしかもその統治に快からざりしによるといひ一説にはこれ一三〇四年プラートのカルディナレなるニツコロが時の法王ベネデクト十一世の命をうけてフィレンツェに赴き市の平和をはかれるも事成らず遂に神と寺院の詛ひを市民にあびせてこれを去るに至れるを指せりといふ、恐らくは後説正しからむ

註釋者又曰、フィレンツェの禍ひとは白黨の追放及びフィレンツェの大火（一三〇四年）等を指せるなりと

【我年】老いて郷土の禍ひを見んはいよく心苦し

【さきに】地、二四・七九―八〇

一九―二一

【悲しめり】第八囊の罪人等世にまれなる才を天よりうけてしかも善用せずかくはかなき罰を蒙るにいたれるを悲しめるなり

二二―二四

【星】善き星は幸運なり（地、一五・五五―七参照）

【星より善きもの】神の恩寵

【寶】天才、之を棄つるは善用せずしてその特權を失ふなり

二五―二七

日最も長き時乃ち夏

三四―三六

【仇をむくいしもの】豫言者エリシヤ、兒童の一群に嘲られて怒り林中より二匹の熊を出してその四十二人を裂かしむ（列王紀略下二・二三・四）

【エリアの兵車】豫言者エリア、エリシヤの目の前にて昇天す（列王紀略下二・一一―一二）、その時炎につままれて姿見えざりしを罪人の炎の中にかくるゝにたとへしなり

四〇―四二

【喉】狭き底

【盗みて】罪人の中にかくして少しも外にあらはすことなきをいふ

註釋者曰、炎の罰はヤコブ、三・六に、舌は火なりとあるによれ

りと

四九―五四

【エテオクレ】エテオクレス（地、一四・六七―七二註参照）七
 王の役徒に久しきに亙れるよりエテオクレスとポリユネイケス一
 騎打をもて兩軍の勝敗を定むることとし戦ひて共に斃れぬ、人々
 その骸をあつめて共に荼毘に附せしに立登る焰二に分れたりとい
 ふ

五五―五七

【ウリツセ、ディオメーデ】オデユセウス・ディオメデス共にホ
 メロスの詩にうたはれて名高きギリシアの英雄

【怒り】トロイア人に對する怒り

五八一六〇

包圍十年に互りてトロイアの城未だ落ちざりければギリシア軍才
デュセウスの謀により山の如く巨大なる一の木馬を作りてその中
に多くの勇士をひそましめ自餘の士卒は悉く海に浮びて附近の島
影にかくれ恰も事の成らざるをしりて全軍本國に引返すものゝ如
く装ひまた残せる木馬はアテナへの捧物なりとのことを敵地に流
布せしむ、トロイア軍欺かれてこれを城内にひきいる、夜に入り
てその中なる將士一齊にあらはれいで城門を内よりひらき既に城
外に待ちゐたるギリシア軍を迎へ火を放つて城を焼きトロイアこゝ
に陥落す（『アエネイス』二・一三以下）

【門を作り】木馬城に入りアエネアス、城より出でしを門を作る

といへるなり

【祖先】アエネアス（地、二・二〇—二一参照）、木馬のために城陥りて後イタリアにゆけり

六一—六三

【デイダーミア】デイダメイア。スキュロス島の王リコメデスの女

アキレウスの母テチスわが子がギリシア軍に加はりてトロイアに赴く事あらんを恐れこれを女装せしめてリコメデスに托し置きたりしにオデュセウス商人に姿を變へデイオメデスと共にスキュロスにわたり武器を示してアキレウスを試み遂に誘ひてトロイアに向はしむ、この時すでにひとりの子の母なりしデイダメイアは別

離の悲しみに堪へかねてために世を早うするにいたれり

【パルラーディオ】トロイア城内に安置せられしパルラス（アテナ）の像、この像城内にある間は城安全なりと信ぜられければオデュセウス、ディオメデスと變装して忍び入りこれを盗みてギリシアの陣に送れり

六七―六九

【身を】四三―五行參照

七三―七五

【ギリシア人】異説多し

ダンテは本國イタリアの人とかたるを例とするにギリシアは國異なる上その文物に關する詩人の知識悉く間接にて従つて充分なら

ざるをいへるなるべし

七九―八四

【心に適ひ】 『アエネイス』に残りてその名不朽に垂るゝをいへり

【いづこに】ホメロスの『オデュセイア』にうたはれしオデュセウスは百難を免かれ再び故國イタカに歸りてペネローペの貞操に報いたり、されど當時これと異なる傳説あり、この説によればオデュセウスは大西洋上の航海を企て勇敢なる士卒若干とまづポルトガルに赴きてこゝにリスボン市の基を起し、それよりアフリカの西にあたる海をゆき遂に暴風に遭つて死せりといふ、さればダンは後の傳説にもとづきこれに自己の創意を如へて一の新しき

物語を作れるなり

八五―八七

【大なる角】オデュセウスのデイオメデスに比してさらに傑出せるを示す

八八―九三

【ガエタ】ローマの東南セツサ市の西にある港、アエネアスこの處に上陸し死せる保姆カイエクを葬りその名に因みてこゝをカイエタ（ガエタ）と呼べること『アエネイス』第七卷の始めにいつ

【置せし】或ひは、とゞめし

【チルチエ】ガエタとアンチオの岬の間のチルチエイオ山に住める妖女の名

九四―九六

【子】イタカ島に残しおきしわが子テレマコス

【父】ラエルテス

【ペネローペ】オデュセウスの妻

【夫婦の】*debito*（義理ある）、父子の如く生れながらの關係に
あらざるをいふ

一〇〇―一〇二

【海】地中海

一〇三―一〇五

地中海の兩岸即ち北の岸はイスパニアまで南の岸はモロッコ（アフリカの西北）まで

【スパニア】イスパニア

一〇六一—一一一

【せまき口】ジブラルタルの海峽、この海峽二の山に閉さる、ヨ
ーロッパなるをカールペとよび、アフリカなるをアービラと名づ
く、神話に曰、ヘラクレス、ジエーリオネの牛を得んとてイスパ
ニアにわたりこの處にいたれる時西方地果る處たる標としてこの
二の山（ヘラクレスの柱の名あり）をこゝに築けりと

【シヴィリア】イスパニアの西南にある町（地、二〇・一二四—
六註参照）

【セツタ】セウタ、ジブラルタルの海峽に面するアフリカの一市

一一二—一二〇

【日を追ひ】日の行方を追うて西に進み

【人なき】南半球はみな水に蔽はれて人の住むべきところなしとの古の話によりてかくいへり

我等既に年老いて餘命いくばくもなければ五官の未だ死の眠りにいらざる間に南半球をさぐるべし

【起原】人間の世にいでし

一二四——二六

かくて船尾を東にし權の翼を驅りて不知の大海に漂ひたえず西南（地球面よりみて東南）の航路を取れり

一三〇——三二

我等大海に浮びしこの方五ヶ月にして

【月下の光】月の地球にむかへる半面の光

一三三—一三五

【山】淨火の山、イエルサレムの反対面にある

一三九—一四一

【天意】神は生ける者の足淨火の陸を踏むを許したまはざるなり

(淨、一・一三〇—三二参照)

第二十七曲

ウリツセ (オデュセウス) 等去りて後グイード・ダ・モンテフェ

ルトロの魂同じく焔に包まれて來りローマニアの現状をダンテに
問ひ己が地獄にくだるにいたれる顛末を告ぐ

一一三

【許し】二一行

七一九

【シチーリアの牡牛】アテナイの工匠ペリルロスがシケリア島ア
グリゲントウムの暴君ファリスの爲に造れる銅製の牡牛なり、
人をこの中に入れて焼けば外に洩るゝ呻吟の聲恰も牛の鳴くに似
たり、しかしてその最初の犠牲となれる者乃ちペリルロスなりき
といふ

【好し】詩篇五七・六に曰、彼等はわが前に※をほれりしかして

みづからその中に陥れりと（箴言二六・二七、傳道之書一〇・八等參照）

一三一—一五

【はじめは火に】異本、火の尖に

【火のことば】焰の風にゆらめく音（地、二六・八六—七參照）
一六一—一八

【舌】グイードの詞はその口を過ぐる時舌よりうけし動搖を炎の尖に傳へ

一九—二二

【ロムバルディアの語】ウエルギリウスの本國の語（地、一・六八參照）

【いぎゆけ】ウエルギリウスのオデユセウスにいへる言をくりかへせるなり

ウエルギリウスの首をロムバルディア（地、二八・七三—五註參照）方言といへるについては諸説あり、（一）*issa*（異本、*istra*）と *adizzo* とをこの地方特有の語となすもの（二）前者のみを然りとなすもの（三）言の形にあらざるに發音の相違をいへりとなすもの等これなり

二五—二七

【ラチオの國】ラテイウム。イタリア（地、二二・六四—九註參照）

【盲の世】地、四・一三參照、ガイドはウエルギリウスを前を

うけんためにくだれる罪人なりとおもへるなり

二八一—三〇

【ローマニア人】當時のローマニアは東にアドリアティコ海西にボローニア市南にアペンニノ山脈北にポー河を境とせるイタリア東北一帯の地を指す、ラヴェンナ、チエルヴィア、フォルリ、リミニ等の諸市皆この中にあり

【我は】グイード・ダ・モンテフェルトロ、ローマニアなるギベルリニ黨の首領にて當時武勇第一と稱せらる、その生地モンテフェルトロはウルビーノ市とティーヴェレ河の水源地なるコロナール山（アペンニノ連峰中の一高山）の間にある

三四—三六

【下にかくるゝ】橋の下火の中に

三七―三九

【汝の】汝の郷國

【去るにあたりて】一三〇〇年には公けの戦ひなくたゞ例によりて權門勢家互に嫉視反目せり

四〇―四二

【ラヴェンナ】一二七〇年ポレンタ家の手に歸してより一四四一年までその治下にある

【鷲】ポレンタ家の紋はラーナの説によれば黄地に朱の鷲なり

一三〇〇年にはグイード・ダ・ポレンタ即ち老グイードとて、第五曲にうたはれしフランチエスカの父なりし者ラヴェンナを治め

たり

【チエルヴィア】ラヴェンナの南約十二哩アドリアティコ海濱の町にて當時ポレンタ家の治下に屬せり

四三—四五

【邑】フォルリ、一二八一年法王マルチーノ四世多くのフランス人にイタリアのグエルファイ黨を加へし一軍をローマニアに遣はしこの地方のギベルリニ黨を攻めしを、この軍久しくフォルリを圍みしかども城善くその難に耐へ城主グイード・モンテフェルトロ兵を集めて市外に突進し大に敵軍を敗れり

當時フォルリを治めしオルデラツファイ家の紋は上半金地に緑の獅子（ベンヴェヌーチ *Benvenuto* の説による）あるものなりしかば

フオルリを緑の足の下にありといへるなり

四六―四八

【ヴェルルツキオの猛犬】マラテスタ家、ヴェルルツキオはリミニの西南約十哩にある城の名、この城久しくマラテスタ家の所有たり、古き犬は第五曲の中なるパオロ及びその兄ジャンチオツトの父にてマラテスタ・ダ・ヴェルルツキオといひ新しき犬はその長子乃ち前二者の異母兄にてマラステイーノといふ、父子共に獯猛リミニ及び其他の領地に君となりて民の膏血を絞れり

【モンターニア】リミニ市ギベルリニ黨の首領なるモンターニア・デ・パルチターテイ、一二九五年マラテスタ父子のために虜はれて獄中に死しリミニ市彼等の手に落つ

四九―五一

【白巢の小獅子】マギナルド・パガーニ・ダ・スシナーナ（淨、一四・一八一―二〇参照）家紋白地に青の獅子を用ゐたり

【夏より冬に】四季のたえず變遷する如くマギナルドの時宜に應じて黨與を變ぜるをいへり、史家ヴィルラーニ曰、この者ローマニアにてはギペルリニ黨に屬しフイレンツエにてはグエルフイ黨に屬せりと

【ラーモネ】川の名によりて町を示す、即ちラーモネ河畔のフアーエンツア

【サンテルノ】同上、サンテルノ河に近きイモラ

五二―五四

【洗はるゝもの】チエゼナ、サーヴィオ河畔にある町、一三〇〇年チエゼナ自治制を布き年々ポデスタを選びて政務をとらしめこの者政權を亂用し市民を虐ぐる恐れあるにいたれば直ちにこれを追へり

五五―五七

【人】地獄内なる他の罪人、或曰、ダンテ自身よくガイドの問に答へしをいふと

六一―六三

【この焰は】我は何事をも其人に語るまじ

六四―六六

地獄に苛責を受くる者多くは、詩人の傳言によりて在世知友の間

に新しき記憶を呼び起さんことを願へり、チャツコ（地、六・八九）
 ピエール・デルラ・ヴィーニア（地、二二・五五―六）みたりの
 ファレンツェ人（地、一六・八五）等これなり、しかるにこれに
 反し一方には生者にあふを恥辱としつとめてその罪業を掩はんと
 するものあり、カッチアニミーコ（地、一八・四六）この曲のグ
 イード、コチートのボツカ（地、三二・一〇〇―一〇三）等これ
 なり

六七―七二

【帶紐僧】聖フランチェスコ派の僧。身に紐を帯ぶるを以てこの
 名あり（九一―三行註参照）、グイードが結縁の身となりしは一
 二九六年のことなり

【大いなる僧】法王ボニファキウス八世

七三―七五

わが世に住みし間の行は猛者の行といはんよりはむしろ奸智に長けし者の行なりき

七九―八一

ダンテの『コンヴィヴィオ』四、二八・一四以下に曰く

クリオがその『老年論』にいへる如く自然の死は長き航海の後なる港また休みともいひつべし、されば良き舟人の港に近づくにあたり其帆をおるしてゆるやかに船を操りしづかにそこに入る如く、人また地上の活動の帆ををさめその志を盡し心を盡して神に歸るべきなり

八五―八七

【ファリセイびとの王】法王ボニファキウス八世、即ち當時の僧侶（偽善者）の王なり、偽善者を第二のパリサイ（ファリセイ）人といへるは聖書によれり（マタイ、二三・一三等）

【ラテラーノ】ローマ市の一部、コロナ家はラテラーノなる聖ジョヴァンニの寺院近き處にありしなり

一二九七年法王ボニファキウス八世軍を起してコロナ家を攻め遂にペネストリーノ（ローマを距る約二十四哩）にあるその本城を圍むにいたれり、されどこの城はアペンニノ連峰の裾にあり要害堅固にして容易に落つべくもあらざりければ法王やがてグイードの智を借り奸計を用ゐてこれを奪へり

【サラチーノ（サラセン）人、ジユデーア人】法の爲、教の爲、異教徒と戦へるにあらず

八八―九〇

その一人だに教に背きキリスト教徒たる實を失ひしはなし

【アークリ】シリアの一市、パレスチナなるキリスト教徒最後の苦戦その效なく、一二九一年、サラセン人の手に歸せり

【ソルダーノの地】ソルダン。アークリ陥落の後法王令旨を下し一般キリスト教徒のイスラム教徒と貿易を行ふことを禁ぜり、ソルダンの地は主にアレクサンドレア及びエジプトを指す

九一―九三

【瘠する】戒めと斷食によりて身瘠するなり

【紐】天、一一・八七に卑しき紐といひ同一二・一三二に紐に上りて神の友となりとあり、身を卑しうして貧しき者と親しみ慾を戒めて上帝と親しむの意を寓せるなり

九四―九九

【コスタンティーン】コスタンティヌス。當時の傳説に曰、コスタンティヌスはキリスト教徒を迫害せるため冥罰によりて癩を病めり時に一醫の言を進むるあり曰ふ小兒を集めその血を絞り大帝自らこれに浴せば病即ち癒えんと、無辜の兒童等宮廷に集めらるゝに及び母の號泣する聲大帝の耳に入る大帝小兒を殺すにしのびずこれを殺さんよりは我むしろ死を待つべしといふ、この憐憫の情上帝の嘉納し給ふところとなりペテロ、パウロの兩聖徒夜

帝にあらはれてシルヴェステル（地、一九・一一五―七註参照）を訪ふべしと告ぐ、この頃シルヴェステルは迫害を避けてシラツティイといふローマ附近の山中にひそみたりければ大帝即ちこゝに赴き洗禮をうけてキリスト教徒となり癩病全く癒えたり、かの有名なる大帝供物の一條（地、一九・一一五―七）もまたこの事に基づきてなりと

【傲の熱を】コロンナ一家を倒してひとり勝を誇らんと熱望を達せんとて

一〇〇―一〇二

【ペネストリーノ】八五―七行註参照

一〇三―一〇五

【鑰】天國の（地、一九・九二參照）

【我よりさきに】ケレスティヌス五世、位を退けるを鑰を尊まざるといへり（地、三・五八―六〇註參照）

一〇六―一一一

【長く約し】ペネストリーノをわが物とする策は他にあらず、多くの事を約束してしかもその約束を果さざるにあり

ペネストリーノの城危機に瀕し和を乞ふにいたれる時（一二九八年）法王より寛典の沙汰ありければコロナ家の出なる二人のカルディナレ、法王の許にいたれるに法王はたゞに破門の取消ををせるのみならず彼等の名譽地位財産をもとのまゝならしむる意あることを告げ彼等をこゝに止めおき之と同時に人を遣はしてペ

ネストリーノを占領せしめ盡くこの市を破壊したり

一一二——一四

【黒きケルビーニ】鬼（地、二三・一三一）、當時色黒き人の形を畫きて鬼となせるより黒きといふ、またケルビーニは九種の天使の一なり、各種の天使天を逐はれて地獄にくだれり

一一八——一〇

【悔いと願ひ】罪を悔ゆる心と罪を犯さんとの意志とは兩立せず
一二四——一六

【ミノス】ミノスの八度尾を捲くは罪人の第八の地獄に落つべきものなるを示す（地、五・四以下）

一二七——二九

【盗む火】罪人をつゝみかくす火乃ち第八囊（地、二六・四一—
二参照）

【衣】炎の

一三三—一三六

【分離を】不和軋轢の種を蒔きそのため罪の重荷を負ふにいたれる者こゝに應分の罰を受く

第二十八曲

詩人等やがて第九囊にいたれば鬼に斬られし多くの罪人あり即ち

宗教政治の上に不和分争の種を蒔ける者なり、このうちマホメツト、ピエール・ダ・メデイチーナ、モスカ、ベルトラムの四人ダシテとかたりて己と侶との事を告ぐ

一―三

【継なき者】平仄押韻の制限なき者乃ち散文

七―一二

【プーリア】イタリアのナポリの王國を指す

【トロイア人】アエネアスと共にイタリアに來れるトロイア亡命の勇士等。古代ローマの東南に居住せるサンニタ人とローマ人との間に屢 戦ひ起り（前三四三―二九〇年）サンニタ人遂に征服せらる

異本、ローマ人とありされどダンテはトロイア人をローマ人の意に用ゐしものなればその實同じ

【リヴィオ】テイトウス・リウイウス、有名なるローマの歴史家（前五九—一六年）、『ローマ史』の著あり

【長き戦ひ】第二のポエニ戦争（前二一八—二〇一年）とてカルタゴ人とローマ人の間に起れる戦ひなり、この戦ひの中カルタゴの驍將ハンニバル、プーリアのカンナエといふところにて大いにローマの軍を敗ることあり（前二一六年）戦ひ終りて後敵の死者の指より黄金の指輪を集めしに數俵の多きにいたれりといふ（リウイウスの『ローマ史』二三・一二及びダンテの『コンヴェイヴィオ』四、五・一六四以下参照）

一三一—一八

【ロベルト・グイスカールド】ロベール・ギスカール（天、一八・四八）、ノルマンディの勇將にてプーリア及びカラブリアに君たり、十一世紀の後半サラセン人並びにギリシア人此等の地をロベールの手より奪はんとして軍敗れ南部イタリアを逐はる

【チエペラン】チエペラーノ。リリス河畔にある町の名、ローマよりナポリ王國に入る通路として重要な地なり、一二六六年シヤルル・ダンジユウ（カルロ・ダンジオ）、ナポリ王國を攻めし時チエペラーノの橋を守るプーリアの貴族等私怨を懷いてその王マンフレディに背き、橋を敵の過ぐるに任し遂にベネヴェントの激戦となりマンフレディ戦場の露と消ゆ、註釋者多くはダンテの

チエペラーノは乃ち間接にベネヴェントの戦ひを指せるものなるべしといふ

【ターリアコッツォ】アブルツツオ國の一城市（ローマの東）

【アーラルド】エラール・ド・ヴァレリ。フランス軍の將なり、マンフレデイ殪れシャルル一世既にプーリアに王たるにいたりしも、マンフレデイの甥コルラデイーノ（コンラツド）なほ干戈を用ゐてこれに當りしかばシャルルはその軍師老エーラルの謀に従ひ軍を三手に分け、まづ二手をもてコルラデイーノを迎へしむ、かくて一二六八年ターリアコッツォのあたりに激戦あり敵軍勝に乗じて戰場に散亂す、シャルルこの機をうかゞひ軍を收めてこれを殘しおきし一手の兵と合し不意に敵を襲ひ大いにこれを敗りコ

ルラディーノを虜にす、ベネヴェントの戦ひと共に世これを稱してアンジユウの亂といふ

二二—二四

【中板、端板】mezul は樽の底三枚の板のうち中央にある物 *lull* は同じく兩端にある物

三一—三三

【マオメット】マホメット。イスラム教の教祖、紀元五六〇年アラビアのメツカに生れ同六三三年メヂナに死す、ダンテは宗教の分争を醸せる者としてこゝにこの偉人を罰せり

【アーリ】マホメットの従兄弟にして且つその筋なりし者（五九七—六六〇年）

三七―四二

【裝ふ】或ひは、傷つく、截る

四三―四五

【自白】ミノスの前にて告白せる罪（地、五・七―八參照）

五五―六〇

【フラー・ドルチン】ドルチーノ。有名なる使徒派の管長、一二九六年使徒派（寺院を使徒時代の状態に復歸せしむとの主義によりてかく名づけしなり）の長となりその勢力次第にトレント、ブレツシア、ベルガモ等の諸處に及び、法王クレメンヌ五世令旨を下し十字軍を起してこれを攻む、ドルチーノ、ヴァル・セシアにて久しくこの軍と對峙し一三〇六年五千の宗徒を率ゐてノヴ

アーラとヴェルチエルリ兩市の間の山地に籠れり、一三〇七年三月にいたり糧の乏しきと雪の大いなるため遂に法王の軍に降り同年六月ヴェルチエルリに於て火刑に處せらる

【ノヴァーラ人】十字軍に加はれる

六一―六三

カーシーニ (T. Casini) 曰、この一聯はマホメツトの人に後れざらんため早口にかたりて去れるを示すと

七三―七五

【ヴェルチエルリ、マールカーボ】ヴェルチエルリはピエーモンテ州の一市、マールカーボはポーの河口に近きラヴェンナの一城なり、故にこゝに所謂麗しき野はアルピの麓よりアドリアティコ

の海岸にわたりて次第に傾斜する一帯の曠野即ちロムバルディアを指せるなり

【ピエール・ダ・メデイチーナ】ローマニア各市を歴遊してその侯伯等の中に争亂の種を蒔ける者、傳不詳

メデイチーナはボローニア、イモラ兩市の間であり、或曰、ピエールはこの邑を治めしカツターニ家の出と

ペンヴェヌーチ曰、ダンテ嘗てメデイチーナに赴きカツターニの歡待をうけしことあり七一行にダンテをみしことありとピエールのいへるもこれによりてなり云々

七六一—八一

【ファアーノ】リミニの東南約三十哩にある海濱の町、ピエールは

ボローニアを逐はれし後この町に住めることありといふ

【メツセル・グイード、アンジオレルロ】グイード・デル・カッ
セロ及びアンジオレルロ・ダ・カリニアーノ、共にファアーノの貴
族

一三一二年の頃リミニの暴君マラテステイーノ（新しき犬、地、
二七・四六）この二人とラ・カットリーカに會して國事を議せん
といひて彼等を欺きひそかに人を遣はしてその船を路に要し彼等
を殺しその黨與を逐ひ自らファアーノを治む

【ラ・カットリーカ】アドリアティコの海濱リミニとファアーノの
間にある町

八二―八四

【チープリ、マイオリカ】キュプロス、マジヨリカ。地中海の東端及び西端にある島、兩島の間は猶地中海といふが如し

【アルゴス人】昔、地中海を横行せるよりいふ

【ネツツーノ】海の神、ポセイドン（ネプチューン）

八五―八七

【一をもて】マラテステイノは生れて獨眼なりしなり

【ひとり】クーリオ（九七―九註参照）

【邑】リミニ

八八―九〇 【フォカーラ】ファアーノとラ・カットリーカの間の

岬。このあたり航海の難所にて風荒き時は舟子等神に誓願かけ航路の安全を求むるを常とせりといふ、グイード、アンジオレルロ

の二人はこの難所にさしかゝらざるうちに殺され誓願の必要なき
にいたれるなり

九一―九三

【見しことを】リミニを見しことを悔ゆるなり、九七―九註参照
九七―九九

【彼】クーリオ。ローマの民政官、カエサルがローマ議會に敵視
せらるゝに及び彼ローマを逐はれてラヴェンナにいたりこゝにカ
エサルにあひこれにすゝめてルビコン川（リミニの北數哩）を渡
らしむ、ルビコンを渡るはローマ共和國に對して宣戰の布告をな
すと等しければ當時カエサルが容易にその心を決し得ざりしこと
人の知るところなり

クーリオのリミニを見しことを悔ゆるはこの附近にてカエサルの心をうごかし争亂の基を起せるため第九囊に罰せらるゝにいたりたればなり

一〇六一—一〇八

【モスカ】モスカ・デ・ロムベルテイ（一二四三年死）

こゝにフィレンツェの貴族ブオンデルモンテ家の一人にて同じ町なるアーミデイ家の一女と許嫁の間柄なりし者あり、この者約に背き他家と縁を結びしかばアーミデイ家にてはこれを以て忍び難き侮辱となし親戚知己を集めて復讐の策を講ぜり、席に連れるモスカこの時辯をふるつて破約者の殺害を説き議ここに一決す
ブオンデルモンテ殺害せられこの報全市に傳はるに及びて事態い

よく紛亂し市民のうち或者は殺害者に與してギベルリニ黨となり或者は被害者に加擔してグエルファイ黨となりかくて兩黨相軋し禍亂長く盡きざるに至れるなり

【事行はれて輒ち成る】*Capo ha cosa fatta* 事一度行はるればまたいかんともしがたし、進んで事を成せさらば好結果を生ぜん、換言すればブオンデルモンテを殺せさらば一切の解決を見ん

【トスカーナ】兩黨の争ひはフィレンツェよりトスカーナ州の各地にひろまれり

一〇九—一一一

【宗族の死】一二五八年ロムベルテイ家は他のギベルリニと共にフィレンツェを逐はれ再び歸ることをえず遂にはその消息を知る

ものすらなきにいたれるなり

一二四—一二六

體は己の爲に己の一部なる首を燈となせり（目ありて前を見分くらばなり）されば體と首とは二にして一、一にして二なり、かゝる不思議のいかでありうべきやはたゞ神のみ知りたまふ

一三三—一三五

【ベルトラム・ダル・ボルニオ】ベルトランド・デル・ボルン。

フランスのペリゴー（當時英領）の貴族にてオートフォルの城主（地、二九・二九）なり、十二世紀の半の人、英王ヘンリー二世

（一一三三—一一八九年）の長子ヘンリー（一一五五—一一八三年）に説きてその父に叛かしむ、子死して後父の補ふるところと

なりしも赦されて僧となりその身を終ふ

【若き王】ヘンリー二世の長子ヘンリー。父の在世中兩度まで戴冠式を行へるためフランスにてもイタリヤにても若き王として知られたりきといふ

異本、王ジヨヴァンニ（ジョン）とありて謄寫本多く之によれりといふ、この異本と本文との比較につき委しく知らんと欲する人は異本を可とするスカルタツツイニ不可とするムーア（『用語批判』三四四―五一頁）の説を参照せらるべし、王ジョンはヘンリー二世の末子にて一一九九年より一二一六年までイギリス王たり
一三六―一四一

【アーキトフェル】イスラエル王ダヴィーデの議官、王子アブサ

ロムの反逆を助けこれに授くるに父を殺すの謀を以てす（サムエル後、一五・一二以下、一六・一五以下、一七・一以下）

【根元】脊髄

第二十九曲

ダンテ、ウエルギリウスと第九囊を去り第十囊の橋をわたりて最後の堤の上に下り左の溪を見おろせば種々なる手段を用ゐて人を欺けるもの種々なる悪疫に罹りて苦しめり、その一部鍊金の術を行へるもの、うちアレツツオ、シエーナの二の魂兩詩人と語る

一—三

【目を酔はしめ】目に涙を湛へしめ

七—九

【二十二哩】地、三〇・八六註参照

一〇—一二

【月】地、二〇・一二七に昨夜圓かりきといへる月は今南の中天にあり即ち年後一時と二時との間なり、地獄内の時間は日によらずして月によりてあらはすを例とす（地、一〇・七九以下、同二〇・一二四以下参照）

【時】地獄全體にて約一晝夜を費す豫定なれば残すところ今や僅かに五六時間あるのみ

一六一—二一

或ひは、導者は我に答へんとしてすゝみ我はうしろに従ひつゝさ
らににいひけるは

【岩窟】第九囊

【價高き】罰重き

二五—二七

【指示し】仲間の罪人等に

【指をもて】指をうちふりて

【ジェリ・デル・ベルロ】ベルロ・アリギエーリ（ダンテの祖父
ベルリンチオネの兄弟）の子。性極めて争ひを起すを好み之がた
めに自ら禍ひを招きて同じ町（フィレンツェ）なるサツケツティ

家の者に殺さる、一三〇〇年の頃はこの怨みいまだ報いられざりしがジェリの死後三十年にいたりてその甥等サツケツテイ家のひとりを殺しそれより一三四二年まで兩家の間に争ひ絶ゆることなかりしといふ

二八―三〇

【アルタフォルテの主】ベルトラム・ダル・ボルニオ（地、二八

・一三三―五及び註参照）アルタフォルテは城の名なり

三一―三六

【恥をわかつもの】死者の血族、仇討をもて死者に對する遺族の義務とをせること恰も昔時の日本の如し

四〇―四二

【僧院】囊、*chiostra* は壁に圍まるゝところ及び僧院の兩義を有するが故に、前の意によりて囊をひゞかせ後の意をうけてその内なる罪人を役僧といへるなり

四六一—五一

【七月九月の間】夏。沼澤の地病最も多き時

【ヴァルデイキアーナ】キアーナ河の流域に沿へる溪、アレツツオ、コルトナ、キウーシ、モノテプルチアーノ等の諸市このあたりにあり、當時夏に至れば河水停滯してその毒氣に感ずる者多かりしところなり

【マレムマ】トスカーナ州海邊の沼地

【サールデイニア】中古人口少なく沼多かりきといふ

五五―五七

【世に】原語、こゝに正義は神の使命によりて罪人の名を娑婆世界に録しおき後彼等を地獄に罰す

五八―六六

【エージナ】アイギナ。アテナイ西南の一小島、女神アイギナに因みてこの名あり

神話に曰、ヘラ（ジュノー）神夫ゼウスがアイギナを愛せるを怨み疫癘の禍ひをアイギナ（乃ち女神の住めるところ）に下せり、人畜悉く斃れ死したゞ残れるものはアイギナの子エアコありしのみ、エアコ樫のほとりに立ちて蟻群の樹皮を上下するを見、かくの如く多くの民を新に與へられんことを父ゼウスに請へり、ゼウ

ス即ち蟻を變じて人となし民再びアイギナに滿つ（オウイデイウ
 スの『メタモルフオセス』七・五二三以下）

七三―七五

【瘡】癩病の

七六―八一

【心ならず】早く馬の手入を終りて臥床に入らんとおもふ僕

八八―九〇

【ラチオ人】イタリア人

九七―九九

二人背を合せて凭れゐたるがむき直りてダンテを見しなり

一〇〇―一〇二

【身をいとちかく我によせ】或ひは、心を全く我にむけ

一〇三―一〇五

【第一の世】世界

【多くの日輪の下に】多くの年の間

一〇九―一一七

【我】十三世紀の半の人にて名をグリツフオリーノといへりと古註に見ゆ

【アールベロ・ダ・シエーナ】傳不詳

【デーダロ】ダイダロス。イカルスの父、翼を作りてクレタ島を脱せるもの（地、一七・一〇六―一四註参照）

【子となすもの】シエーナの僧正を指せりといふ、されどその名

もまたアールベロの父なりしや單に恩人なりしやも明かならず

一一八—一二〇

【鍊金の術】科學の研究を目的とせずして人を欺くを目的としたればなり

一二四—一二九

【癩を病める者】カポツキオ（一三六行）、シエーナ人の虚榮心を罵れるダンテの言に答へてストリツカ、ニツコロ等は例外なりといひ皮肉の反語を用ゐしなり

【ストリツカ】シエーナの者、傳不詳

【ニツコロ】同上、丁子の香料を燒鳥に加味してくらへりといふ（一説には丁子を炭の代りに用ゐこれにて雉子鷄等を燒けりとも

いふ)

【園】酒食に耽る人々の間

或曰、シエーナの町のことゝ

一三〇—一三二

【一晚】ブリガータ、スペンデレツチャ（浪費隊）と名づくる一隊、十三世紀の後半シエーナ市中富豪の子等十二人相結んでこの一隊を組成し各自莫大の金を抛つて一高樓を營み日夜遊樂を事とす、ストリツカ、ニツコロ、カツチア、アツパリアート皆これに屬せりといふ

一三六—一三八

【カポツキオ】鍊金の術によりて人を欺けるため一二九三年シエ

一ナ市にて火刑に處せられし者、註或ひはフィレンツエの人とし
或ひはシエーナの人とす、その言ふところによりてダンテと相識
の間なりしことしるべし

第三十曲

詩人等なほ第十囊の堤をゆき詐僞によりて地獄に落ちし罪人の中
姿を變へて欺ける者貨幣のまがひを造れるもの及び言によりて欺
ける者を見る。

ヘラはゼウスがテバイ王カドモスの女セメレを愛せるを怨み、カドモスの全家に禍ひを下せることあり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』三・二五三以下参照）

【しばく】カドモスの甥アクタイオンの横死、セメレの妹アガウエがわが子ペンテウスを殺せること等

四―六

【アタマンテ】アタマス。カドモスの女イノの夫にてテバイの王となれる者、イノが姉セメレの子バツコス（乃ちゼウスとセメレの間の子）を養育してヘラの怒りを招けるより禍ひアタマスに及びて心狂ふにいたれるなり

【妻】イノ

【男子】レアルコスとメリケルテス

七―九

オウイデイウスの『メタモルフオセス』に曰く、いぎ侶よ網をこの林に張るべし我今こゝに二匹の仔ある牝獅子を見たりと（四・五一三）

一〇―一二

【荷】メリケルテス

一三―一五

【王】プリアモス（地、一・七三―五註参照）

一六―二一

【エークバ】ヘカベ。プリアモスの妻、トロイア城陥落の後虜は

れてギリシア軍中にあり

【ポリツセーナ】ポリユクセナ、ヘカベの女、トロイアよりの歸途トラキヤに立寄れるギリシア軍アキレタスの靈を慰めんため

(地、五・六四―六註参照) ポリユクセナをその墓前に殺せり

(オウイデイウスの『メタモルフオセス』一三・四三九以下)

【ポリドロ】ポリユドロス。ヘカベの子なり、ヘカベ、ポリユクセナの骸を淨めんとて海濱にゆきこゝにトラキヤ人に殺されしわが子ポリユドロスを見出せるなり(地、一三・四六―八註参照)
二二―二七

テバイのアタマス、トロイアのヘカベを狂はしめその他獸をも人をも狂はしむる瞋恚の一念

三一—三三

【アレツツオの者】グリツフオリーノ（地、二九・一〇九）

【ジャンニ・スキツキ】フイレンツエ市カヴァルカンテイ家の一人

フイレンツエの貴族ブオソ・ドナーテイなる者死するにあたりその子（或曰弟）シモン父が遺産の多くを他人に譲らんとするの意あるを察し遺言書を作らしめずブオソ死して後ジャンニに説き、これを床に臥さしめブオソ未だ死せざるが如く装ふ、かくてジャンニは巧みに死者の聲調を似せて公吏を詐りこれに型の如くなる遺言書を認めしめきといふ

三七—三九

【ミルラ】神話に曰、ミルラはキュプロス島の王キニユラスの女なり、非倫の慾を満たさんため變装して己が父を欺きこれと罪を犯すにいたり（オウイデイウスの『メタモルフオセス』一〇・二九八以下）

四〇―四五

【群の女王】ブオソの所有せる騾馬、この騾馬は當時トスカーナ州第一と稱せられし名馬なりければスキツキは前記遺言書の中に一項を加へてこれを己の所有とをせり

五二―五四

水分の營養化せざるもの惡所に停滯して身ために權衡を失ひ顔瘡せ腹脹る

五五―五七

【エチカ】熱病の一種

五八―六三

【マエストロ・アダモ】プレシヤの人

【水の一滴】ルカ、一六・二四富者の言に、父アブラハムよ我を
憐みてラザロを遣はし指の尖を水にひたしてわが舌を冷やさせ給
へ

六四―六六

【カセンティーン】カセンティーン。アペンニノ山間アルノの溪
の一地方

七〇―七二

神の正義はわが犯罪地なるカセンチイーノのあたりの水ゆたかに
空氣涼しき處を我に思ひ起さしめ、これによりて却つてわが苦を
増しわが歎きを大ならしむ

七三―七五

【ロメーナ】カセンチイーノの城。ガイド伯爵家の所有たり

【バツテイスタの像】フィレンツエの貨幣は一面に守護神なる洗
禮者ヨハネの像あり一面にこの市のしるしなる百合の花形ありし
なり

【焼かれし】アダモはカセンチイーノ附近のコンスマといふ處に
てフィレンツエ人により火刑に處せらる（一二八一年）

七六―七八

【グイード、アレツサンドロ、彼等の兄弟】グイード、アレツサンドロ及びアージノルフオ。ロメーナの伯爵にて三人共兄弟なり、アダモに勧めて通貨を鑄造せしむ

【フォンテ・ブランダ】シエーナなるフォンテ・ブランダ（泉の名）最も名高く古註皆これをもつてダンテの指すところとす、されどその後ロメーナ附近に同名の泉あること知れ（フラティエールリ註参照）近代之をあぐる註疏家多し

七九—八一

【ひとり】グイードなるべしといふ

【身繋がる】病ひの爲に動く能はざるをいふ

八二—八七

【十一哩】第十囊の周圍はまさしく第九囊の半にあたり（地、二九・九）、地獄全體の大なることしるべし、されど或ひはこれを標準として第八囊を四十四第七囊を八十八哩と計算する人あるも思ふにこれ必ずしも詩人の意にあらじ

八八―九〇

【カライト】一※の二十四分の一フィレンツエの金貨は二十四カライトの金なるにアダモの贗造貨幣は二十一カライトの金に三カライトの混合物を加へしものなり

【フィオリーノ】フィレンツエの本位貨幣。一面に花（フィオレ）の形あるよりかく名づけしもの

九四―九六

【巖間】 greppo は、破鉢（古義）

九七—九九

【偽りの女】エチプト王パロの司なるポテパルの妻、ヤコブの子ヨセフに思ひを懸けその己の意に従はざるをうらみて無實の罪をこれに責はしむ（創世記三九・六以下）

【シノン】トロイア軍中ギリシア人の残せる木馬（地、二六・五八—六〇註参照）に就きての評定まち／＼にして容易に決せざりし時シノンは恰もギリシア軍に背きて逃れ來りしものゝ如くみせかけ王プリアモスに近づきて巧みに辯を弄し遂に木馬を城内に曳入らしむ（『アエネイス』二・五七以下）

一〇三—一一五

【これにも】シノンの拳にも

一〇九―一一一

【火に行ける】火刑に處せられし時はその手縛られて動かすをえざりしなり

一一二―一一四

【トロイアにて】王プリアモスに木馬のことを問はれし時

一一五―一一七

【鬼より多し】貨幣の數即ち罪の數なり（地、一九の一―四参照）

一一八―一二〇

【誓ひ】『アエネイス』二・一五二以下にシノンが手をあげて日

月星辰を指しその言の眞なるを證せしこといづ、馬は即ち木馬な

り

一二四—一二六

汝世にある日偽りの口を開き身の禍ひを招ける如く今も我を罵りて却つて我にいひこめらる

【己が禍ひのために】異本、惡をいはんため

一二七—一二九

【ナルチツソの鏡】水

ナルチツソ（ナルキツソス）の物語はオウイデイウスの『メタモルフオセス』三・四〇七以下にいづ、ある河神の子なりき嘗て水を呑まんとて澄める泉のほとりにいたり水にうつれる己が姿を見之を慕ふあまりに此處を放れずして死せり

一三〇—一三二

【少しく慎しむべし】 Or pur mirai 思ひのまゝにみよと裏をいへ
るなりとの説あり

一三六—一三八

【すでに然るを】 事實夢なるを夢ならざる如く

一三九—一四一

あまりに恥ぢかつ惑へるため却つて詫の詞出ねばこの無言の表情
乃ち是詫なるを思はずしてなほ詞をもて詫びんとせるなり

第三十一曲

かくして後最後の岸を横ぎりマーレボルジェ中央の坎にいたれば
こゝに多くの巨人ありその一アンテオなる者導者の請に従ひ兩詩
人を第九の地獄におくる

一—三

【舌】ウエルギリウスの

【先には】地、三〇・一三一—二

【染め】恥、頬を赤く染めしなり

【薬】慰藉（地、三〇・一四二以下）

四—六

【槍】父ペレウスより傳はりしアキレウスの槍。傳説に曰、アキ

レウスの槍に突かれて傷をうけし者再びその槍に突かるれば傷癒ゆと

この槍トロイアのテレフオスを傷つけ後その疵を癒せることオウイデイウスの『メタモルフオセス』一二・一一二、一三・一七一等にいづ

一〇―一五

【角笛】七〇―七二行註参照

一六―一八

【カルロ・マーニオ】シャルルマーニュ大王（七四二―八一四年）。イスパニヤ遠征の際此國の東北ロンチスバルレなるその後陣、敵の襲撃を受けて難戦苦闘す、後陣の將ローラン（或ひはオルラ

ンド、シャルルの甥なり）衆寡敵せざるを知り救ひをシャルルに求めんため角笛を吹きしに笛聲遠く響きわたりて既にこの地を距る四里なりしシャルルの耳に達せりといふ、有名なるフランス中古の史詩『ローランの歌』にくはし

【聖軍】 十字軍なれば

三一—三三

【巨人】 神話の巨人、己が力を恃みて神に逆へる者

ムーア曰、ダンテが巨人の一群をこの處に置けるは『アエネイス』六・五八〇—八一に、地の古の族テイタンの子等（巨人）雷に撃たれてかくいと深き處にきまろべりとあるに基づく

【坎】（地、一八・五）第九の地獄この底にあり、巨人等足を氷

に觸れ半身を坎の外にあらはす

三七―三九

【誤り】巨人を櫓とおもへる誤り

四〇―四五

【モンテレッツジオン】シエーナの北約九哩にある城にて圓き高き城壁の上にさらに十四個の櫓ありきといふ

【ジョーヴェ】ゼウス。フレーグラの戦ひ（地、一四・五五―六〇並びに註参照）にゼウス神雷にて巨人等を撃ち滅ぼせる事あればなり

四九―五一

巨人等新に生るゝことなければかくの如く剽悍獰猛の勇士（軍神

アレスに事ふるものは乃ち戦士なり）跡を世に絶つにいたれり

五五―五七

【心の固め】智能、象鯨の類は巨大にして力餘りあれども智足らざれば危険ならず、此故に自然は巨人を滅ぼして象と鯨とを生存せしむ

五八―六〇

【松毬】青銅製の松毬にて長約七呎半あり、ローマ皇帝ハドリウススの廟を飾らんとため作られしものと傳へらる、當時ローマ聖ピエートロの寺院の構内にありしが今はヴァチカンの宮殿内松毬の園と稱する園の中にあり

六一―六六

【フリジア人】大男の稱あるフリジア（オランダの北）人。三人の丈を繼合はすともその髪に達し能はざるべし

【三十パルモ】約二十一呎（頸より臍までの長）なり

六七―六九

バベル高塔の事によりて言語の亂れたる有様をあらはさんため殊更に無意味の語を連ねしなり

七〇―七十二

【角笛】獵夫（創世記一〇・九）に因みて

七三―七五

導者の嘲りていへる詞

七六―七八

【己が罪】言語の通ぜざるによりて罪の何たるをしるべし

ニムロデ（ネムブロット）の事創世記一〇・八以下にいづ、されどその巨人なりしこと及びバベル高塔の建築者なりしことは見え
ず

【一の言語】世界の言語はもとたゞ一のみなりしが人々バベルに
高塔を築かんとするに及びて亂れわかれたり（創世記一一・一以
下）

八二―八四

【左に】坎の縁に沿ひて左にむかへり

八五―九〇

【誰なりしや】地、一五・一二参照

九四―九六

【ファイアルテ】（或ひはエファイアルテ）ゼウスに背ける巨人の一

【大いなる試み】山に山を重ねて天に達せんとせしこと

九七―九九

【ブリアレオ】神々と争へる巨人の一、體軀巨大にしてはかりし
り難きなり、『アエネイス』一〇・五六五以下に曰く

我聞くエゲオン（ブリアレオの一名）には百の腕百の手あり、彼
五十の楯を鳴らし五十の劔を抜きてジョーヴェ（ゼウス、ユピテ
ル）の雷を冒せる時その五十の口と胸とは焰を吐けり

と、されどダンテのブリアレオはその形ファイアルテの如しとあれ
ば五十頭百手の怪物にあらず

一〇〇—一〇二

【アンチオ】アンタイオス。リビアの巨人ポセイドンとゲーの間の子なり、人の過ぐるにあへば強ひてこれと力を競べかつ必ず勝ちて死にいたらしむ、ヘラクレスこれと争ふに及びアンタイオスが地に倒れその母（ゲー即ち地）の身に觸るゝ毎に力新に加はるを知り宙に吊してこれを殺せり、アンタイオスの身に縛なきは、プレグライ（プレグラ）の戦ひの後に世に出で巨人軍に加はらざりしによりてなり

【凡ての罪の底】地獄の底、第九の地獄

一一二—一一四

【五アルラ】古註の曰ふところ一ならねば、今さだかに知り難し、

フラテイチェルリは曰く、一アルラはフィレンツエのニブラツチヤに等しく一ブラツチヤは三パルモなり故に五アルラは即ち三十パルモに當ると

一一五——一七

ウエルギリウスの詞

【シピオン】スキピオ

【溪間】バグラード川（アフリカ）の流域、ザマ（リビヤの西、カルタゴの南）の古戦場この附近にあり

紀元前二〇一年ローマのスキピオ、カルタゴのハンニバルとザマに戦ひてこれを敗る

一一八——一二三

【獅子】アンタイオスはバグラードの溪間の岩窟に棲み常に獅子を捕へてその肉をくらへりといふ（ルカヌスの『ファルサリア』四・六〇一以下）、千匹は多數の意

【師】神々と巨人との戦ひ

【地の子等】地を母とする巨人等

【コチート】（歎きの川の義）氷の池（地、三二・二二以下）

一二四—一二六

【ティチオ、ティフォ】共に神話にいつる巨人の名

【求むるもの】名

一二七—一二九

【恩恵】神の

一三〇—一三二

【エルクレ】ヘラクレス。一〇〇—一〇二行註參照

一三六—一三八

【ガーリセンダ】有名なるボローニア雙塔の一、ガーリセンデイ家の建設にかゝるが故にこの名あり、この塔高さ約百六十呎東方に傾斜すること約八呎ダンテの時代にはなほはるかに高かりきといふ

雲西方に飛行く時は恰も塔まづ雲にむかひて傾き倒るゝかと疑はる、アンタイオスの身を屈めし時もこれと同じく恰も我等の上に倒れかゝれる如く見えたり

一四二—一四四

【ジユダ】キリストを賣れるイスカリオテのユダ（地、三四・六二）

【ルチーフエロ】魔王（地三四・二八以下）、ルキフェルはもと明星を指していへる語なるを（イザヤ、一四・一二）後世の詩人等惡魔の名となすにいたれるなり

第三十二曲

第九の地獄は特殊の信に背ける者の罰せらるゝところにてカイーナ、アンテノーラ、トロメア、ジユデツカの四圓にわかる、詩人

等まづカイーナにいたりて血族の信に背ける者を見、次にアンテナ
ノーラにいたりて郷土若しくは黨與を賣れる者を見る

一—三

【坎】第九の地獄、地球の中心なれば地獄全體の岩の重力皆此上
に集まるなり

七—九

【全宇宙の底】プロトレマイオスの天文学によれば地球は宇宙の中
心にあり故に地獄の底は即ち全宇宙の底なり

【阿母阿父とよばゝる舌】我等乳臭の口をもて

或曰、俗語の謂と

一〇—一二

【アムファイオネ】神話にいつる有名なる樂人、テバイの王となり城壁を築かんとて琴を彈ぜしに岩石聲に應じてキタイロンの山よりまろび來り圍みおのづから成れりといふ

【淑女等】「ムーサ」（地、二・七）、詩音樂等の神々
一六一—一八

巨人等の足を觸るゝところは第九の地獄の縁なり、しかるにこの地中央にむかひ次第に下方に傾斜するをもて兩詩人がアンタイオスの手によりて石垣を下れる時は既に巨人の足の前方即ち足元上り低き處に立てるなり

一九—二一

【兄弟等】我等二人の兄弟（四一行以下）

或曰、兄弟等は侶の謂にてこの地獄の罪人をすべて指せるなりと
二二―二四

【池】コチート、クレタの巨人の涙流れくだりて地獄の諸水となり後底に集まりて氷の池となる（地、一四・一〇三以下参照）、氷は罪人の心の冷酷なるを表はせるなり

二五―三〇

【オステルリツキ】オーストリア

【ダノイア】ダニューブ又はドナウ、オーストリア最大の川

【タナイ】ドン、ロシアの南にある川

【タムベルニツキ】山の名、所在不明

【ピエートラピアーナ】トスカーナ州の西北セルキオ、マーグラ

兩河の間の連山（今のパーニア）

三一—三三

夏の初めの刈入時、農婦等その日なせしことをその夜の夢に見るなり

三四—三六

【愧あらはるゝところ】顔（地、三一・二参照）

或ひは、愧あらはるゝところまで蒼きなやめる魂等とはと讀む人あり

【鶴の調】寒さのためにうちあふ齒の音鶴の嘴を鳴らすに似たり
三七—三九

【その證】寒さの強きは齒の音にてしられ苦しみの大なるは目の

涙にてしらる

四六―四八

【唇】或ひは、
 瞼

五二―五四

【鏡】何ぞ鏡にむかふ如くかく我等を見るや

五五―五七

【ビセンツォ】トスカーナ州の川、プラート市の附近を流れフィレンツェの西約十哩にいたりてアルノに注ぐ、その上流の溪間にヴェルニオ、チエルバイアと名づくる二の城ありてアルベルト家に屬せり

【アルベルト】マンゴナの伯爵、二人の子ありてナポレオネ、ア

レッサンドロといへり、一二八二年の頃この二人の間に相續上の争ひ起りて互に他を害せんことをはかり遂に共にたふる

五八一六〇

【一の身より出づ】母を同じうす

【カイーナ】第九の地獄第一圓の名、弟を殺せるカイン（創世記四・八）の名を附せるなり

六一一六六

カイーナの罪人をあぐ

【穿たれし者】モドレッド、有名なる『アーサー物語』にいづ

モドレッドはアーサーの子（或曰甥）なり、父の國を奪はんとして殺さる、傳へいふ、アーサーの突きいだせる槍モドレッドの胸

を貫きやがて抜くに及びて日光その傷を射透せりと

【フォカツチャー】フツカツチャー・デ・カンチエルリエーリ、十三世紀の後半の人にてピストイアの白黨なり、伯父を殺せりとも父を殺せりともいふ人ありて罪業あきらかならず

【サツソール・マスケローニ】フィレンツエの者、父の兄弟にたゞ一人の男子ありしがサツソール之を欺きて市外に殺害し伯父死して後その資産を横領せりといふ、この罪業當時あまねくトスカーナ州にしれわたれるなるべし

六七―六九

【カミチオン・デ・パッチ】上アルノの溪なるパッチ家のアルベルト・カミチオネ、その血族の一人（従兄弟との説あり）ウベル

チーノを殺せり

【カルリン】カルリーノ。同じパツチ家の一人、一三〇二年、フイレンツエの白黨と共にピアントラヴィーニの城（アルノの溪にあり）を守れる間、黄金を貪りてフイレンツエの黒黨と内通し之を城内に入らしめしたため白黨多く殺され或ひは虜はれたり

【待つ】アンテノーラに落ち來るを待つなり、その罪甚だ大にしてこれに比すればカミチオネの罪さへいとかろしとみゆればわが罪をいひとくといへり

七〇―七二

以下アンチノーラを敘す

【犬の如く】註釋者或ひは色の蒼黒きをいふといひ或ひは齒をむ

き出すをいふといふ

【凍れる沼】池水の凍れるを見るごとに地獄の底を思ふなり

七三―七五

【重力】地、三四・一一一参照

七九―八一

【彼】ボツカ、ファイレンツエなるアバーチ家の者、モンタペルテ
 イの戦ひ（地一〇・八五―七註参照）酣なりしころグエルファイ黨
 にまじりて戦ひゐたりしボツカは、旗手ヤーコポに近づきてその
 手を斬りファイレンツエ騎兵の軍旗を倒せり、是に於てかグエルフ
 イの士氣大いに沮喪し遂にかの大敗を抱くにいたれるなり

八八―九〇

【アンテノーラ】第二圓の名、トロイアの老將アンテノルの名よりいづ（これ後代アンテノルを以てトロイアを賣れるものゝ如くいひなすにいたればなり）

一〇〇—一〇二

【あらはさじ】顔を上げて

一一五—一一七

【彼】ブオソ、クレモナ市（ミラーノの東南約六十哩）ツエラ家の者なり、一二六五年ロムバルディアのギベルリニ黨に推され王マンフレデイの命によりて一方の將となりシャルル・ダンジュウの南進を防がんとためパルマの附近に陣取りたりしがフランス軍より賄賂をうけ一戦にも及ばずして自由に敵を通過せしめきといふ

一一八一—一二〇

【ベツケーリアの者】テサウロ・デイ・ベツケーリア。パーヴァア（ミラーノの南約二十二哩）の人にてヴァルロムブロサ（フィレンツェの東）僧院の院主なり、フィレンツェを逐はれしギベルリニ黨とひそかに歡を通じこれを郷土に入らしめんとしたりとの罪により一二五八年フィレンツェにて馘らる

一二一一—一二三

【ガネルローネ】『ローランの歌』（地、三一・一六一—八註参照）に名高き模範的賣國奴なり、彼シャルルマーニユの軍中にありてサラセン人の王より莫大の贈物を受けシャルルに説きてその軍を引上げしむ、こゝに於てかピレネイ連山のかなたに止まれるその

後陣、敵の襲撃にあひロンチスパルレの敗戦となりてシャルル部下の名將多くこれに死せり

【テバルデルロ】フアーエンツアの者、一二七四年ボローニアなるラムベルタツチ家（ギベルリニ黨）の人々その郷土を逐はれてフアーエンツアに來れり、テバルデルロはこれらの者に私怨をいだし一二八〇年ボローニアなるジエレメイ家（グエルファイ黨）の人々を迎へ入れ多くの逐客を殺害せしむ

【眠れる】テバルデルロが門をひらきてグエルファイをフアーエンツアに導ける時は味爽なりき

【ジャンニ・デ・ソルダニエル】フィレンツエの貴族にてギベルリニ黨に屬せる者なりしが一二六六年騷擾市民の間に起れる時己

が黨與を棄て、グエルファイ黨にくみしその權勢を振はんとはかれり

一三〇—一三二

【テイデオ】テユデウス、テバイを圍めるギリシア七王（地、一四・六七—七二註参照）の一なり、テバイ人メナリツポスと戦ひ致命傷をうけしかども奮つて敵を殺し猶餘怨を霽さんため侶に請ひて首級を得その骨を嚙めり

一三九

我死なずして物言ふをえば

第三十三曲

アンチノーラの罪人の中にウゴリーノ伯爵なる者ありてその悲惨の最期をダンテに告ぐ、詩人等さらに第三の圓にいたりこゝに友を賣れる者を見、かつファージェンツアのアルベリーゴとかたる

一〇—一二

【言】（地、一〇・二五—六参照）言の形にあらずして音を指せるなるべしといふ

一三—一五

【伯爵ウゴリーノ】ウゴリーノ・デルラ・ゲラールデスカ、ピサの貴族、十三世紀の前半に生る、一二八四年ピサの艦隊を率ゐて

ゼーノヴァと戦ひメロリアの海戦に敗れてピサにかへり、市を擾亂の中より救はんため若干の城をルツカ及びフィレンツエの軍に交付して以て敵の主力をわかつてり、同年選ばれてポデスタとなり、その孫ニーノ・ヴィスコンティ（女婿ジョヴァンニ・ヴィスコンティの子、地、二二・七九―八四註及び淨、八・四六―八註参照）と共に市政を行へるもいくばくもなくこれと相争ひ、ピサのグエルフィ黨また彼等に與して相わかるゝにおよびて葛藤止む時なく黨勢とみに衰ふ、ギベルリニ黨の首領大僧正ルツジエーリ時の至れるを見てひそかに爲す所あらんとし、まづウゴリーノを助けてニーノを逐はしむ、一二八八年ニーノ、ピサを去りて後ルツジエーリ乃ち伯の罪状を擧げて民心を煽動しこゝに猛烈なる市街戦を

見るにいたれり

この戦ひ遂にグエルファイ黨の敗に歸し一二八八年七月ウゴリーノ及びその二子二孫共に虜はれてピサなるグアランデイ家の塔中に幽せられ翌年に至りて悉く餓死す

【ルツジエーリ】ルツジエーリ・デーリ・ウバルデーニ。ピサの東ムジエルロの者、一二七八年ピサの大僧正となり、ウゴリーノの變にあづかりしこと前述の如し、法王ニコラウス四世彼がグエルファイ黨に對する行爲をにくみ終身禁錮の命を下せしかども法王死して彼刑を免かれ一二九五年ヴィテルポに死す

【かゝる隣人】隣人といへば親しみをあらはすこと常なるに彼等は同じ處にありてしかも仇敵なればなり

二二—二四

【塙】グアランデイ家の塔（當時市有）、伯爵等の死後「餓ゑの塔」とよばる

muda は羽毛の變り時に鳥を養ふ處なり、ブーティ (Bui) 曰、作者この塔をかくよべるは塔の中に羽替頃の市有の鷹を飼へるため當時かくよびならはせしによるかさらずば轉用して伯爵等がこゝに籠の鳥の如く幽閉せられしをいへるならんと

註釋者曰、この後にもなほ人を籠むべしといへるはウゴリーノの想像にてその後この塔中に幽せられし人あるを聞かずと

二五—二七

【多くの月】牢獄の中たゞ月の盈虚によりて時の過ぎゆくをしる

なり、ウゴリーノ等のとらはれしは一二八八年七月にてその死せしは翌年三月なればその間幾多の月を閲せり

二八一三〇

【山】サン・ジュリアーノ、ピサとルツカの間にある

三一―三三

【牝犬】ギベルリニ黨に屬する僧正一味のピサ人

【グアランデイ、シスモンデイ、ランフランキ】僧正に與せしピサの名族

三七―三九

【曉】地、二六・七參照

【兒等】四人の中ガッドとウグツチオネはウゴリーノの子ブリガ

一タとアンセルムツチオはその孫なり、おしなべて兒等といへるは親愛の意をあらはせるなるべし

四六―四八

【釘打つ音】 *chiavar* 異説に釘打つにあらず鍵もて閉すなりといへどうけがたし

四九―五一

【アンセルムツチオ】（稚なきアンセルモの義）、ウゴリーノの長子グエルフォの子

五五―五七

【われ自らのすがた】 血肉の似寄り並びに同じ憂ひ同じ恐れ

六四―六六

【土よ】何ぞ開きて我を呑みこの憂ひより救はざりしや

六七―六九

【第四日】釘打つ音をきゝし日より四日目

【ガツド】ウゴリーノの子にてウグツチオネの兄なり

七〇―七五

【まのあたり】原文、汝の我を見る如く

【二日】七日と八日目の二日（或曰、六日と七日目の二日と）

異本、三日

【斷食の力】悲哀その極みに達してしかもいまだ死なざりしかど

遂に餓ゑの爲に死にたり

七九―八一

【うるはしき國】イタリア、「シ」st.を然の意に用ゐる國なり

【隣人等】フィレンツエ、ルツカの人々

八二―八四

【カプライア、ゴルゴーナ】チレニア海中の二島嶼、アルノ河口の西南にあり、ピサはこの河口に近く且つその兩岸に跨がる町なれば河水氾濫して全市の民溺れ死するを願へるなり

八五―八七

【城を賣れり】一三―五行註参照

【きこえ】ウゴリーノ伯が城を敵に渡せるは私慾を満たさんため

なりきとの流言當時行はれ僧正ルツジエーリ亦之を以て民心を煽動する一の利器たらしめし如し、されど伯のこの行爲はピサを窮厄の中より救ひ出さんとする苦肉の謀なりければダンテもこゝにたゞこれを世評として記載せるのみ、ウゴリーノのアンテノーラに罰せらるゝは己が權勢を大ならしめんためニーノ・ヴィスコンティを逐ひ却つて自らグエルファイ黨の禍ひを醸すにいたりたればなるべし

【十字架につく】苛責す

八八―九〇

【第二のテーベ】ピサ、テバイ（テーベ）は多くの殘虐行はれし處なればなり

【年若き】ダンテは事實を枉げて二子二孫皆幼少なりし如くしるせり、このうち丁年に満たざりしはアンセルムツチオのみ

【ウグツチオネ】ウゴリーノの子にてガツドの弟なり

【イル・ブリガータ】アンセルツチオの兄、名をウゴリーノ又はニーノといふ、イル・ブリガータはその綽名なり

【此曲】五〇行及び六八行

九一―九三

以下トロメアを敘す

九四―九六

初めの涙凍りて次の涙を出でしめざるをいへり

九七―九九

【被物】visiere 眼鏡又は兜の表と解する人あり

【杯】眼孔

一〇三—一〇五

【地氣】太陽の熱によりて一種の氣地より生ずその乾けるもの風を起し濕れるもの雨を起すといへる古の學説によれり、ダンテは日光なき地獄の底に風あるをあやしめるなり

一〇六—一〇八

【源】地獄の王ルキフェルの翼（地、三四・五〇—五一）

一〇九—一一一

【最後の立處】第四圓即ちジュデツカ、詩人等をジュデツカに罰せらるべき魂なりとおもへるなり

一一二——一四

【洩す】涙によりて

一一五——一七

【氷の底】ルキフェルの許、ダンテは約を果すも果さざるもいづれ地心にゆくべきものなればそのいへること誓言に似て誓言にあらず

一一八——二〇

【アルベリーゴ】アルベリーゴ・デイ・マンフレデイ。一二六七
年より「フラータ・ゴデンテイ」（地、二三・一〇三参照）たり、
ファアエンツアのグエルファイ黨を統ぶ、その血族マンフレデイ

（弟なりとの説あり）及びマンフレデイの子アルベルゲットと權

勢を争ひ、ひそかに彼等を害せんとはかり言を和親に托して宴に招き食終れる時果物を持來れといふ、この時忍びの者共この詞を相圖に座席に入來りて父子を殺せり（一二八五年）

【よからぬ園の】客人を賣る相圖に用ゐたれば罪の園に生ぜる果といへり

【無花果に代へ】罪業相當の刑罰をうく

一二一—一二三

【しらず】地、一〇・一〇三—五参照

一二四—一二六

【トロメア】第三園、賓客の信に背ける者の罰せらるゝところ、ジエリコの首長トロメオの名をとれるなり、このトロメオはおの

が岳父にして祭司長なるシモネ・マツカベオ及びその二子をわが城内に招き酒を飲ましめて後殺せり（マツカベエイ前、一六・一
一―六）

【アトロポス】運命を司る神の一にていのちの糸を斷ち切るもの

その人未だ死なざるに魂まづトロメアにくだりて罰をうくることありとの意なり、之に關し註釋者曰、ダンテは詩篇五五・一五に、願はくは彼等生けるまゝにてシエオルに下らんことをといへるにもとづきこの種の刑罰に思ひいたれるなるべしと

一三三―一三五

【おのれは】魂自らは地獄の底に落つ

一三六一—一三八

【セル・ブランカ・ドーリア】ジエーノヴァの名族ドーリア家の者にてミケレ・ツアンケ（一四〇行）の婿なり、一二九〇年の頃、（或ひは七五年の頃ともいふ）サールデイニア島のロゴドロ州（地、二二・八八—九〇及び註参照）を奪はんため舅を招きて會食し欺いてこれを己が城内に殺せり

一四二—一四四

【マーレブランケの濠】第八の地獄第五囊、汚吏の罰せらるゝところ

一四五—一四七

異本、この者己が身と……その近親のひとりの身に鬼を残せり

一四八―一五〇

【暴】約を履まざりし事

一五四―一五七

【ローマニアの魂】アルペリーゴ（一一八行）、その郷里フアー
エンツアはローマニアにあり

【ひとり】ブランカ・ドーリア

第三十四曲

ダンテ、ウエルギリウスと第九の地獄第四の圓にいたりこゝに恩

人を賣れるものゝ魂を見、後その中央にあらはれし地獄の王ルキフェル（ルチーフエロ）に近づきその毛にすがりて地心を過ぎさらに一條の幽路をたどりて外界にむかふ

一一三

Vexilla Regis prodeunt inferni（地獄の王の旗進む）、この中初めの三語はフォルツナート・ヂ・チエーネダー（イタリアの生れにてフランス、ポアチエの僧正となれり）の作なるキリスト磔刑の聖歌の始めをとれるなり、この歌今も寺院の一部に用ゐらるるといふ、地獄の王はルキフェル、旗はその翼なり

七一九

【風】五〇—五一 行参照

一三一—一五

四種の罪人、註釋者曰、恩人を賣れる罪人の中、伏したるは己と同等の地位にあるもの、直立せるは己より地位低きもの、倒立せるは同じく高きものを賣り、弓形をなすは高きと低きと二種の恩人を賣れる者なりと

一六一—一八

【昔姿美】魔王が未だ天を逐はれざりしさきには天使中その姿特に美しく尊かりしと信ぜられたればなり（淨、一二・二五—六參照）

一九—二一

【ディーテ】魔王の名として用ゐられしこと『アエネイス』に例

多し

二五—二七

【彼をも此をも】死をも生をも

三四—三六

特殊の神恩によりてその美しき事萬の天使にもまされる程なるになほその造主に背けりといへば今一切の禍ひの本となるもあやしむにたらず

三七—三九

【三の顔】寓意のあるところあきらかならず、註釋者曰、これ地、三・五—六なる三一の神の對照なり即ち權威智慧愛の三に對し無力無智憎惡の三を示せるものにて無力は黄無智は黒憎惡は赤を以

てあらはすと

四〇―四二

【雞冠あるところ】頭の頂、四七行に鳥といへると同じく翼あるに因みてなり

四三―四五

【ニ―ロ】エジプトのナイル川、南方エチオピアよりいづ

【人々】エチオピアの黒人

四九―五一

【羽なく】當時の説によれるなり。

五二―五四

【コチート】地、一四・一一八―二〇参照

五五―五七

【碎麻機】*maciulla* 二個の木片うちあひて麻を碎き莖と絲とをわかつ機具

六一―六三

【ジユダ・スカリオット】イスカリオテのユダ、キリスト十二弟子の一、師を賣りて銀三十をえ後悔いて縊る（マタイ、二六・一四以下及び二七の三以下等）

六四―六六

【プルート】マルクス・ユウニウス・ブルートウス（前八五―四二年）、カエサル殺害者の一人

六七―六九

【カツシオ】カイウス・カツシウス・ロンギーヌス（前四二年死）ブルートウスと共にカエサルを殺害せるもの、或人曰く、ダンテがカツシウスを肉逞しきものとせるはキケロがルキウス・カツシウスを肥えたりといへるに基づきルキウスを、カイウスと誤り混じたるによると

ダンテの所謂理想的國家には二個の重要な機關あり、一は法王にして靈界の事を司り一は帝王にして物質界の事を司る、ダンテ思へらく、この二の者各　その範圍内に於て絶對の權能を有し各　直接に神より受けたる使命を果し、しかも相提携し相並馳して初めてこゝに人類の幸福を増し一は天上の樂園を作り一は地上の樂園を造るにいたるべし、キリストは法王の法王なりこれに背け

るユダはたゞに恩師の罪人なるのみならずまた神の攝理にむかひてその刃をむけしなり罪最も重し、カエサルは皇帝の皇帝なりこれに背けるブルートウス等はたゞに恩人を賣れる逆賊なるのみならずまた神意に基づいて地上の樂園を完成すべき國家至要の機關にむかひてその旗を擧げしなりユダにつぎての罪人といふべし

【夜はまた來れり】一三〇〇年四月九日の夕暮となれるをいふ
七六―七八

【疲れて】重力の集まるところなれば身を轉じて地心を離るゝこといとかたし

七九―八一

ルチーフエロ（ルキフェル）の腰乃ち地球の中心までくだりその

後身を逆にして南半球を上りゆくが故に下るも上るも同一の方向に進むに他ならねどダンテまでひてもとの地獄に歸るとおもへりとの意

八二―八四

【とらへよ】わが頸を

【段】地、一七・八二参照

九一―九三

【何なるやを】地球の中心なることを

九四―九六

【日】時を示すに日を用ゐしは既に地獄を離れたればなり

【第三時の半】昔晝間の十二時を四分して第三時第六時及び第九

時を夕とをせり、第三時は日出後の三時間なれば日出を六時頃と見做してその半即ち約七時半にあたる、再び九日の朝となりたれば歸るといへり（一一八—二〇行註参照）

一〇〇—一〇二

【淵】地獄

一〇三—一〇五

【氷】コチートの

一〇六—一〇八

【蟲】ルキフェル、地心を貫いて立てり、蟲は姿の忌むべきをあらはす詞（地、六・二二—四註参照）

一〇九—一一一

【點】地球の中心、當時の科學によれば宇宙の重力のすべてあつまるところなり（くはしくはムーアの『ダンテ研究』二卷三二一頁以下参照）

一一二——一七

【人】キリスト

【頂點のもと】イエルサレム、インドより起れる北半球の子午線はその頂點にいたりてイエルサレムの都を蔽ふ（淨、二・一以下）

【ジュデツカ】第九の地獄第四の圓、恩人に背けるものゝ罰せらるゝところ（一〇——一五行）、キリストを賣りしジュダ（ユダ）の名による

【小さき球】ジュデツカと相當する背面の小圓即ち詩人等の立て

る圓き岩

一一八——一二〇

南北兩半球の相對面に於ける時間の差は十二時間なり、すなはち南半球は北半球より時後るゝこと十二時なれば地獄の夕はその背面の朝にあたる

一二一——一二六

ルキフェル天を逐はれて南半球に落つ、この時この半球を蔽へる陸は恐怖のあまり海にかくれて北半球に入りたり、また淨火の山は魔王が地獄にくだれる時これに觸るゝをおそれて地底を離れし土より成りこの土地底を離れしたためこゝにこの空虚あるにいたれるなるべし

一二七―一三二

【ベルツエブ】ベルセブル、地獄の王ルキフェルの異名（マタイ、一二・二四）

【墓】地獄

【一の處】半球地下の狹路、ルキフェルの許より地上の一點に通ずる路なればその長さは地獄の入口よりルキフェルまでの距離に等し

【小川】淨火に淨められし罪地獄にかへるなり、註釋者多くはこれをレーテの流れと解すれど疑はし

一三六―一三八

【孔の口】地上への出口即ち地下の狹路の一端

【美しき物】星（地、一・四〇参照）、天と共にめぐりゆくもの
一三九

【いでぬ】九日の午前七時半頃にて今見る星は十日の早朝の星なれば（浄、一・一九―二一註参照）南半球地下の幽路を辿れる間は二十時間餘なり

【諸の星】『神曲』の各篇皆 *stelle*（星）の一語に終る

ダンテの地獄は漏斗状をなす一の大いなる坎なり、その頂地表いただきに接し、底地心に達す、坎に沿ひ坎をめぐりて多くの圓形の地帯あり、底を合せて九個の獄となる（この中第七獄は三、第八獄は十、第九獄は四に細分せられ各 罰する罪人を異にす）、すべて上方に罰せらるゝものはその罪軽く下るに従つてその罪重し、しかして第五獄と第六獄の間にはデイーテの城壁ありて地獄全體を二分す、その上なる諸獄には放縱の罪罰せられ下なる諸獄には邪惡の罪罰せらるゝ、この他地獄圏外に怯者の罰をうくるところ第八獄と第九獄の間に巨人の罰をうくるところあり、地心を貫いて地獄の王ルチーフエロの立つあり。

地獄内の諸水にはアケロンテの川、ステイージェの沼、フレジエトンテの流れあり、名異なれども實一なり、クレタ島の巨人よりいでて地獄にくんだり或ひは川、瀑、沼となりてあらはれ或ひはまた地下にかくれて次第に地底にむかひ、遂に凍りてコチートの池となる。

ダンテはウエルギリウス（ヴィルジリオ）に導かれて暗き林を離れ、地獄の門よりたえず左に道を取り、地獄各圏を歷程してその底にくんだり、さらに地心を過ぎて南半球に移り、地下の幽路を辿りて再び地上にいつ。

二詩人が地獄内に費せる時間は約二十四時間にて地心より南半球の地上にいたるまでに費せる時間は約二十一時間なり。

青空文庫情報

底本：「神曲（上）」岩波文庫、岩波書店

1952（昭和27）年8月5日第1刷発行

※「神曲」の原文は、三行一組の句を連ねる形式を踏んでいます。底本は訳文の下に、「一」「四」「七」と数字を置いて、原文の句との対応を示していますが、このファイルでは、行末に「一」「三」「四」「七」を置く形をとりました。

※底本が用いている「**〔**」と「**〕**」は、「アクセント分解された欧文をかこむ」記号と重なるため、「**[**」と「**]**」に置き換えました。

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2003年9月29日作成

2006年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神曲

LA DIVINA COMMEDIA

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 地獄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>